

SD

スペースデザイン ISSN 0563-0991
第396号 1997年9月1日発行
毎月1回1日発行
昭和40年2月5日第三種郵便物許可

9709 | Space
Design

駅空間の新局面

A New Phase of Railway Station Space

Monthly Journal of Art and Architecture



大切なのは、 何かをつかもうとする心。

電気は光・熱・情報・音響などに姿を変え、私たちの暮らしを支えています。関電工はこうした電気を、住宅で、オフィスで、劇場で、工場で、環境への配慮と安全性を第一に具体的なシステムや設備のカタチでお届けしています。そしてつねに、さらなる可能性を広げようと、新たな夢を描き、日夜さまざまな研究を続けています。今までも、これからも、関電工の技術はいつもあなたの近くにいます。

いつも、人に優しい技術で未来へ。

 **関電工**

本社：〒108 東京都港区芝浦4丁目8番33号
☎：NTT 03(5476)2111 TTN 03(4431)2111

バケツ 4745杯

TOTOの節水便器なら、
年間にバケツ4745杯節水できます。(当社比※)

※バケツは、一杯を4Lとして計算しています。

◎4人家族、1人1日に大1回小2回使用すると計算→従来シリーズに対し
NEW ZG・ZS、NEW CSシリーズは、約33%、18,980L/年を節水できます。

なぜ、TOTOの便器だけがこんなに節水できるのか。その答えは、高い技術力もさることながら、早くから“節水”に取り組んできたTOTOの姿勢にあります。もっと少ない水で便器がキレイに洗えれば、水という資源を守ることができる。より少ない水で便器がキレイに洗えれば、水道料金をグッと抑えることができる。この発想が便器の節水力に磨きをかけます。今回の「新節水便器シリーズ」では、洗浄水量(1回の洗浄に必要な水量、これが重要)を減らすことで節水力を大幅に向上させました。水のムダと家計の出費を抑えるなら、TOTOの節水便器。TOTOの節水便器が確実です。

カタログご希望の方は、〒154 東京都世田谷区桜新町2-24-2 TOTO広告宣伝部「SS-1」係まで、住所・氏名・電話番号を記入のうえご請求ください。

便器は節水力

TOTOの節水便器



TOTO
新節水便器シリーズ。

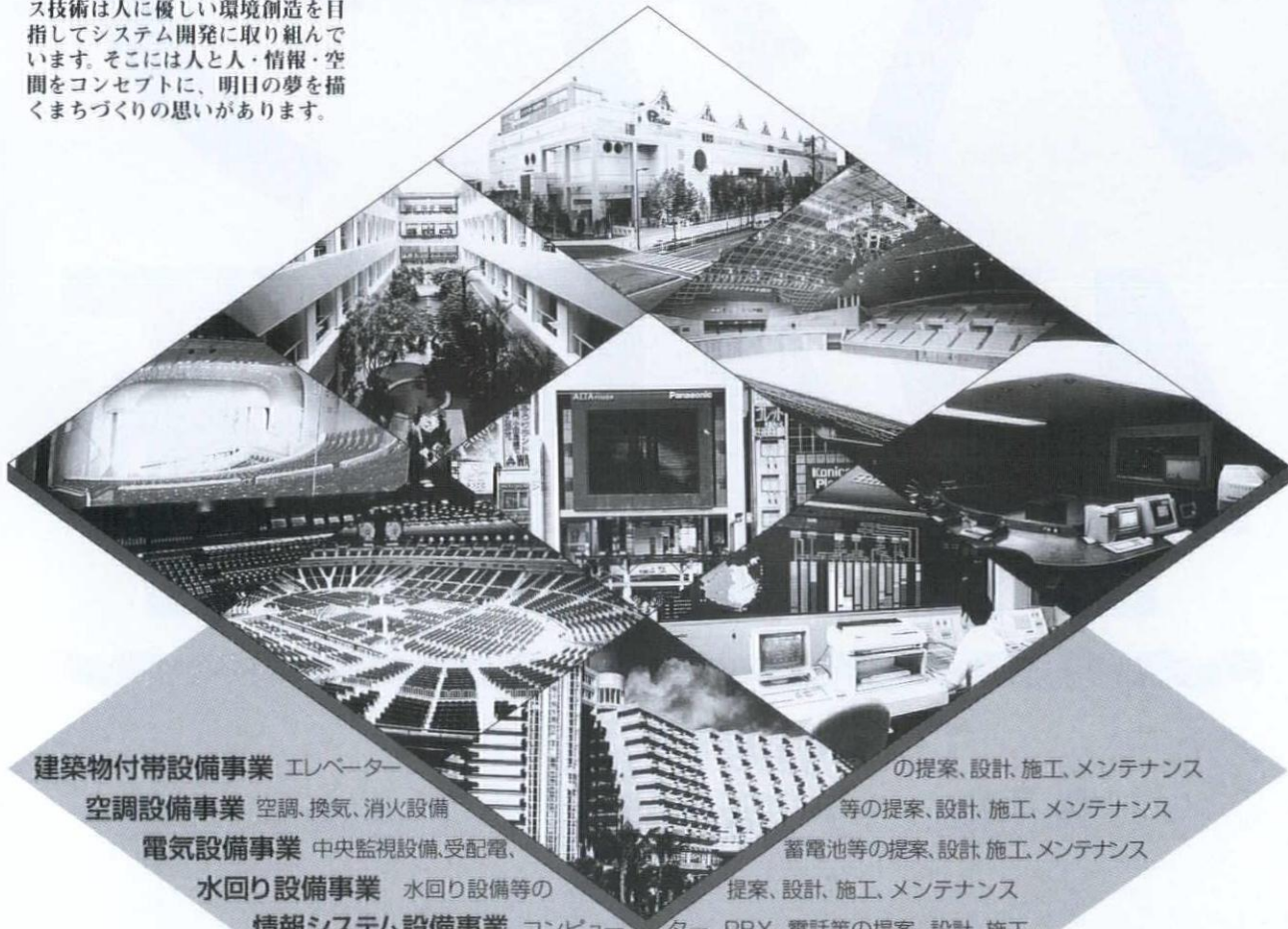
ネオレスト
NEW CSシリーズ
NEW ワンピース
NEW ZG・ZS



National/Panasonic

私たちは快適をシステムにしてお届けします。

松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。



建築物付帯設備事業 エレベーター

空調設備事業 空調、換気、消火設備

電気設備事業 中央監視設備、受配電、

水回り設備事業 水回り設備等の

情報システム設備事業 コンピューター、PBX、電話等の提案、設計、施工、メンテナンス

映像・音響設備事業 映像、音響システムの提案、設計、施工、メンテナンス

まちづくり事業 都市再開発、施設開発、環境創造の提案、設計

の提案、設計、施工、メンテナンス

等の提案、設計、施工、メンテナンス

蓄電池等の提案、設計、施工、メンテナンス

提案、設計、施工、メンテナンス

FLAPS、羽ばたくという意味をもつ新キーワード「AV & CC FLAPS」は映像・音響・情報通信システム・食品流通・照明・空調・水管理・搬送とさまざまな設備システムの融合により真の快適環境を求め夢の実現へと願いをこめて事業展開を進めていきます。



松下電器産業株式会社

建設システム営業本部 ☎03-5500-7504

北海道支店 ☎011-207-7722

東北支店 ☎022-711-3551

新潟支店 ☎025-246-1031

関東支店 ☎0286-37-2241

神奈川支店 ☎045-651-5051

建設システム営業本部中部支店 ☎052-951-6010

長野支店 ☎0262-26-3990

北陸支店 ☎0762-23-1121

静岡支店 ☎054-247-5155

建設システム営業本部関西支店 ☎06-949-2111

中国支店 ☎082-247-5272

四国支店 ☎0878-26-1711

九州支店 ☎092-431-1100

沖縄支店 ☎098-869-2926

AV & CC FLAPS

AUDIO VISUAL COMMUNICATION COMPUTER FOOD LIGHT AIR&AQUA PASSAGE SOFTWARE&SYSTEM



あしたのものがたり



出会は、
人をゆたかに変えてくれます。
ひとりひとりの夢は、語られ、共有されて
あしたのたしかなかたちになっていきます。
たてものは、人と未来が
出会う場所なのです。

株式会社 大林組

東京本社／東京都千代田区神田司町2-3 〒101 ☎03-3292-1111 本店／大阪市中央区北浜東4-33 〒540 ☎06-946-4400[電話番号案内]

スポーツ、イベント、コンベンションなど、多様な用途に対応するドーム空間は
地域の活性化、新しい街づくりの中核をなす施設として全国各地で注目を集めています。

しかし、さまざまなイベントを成功させるためには、

高度な機能はもちろん、ひとびとを包む快適かつ創造性に満ちた空間が求められます。

これらの要求に応え、カジマは数多くの大空間建設で培った実績と先進技術を結集し、各種ドームを開発。

それぞれの地域、用途、目的にもっともふさわしいドームを提案、実現してきました。

すでに、これらのドームでは、野球やサッカーなどのスポーツやコンサート、文化・産業イベントなどが開催され、
ひとびとにダイナミックな空間体験と大きな感動を与えています。

熱中大空間

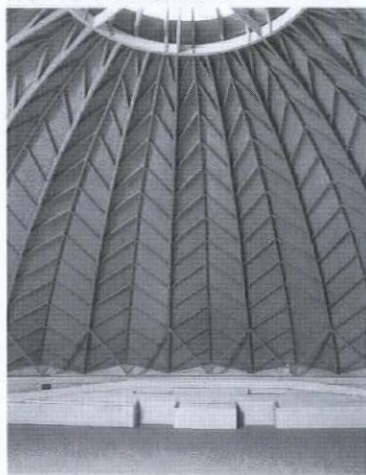




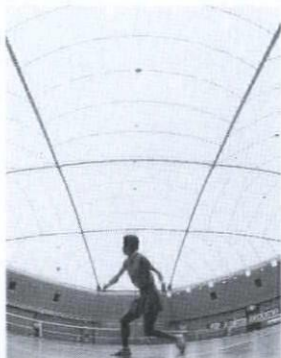
出雲ドーム(木造ドーム)
大空間に日本の伝統美を生かした木造とスチールによるハイブリッド膜構造。



信州博覧会グローバルドーム(木造ドーム)
国産から松材による大断面集成材をはじめ採用。



あきたスカイドーム(スーパーパラソル・ドーム)
自然光を透過する膜屋根とスチール造のスーパー・スペースアーチによるハイブリッド膜構造。



クリエイティブ・テニスガーデン千葉(エアドーム)
膜屋根を空気で支えるため超大スパンにも対応が可能、戸外のような明るい大空間。



新国技館(スチールトラス)
多様な設計条件にフレキシブルに対応できる豊富なトラス技術ラインナップと建設実績。



竹原火力発電所貯炭場内部(ラメラドーム)
安全性・経済性にすぐれ、あらゆる用途に対応できる鉄骨ドーム。

大空間の安全を支える 確かな技術。

強風や地震、火災、温度変化などに対し
て総合的な観点から最良のものを採用。
コンピュータを駆使した構造解析や各
種シミュレーションなどにより究極の安全
性確保に努めています。

大空間をドラマチックに演出する 照明・音響技術。

スタジオ・コンサートホールなどの豊富な
設計・施工実績をもとに最新の実験設
備による実験・研究を重ね、それぞれの
用途に応じたクオリティの高い照明・音響
システムを提供しています。

より快適な室内環境をつくる 空調技術。

大型模型による温度分布シミュレーション
や観客席における気流の実測を重ね、こ
れらのデータを基に、最も快適な室内環
境実現のための空調設備をトータルシ
ステムで組み込みます。

鹿島

KAJIMA CORPORATION

本社:千107 東京都港区元赤坂1-2-7

お問い合わせは——

建築技術本部 (03)3404-3311(代)

四季宴会

KARUIZAWA
MEETING
& PARTY



軽井沢
ホテル 鹿島/森

ホテルオークラチェーン

ご予約・お問い合わせ:
ホテル 鹿島/森 予約係
☎ 03(3478)6220
現地 ☎ 0267(42)3535(代)
FAX: 0267(42)5335



Classical Elegance in Tokyo

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。
ドアマンに迎えられホテルに一步脚を踏み込めば、あなたの新しい物語がはじまります。

ヨーロッパ・サマータイムをお約束 サマー宿泊プラン'97

■期間 1997年7月11日(金)から9月6日(土)まで

燦々と輝く太陽を友に、デラックスなガーデンプールで豪華なアーバンリゾート気分を満喫。1室2名様利用(ツイン)

お一人様料金

月～木	¥13,500
金、土、日	¥15,000

●1泊朝食付 ガーテンプール入場料(1回)・サービス料込み、税別。●雨天の場合は、インドアプールのご利用とさせていただきます。ただし、18歳未満のお客様が含まれる場合は、ガーデンプールご利用日を振り替えていただきます。●8月13日(水)～14日(木)の期間は、全土日の料金とさせていただきます。



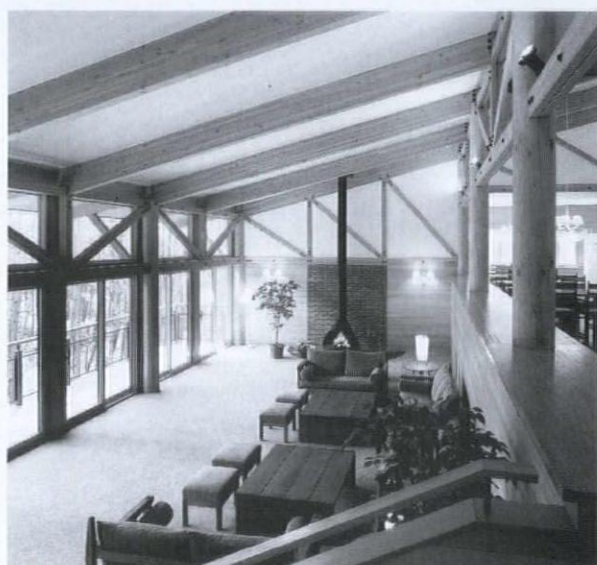
株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

ホテル イースト21東京

〒135 東京都江東区東陽6-3-3 TEL 03(5683)5683(代) FAX 03(5683)5775
地下鉄東西線「東陽町駅」より徒歩7分。東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

大興物産の海外建材シリーズ

No.6 木製品(ツーバイフォー, 集成材)



大興髙科山荘

大興物産は、米国ツーバイフォーシステム用各種部材をパッケージ輸入しており、企画段階から調達・施工段階までトータルなコーディネーションを致します。

お問い合わせは、大興物産株式会社・海外調達部まで。

〒107 東京都港区元赤坂1-5-31(新井ビル) TEL03-5474-6054 FAX03-5474-6386

建設資機材の総合商社

鹿島グループ

大興物産株式会社

本社 〒107 東京都港区元赤坂1-6-4 安全ビル

本社 ☎(03)3423-2511 FAX(03)5474-6076
東京支店 ☎(03)3423-2511 FAX(03)3423-1915
横浜支店 ☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996
名古屋支店 ☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179
大阪支店 ☎(06) 762-5661 FAX(06) 762-1074

札幌営業所 ☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074
東北営業所 ☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867
関東営業所 ☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719
北陸営業所 ☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248
広島営業所 ☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270

四国営業所 ☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
九州営業所 ☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
シンガポール
オフィス ☎65-3440590 FAX65-3446714

日本アス仕様

それぞれの味を生かし

メルタン21

カスタムEE

NPシート

ペストロン

防水仕様をすべて濃縮!!

NS防水

カナート



総合防水メーカー

日新工業株式会社

営業本部 103/東京都中央区日本橋久松町9-2 ☎03(5644)7211(代表)

東京 ☎03(5644)7221 (代表)	福岡 ☎092(451)1095 (代表)
千葉 ☎043(227)9971 (代表)	札幌 ☎011(281)6328 (代表)
横浜 ☎045(316)7885 (代表)	仙台 ☎022(263)0315 (代表)
大阪 ☎048(642)5811 (代表)	広島 ☎082(294)6006 (代表)
名古屋 ☎06 (533)3191 (代表)	高松 ☎0878(34)0336 (代表)
金沢 ☎052(933)4761 (代表)	松山 ☎0762(22)3321 (代表)



広告についてのお問合せの際は<SDを見て>と御明記願います

あなたのそばに、
私はいます。

HUMAN ELECTRIC ENGINEERING NAKADATE

Type of Operations

● General Electrical Work ● Internal / External Wiring for Lighting & Power ● Electrical Work
for Power Stations & Substations ● Design, Execution & Management of Telecommunication Work

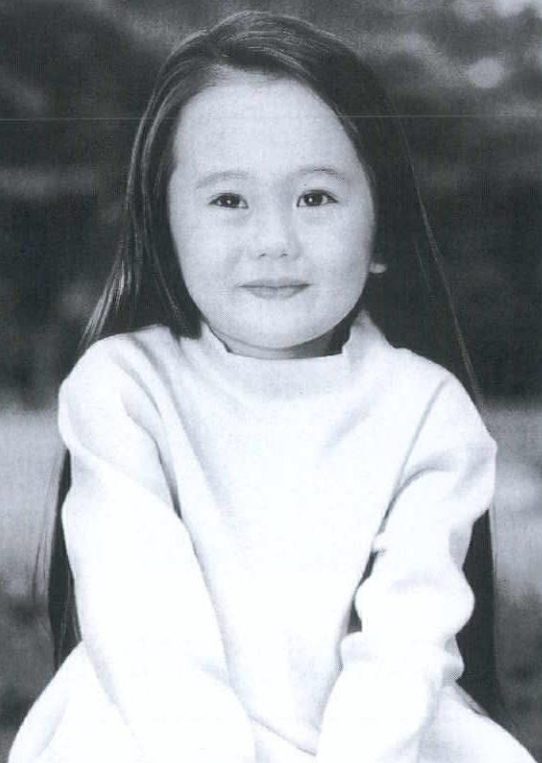
テクノロジー&システム



中立電気株式会社

〒162 東京都新宿区新宿1丁目13番12号 電話 03(3356-2511)代

自然より自然に、
あなたを包みたい。



あなたの、いちばん心地良い場所はどこですか。

きっと、多くの方が、

大自然の中をイメージされることでしょう。

私たちは、そんな快適さをあらゆる建物の内に

創造していきたいと考えています。

人間は、あくまでも自然の一部。その事実を大切に、

新しい最適環境を創造していきたい。

もっとナチュラルに、

いつもあなたのそばに、ダイダンです。

Always With You.



衛生・空調工事

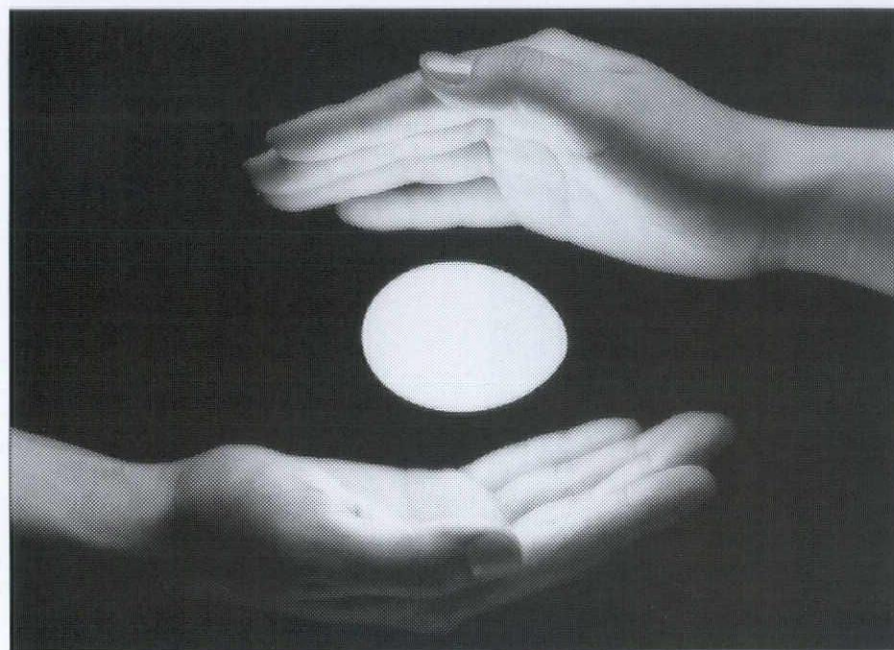
株式会社 川合工業所

代表取締役 高橋 賢二

〒254 平塚市馬入本町 2-4

電話 0463(21)0674

設備は手にとって選べません。 だから……



大切なのは、技術の信頼性。
豊富な実績と、
そのなかで培われた
確かなノウハウです。
私たち三建設備工業は、
求められる環境を
信頼の技術で創りだします。

望まれる環境を、信頼の技術で。

三建設備工業株式会社

〒103 東京都中央区日本橋蛸殻町1-35-8 TEL03-3667-3431

FRIENDS OF EARTH

美しい星だから、次の世代にそのまま残したい——川本はそう考えます。



環境技術で未来をひらく

川本工業(株)

●本社—〒231 横浜市中区寿町2丁目5番地の1 ☎045(662)2021
●営業種目— 空調・衛生工事、電気工事、土木工事、水処理・公害防止工事

夢×技=無限大

安らぎと喜びがある。
生み出すための第一歩は
夢からもらった。
形を築くための第一歩は
技からもらった。
ふたつの可能性が会う時
私たちのフィールドは
無限大です。

何時もあなたの街で
お会いしている
クリハラ。
私達の生活環境に必要な
電気設備・エネルギー
情報通信・環境の分野で
企画、設計、施工、保守に
わたる一貫したシステムで
事業を展開しています。



 創業1919 あなたの街でお会いしています
東原工業株式会社

本 社／〒530 大阪市北区角田町1-1(東阪急ビル) TEL.06(313)1101
東京本店／〒105 東京都港区芝大門1-4-8(浜松町清和ビル) TEL.03(3432)1901

衛生・空調工事

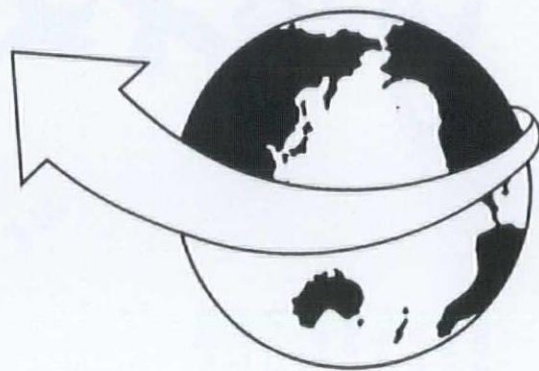
株式会社 鈴木商会

取締役社長 鈴木 溢也

〒230 横浜市鶴見区鶴見中央2丁目5番4号
電話 045(501)0441

未来に向って…

限りある資源
限りある空間の中で
より快適な環境づくりの
ために努力しています。



●営業品目

空気調和・冷暖房・給排水・衛生設備・設計施工



株式会社朝日工業社

本社・東京支社 〒105 東京都港区浜松町1-25-7 電話 03(3434)5711
大阪支社 〒532 大阪市淀川区加島1-58-59 電話 06(302)2273
支店 北海道／東北／北関東／横浜／名古屋／中国／九州

電気設備工事一式

鈴木電業株式会社

代表取締役社長 鈴木宗雄

〒253 茅ヶ崎市十間坂1-8-1

☎ 0467(85)3241~3

FAX 0467(83)4969

最先端のハーモニー。

さまざまな先端技術が調和して、「快適」という名のハーモニーを奏でる。トーエネックのエンジニアリングは、まさにそんなイメージです。電気設備をはじめ、情報通信・冷暖房・空調・防災設備など…。システム設計から施工・保守まで、高度で総合的な技術力を活かし、全国主要都市を拠点に幅広いネットワークでみなさまにお応えしています。オフィスビルやマンション、ホテル、工場、さらにはコミュニティ施設。あらゆるスペースを、心地よい技術のハーモニーで包み込みたい。インテリジェント&ヒューマン。私たちは、トーエネックです。



いろんな技術を結んで、トータルに考える。
トーエネック エンジニアリング

先端技術で、システムする。
TOE/NEC

株式会社 トーエネック

本店/名古屋市中区栄1-20-31 〒460 ☎(052)221-1111
東京本部/東京都豊島区巣鴨1-3-11 〒170 ☎(03)5395-7111
大阪本部/大阪市淀川区新北野3-8-2 〒532 ☎(06)305-2181

衛生・空調工事

豊正工業株式会社

代表取締役 中村 正親

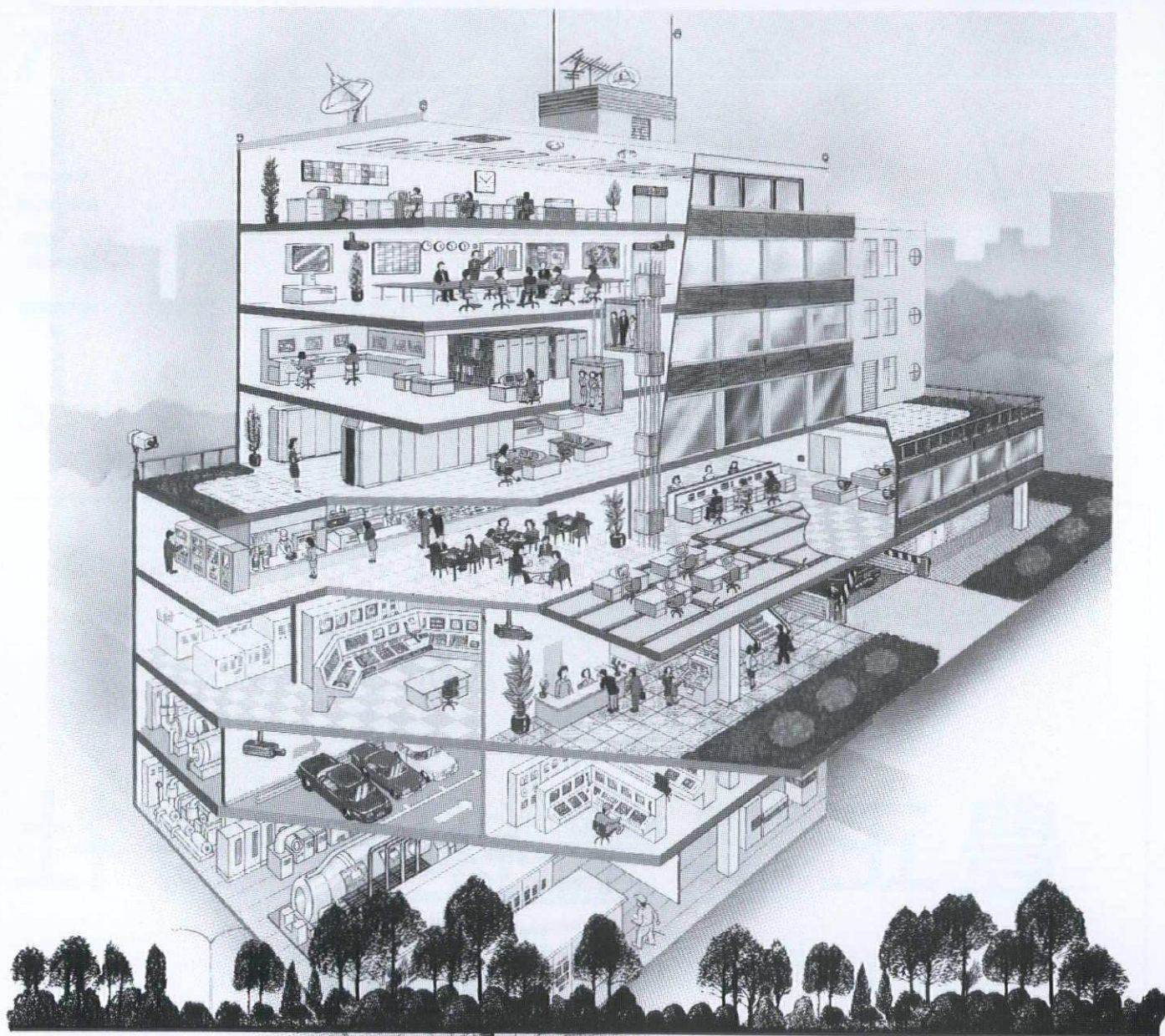
〒220 横浜市西区浜松町12-29

電話 045(241)5115



快適さは…安全、確実が基本。

快適な環境づくりに、 豊かな経験。



●技術と伝統の…

内線工事 ■ 外線工事

東光電気工事株式会社

本社 〒101 東京都千代田区西神田1-4-5 TEL.(03)3292-2111

支社所在地／札幌・仙台・大宮・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・福岡

鹿島出版会

東京都港区赤坂6-5-13
電話：03-5561-2111 (代)
振替：00160-2-180883
Home Page Address:
http://www.kajima.co.jp/kajima_mall/publish/index.htm
年間定期購読料
26,000円 (特別定価号十消費税、送料込み)

SDバックナンバー常備店
[東京]
八重洲ブックセンター
03-3281-8203
三省堂本店 (神田)
03-3233-3314
書泉ブックマート
03-3294-0011
紀伊国屋本店 03-3354-0131
大塚書店 03-3463-0511
[大阪]
旭屋書店本店

柳々堂 06-443-0167
[札幌]
旭屋書店 011-241-3007
[横浜]
有楽堂本店 045-261-1231
[京都]
大龍堂書店 075-231-3036
[大学生協内書店]
東北工業大学 東京工業大学
法政大学工学部 早稲田大学理
工学部 関東学院大学

9509 丹下健三

3873円

最新作シンガポールの超高層ビル「UOBプラザ」、新宿の新たなスカイラインを構成する「新宿パークタワー」を中心に、東南アジア、ヨーロッパ、国内のプロジェクトを通して丹下健三の現在を紹介。

9510 環境に呼応する建築：シーザー・ペリの最新作

1988円

近年、海外での活躍が目立つペリの最新作を紹介。[ランドマーク・グラフィティ——「タワーアート in 通天閣」：ヴァナキュラーな電脳都市展」より]

9511 長谷川逸子：1985—95

3059円

過去10年に渡る主要作品を網羅し、長谷川逸子の現在を紹介。作品：山梨県フルーツミュージアム、新潟市民文化会館他、全30作品。文＝ピーター・クック、他。対談：多木浩二×長谷川逸子

9512 SDレビュー1995

1988円

第14回SDレビュー誌上発表。由田徹十岡本美樹、季鏡男、トム・ヘネガン＋アーキテクチャ・ファクトリー [Villa Romana: ローマのヴィラと庭園] [水戸岡鋭治のトランスポート・デザイン]

9601 都市づくりを仕掛ける建築家たちの実践

2854円

地方自治体主体のまちづくりプロジェクトを紹介。事例：くまもとアートポリス、クリエイティブTOWN岡山、長崎アーバン・ネットワーク、白石メディア・ポリス

9602 建築のメモリア：イタリアの合理主義の流れ

1988円

イタリア建築の基調として流れている合理主義の現在を考察。6人の建築家の作品を紹介する。アントニオ・モネステローリ、フランコ・ステラ、他。

9603 ベトナム建築大博覧

2548円

ベトナムの都市と建築：ハノイ、フエ、ホイアン、チャンバ遺跡、ホーチミン。ベトナムの工業団地。ベトナム現代建築事情、他。文＝重枝豊、中沢信一郎、村松伸、他

9604 大地と光の変様 オーストラリア建築1788—1988円

1988円

1788年入植以来のオーストラリア建築の変遷を追う。[ネクストジェネレーション in New York：スミス＝ミラー＋ホーキンソンとジョエル・サンダース]

9605 多様性と調和の建築 ケルカン＋マルクの最新作

1988円

コンペの秀作で知られる大規模設計事務所の90年代の新作を紹介。[海と建築——鈴木二の最新作] 物質試行：佐木島プロジェクト、佐木島の住宅

9606 建築家の椅子111脚

3059円

19世紀後半から現在に至るまでの建築家がデザインした椅子を111脚紹介。C.R. マッキントッシュ、A. ガウディ、O. ワグナー、ル・コルビュジエ、M. van D. ローエ、C. イームズ、A. ロッシ、他

9607 再考 建築家土浦亀城

1988円

戦前、戦後の作品を紹介しながら、昭和初期モダニズムにおける土浦の再評価を試みる。作品：土浦邸 (第1、2) [スタジオ建築計画の集住考] 最新作 FH-HOYA-II を取りあげながら彼らの設計思想を紹介

9608 マイケル・ホプキンス

2447円

「構造上の表現がクリアな」主要作品を紹介。ホプキンス自邸、イギリス国税局新庁舎、ブラッケン・ハウス、他 [光と空間の夢を訪ねて： دونالد・ジャッドとウォルター・デ・マリア] 文＝南條史生



9609

デンマーク・モダンハウスの最盛期

デンマークの50-60年代の住宅を紹介。キンゴ・ハウス、ヨーン・ウッソフ、他 [山上の都市と塔の家——イエメン：都市と住居の形態学] 文＋写真＝芦川研究室

1988円

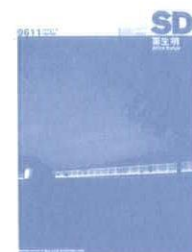


9610

中世の光と空間：フランス中南部のロマネスク建築

ル・トロネ修道院、他。写真＝堀内広治、文＝羽生修二、他 [ふたつの都市考 (近代都市と芸術) (未来都市の考古学展)] [97の椅子プロジェクト]

1988円



9611

葉生明

彼のみごとなディレクションに裏付けられた、コラボレーションの結晶を紹介。岡崎市美術館、植村直巳美術館、カーニバル・ショークース、他。[田窪泰治のサン・ヴィゴールド・ミューゼ・プロジェクト3]

2548円



9612

SDレビュー1996

第15回SDレビュー誌上発表。ユスト・セザール＋ペーター・ルーゲ (Pysall Ruge Architekten)、高橋昌巳 (シチエ環境建築設計)、城戸崎和佐建築設計事務所 [伊丹潤の近作より：石彩の教会、木の教会、土の教会]

1988円



9701

葉祥栄：カリステニクス

柔らかい建築のための12の柔軟性。キーワード「柔軟性」をもとに12のカテゴリーに分けて、全主要作品を紹介。老人保健施設サンダイヤル、他。

3059円



9702

木を生かした架構と空間

木の性質を生かした国内外の25例を紹介。全山の火葬場、モルジュのホール、他。文＝川口徹、今川憲英 [アジアを熱くする新世代建築家たち：IAA国際会議場より] アジアの都市・建築の現在、未来を問う。

1988円



9703

ミニマル・スペース・アーキテクチャ

ミニマルでシンプルな建築表現が特徴的な、4人の建築家を紹介。ジョン・ボーン、小川晋一、岸和郎、石田敏明、文＝丸山洋志、他 [東京国際フォーラム] 写真＝堀内広治

1988円



9704

拡張するデジタル・デザイン

コンピュータとネットワーク技術による、建築・都市の新しい環境を導き出すプロジェクトを紹介。文＝田島則行、山口重之、桂英史、マイケル・ベネディクト、藤嶋正樹、久保田見弘、坂村健、奥出直人、両角光男、他

3059円



9705

アフラトピア・スカルバと「ベネトン」

アフラトピア・スカルバによるベネトンのオフィス社屋、ショップなどを紹介。文＋イラスト＝写真＝豊田博之 [都市ビザとカルマッシュの仕事] カーサ・ムーティ、ヴェルディ劇場修復計画など

2000円

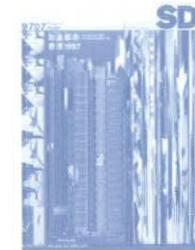


9706

柳澤孝彦：劇場の空間構成

新国立劇場、東京オペラシティビル、三鷹市芸術文化センター、他。文＝長友宗重、本杉省三 対談＝川向正人×柳澤孝彦 [装飾を排したフォルムデザイン——スウェーデンのグッドデザイン展より]

2000円



9707

加速都市・香港

「速度」をテーマに激動する香港の姿を捉える。参加作家＝アラン・チャン、タイクーングラフィックス、浅川敏、江頭慎、他 監修＝村松伸、小嶋一浩、木下光 文＝松田直則

2000円



9708

R.ヴェンチュリー＋D.スコット・ブラウン：90年代の仕事

日本での処女作 (メルバルク日光露崎) を中心に90年代の作品を紹介。シアトル美術館、他。文＝香山壽夫、安山宜之、他 [岐阜県北方住宅プロジェクト] 監＝磯崎新

2400円

鹿島出版会がホームページを開いたしました。

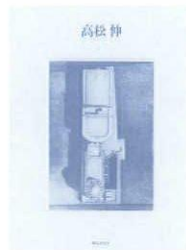
SDをはじめ、当社で出版している書籍の検索が出来ます。是非ご覧下さい。

Address: http://www.kajima.co.jp/kajima_mall/publish/index.htm

アルヴァ・アアルト

巨匠A.アアルトの全主要作品を掲載した総特集。A.アアルトのデザイン・ヴォキャブラリー：武蔵 章、アアルトの年表1899-1976、アアルト建築所在一覧。

3090円



高松 伸

高松 伸

88年度建築学会賞受賞作のキンブラザ大阪を中心とし、1988年までの全主要作品を一挙掲載。精緻なる細部と大胆な素材の扱い、独特な造形により、磁き込まれた独自の作品を創り続ける高松伸の世界を紹介する。織津 一、三、他。

3800円



横事務所のディテール/TEPIA

機械産業情報会館 (TEPIA) というハイテクの殿堂にふさわしいデザインを支える、精密かつダイナミックなディテールの仕組みを写真とドローイングの構成で解剖する。横文彦のディテールとしては初の作品集。

6800円



菊竹清訓

メタボリスト菊竹清訓の初期から1980年までの作品集。第三世代の建築/とりかえ論1950-1960年/方法論の時代1960年-1970年/私の中の菊竹清訓の作品：内井昭蔵、他/作品データ・主要作品分布図、年表、他。

3090円



Kunihiko Hayakawa

早川邦彦

プロジェクト、商業施設、都市型複合建築、集合住宅、住宅、コンペ案まで、初期の作品から1988年までの全主要作品を一挙に紹介した早川邦彦の初作品集。SKY VILAGE、ラビリンス、成城交差点の家、アトリウム、他。

4300円



Anatoli Isenok

磯崎新③ 1985-1991 part 1

キーワードを軸に自らの作品をいくつかの流れに分けて、つくばセンタービル以来、1985-1991年の作品群を紹介。水戸芸術館、サンジョルディパレス、お茶の水スクエア、他。

4800円



白井 晟一

孤高の建築家・白井晟一の珠玉の作品集。懐賢館、ノアビル、聖アキラ館、昨雪軒、尾別山寮、虚白庵、他。論文=磯崎新、針生一郎、浅野敏一郎、白井昱磨。座談=大江宏+藤井正一郎+宮内嘉久。作品文献年表1935-1975年。

3605円



Doi Hideo

ドイツ表現主義の建築

1920年代のドイツを席捲した表現主義の嵐。そこにはレンガとガラスを素材とした自由奔放な造形と多様な表情をもった建築が生まれた。近代建築誕生の母体となり、現代にも影響を与える表現主義建築の全容を紹介。B.タウト、他。

3300円



Anatoli Isenok

磯崎新④ 1985-1991 part 2

part 1同様、自らの「自註」と共に作品を紹介してゆく。ティーム・ディズニー・ビルディング、北九州国際会議場、シュトゥットガルト現代美術館、バラディウム、[蝶々夫人] 舞台美術、他。

4500円



象設計集団

独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出し続ける象設計集団の初めての作品集。そのユニークな建築群の生々しい姿を捉える。安住町農協市民センター、名護市庁舎、宮代町立立原小学校、道修館、他。論文=荒俣宏、宇佐美圭司、他。

4000円

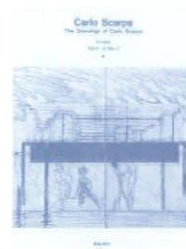


Wooden Architecture Today

続・木造建築の現在

海外61作品、国内13作品の木造建築を紹介。豊かで暖か味のある空間を生み、またあらゆる空間構造に対応できる木構造を再評価する。インタビュー：坪井善勝、杉山英男、内田祥哉。対談：今川善英 X 安村基。

3708円



Carlo Scarpa

カルロ・スカルパ図面集

プリオン家墓地进行めとする主要作品のドローイング約150点を収蔵。プリオン・ヴェガ墓地、フェルトレの遺跡博物館、ヴェネツィア大学文学・哲学部校舎増設、他。文：豊田博之、カルロ・スカルパ、他。

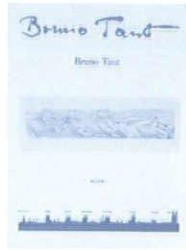
3500円



横 文彦②

横文彦の80年代の活動を知る第2作品集。そこには増々精緻さと多彩さを加えた作品群が見て取れる。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館、前沢ガーデンハウス、慶應義塾日吉図書館、電通大阪支社、京都国立近代美術館、他全21作品。

4326円



Bruno Taut

ブルーノ・タウト

1933-36年滞日期間の活動を中心に、没後40年を記念した特集。作品=熱海の家、ポスポラス海峡に臨む自邸、ヴァイネルト通りの集合住宅、グレル通りの集合住宅、他。タウトの工芸品と著書、他。

2575円



Tadano Aoki

安藤忠雄③アンビト・プロジェクト

'70年代からの見逃せないアンビト作品29点を紹介。JR京都駅改築設計競技案、岡本ハウジング、I計画、伊豆プロジェクト、水の劇場、中之島プロジェクトII、Iギャラリー、大淀の茶室、他。

3800円



伊東豊雄

風のように、光のように変化する建築。独自の感性で買かれた作品群、その初期から1986年までの軌跡。中野本町の家、シルバー・ハット、レストラン・ノマド、馬込沢の家、風の塔、東京遊牧少女の家具、ホンダクリオショールーム、他。

3914円



Bozarth

ボザール：その栄光と歴史

ボザールの全貌を紹介。アカデミーの功罪：高階秀爾、ボザールその歴史と思想：三宅理一編。ボザールの成立とネオ・グレコ形成、折衷主義の世界、近代の憂鬱、戦後のボザール、バリ・オペラ座の図面と写真、他。

2575円



Urban Design Yokohama

都市デザイン | 横浜

横浜市の20年にわたる都市デザイン活動の足跡を辿り、これからのアーバンデザインの課題と展望を探る。座談会：都市づくりの新局面へ向けて、横 文彦 X 斎藤敬 X 小澤恵一、他。

5000円

5 特集

駅空間の新局面

6
日本の駅デザインの
変遷と現況
宮林敬幸

7
駅空間の
構造的再編の時代
窪田陽一

20
今後の駅舎建設に向けて
前田厚雄

47
駅は駅舎ではなく
都市である
次世代の駅空間を求めて
伊澤 岬

編集長：相川幸二
編集スタッフ：
寺田真理子 高木伸哉
大野由美 飯塚りえ
高森和志
制作協力：久世健
勅使河原馨/guild
アドバイザー：伊藤公文

発行人：平田幹郎
編集人：長谷川愛子

発行所：鹿島出版会
〒107 東京都港区
赤坂6丁目5番13号
電話：
(03) 5561-2551 営業
(03) 5561-2555 編集
FAX：
(03) 5561-2561 営業
(03) 5561-2565 編集
TELEX：
02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番
Home Page：
[http://www.kajima.co.jp/
kajima_mail/publish/
index.htm](http://www.kajima.co.jp/kajima_mail/publish/index.htm)

印刷・製本：
凸版印刷株式会社
〒174 東京都板橋区
志村1丁目11番1号
電話：
(03) 3968-5111 案内

取次店：トーハン・日販・
大坂屋・大洋社・
栗田出版販売・誠光堂・
鈴木書店・西村書店・中央社

定価：2,000円
[本体1,950円]
年間直接購読料：26,000円
特別定価号+送料込み

表紙：京都駅ビル
表紙写真：大野 繁
表紙デザイン：小泉均

8
JR西日本美川駅、
美川コミュニティプラザ

12
JR東日本磐城塙駅

16
ふるさと銀河線本別町
コミュニティステーション・
ステラプラザ

22
JR東日本大曲駅

25
JR東日本矢吹駅

28
JR東日本田沢湖駅

32
JR東日本鳴子駅

34
JR九州由布院駅

37
野岩鉄道川治温泉駅

40
JR九州西鹿児島駅

43
東葉高速線船橋
日大前駅西口

46
船橋日大前駅東口

49
M in Mプロジェクト
博物館動物園駅の
進化と再生
若松久男・森 徹・植野 糾

57
京都駅ビル
写真＝大野 繁

75
コンコースを
アーバン化する
新京都駅について
川崎 清

80
対談
駅空間と公共性
京都駅ビルの
設計コンセプトを中心に
横尾忠則×原 広司

109
バラ色のユートピア
ワイセンホーフ・ジードルンク住宅展より
長谷川 章

86 SDレビュー1997：展覧会開催のお知らせ

90 連載：apple tomology MOVING DIMENSION 戸村 浩
トムの時空形象学 最終回

93 隔月連載： プレスラウ美術工芸アカデミー／ベトラ・ヘルシャー 構成＝長谷川 章
ポーランドのアヴァンギャルド3

107 連載：世界の現代美術館探訪——美術館は生まれ変わる 水沢 勉
3. 複合された美術館空間

113 新刊紹介

114 書評

116 お知らせ

117 展覧会レポート：
ジャスパー・ジョーンズ展より

119 海外建築情報リミックス：12 Architects
9. Philippe Starck

5 Special Feature:

A New Phase of
Railway Station Space6
Designs of
Railway Stations in
Japan: Past and Present
Takayuki Miyabayashi7
An Era of Structural
Reorganization of
Station Space
Youichi Kubota20
A Consideration of
Future Railway Station
Construction
Atsuo Maeda47
A Railway Station Is a
Town, Not a Building:
In Quest of
Next Generation
Railway Station Space
Misaki IzawaChief Editor: Koji Aikawa
Associate Editors:
Mamiko Terada
Shinya Takagi
Yumi Ohno
Rie Iizuka
Kazushi Takamori
Production Cooperation:
Takeshi Kuze
Kaoru Teshigahara/guido
Adviser: Kobun ItoPublisher: Kanna Hirata
Executive Director:
Aiko HasegawaPublished by
Kajima Institute Publishing
Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka,
Minato-ku, Tokyo 107,
Japan
TEL:
03.5561.2551 [Management]
03.5561.2555 [Editing]
FAX:
03.5561.2561 [Management]
03.5561.2565 [Editing]
TELEX:
02422467 KAJIMA J
Home Page:
http://www.kajima.co.jp/kajima_mall/publish/index.htm

Printed in Japan

This Copy: ¥2,000
¥30,000 a year
¥50,000 two years

Order Form: Page 132

Cover:
Kyoto Station Building
Cover Photo: Shigeru Ohno
Cover Design:
Hitoshi Koizumi/NID8
JR West Japan Railway,
Mikawa Station:
Mikawa Community
Plaza12
JR East Japan Railway,
Iwaki Hanawa Station16
Hometown Milky Way
Railway: Honbetsu
Community Station
Stellar Plaza22
JR East Japan Railway,
Omigari Station25
JR East Japan Railway,
Yabuki Station28
JR East Japan Railway,
Tazawako Station32
JR East Japan Railway,
Naruko Station34
JR Kyushu Railway,
Yufuin Station37
Noiwa Railway,
Kawaji Onsen Station40
JR Kyushu Railway,
Nishi-Kagoshima
Station43
Toyo Kosoku Line,
Funabashi Nichidai-mae
Station West Exit46
Toyo Kosoku Line,
Funabashi Nichidai-mae
Station East Exit49
Museum in Metro
Project
("M in M Project")
Hisao Wakamatsu +
Toru Mori +
Osamu Ueno57
Kyoto Station Building
Photo by Shigeru Ohno75
The Urbanization of the
Kyoto Station Building
Concourse
Kiyoshi Kawasaki80
Discussion
The Public Nature of
Railway Station Space:
The Design Concept of
the Kyoto Station
Building
Tadanori Yokoo and
Hiroshi Hara109
Rose-colored Utopia:
The Die Weiflenhofsiedlung Housing Exhibition
Akira Hasegawa

86 SD Review 1997

90 Series: Moving Dimension Hiroshi Tomura
apple tomology 2493 Bimonthly series: Bresrau Academy of Arts and Crafts / Petra Hölscher
Poland's Avant Garde 3 Presentation by
Akira Hasegawa107 "Museums of the World" Series: The Museum Transforms
3. Integrated Museum Space Tsutomu Mizusawa

113 Book Information

114 Book Review

116 Announcements

117 From the Exhibition:
Jasper Johns119 Eminent Works Abroad: 12 Architects
9. Philippe Starck

特集

駅空間の新局面

駅、そこは旅立ち、帰着としての空間。
駅、そこは人々が出会い、滞留する空間。
人々にノスタルジーとフィクショナルな
イメージを喚起する駅。

駅空間にも、都市の顔として
都市交通システムの要として巨大化するものと、
ローカルで小規模ながらも、
地域コミュニティの核として
多用途な機能を併せ持つものまで、
その都市規模により、
さまざまな姿が見て取れる。
本特集では、作品として前者をひとつ、
後者を12紹介している。
これらと、各論考が、日本の駅空間の現況と、
今後の展開を考える上での
契機となれらばと思う。

日本の駅デザインの変遷と現況

宮林敬幸

日本では明治5年(1872年)新橋―横浜間に鉄道が開業した。代表的な新橋、横浜の両駅は、小振りではあるが、ブリジェンヌによる、ヨーロッパスタイルの終着駅様式であった。

日本の鉄道敷設は、主として明治国家の国策である欧化思想、富国強兵、中央集権策の強力な具現化であった。当然各地の中核駅は、その思想の全国敷延の役割を担うこととなり、勢い肩肘を張り、威厳に満ちた、洋式建築となった。欧米のような産業の発展のない当時の日本では、鉄とガラスの大構築物は、所詮無理な話ではあったが。しかし各地の中核駅はその新様式と鉄道の魅力によって、十分にその役割りを果たした。

しかしいずれの中核駅も、その後の日本の発展に伴う鉄道利用の増大に対処出来ず、現在では、県庁所在地の初代駅は、東京駅(大正3年)を唯一の例外として、現存していない。

大正に入ると、大正ロマンに見られるごとく、時代思想も明治のそれとは大きく変わった。駅デザインも、2代目鎌倉駅(大正5年―昭和59年)、原宿駅(大正10年)のごとき、大正ロマンを彷彿とさせる、親しみやすい駅が各地に建設された。また日本が自信をつけるにつけ、日本固有の文化の再評価も行われ、そのような時代背景のなか、駅舎も2代目奈良駅(昭和9年)、3代目長野駅(昭和11年―平成7年)など、地方色豊かな駅が、各地に建設された。

駅建設の大きな変化は、日本の建築界におけるゼツェション運動の影響である。鉄道省の建築家、伊藤滋は「停車場建築は内部に停滞居住するものでなく、むしろ道路の一部であるというところにその特徴がある。レールウェイ・インダストリーというものは、すべて単純と秩序と迅速によらねばならない。また、停車場建築も単純と秩序は迅速の觀念の上に設計されるべきである。この精神は建築思想と良く一致する」と述べ、具体例として2代目御茶ノ水駅(昭和7年)を設計した。この御茶ノ水駅は、白を基調とした無装飾の壁面と、単純な矩形の開口部を持った建築であり、ル・コルビュジエやグロピウスを中心とした近代建築と十分比肩できるものである。

戦後は、戦災を受けた駅や、老朽化した駅の再建が急務であった。こうした中で民衆駅

構想が生まれた。これは駅舎の建築にあたって、費用の一部を部外者が負担する代わりに、建設された駅舎の一部を部外者が利用し、そこに店舗や食堂等を設けるというものである。この方式で多くの中核駅が再建された。そしてこの方式はやがて「駅ビル」スタイルへと発展していく礎となった。

この当時の建築思想は機能主義の全盛期であった。すなわち、駅は乗降のための機能を徹底的に追求し、それに合った形態が相応しく、よけいな装飾、ゆとりなどを極力排除し、単純明快にするべきとの主張のもと、多くの駅が建設された。

機能主義に拍車をかけたのが東海道新幹線の駅舎の一連のデザインであった。新幹線は高架の形態を採ったため、多くの駅舎は高架下を積極的に利用した高架下駅となった。そのため高架の外装と、駅舎全体を飾る高架防風スクリーンが駅舎の顔となった。そのため在来線の駅舎とは異なり、駅の機能上、横に細長いのっぺりした駅舎にならざるを得ず、建築物として都市の顔やランドマークになるべき屹立したデザインが困難なことに加えて、ヒューマンスケールを超えた巨大化したファサードになってしまった。逆にこれが新幹線駅舎の特徴となった。日本の工業化の大発展と、建築界の機能主義の相乗効果が加わり、特に鉄道の駅の場合、旅客の流動、滞留の扱い、ラッシュ時の容量決定、それらに伴う空間づくりなど、まさに新幹線駅舎は、機能主義の格好のケースとなった。在来線の駅舎も事情はほぼ同様で、箱型のユニヴァーサルスタイルの駅ビルが、多くの中央、地方都市で建設された。

国鉄解体とほぼ時を同じくして、まったく新しいコンセプトのもと、駅舎が建設される時代となった。その動きは国鉄最後の昭和50年代後半頃から生まれたものであるが、JRの時代になって加速され現在にいたっている。

その基になったものは、駅の見直し、すなわち駅の役割、機能の見直しである。駅は「単なる乗降の場」との見方から、もっと複合的、都市的に見直し再構築する必要があるとの認識である。機能的なものは美しいとの主張のなかで、空間のゆとりや感動が排除されてきたことへの反省に立ち、個性と文化とアメニ

ティに富んだ駅が見直されるようになった。同時にそれは、自分たちの商品をより魅力のあるものにし、社会からの支持を高め、企業の発展を図ろうという民間の発想でもある。

時あたかも日本は高度成長期を終え、荒々しい成長の時代から、安定成長、成熟期に入り、人々の考え方、価値観も変化し、ゆとり、個性化、多様化、地方の時代と成熟文化の時代となった。建築デザインの考え方も、直線と面を主体とし、単純で力強く男性的な、ユニヴァーサルな造形から、柔らかな曲線、地方のモチーフの重視、個性の尊重等に価値を置く方向に大きく変化した。

駅も単なる乗降の場から、生活全体をサポートし、豊かにさせる場へと、その基本理念が大きく変化した。国鉄がJRとして民営化されたのを最大の契機として、駅はかつての栄華を取り戻しつつある。そしてより快適で、利便性に富み、情報豊かで、感動的空間を持ったものとなりつつある。そのため、最近の駅は、多くの場合、郵便局や町役場の機能の一部を取り込んだり、コミュニティ施設や商業施設、飲食施設との合築駅となる。いわゆるステーション・コンプレックスであり、複合化、総合化されることによりさらに魅力が高まり街の機能の一部を形成する。

当然そこでは、新しい街のアイデンティティ、ランドマークとなるデザインが求められる。そしてそれは、歴史性や地域性、機能、時代の精神、技術の総体の表現なのだ。それらが渾然一体となって現出された時、駅は、再び「おらが駅」として愛され、心象に深く刻まれる。

●みやばやし・たかゆき／交建設計

駅空間の構造的再編の時代

窪田陽一

鉄道の駅は19世紀の産物である。鉄道という近代交通手段の中継地点である駅舎はそれ以前の時代に原型を持たなかった。歴史的にみれば駅の空間は都市の新参者だったわけであり、既存の都市空間に対してどのような関係を持たせるかということは重要な着眼点となった。駅の内部空間は鉄道の機械システムの論理が卓越するが、当時の建築家は駅を都市の中のどのような場所として位置付けるかという課題に対しても現代にも通用する解答を考え出している。折りしもバロック的都市計画の波がヨーロッパを覆い、重要な公共的建造物は街路の軸線とそのファサードが関連づけられて配置されるようになり、一直線の広幅員街路が形成するビスタの焦点に建造物の正面中央部が位置するという中心性が高い構図の景観が形成された。こうした建造物の前には建物全体が見渡せるように引きを取るための前庭が設けられることが多く、新しい時代の技術を象徴する鉄道の駅前にも広場が形成された。駅前大通りの一端に位置する駅前広場は交通手段転換の空間であると同時にシンボリックな都市空間として誕生したのである。

鉄道の駅空間を考える上でもうひとつ重要な点は路線のネットワークである。鉄道網が発達してくると駅での乗り換えや同一の駅への路線の集中が起こる。初期の鉄道は路線毎に経営者が異なり、乗客獲得の利害関係から駅舎を離して建設したりすると個々に計画された駅空間により乗客の流れが混乱するなど、都市の公共的な施設として大きな問題を抱えることが明らかとなった。そこで欧米ではユニオン・ステーション方式が採られるようになる。これは異なる鉄道会社が集まる駅の整備と運営をひとつの組合に委ねて合理的で快適な駅空間をまとめる手法であり、やがて、鉄道会社の統合再編にもつながっていく。組合駅という運営形態がとられることにより、複雑になりがちな駅空間の総合的な計画設計が可能になる。一方、単一路線の駅では、乗降客数という規模の指標が全てのパラメータの決定要因となる。そして基本的に標準設計を旨とする鉄道という技術システムの中では、都市空間の中での駅の立地特性を反映した設計は浮上しにくい。この限界をいかに克服するかという問題も早くから認識されていた。

地下鉄の駅の例にはなるが、ウィーンにオットー・ワグナー、パリにはギマールによる地上出入り口の事例がある。こうしたアールデコやアールヌーボーが今世紀初頭に残した作品は徒花のようにも見えるが、都市の中での場所と駅の間を問いつけているとも言える。

20世紀に国際建築様式が蔓延するに従い、あるいは地下に設けられるようになり、駅は駅であることを表現するモチーフを失うに至る。高架橋による立体化が都心に持ち込まれたのは百年も前になるが、土木構造物のスケールがむき出しで建築のスケールと対峙する関係をいかに調整するかは、駅舎と駅前広場、さらには周辺をも取り込んだ空間計画の大きな課題として今も存在する。我が国では法規制の枠組みが桎梏になる場合が少なくないが、計画手段でのトポロジカルな考慮が乗客に大きな利便性をもたらしている優れた事例がどちらかといえば過去の方に見られるのは、土地利用が高度化したと自負する現代の皮肉だろう。例えば東京の地下鉄丸の内線の赤坂見附駅は、銀座線との乗り換えを考慮してそれぞれの上り線下り線が二層に重なっている。JR中央線の御茶ノ水駅では快速と各駅停車の列車間での乗り換えが同じプラットフォームでできるように、復々線が駅の前後で立体交差により位置が入れかわれるようになっている。このように路線計画の段階での周到な配慮により、利用者の動線は短縮され、わかりやすく使いやすいく駅空間が形成される。日本の私鉄においては駅ビルや百貨店との接続を立体的に行った神戸の阪急三宮駅等の好例が各地に見られるが、概ね一事業者の管理域内にとどまっている。複数の事業者にまたがる総合的な空間計画はほとんど見られない。乗客のための利便性と快適性を第一とする鉄道サービスを心がけるならば、異なる事業主体の間の調整により狭い土地を有効に利用することは不可欠である。要は、併置、重層、交差といった空間相互の関係を立体的に編集する思考技術の問題であり、技術基準の制約を組み替える柔軟な制度再編も必要だろう。こうした計画的な配慮がむしろ後退した場面も残念ながら見られる。東京の三軒茶屋駅は昔は東急玉川線と世田谷線の路面駅だったが、玉川線が半蔵門線と相互乗り入れて地下に入った後、駅周辺の再開発が行われ、世田谷線の駅はホームからホームへの距離で見

れば以前よりも数百メートル近く離れた。高齢者や障害者への福祉対応が声高に叫ばれている現代の駅空間の資質を向上させるために運輸省が推進しているアニメティ・ターミナル整備事業では、エスカレータやエレベータ、動く歩道などの機械力による補助設備の設置が進められている。しかし駅の空間を本当にわかりやすく使いやすいものにするには、暖勾配の斜路を導入できるようなゆとりをもつように駅空間を構造的に改良し、利用者の動線と見通しのよい空間構成が視覚的に一致した明快な計画と設計が必要なのである。

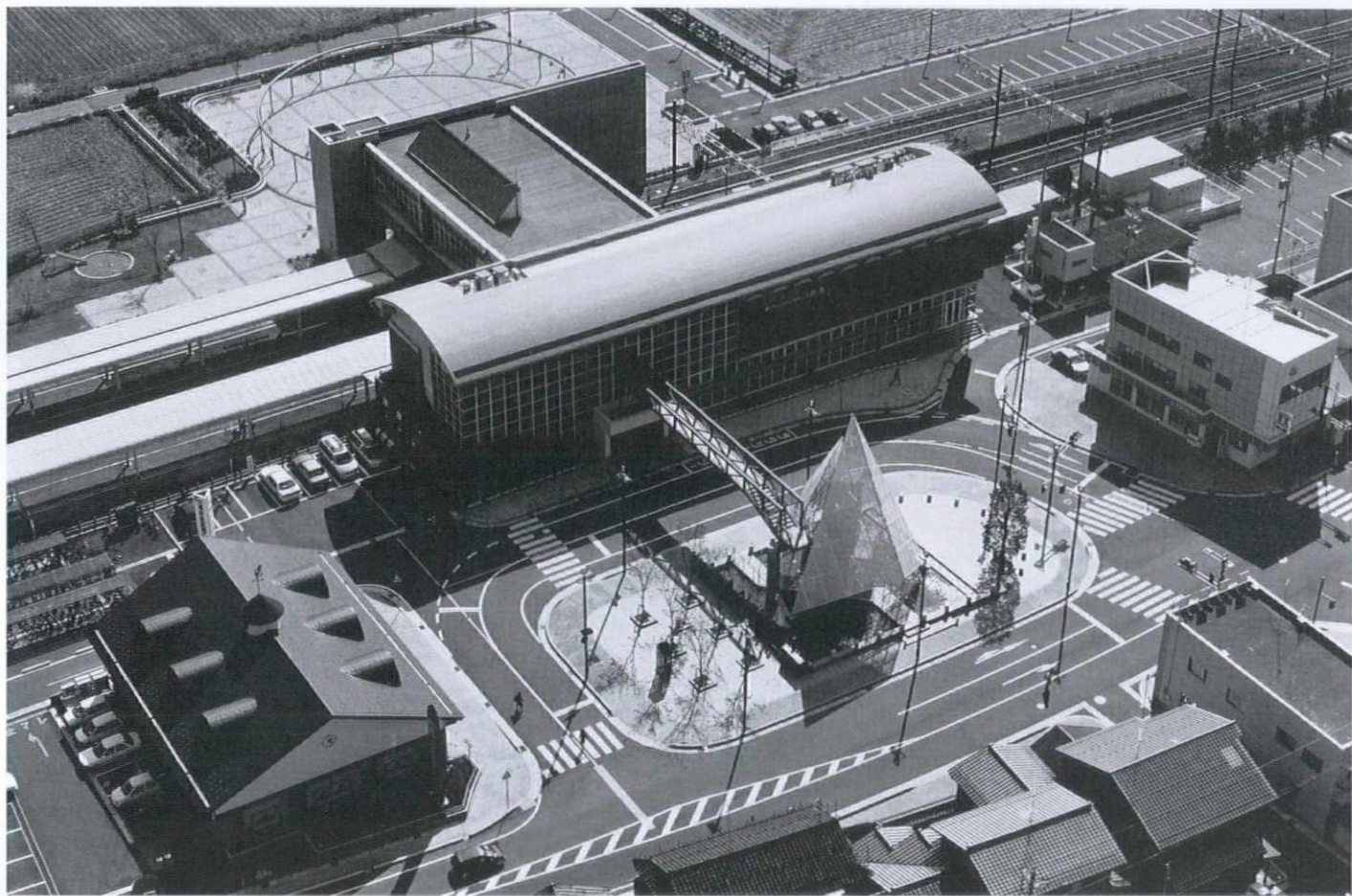
日本と海外の鉄道の駅で明確に異なる点は改札口の有無である。ロンドンやパリの地下鉄等の都市内高速鉄道網では有人あるいは自動化された無人の改札ラッチを置いている場合もあるが、海外の鉄道の大半では社内検札しかなく、利用者の良心に委ねるオネステイ・システムにより駅務員を削減し経費を抑えている。このためコンコースからプラットフォームまでが動線上は連続している。日本の鉄道でも地方線の無人駅では同じような状況にあるが、ラッチの内と外の区別が設備の面でも大きな影響をもたらす。公衆電話やトイレのようにラッチのどちら側にも必要になる設備は大きな駅になれば両側に作らなければならない。乗降客が少ない駅ではこれらの設備はラッチ内にしか置かれていない場合もあるが、不便であることは確かである。日本の鉄道は運行サービスが比較的頻繁な路線が多いため、ラッチ内で長時間乗り換え待ちをすることを想定していない場合が多く、時間を潰すためのサービスがこれまではほとんど考慮されなかった。多くの荷物を持ち乗り換えのために駅の中で長時間滞留するような旅行者への配慮は極めて貧弱である。日本国有鉄道の民営化以降、多少の物販店の導入やサインや駅舎のデザインの改善は盛んに試みられているが、乗降客のための空間のゆとりは必ずしも十分とは言いきれない。さまざまな施設の財産権の問題や財政投融資の制度的な枠組みを変えながら、駅空間を都市空間の中核として構造的に再編する時代であることは確かだろう。

●くばた・よういち/埼玉大学工学部教授

JR西日本美川駅、美川コミュニティプラザ

石川県石川郡、1995年

設計＝川崎清十環境・建築研究所



石川県美川町は、金沢市と小松市のほぼ中間に位置し、日本海に面する人口1万2千人の海辺の町である。町は、霊峰白山に源を発する手取川河口兩岸の平野部にまたがり、豊富な伏流水の潤す、水田の長閑な景色が広がっている。江戸時代には、北前船の寄港地、本吉港として栄え、旧町内には、豪商の館が軒を連ねた。最近では、金沢の近郊ということもあって、民間住宅地開発の動きが活発化している。町では、建設省のHOPE計画にも取り組み、地域の個性や伝統を活かした町づくりを目指している。

今回の事業は、その町づくりの一環として計画された、軌道両側にまたがる一連の整備事業である。つまり、老朽化した駅の建て替え橋上化にあわせ、軌道で分断されていた町の南北を自由通路によってつないでそれぞれの出入口に個性のある広場を整備する。さらに集会場と交流サロンを併設し、駅を中心とする賑わいと町民の交流の場をつくり出すと

いうものである。

橋上駅舎は、軌道の南北両側からの中央に設けて利用の便を図る一方、アクセスとなる自由通路は、町民ギャラリーとして、通路がそのまま展示空間となるよう計画している。北側は延長されて道路をまたぐブリッジとなり、日本海広場の池の中に建つモニュメントの櫓に連結している。日本海広場は、この地方の豊富な水为主题としており、中央のモニュメントは、海の上を走る帆船の姿を翻案した。また、広場に面する建物前面にも噴水を設けて、広場周囲に涼しげな休憩スポットを提供している。自由通路の南端は、彼方に白山連峰を望む展望台であり、アプローチの階段室は、大きな壁として計画し、白山広場でおこなわれるイベントの、舞台の仕切壁として利用できるものとした。

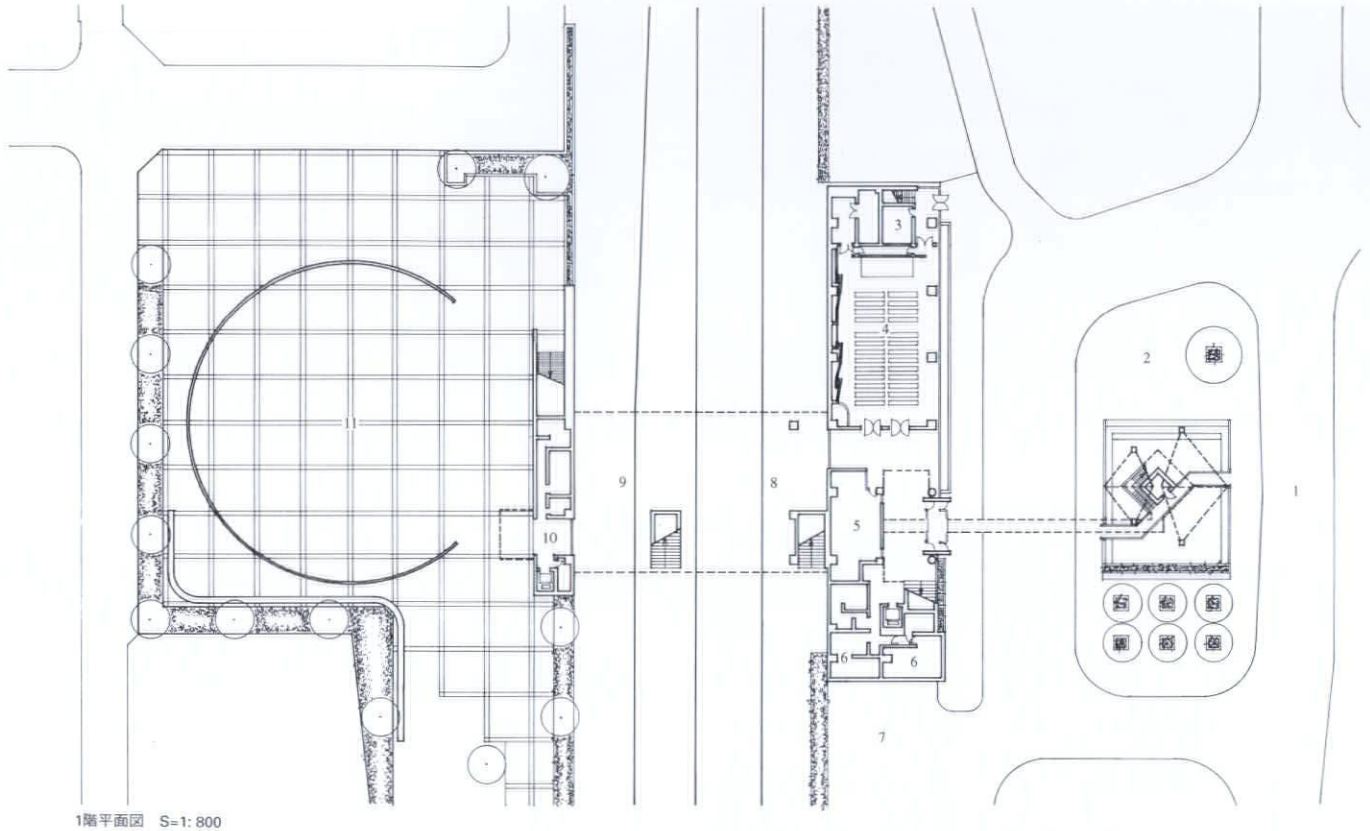
駅舎の構造は、鉄道架線上部でおこなう施工の便を図ることや、狭いホーム上の柱をなくす事などを考え、軌道敷きをまたぐロング

スパンの吊り構造として計画し、地組みした鉄骨を一気に吊り込んだ。この構造によって、二階の自由通路には、柱の凹凸のない連続壁面ができ、眺望と展示の双方の要求を満足するよう、ほぼ全面にパンチングメタルをはめ込んで仕上っている。

駅に併設された集会所は、コミュニティプラザ「ふれ愛」と名づけられ、1階は200名の多目的ホール、2階はふるさと館と称する、町民や駅客のための交流サロンで、文化活動などの展示スペースとしても利用されている。

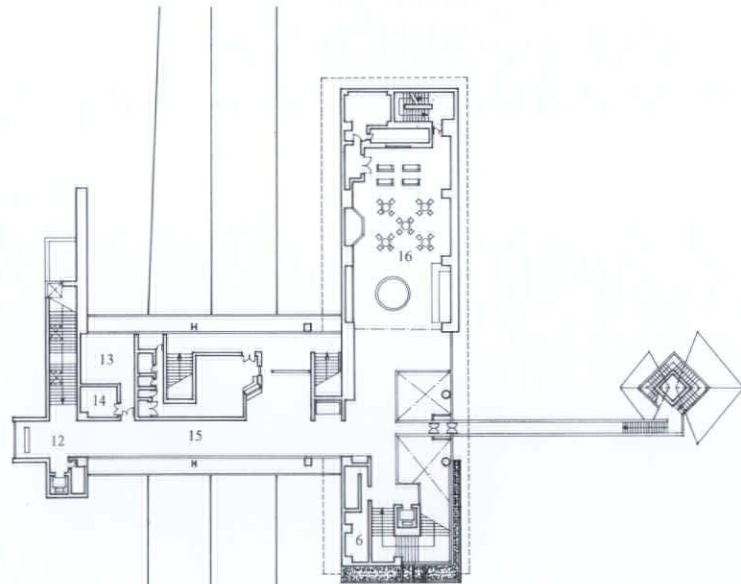
駅を含む周辺再開発の形となるこのような事業は、小さな町では、町づくり事業の核プロジェクトとして取り組みやすい。しかし、一方で町の持っている地域的な特徴や界限性を急変させてしまう恐れもあり、新しい空間に地域の記憶をとどめる計画のあり方、地域らしさの創出につながる細部計画のきめの細かさについても考慮する必要がある。

意匠設計：川崎清＋環境・建築研究所
 構造設計：JR西日本コンサルタンツ、エム構造設計
 敷地面積：13,122m²
 建築面積：1,524m²
 延床面積：2080m²
 設計期間：1993年12月～1994年6月
 施工期間：1994年7月～1995年5月



1階平面図 S=1:800

- 1: 県道
- 2: 日本海広場
- 3: 控室
- 4: 多目的ホール
- 5: 事務室
- 6: 便所
- 7: 駐車場
- 8: 下りプラットフォーム
- 9: 上りプラットフォーム
- 10: エレベーターホール
- 11: 白山広
- 12: 展望室
- 13: 会議室
- 14: 倉庫
- 15: 自由通路
- 16: ふるさと館



2階平面図



断面図 S=1:800



コミュニティプラザ2階ホール（ホワイエ）



コミュニティプラザ2階ふさと館



自由通路、町民ギャラリー



コミュニティプラザ1階多目的ホール



メディアウインとベンチ



イベント当日の広場

JR東日本磐城塙駅

福島県塙町、1993年

設計＝伊藤邦明＋建築研究所MAIS



戦後の一時期民衆駅ブームというのがあって以来、駅の機能の多様化が言われて久しい。しかも、ここ10年来何でもくつつければ良いといった風潮が昂じ、駅としての主体性が問われる例も散見されるに至っている。駅はやはり駅でありたい。かつての馬ならぬ列車その他の乗り物が休憩し、人とモノと情報を交換する場所として十分に機能してこそ駅であろう。磐城塙駅はオープン後4年を経て、人、モノ、情報の行き交う地方都市の核として明らかに生まれ変わった。以前と比べ、とにかく常に人がいる、何か賑わいがあるのである。併設された図書館の利用者数は、公民館横にあった以前のそれと比べ10倍以上に達していることがそれを証明している。人口1万2000人、利用者数1万6946人、入館者数4万8000人（平成5年度）は、県内トップクラスの利

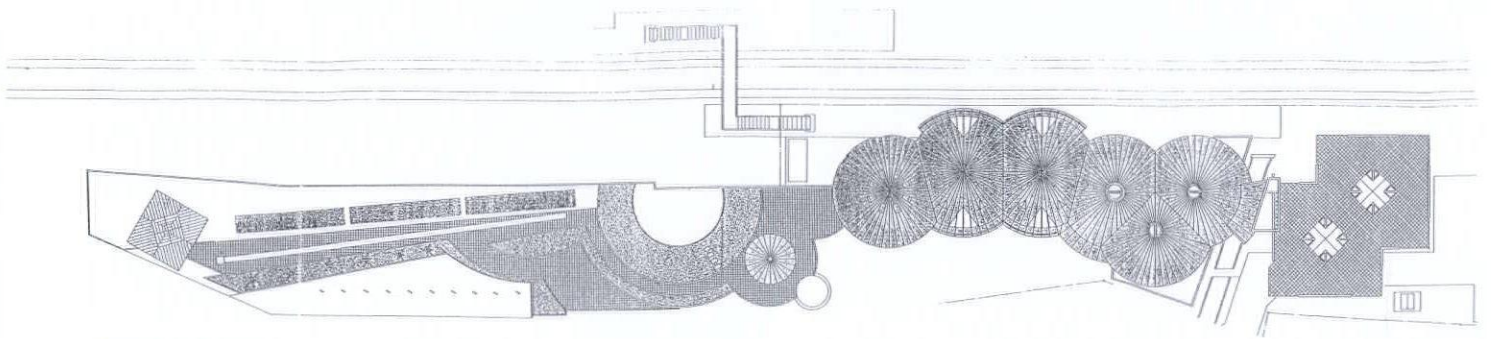
用状況を示している。富永一郎漫画廊やスナックも生き生きとしている。磐城塙駅は1996年、ブルネル賞奨励賞や福島県建築文化賞正賞を受賞し、この点でいささかの寄与が出来たことを設計者として誇りに感じている昨今である。現在JR東日本との協力で、地方都市における駅の景観上の在り方を問う研究をしている。出発点はこの磐城塙駅の屋根形態を如何にデザインするかに伸吟した6年前にあった。背後に、かつて砦もあったという羽黒山を控え、周囲を八溝山に囲まれた塙町にふさわしいシルエットとは、そして、その屋根の下に集う人々が如何なる空間を感ずべきか。磐城塙駅のデザインは屋根のデザインと言ってもよかった。

工事は4期にわたり、しかもどこで終わるかといった明確な計画はなかった。その時に

応じて完成された形態を持たねばならない。ユニークな設計条件と言え言えなくもなかった。このような方法も、軌道系の駅の将来像が必ずしも明確とは言えない現在、リスクを回避する有効な手法であったと言える。なにしろ、磐城塙駅の場合、旧国鉄時代には、水郡線廃止の動きさえあったのだから。

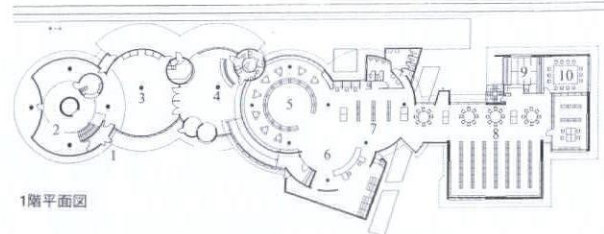
さて、軌道系の駅の将来像という点であるが、これは、自動車との競合の帰趨如何によることだと思う。ドアツードアの要求が高いとは言え、全てが自動車で解決出来る程日本は広くない。公害の問題もある。公共輸送機関がどうしても必要だ。車と列車の乗り換えシステム、インターフェイスの構築に我々の使い良い駅のポイントがあると考える。

意匠設計：伊藤邦明＋建築研究所MAIS
 構造設計：青木繁研究室
 敷地面積：2856.27m²
 建築面積：983.28m²
 延床面積：1226.09m²
 設計期間：1990年1月～1993年12月
 施工期間：1990年12月～1993年10月



屋根伏せ S=1: 1000

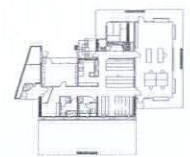
- 1: エントランス
- 2: 漫画廊
- 3: 展示室
- 4: 待合室
- 5: 児童閲覧室
- 6: エントランスホール
- 7: 新聞雑誌コーナー
- 8: 一般閲覧室
- 9: 和室
- 10: 地域資料室



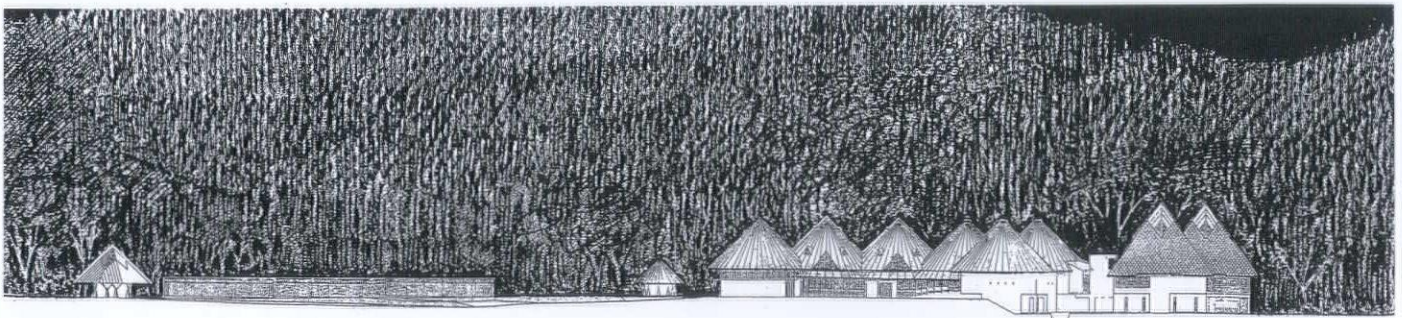
1階平面図



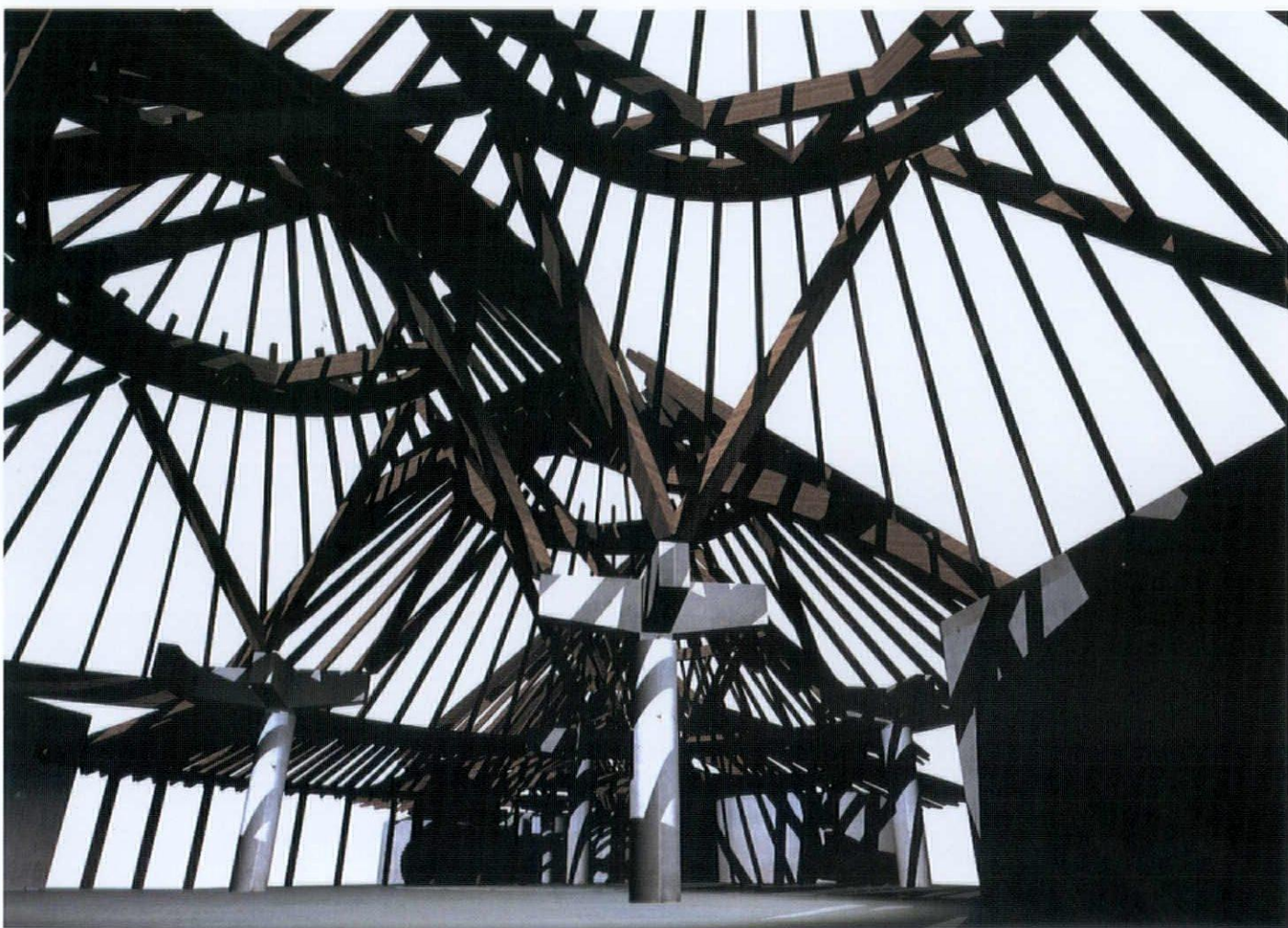
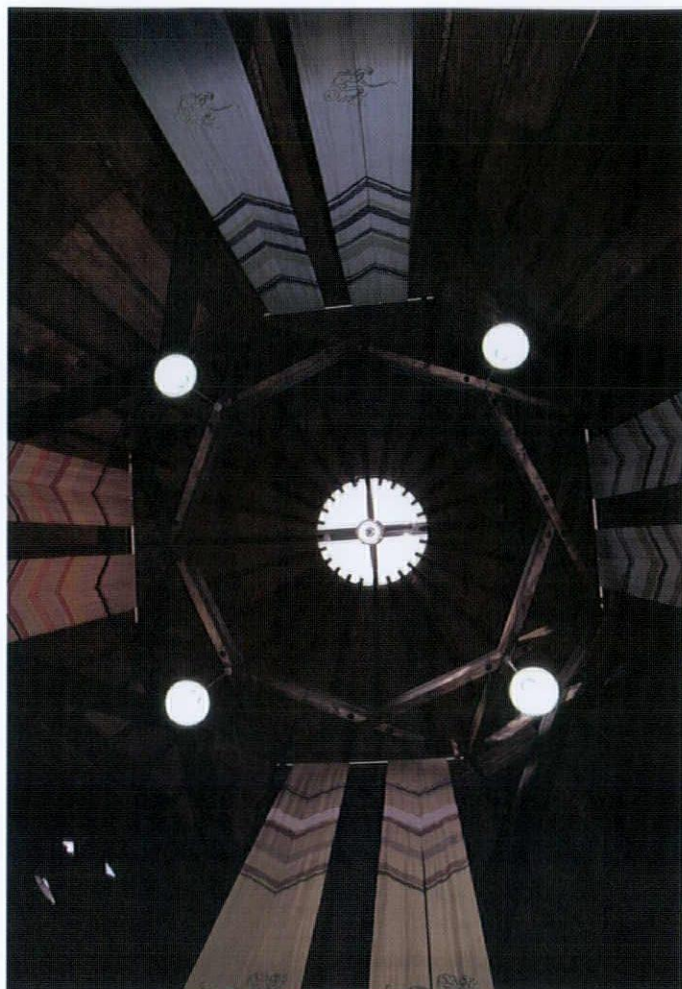
2階平面図

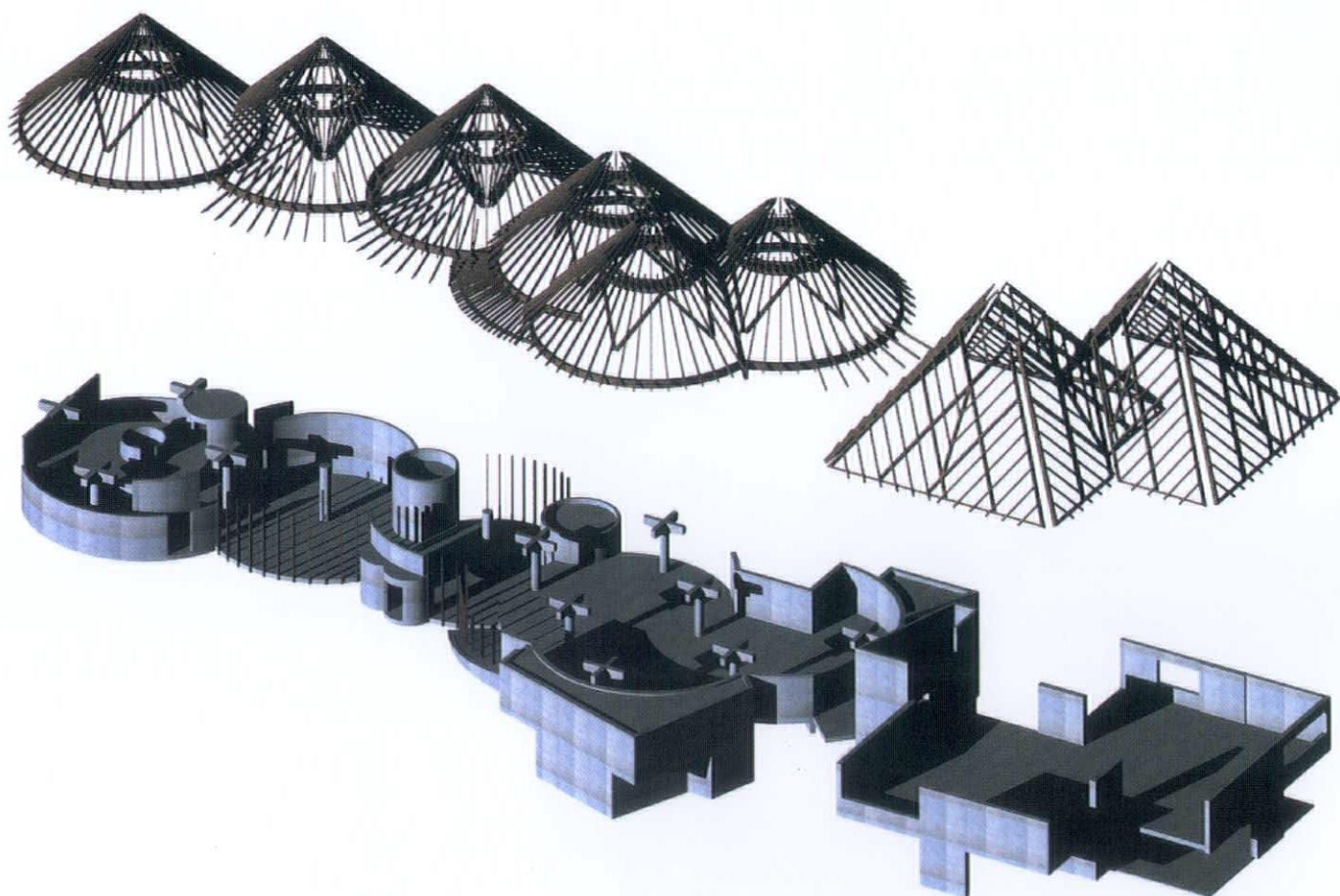
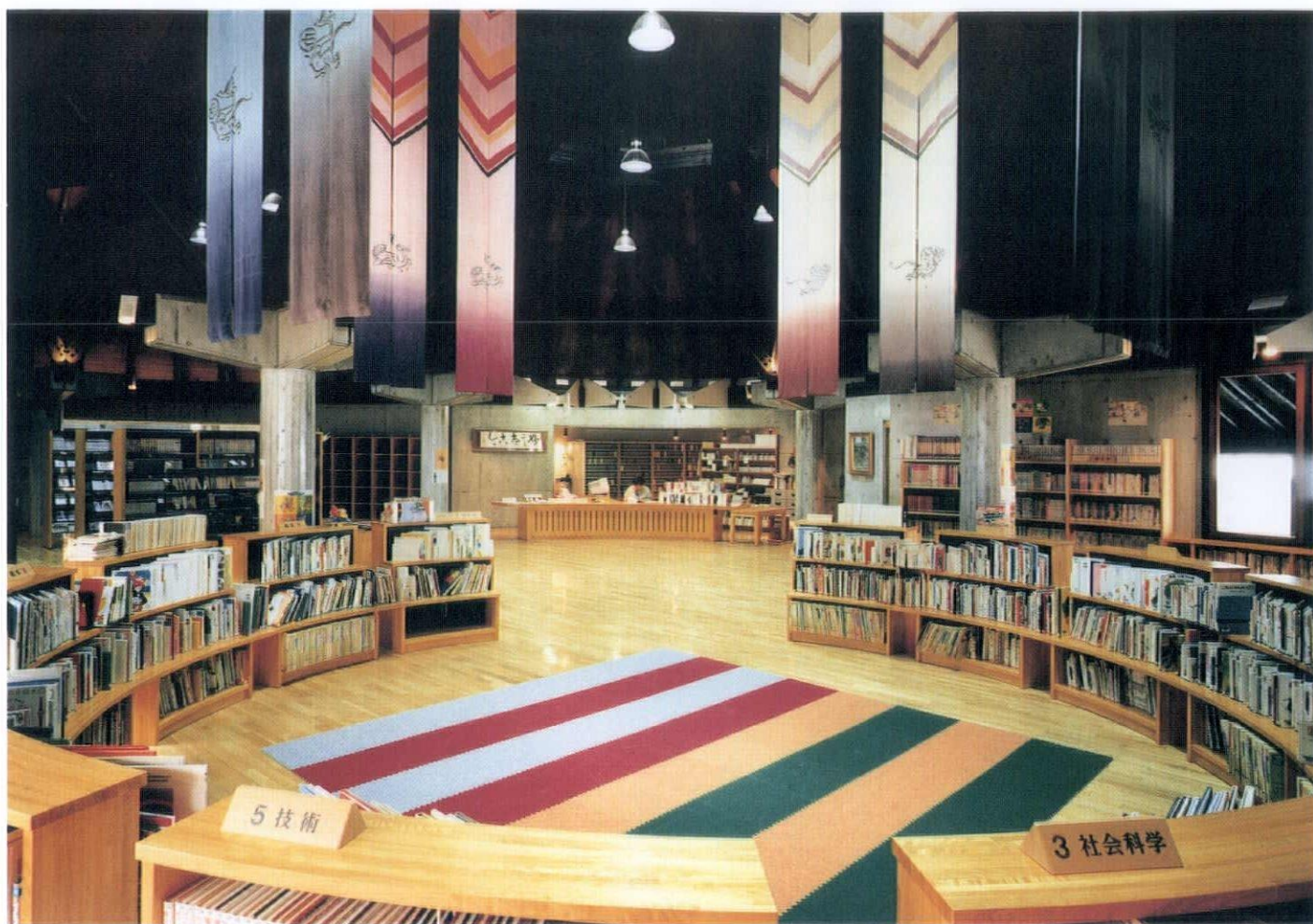


地下1階平面図



西立面図

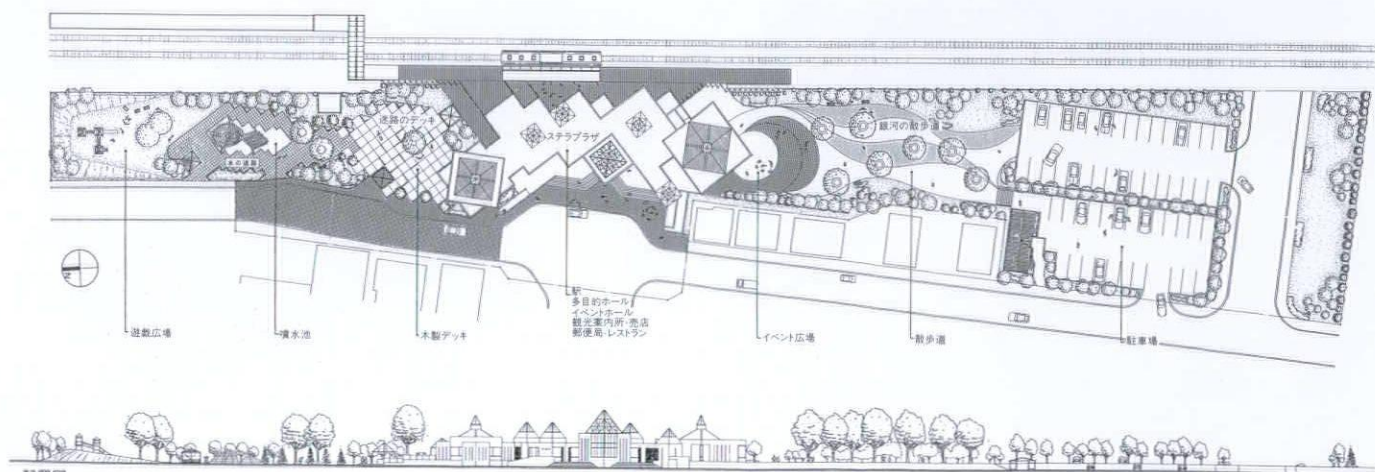




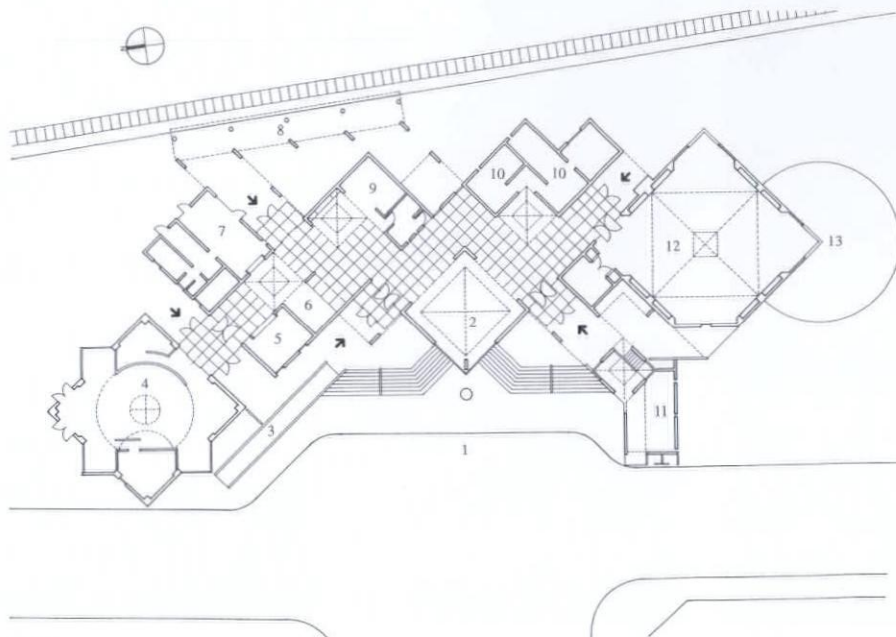
ふるさと銀河線本別町コミュニティステーション・ステラプラザ

北海道中川郡、1991年

設計＝環境設計

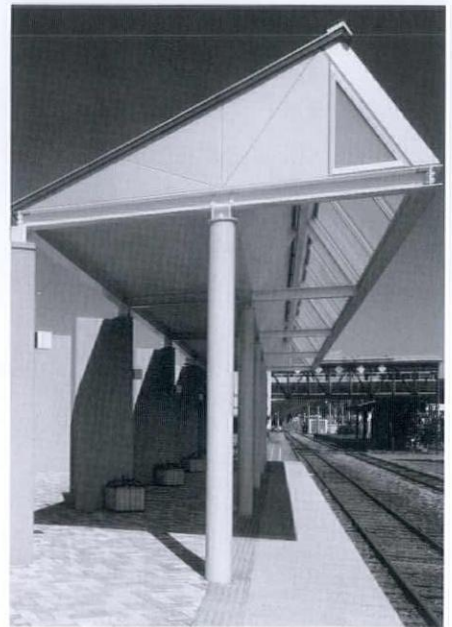


意匠設計：環境設計
 構造設計：TAC構造設計
 敷地面積：2098.91m²
 建築面積：841.45m²
 延床面積：756.84m²
 設計期間：1990年1月～1990年8月
 施工期間：1990年10月～1991年8月



平面図

- 1: 駅前広場
- 2: イベントホール
- 3: スロープ
- 4: レストラン
- 5: 郵便局
- 6: キラスク
- 7: 駅事務室
- 8: プラットホーム
- 9: 観光案内
- 10: 便所
- 11: 自転車置き場
- 12: 多目的ホール
- 13: ステージ



「ふるさと銀河線」という鉄道が池田町と北見市を結んで走っている。JRの廃止路線に沿って七つの市町の第三セクターによって存続させた地域密着型の鉄道である。北斗七星にちなんでこの牧歌的な名前がつけられた。本別町コミュニティステーションは、このふるさと銀河線の本別町の「駅舎」である。と同時に本別町の「地域ふれあいセンター」として建設されたものである。立地的には街の中心に位置し、交通の要としてまた人々の交流の拠点として、新しい役割が期待されている。したがって、この施設を「人と人」「人と情報」「人ともの」を結びつけるターミナル（結節点）としてとらえ、ステーション機能とコミュニティ機能が互いに補充し合う施設のあり方を考えた。具体的には、駅舎、集合場、レストラン、郵便局、観光案内所、売店、休憩所などによる少量多品種型の複合施設とな

っている。

敷地は、旧駅舎を含む鉄道用地のため、奥行わずか10m、長さ100mという細長い形状をしている。敷地の全体計画は、建築施設設備に関連して、街区整備、道路整備、公園整備を含めて総合的に配置計画を行った。駅舎を中央に南側と北側に性格の異なる公園を配し、建物および周辺環境と関連づけた。南側の公園は、駐車場、駐輪場を持ち、通勤、通学の人々の動線を意識した広場型の公園とし、多目的ホールをこの公園に面して一体的に計画した。

一方、北側の公園はレストランに面しており、迷路状のカフェテラス、水遊び用の迷路状の噴水池、そして子供の遊具が置かれ、家庭で遊べる公園として計画した。ちなみに本別町の一村一品は「豆」と「3万坪の迷路」である。

建築の平面計画としては、敷地の奥行と形状を考慮し、視点の移動と建物の奥行に変化が生まれるよう、建物の軸線を45度の角度に傾けた平面計画を採用した。これによって、実際の奥行以上に広がりをもつ内部空間と変化を実現できたと考えている。

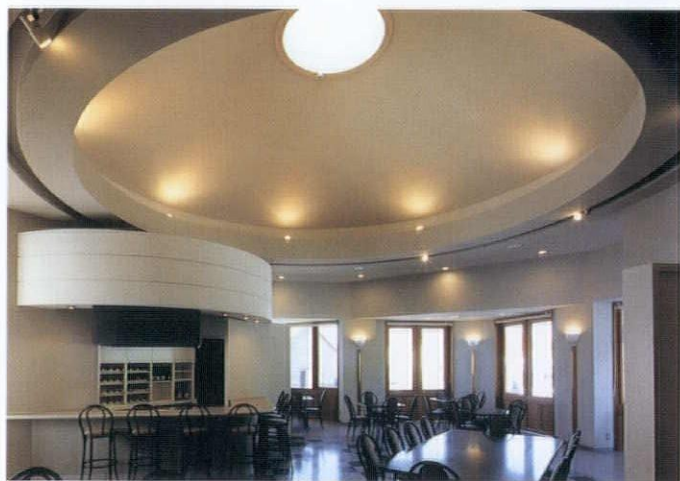
また、この建物は七つのひかり輝く屋根をもっている。これはふるさと銀河線という名に託された夢を建築的にも表現したいと考えたからである。銀河線沿線のどの駅舎も老朽化している中で、本別町が改築の口火を切ることになったので、七つの市町と北斗七星との直接的な表現によって、ふるさと銀河線を象徴化しようとした。この七つの屋根は、昼には外の太陽光を取り入れるトップライトとして、夜には内部のあかりが照らす街の灯として、常にひかりのある明るい施設になるよう計画されている。



イベントホール



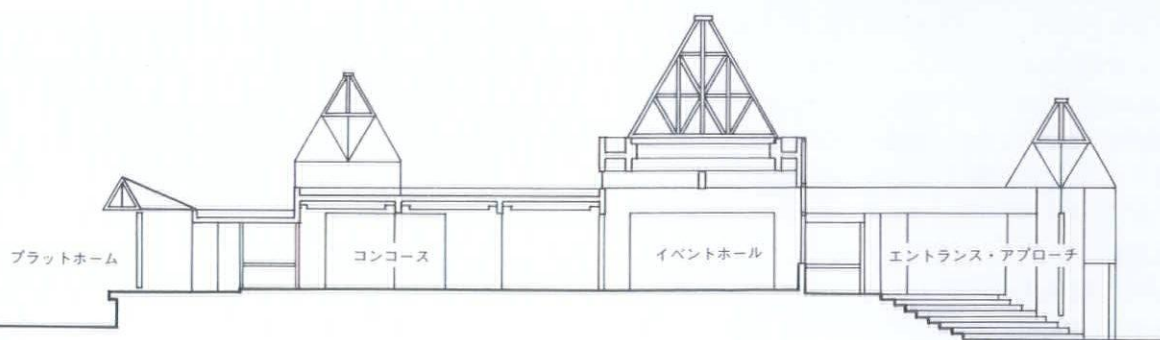
コンコース



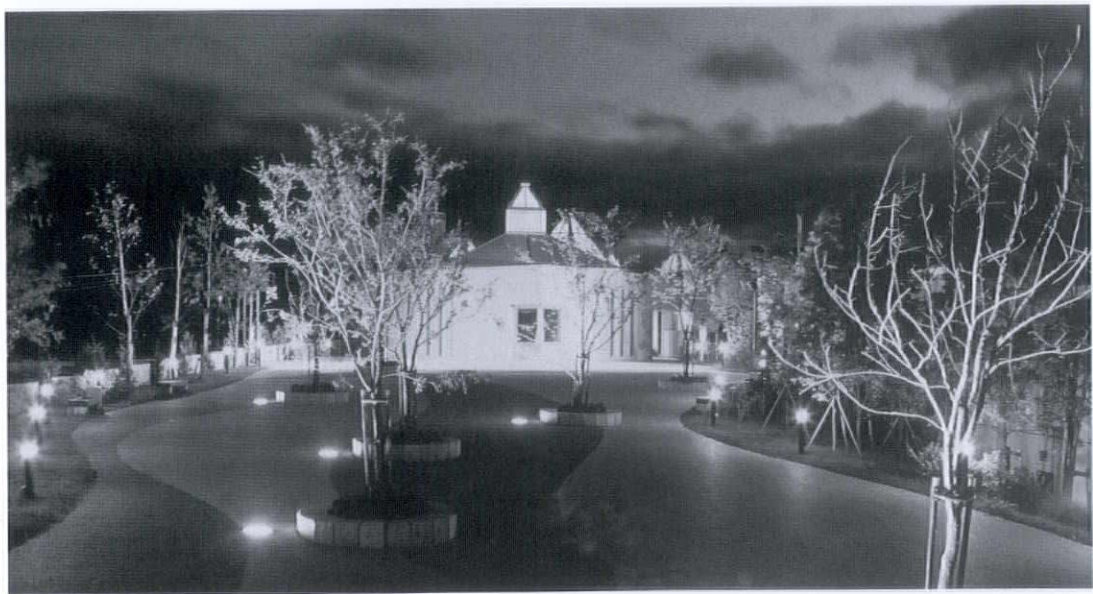
レストラン



多目的ホール



断面図



今後の駅舎建設に向けて

前田厚雄

1987年4月にJR東日本が発足して以来、10年間、私達は、21世紀に向けて新しい生活移動空間を創造するため、「あなたの街から未来にのびる」をコンセプトワードとして、総合生活サービスを提供できる、旅客や地域社会との接点である駅を提案してきた。

駅は、戦後40年間、輸送能力のみに力点が置かれ、他の機能は旅客サービスのための商業施設にごく限定されたものとなっていた。特に高度成長期にあつては、機能性を重視するあまり、必要最低限の空間に抑えることが駅計画の最大のポイントであった。

それに対して、駅に新しい価値を与え、優れたデザインを実現することが必要であるという考え方が主流となり「鉄道ルネッサンス」（鉄道の復権）をかけて、地域とともに発展し、街のランドマークとなる駅、街と街との

結節点となる駅、そして、文化の香る駅等の実現に向けて取り組んでいる。

日本社会は、急速な技術革新の進展、豊かで個性的なスタイルを求める価値観の高まり、自由時間の拡大等の変革の中にあるといえる。

こうした流れの中で、人々の交通機関に対するニーズの高度化・多様化は急速に進んだ。この様な社会的背景を踏まえ、サービスの展開や施設の整備をより一層促進し、時代の要請に応えていける鉄道を作り上げていくことが、私達の大きなテーマでもある。

私達は、1991年に「人にやさしい駅づくり委員会」を設置し、高齢者、身体の不自由なお客等、移動に制約を受ける方々に駅のさまざまな施設を安心して利用頂けるよう設備の開発・設置を行っている。

現代の駅づくりにおける手法は、大きくふたつの流れに分けることができる。

ひとつは、地方の駅での公共施設等との合築やラインで一元開発を行う群体としての整備であり、もうひとつは首都圏における駅ビルとの一体化、即ちステーション・コンプレックスである。

現在、地方の駅では、街の施設と一体化することによって、従来の通過点としての駅から、人や文化や情報が交流する場として駅を再構築してゆくことが求められている。

「駅に個性と文化とアメニティーを」を合言葉に、温浴施設と一体化したくほっとゆだ駅、博物館と一体化した院内駅、図書館とのく磐城塙駅、コミュニティホールとのく矢吹駅等、それぞれの地域の特色を活かした変化に溢れた駅が誕生している。



院内駅



くほっとゆだ駅

また、鉄道は巨大なネットワークシステムなので個々の駅のデザインを考えるだけでなく、線区や地方団体として、駅を考えることが試みられている。

山形新幹線、秋田新幹線、長野への新幹線では、鉄道をひとつの軸に据えた都市計画事業が進められ、すべての新幹線停車駅を改装・改築し合わせて駅周辺の整備を行っている。

街と鉄道の関わり方が一変し、全体を線区として、群体として変えてゆくことによって、強いインパクトが生み出されると考えている。

一方、首都圏では旺盛な輸送需要を反映し、都市生活者のニーズに応え、各駅をより便利で使い易い型に改善している。

サービス水準の向上を図った池袋、信濃町、大井町等の複合駅ビル、輸送改善と合わせて駅の改良を図った東京、恵比寿、渋谷の駅改

良などは、その例である。

これらのプロジェクトは、都市部における駅の現状と利用者・地域社会からのニーズとのギャップを埋め、社会的な貢献という観点から重要な計画で、当社の基本理念である「地域社会の文化の向上と豊かな生活の創造への貢献」にも適うものと思う。

プロジェクトが推進されている駅は、利用者が多く、私鉄や地下鉄等も交差するターミナル駅であり、多くの制約を受けている。

こうした制約条件の解決に、私達の総合的な技術力が活かされ、新たな駅づくりを通じて明日の首都圏の表情をつくってゆければと考えている。

最後に、駅は、そこを利用し、あるいはそこを通過する人々にとって、無数のドラマが交

錯する場と言える。その人間のドラマ、「生活」を包み込む場として、新たな時代を見据え、新しい価値を持つ場としての駅づくりを考えてゆく事が、今後、必要だと考えている。

ひとつの街、ひとつの駅それぞれに個性があり、個別の解が求められる。

そして、それらは大きなランドデザインとして、駅のあり方に対するしっかりとしたコンセプトによって裏打ちされていなければならないと思う。

多くのJRの利用者の方々の心の中に常に温かい風景として浮かび上がり、変化に柔軟に対応しつつ、その期待に応えてゆく、そうした駅の姿を追い求めて、今後とも努力を続けて行きたいと考えている。

●まえだ・あつお/JR東日本設備部旅客設備課



山形駅



池袋駅

JR東日本大曲駅

秋田県大曲市、1977年

設計＝鈴木エドワード建築設計事務所、東日本旅客鉄道東北工事事務所



建築設計：鈴木エドワード建築設計事務所、
東日本旅客鉄道東北工事事務所
構造設計：山辺構造設計事務所
敷地面積：14630.39m²
建築面積：1923.83m²
延床面積：2517.15m²
設計期間：1995年12月～1996年9月
構造設計：1996年9月～1997年12月

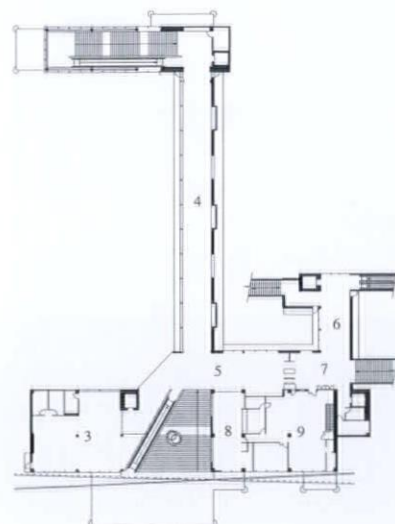




西側立面図 S=1: 1250



断面図 S=1: 1250



2階平面図

- 1: ふれあい広場
- 2: ビュープラザ
- 3: 展示・案内スペース
- 4: 東西自由通路
- 5: 橋外コンコース
- 6: 跨線橋
- 7: 橋内コンコース
- 8: 待合室
- 9: 駅務室



1階平面図 S=1: 1250

大曲駅は1997年春開通の秋田新幹線駅として新しく生まれ変わる事になった。大曲は仙北平野の中心を占める田園商業都市で江戸時代から水運の利を生かし、米穀の集散地と商人のまちとして繁栄。雄物川、玉川、丸子川が大きく蛇行するところから大曲となったという由来もあるように、川は経済的な実益をもたらしたのみならず現在も市民に親しまれている存在だ。この河川敷で開かれる夏の全国花火競技大会は各地から集まった花火師が毎年その腕を競いあい、大曲の名を全国に知らしめている。

「ふれあい・いきいき・音と光と水のまち」は大曲のまちづくりのテーマであるだけに、

短い標語のなかにまちがよく表現されている。駅舎のデザインコンセプトもこのテーマに基づいた。

駅舎はもちろんまちのシンボルでもある。うねったファサードはその名の由来の通り。金属パイプを曲面配置し格子をつくったことで、水のうねりとともにモダンなまちづくりをもあらわした。川の水面が光を受けて反射するように、この格子も一日中変化する光を受け、美しいモワレを見せる。

竹とアイビーは駅にやさしさとやわらかさを与えた。

中央の東西自由通路をはさみ、駅機能と市の施設が西側ロータリーに面している。東口

は駅前再開発を視野にいれ、透明感と存在感を併せ持つ駅の顔をつくった。

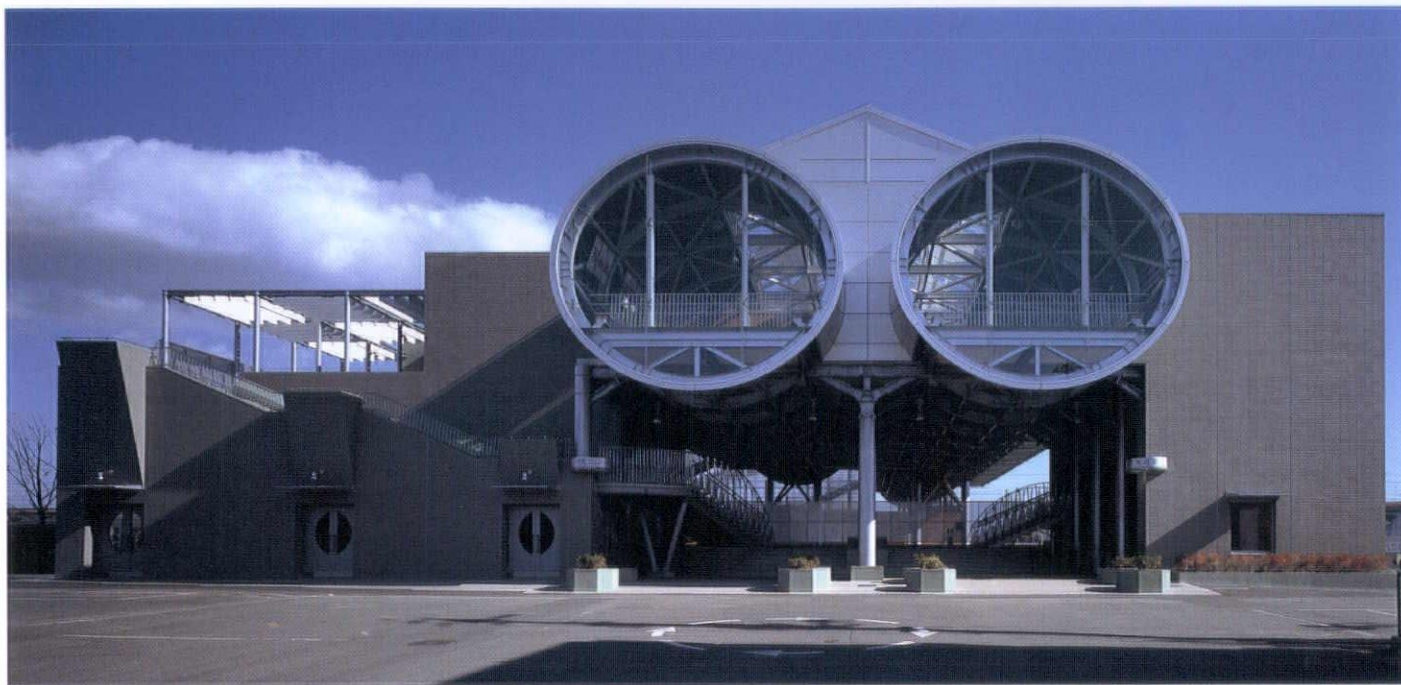
駅舎内には市のインフォメーションホールがつくられると同時に、ふれあい広場と名付けられたスペースもある。駅はまちと人、外と内とのインターフェースの役を担う。この大曲駅はまさに人々が行き交うだけではなく、まちと人、人と人がふれあういきいきステーションとしての機能を持つ。

新生大曲駅が年月を経て大曲の人々、訪れる人々にさらに親しまれ生かされ、地域の大きな機能となることを切に願う。

JR東日本矢吹駅

福島県矢吹町、1995年

設計＝柴田いづみ・柴田いづみ建築設計事務所、柴田知彦・SKM設計計画事務所



意匠設計：柴田いづみ・柴田いづみ建築設計事務所＋
 柴田知彦・SKM設計計画事務所
 構造設計：JR東日本建築設計事務所、TIS & Partners
 敷地面積：12031.06m²
 建築面積：1124.82m²
 延床面積：1576.16m²
 設計期間：1993年10月～1994年7月
 施工期間：1994年11月～1995年10月



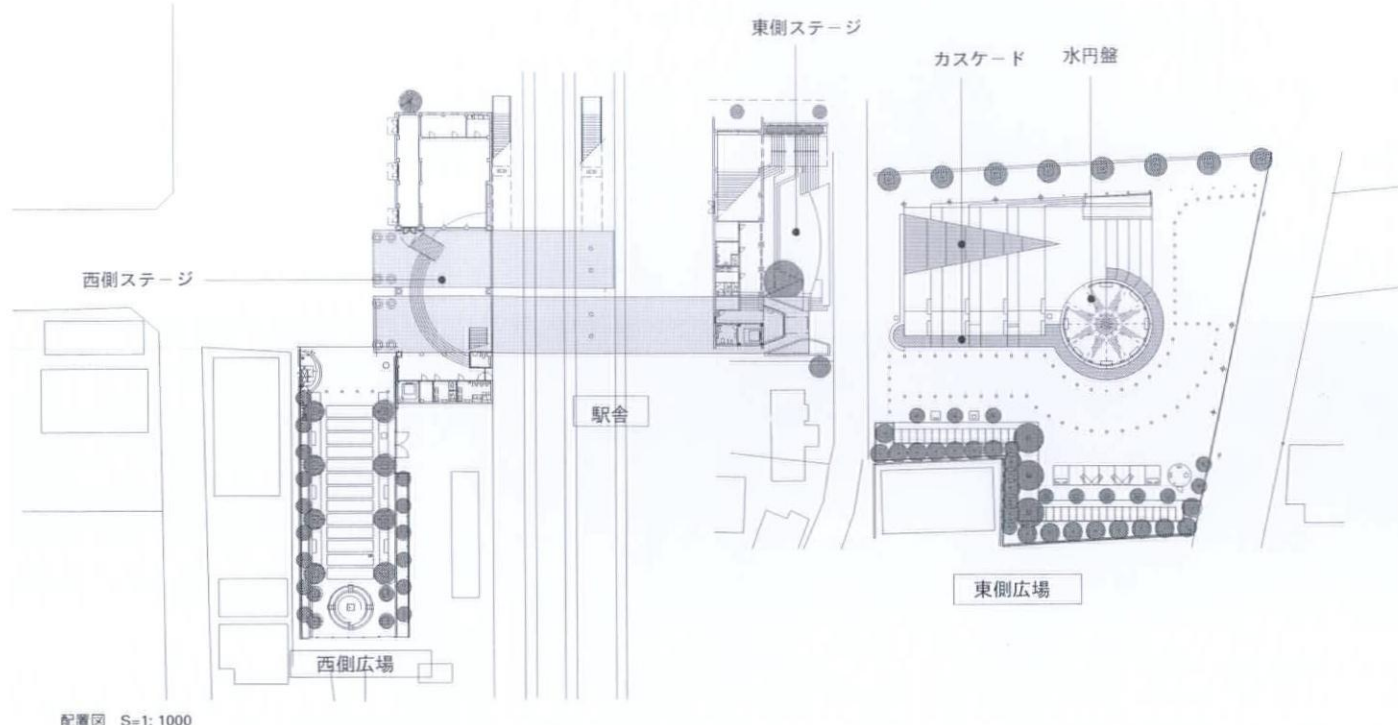
街からステップ・アップ 街にステップ・ダウン

福島県矢吹駅は東北新幹線の新白川駅と郡山駅を繋ぐ東北本線の真ん中に位置する。橋上駅の宿命として6～7mの高さを登らなくてはならない。この高さをいかに楽しく移動できるかが命題であった。そして、街の新しいシンボルとしての施設の特徴を形態と機能にどう反映出来るか、架線上の制約された空間と時間（下弦梁のジョイントのための建て方工

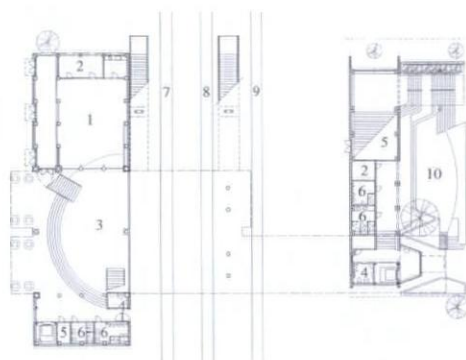
事が可能だったのはわずか朝方の2時から4時という工事時間帯であった）の中での可能性を構造的にいかにつくりだせるかが、主な問題であった。橋上駅はホームへの階段と東西の街に繋がる階段、自由通路と跨線橋と性格が似ているのに、機能も大きさも所有も違うものを形態的に組み合わせなければならぬ難しさから、往々にして、ボックスに足をつけたものになりがちであった。特に、交通結節点としての機能を重視するために、人が

「待つ」とか「不安である」とかの駅特有の心理的要素をやわらげ、その作用を空間に置き換え、かつ、そこが楽しい場所であるように演出する事に欠けていたのではないだろうか。特に駅の出口は街との接点である。単なる昇降の労働を街からステップ・アップ、街にステップ・ダウンする心地良さに変えてみたかった。

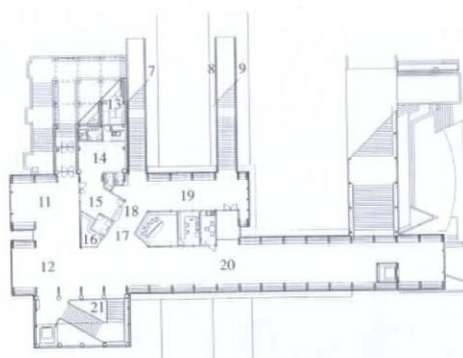
その第一の演出が踊り場をステージにしたことである。西口は既存の市街地にギリギリ



配置図 S=1: 1000



2階平面図



1階平面図 S=1: 1000

- 1: コミュニティホール
- 2: 倉庫
- 3: コミュニティ広場
- 4: 多目的化粧室
- 5: 機械室
- 6: 便所
- 7: 1番ホーム (下り)
- 8: 2番ホーム (上り、下り)
- 9: 3番ホーム (上り)
- 10: ステージ
- 11: 物産展示コーナー
- 12: プラザ
- 13: 休憩室
- 14: 事務室
- 15: 改札
- 16: 待合室
- 17: 券売機
- 18: 出改札
- 19: 跨橋線
- 20: 自由通路
- 21: 冬の階段

のロータリーしか無かったので、大屋根の下に広場としてステージをつくり、お祭りではイベント会場にもなっている。一方、東口の踊り場のステージは水の広場と一体になっている。広場のカスケードは、水を止めるとステージの観覧席の段になる。丸く並べられたベンチは、水を流す季節はジェット噴水となる。この水は羽鳥湖からの農業用水を使っており、稲刈りの季節から冬は水を止めるので、広場の座るためのイスとベンチとして存在す

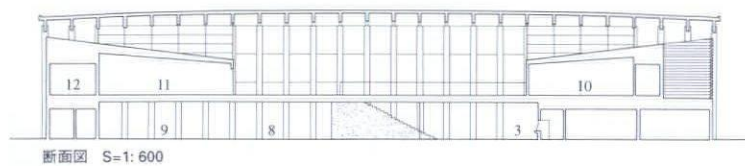
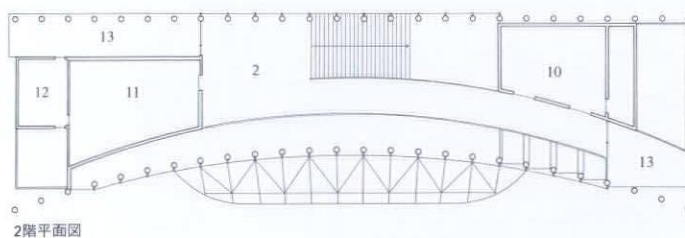
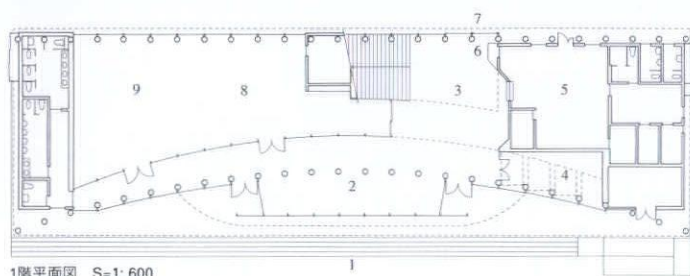
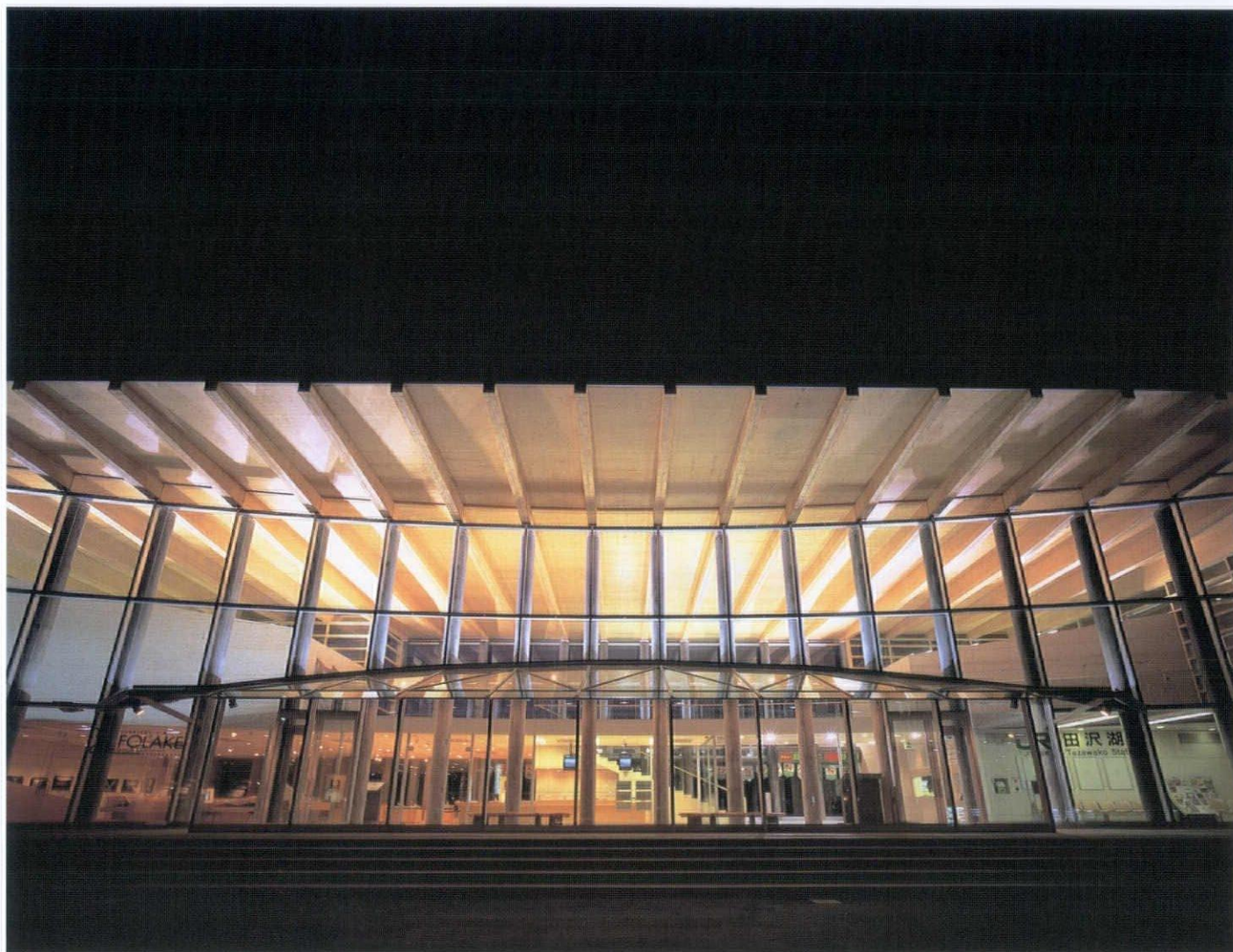
る。ステージにはけやきの株立ちを1本植えているが、人が居ても居なくてもさみしい絵になる構図を意図している。第二の演出は、東西を繋ぐ形態をチューブにして、架け橋の役割を持たせ、そのエンドは街を見直す見晴らし台としている事である。チューブの形状は通路の有効幅と高さの関係から、楕円に設定したが、それが街を見守る眼鏡の様な役割を担うことになった。第三の演出は、待ち時間に、それぞれの人が思いの「場所」

を見つけることが出来るように57mの長さ一杯にベンチを設置している事である。行政窓口と図書コーナーを駅のラッチのそばにとり、同様に待ち時間に自由に使ってもらっている。「21世紀はアイの時代」であって欲しい。「愛」でもあり、「I=私」のそれぞれの存在が尊重され、活かされる時代の到来を願う事を意識してつくった駅である。

JR東日本田沢湖駅

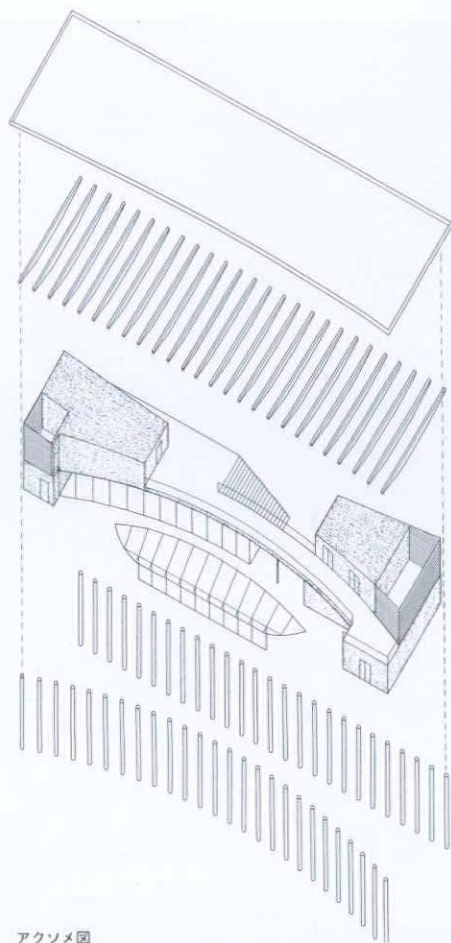
秋田県仙北郡、1997年

設計＝坂茂建築設計、東日本旅客鉄道東北工事事務所、ジェイアール東日本建築設計事務所

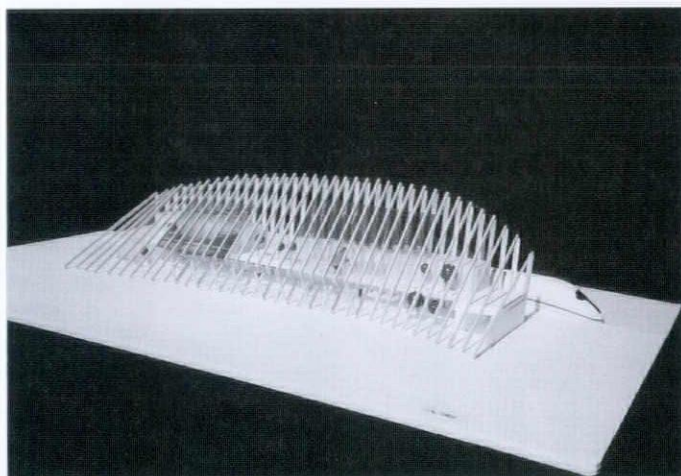


- 1: 駅前広場
- 2: 交流ホール
- 3: コンコース
- 4: 待合室
- 5: 駅事務室
- 6: 改札
- 7: プラットホーム
- 8: 観光案内所
- 9: 田沢湖見聞録
- 10: キネマ倶楽部
- 11: 森と水のテーマ館
- 12: 物置
- 13: 屋上

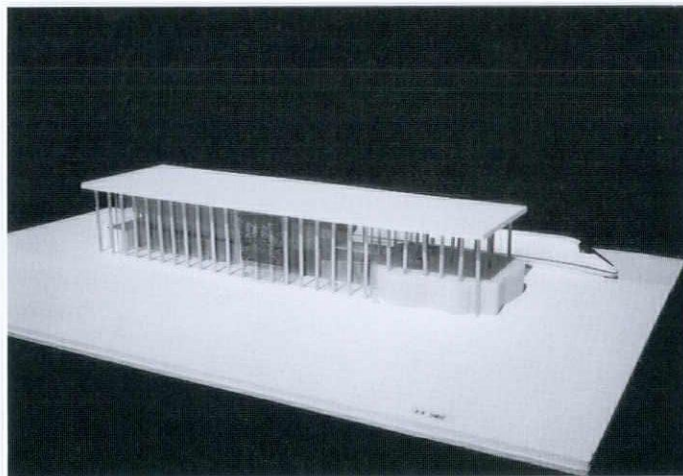




アクソメ図



A案



B案

今回の計画は、屋根に勾配をつけて積雪を落とすA案と、陸屋根にして積雪荷重をすべて屋根で受けるB案という、全く違う2案を作ることから始まった。

A案では集成材の大梁を東北地方の冬の特徴でもある「雪囲い」(板をスノコ状に隙間をあけて窓枠に立て掛け、積雪の荷重から窓を守る工夫)のように前面で傾斜させ、空間全体を覆うように掛けた。そしてその架構の傾斜を変化させ、町の要望であった「辰子姫伝説」の竜をイメージした、うねるようなボディとした。

B案は、これも町の要望である「秋田杉」のイメージを使い、真っ直ぐ天に伸びる杉材を

PCパイプで表現し、陸屋根で受ける膨大な積雪荷重を列柱により分散させ、基礎の杭工事をなくしている。

これらA、Bの2案は、A案の前面広場に対し円弧状に包み込むプランで、中央に溜まりの空間(交流ホール)を持つ平面計画と、B案の陸屋根でそれをさらに浅いヴォールト屋根を合わせた案を作ることによって、最終的に統合されることになった。そこでこれらの別々な要望を満たしつつ、形態的にも構造的にも整合性のある案を作ろうと考えた。その結果、前面のPCパイプの列柱を円弧状に並べ、その上に応力の流れを視覚化するように円弧にカットした16mmの鉄板を集成材で挟んだ合

せ梁を載せた。鉄板を挟んだのは、木造は採用されないということで、計算上の梁の曲げ応力を鉄板で持たせれば、S造として役所に認められるという事情による。木は単にたわみ押さえとして使った。

前面の列柱を円弧に並べたため、中央にいくに従いスパンが小さくなり、逆に底としてキャンティレバー状に梁が出て、柱頭の梁背は高くなり、自然に町からも要望のあった浅いヴォールト屋根の形状が実現した。大屋根の下は、ガラス張りの透明な空間として、広場側からは、列車が入るのが見え、プラットフォーム側からも駅前広場までが見通せるようにした。空調された諸施設の独立したヴォリ



ュームは、大空間の中に入れ子状に挿入されたように置かれるため、冬は断熱効果が高く、夏は諸施設には直射日光が当たらず、大屋根の下を風が通り、室内環境が調整できるようになっている。このようにさまざまな要望と条件を満たしつつ整合性のあるストーリー作りを心掛けた。(坂茂)

田沢湖駅は、森と湖と温泉の町、田沢湖町の玄関口であると同時に、この春開業した秋田新幹線の秋田県に入って最初の停車駅でもあり、秋田観光のゲートとしての役割も担う。また、最近の地方駅に多く見られるように、町の公共施設とJR東日本の鉄道駅が結びついてできた、いわゆる合築駅であり、町の公共施設として、田沢湖観光情報センターが入っている。

こうした駅は、どうしても観光客主体の駅になりがちだが、計画者である私たちは、「地域住民と来街者が相互に交流し続ける装置としての駅」を計画コンセプトとして掲げ、観光客向けだけのよそよそしい駅にはしたくないと考えた。そのためには、まず地域住民に喜んで使われる駅になる必要があり、駅としてのわかりやすさと、駅と町とのつながりということに特に留意した。乗車時には駅に入

降車時には町に向かって開かれていくこと。

さらに、町から駅舎内部のアクティビティと鉄道のモビリティが見えること、逆に駅から山並みや町の風景が見えることなど。こうした「見る・見られる」の関係づくりの企図は、「単純な空間構成のシースルーの箱」という発想につながり、坂氏の構造計画のアイディアとも合致していくこととなった。

この駅が実際に「地域住民と来街者が相互に交流し続ける装置」となっていくためには、今後の使われ方によるところが大きい。列柱の大架構により、外皮を内部空間の架構と分離したこの駅の計画が、長い時間のなかで変化していくであろう施設の使い方にどう対応していけるか、その姿を見守っていきたいと思う。(東佳代子・清水正人／㈱ジェイアール東日本建築設計事務所)

意匠設計：坂茂建築設計、東日本旅客鉄道東北工務事務所、
ジェイアール東日本建築設計事務所
構造設計：松井源吾＋O.R.S.事務所、
ジェイアール東日本建築設計事務所
敷地面積：4423.74m²、
建築面積：761.73m²、
延床面積：991.75m²、
設計期間：1994年11月～1996年6月
施工期間：1996年8月～1997年3月

JR東日本鳴子駅

宮城県鳴子町

設計＝ジェイアール東日本建築設計事務所、乃村工藝社



「白い湯煙の町」、「こけしの町」として全国的に名高い「鳴子町」は、栗駒・舟形リフレッシュリゾート地域の中央にある温泉と観光の町である。古くからの歴史と伝統を誇り、恵まれた自然環境のもとで、長年にわたって「みちのくの素朴な良さ」を多くの人に伝えてきた。

鳴子の町並みは山裾を川に沿って、带状に伸びている。そうした地形からでは、町の中心が見えにくく、町のシンボルとなる施設が熱望されていた。

「鳴子&ナイス (ナルコ・インフォメーション・ステーション)」は、町を訪れた人々が最初に接する町の玄関口である駅で、湯の町「鳴子」の強烈なイメージを抱かせ、かつ訪れた人々との「ふれあいの広場」となり、また町のシンボルとなるような願いを込めて建設された。駅は、鉄道の乗降の場であり、そこを訪れる人々が出会い、集い、交わる場でもあり、幾多の人生のドラマがそこに繰り広げられる。そのような「ところ」と願いを込めて、鳴子に降り立つ人が、まず階段状の「円

形劇場 (ギャラリー・シアター)」に導かれるように計画した。そこは、吹き抜けの広い空間になっていて、ステージではミニコンサートやコンテスト等の多彩なイベントが催される。また中央正面の9面のマルチスクリーンからは、町の新鮮な情報が絶え間なく発信されている。客席背面は曲面ガラスになっており、ガラス越しに鳴子の町並みがパノラマ状に展開され、さらに駅前広場で催されるイベントに、内部からも参加できるようになっている。

「ギャラリーシアター」の周りには、鳴子の自然、観光、温泉スポットなどを紹介する「観光案内センター」や伝統こけし等の町の歴史文化を紹介する「町民ギャラリー」、くつろぎと憩いの場となる「軽食コーナー」など、町の情報を常に発信しつつ、訪れた人とのコミュニケーションを図れるよう、施設を配置した。

なお、駅の名称は平成9年3月に「鳴子温泉駅」に改称された。



- 1: ギャラリーシアター
- 2: 駅事務室
- 3: 観光案内所
- 4: コンコース
- 5: エントランス
- 6: 売店
- 7: 便所
- 8: 事務室
- 9: ショーケース
- 10: 事務室
- 11: 町民ギャラリー
- 12: 和室
- 13: 休養室
- 14: 厨房
- 15: 喫茶室
- 16: バルコニー
- 17: 吹き抜け

鳴子

意匠設計：意匠設計：ジェイアル東日本建築設計事務所、
乃村工務社

構造設計：ジェイアル東日本建築設計事務所

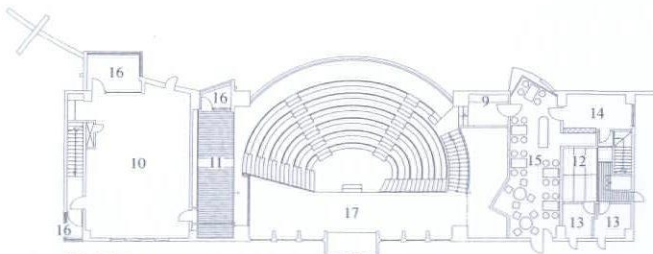
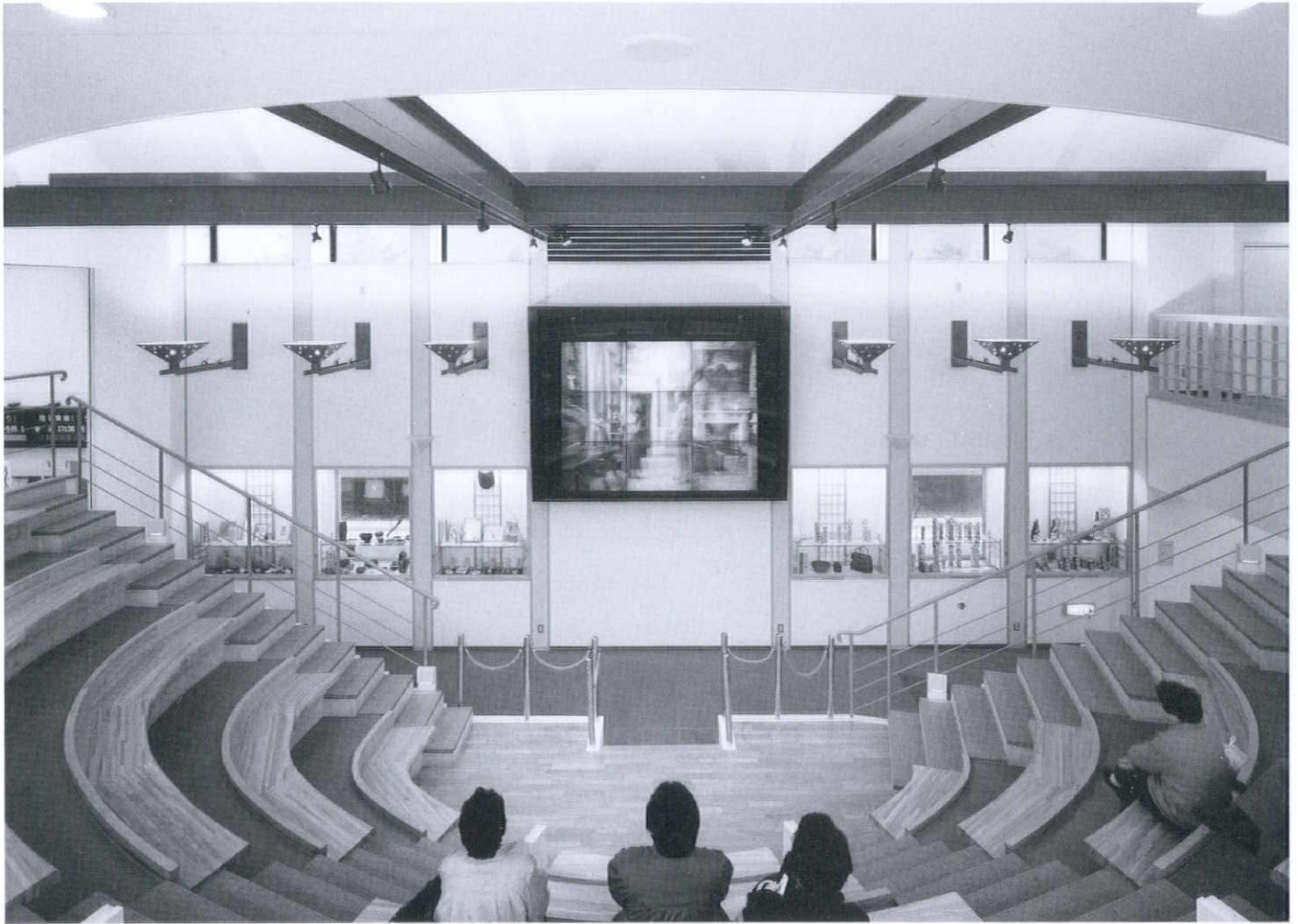
敷地面積：2427.32m²

建築面積：378.13m²

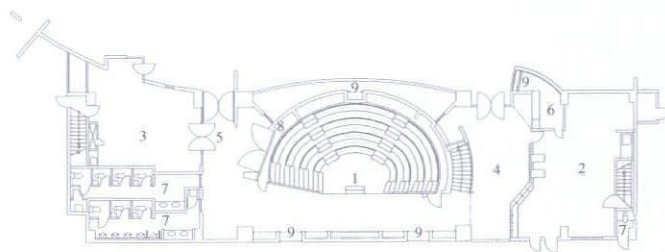
延床面積：622.32m²

設計期間：1990年10月～1991年2月

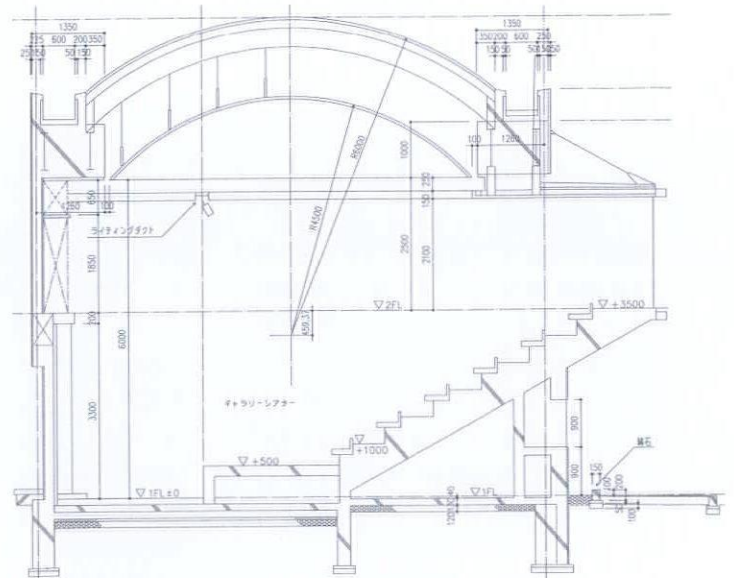
施工期間：1991年3月～1991年12月



2階平面図 S=1:350



1階平面図 S=1:350



断面図 S=1:100

JR九州由布院駅

磯崎新アトリエ



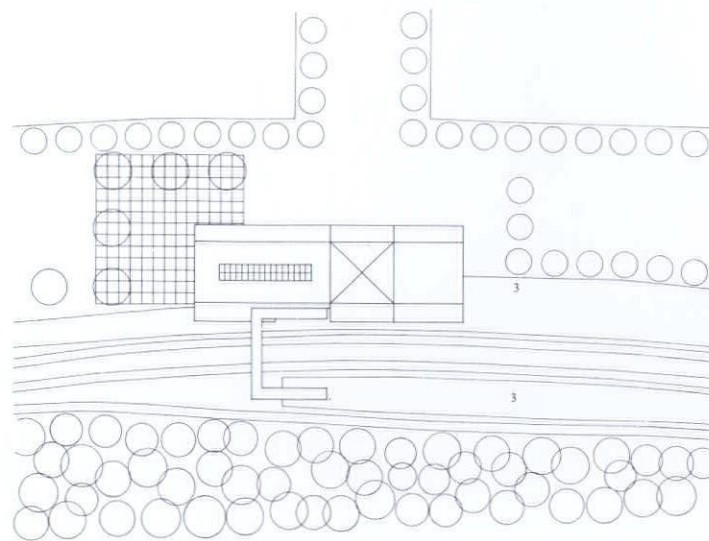
JR由布院駅は、自然豊かな温泉街である湯布院町の西端、湯布岳を正面に臨む位置に建つ。

近年、観光客の増加に伴い老朽化した駅の改築が必要になり、建設にあたり次の条件が求められた。単なる通過点としての駅ではなく、観光客と住民および地域文化の出逢いの場となること。情報発信の場、さらには湯布院のシンボルとなること。町の条例に従い、階高は12m以下とすること。そこで中央に12mのコンコースを、その両脇に駅業務としての

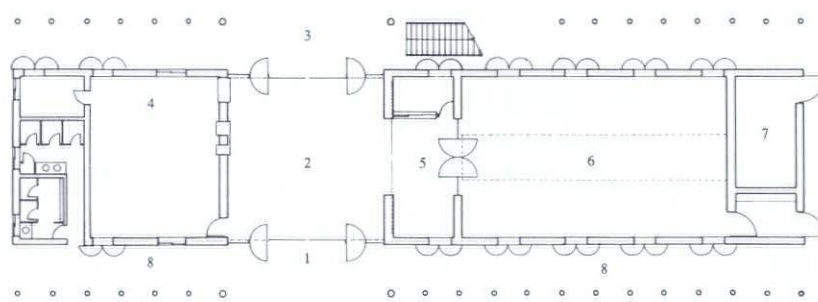
事務室、文化の出会いの場としてのイベントホールを配した。建物はすべて木造で連結されたが、伝統的軸組構法には従っておらず、大断面の集成材や枠組壁構法の使用により、木造による大空間をつくり上げている。コンコースは1辺9mのキューブの上にクロスヴォールトの屋根が架けられ、四方から光を導いている。従来の駅のイメージを脱するために改札ラッチをなくし、床は温泉を利用した床暖房の石貼りとしている。また、小規模な演

奏会にも対応できる。駅事務室とイベントホールは弓形の集成材とテンションバーの構成によるオープンな空間である。

特にトップライトを設けたイベントホールは、美術館として使用できるように、窓、開口部に取り外し可能なパネルをつけ、展示スペースを多く取れるように工夫されている。外部には回廊が設けられており、湯布岳をはじめとする周囲の眺望が得られるような構成となっている。

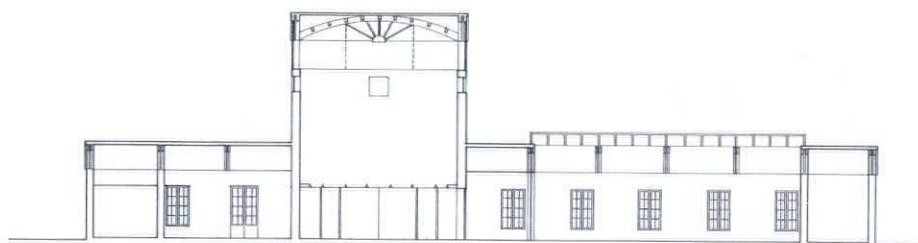


配置図 S=1:1200

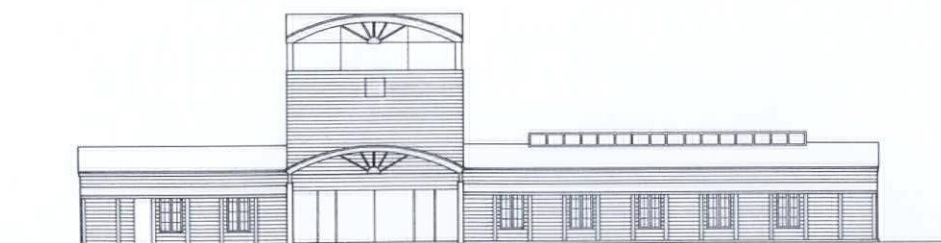


平面図 S=1:400

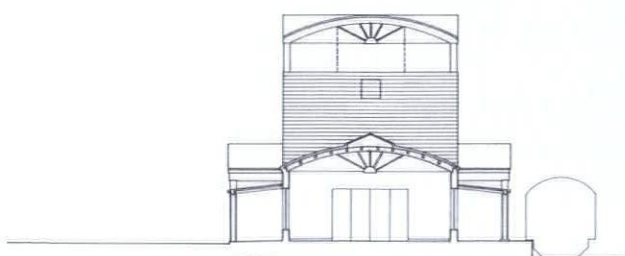
- 1: エントランス
- 2: コンコース
- 3: プラットホーム
- 4: 事務室
- 5: キッチン
- 6: イベントホール
- 7: 機械室
- 8: 回廊



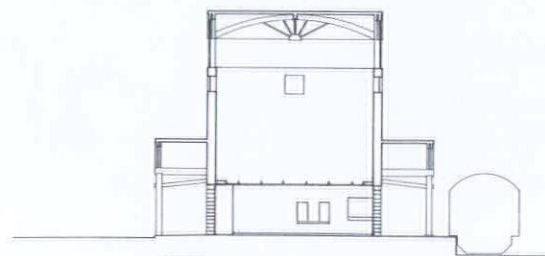
断面図 S=1:400



立面図 S=1:400

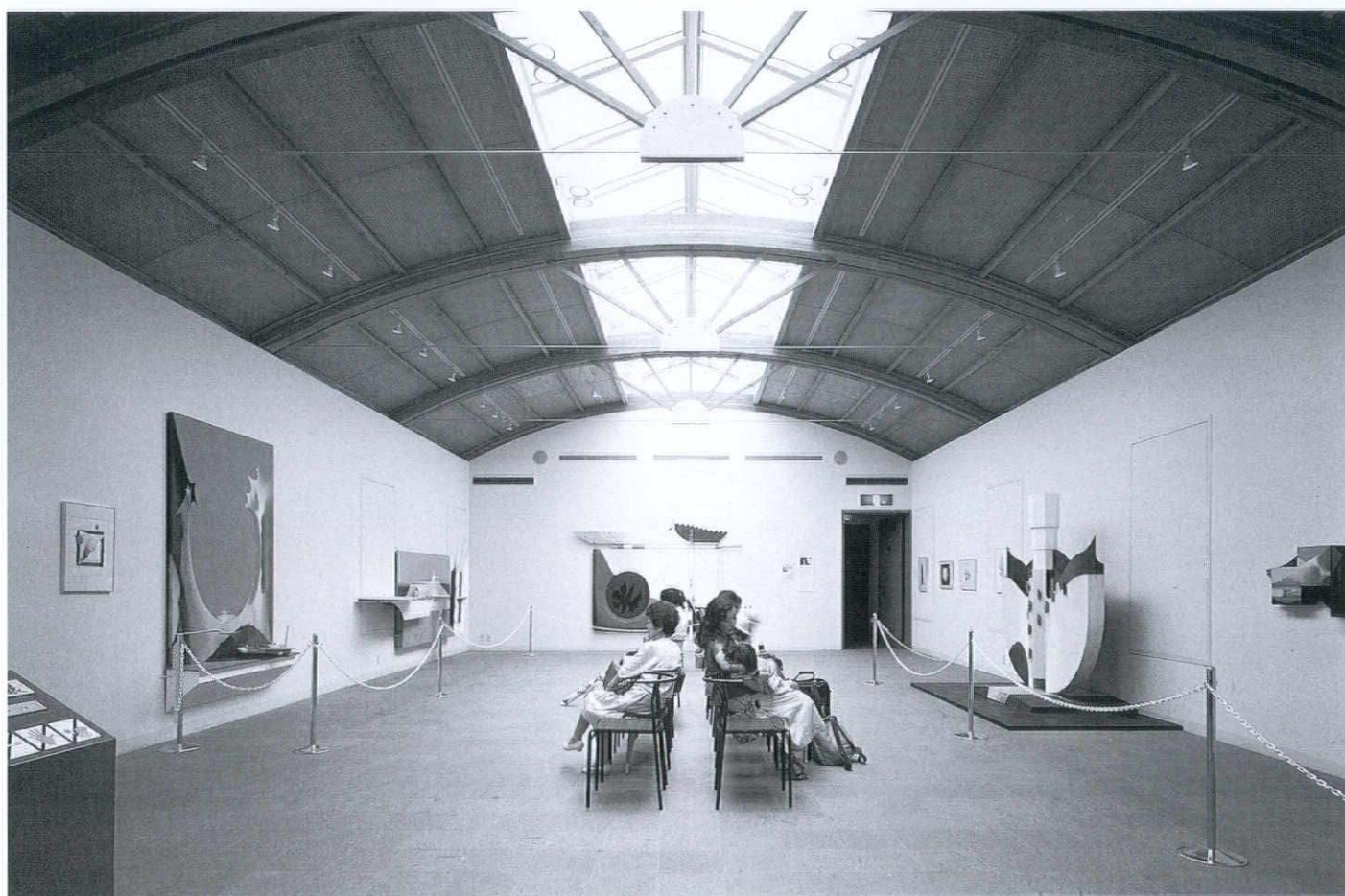


立面図 S=1:400



断面図 S=1:400

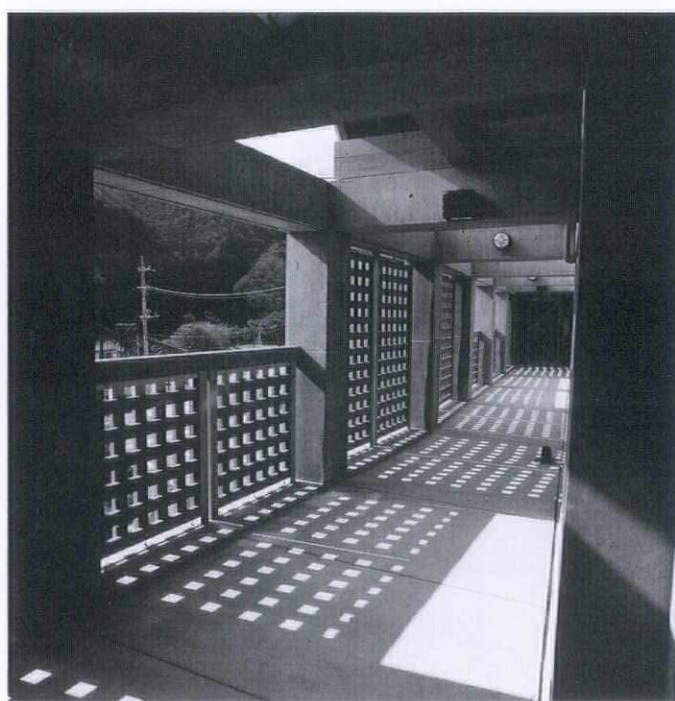
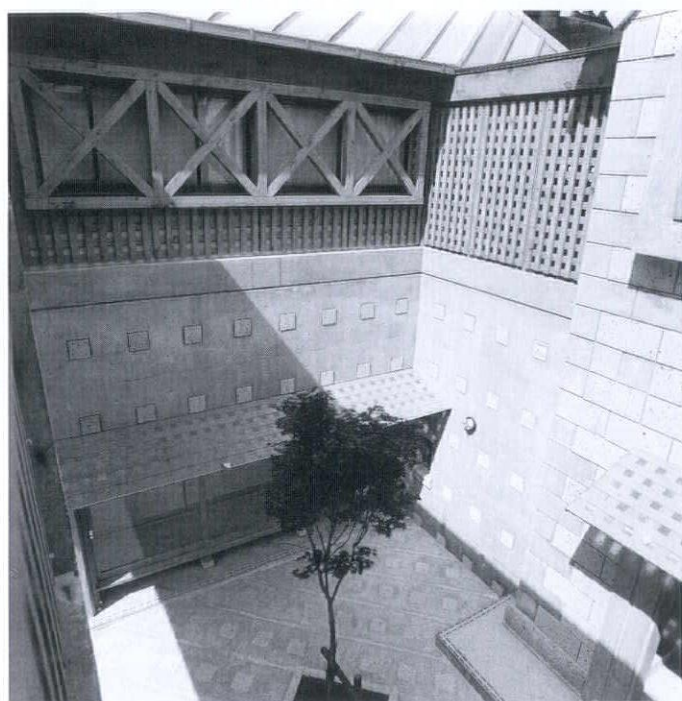
由布院
意匠設計：磯崎新アトリエ
構造設計：川口衛構造設計事務所
敷地面積：1996.09m²
建築面積：571.86m²
延床面積：372.60m²
設計期間：1989年1月～1989年12月
施工期間：1990年2月～1990年12月

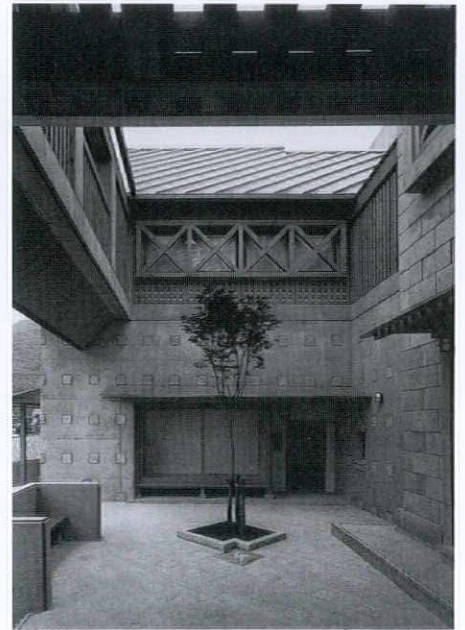
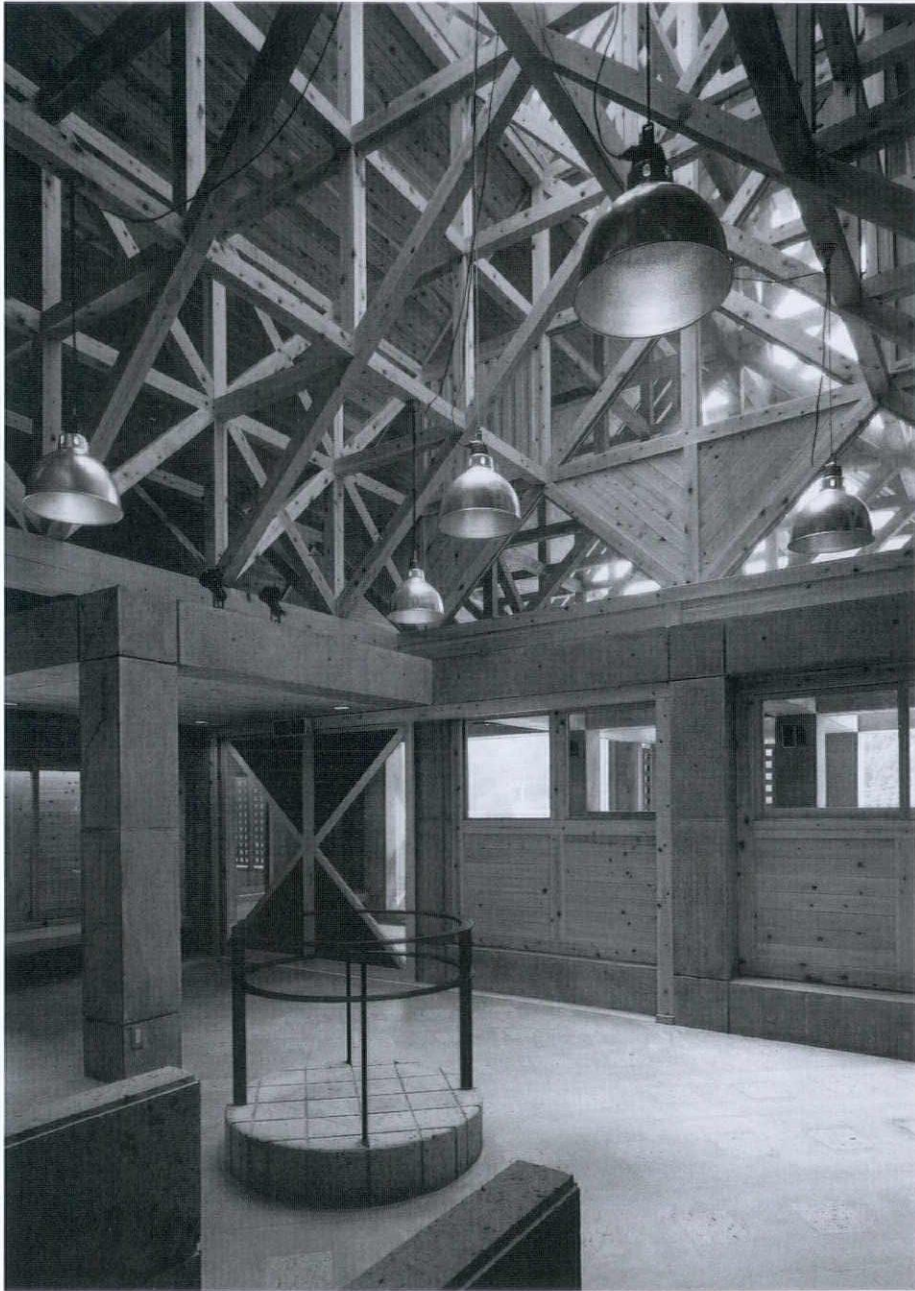


野岩鉄道川治温泉駅

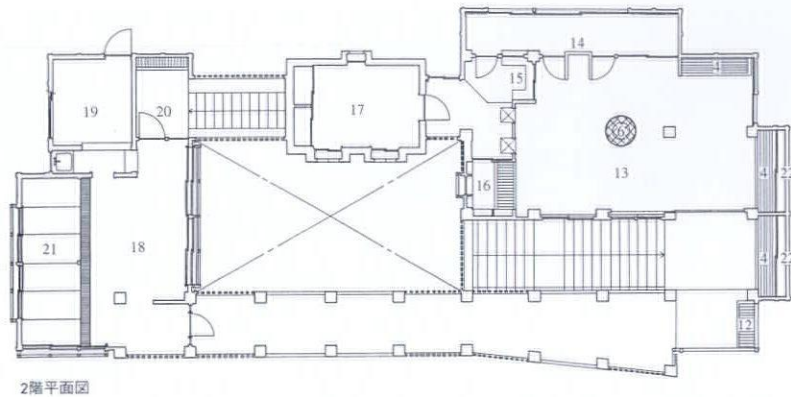
栃木県塩谷郡藤原町、1988年

設計＝中山繁信／T.E.S.S.計画研究所

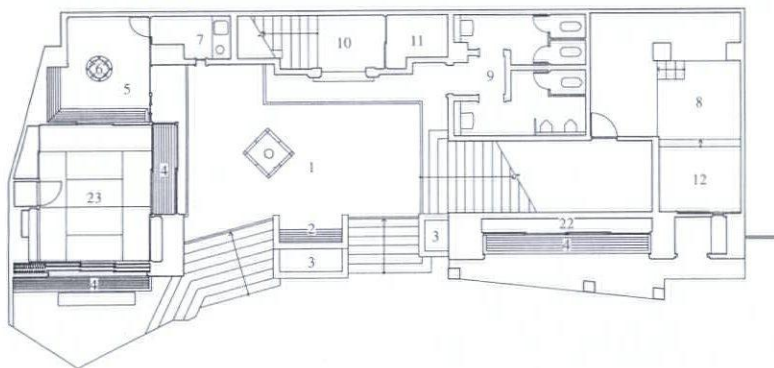




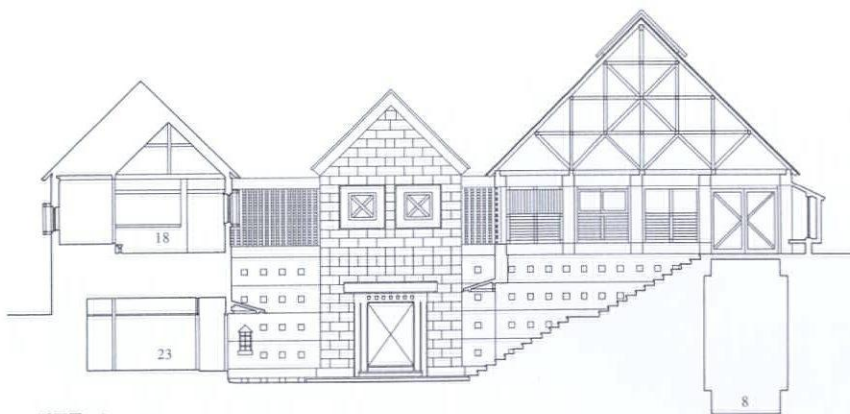
意匠設計：中山繁信／T.E.S.S.計画研究所
 構造設計：秋元構造設計事務所
 敷地面積：341.54m²
 建築面積：204.38m²
 延床面積：264.00m²
 設計期間：1986年10月～1987年4月
 施工期間：1987年7月～1988年3月



2階平面図



1階平面図 S=1:250



断面図 S=1:250

- | | |
|------------|------------|
| 1: 中庭 | 13: 待合室 |
| 2: ベンチ | 14: 改札口 |
| 3: 横え込み | 15: 券売室 |
| 4: 緑側 | 16: 売店 |
| 5: 土間 | 17: 事務室 |
| 6: ストープ置き場 | 18: 店舗 |
| 7: 湯沸かし室 | 19: 厨房 |
| 8: 倉庫 | 20: ホール |
| 9: 便所 | 21: 座敷 |
| 10: 店舗入口 | 22: 展示スペース |
| 11: ロッカー室 | 23: 集会室 |
| 12: 電話ボックス | |

駅舎が地域性、地域色を失ったといわれて久しい。駅は私たちが旅先で出会う最初の空間である。だが、駅や家並は画一的、平均化され、私たち旅人の目や足を止める力を失ってしまった。そこで、計画の手掛かりは、一旅人の視点から、旅情を感じることができる宿駅像をこの駅に求めてみた。

まず、この付近の街道に沿って集落の形態、家屋、付属屋などの特徴を調べてみた。するとこの流れに沿って、徐々にそれぞれの地域特有の形態や様式が具体的な形として浮かび上がってきた。例えば、宇都宮付近に多い大谷石造りの倉は会津方面に近づくほど少なくなり、徐々に土蔵に変わっていく。集落や屋根の形態にも同様の傾向が見られ、様式のグラデーションが見えてくる。このように、この線路沿いの地域色の強いデザインを丁寧に読み取り咀嚼しながら、それらをデザインの手掛かりとして、この駅舎を形態化していった。

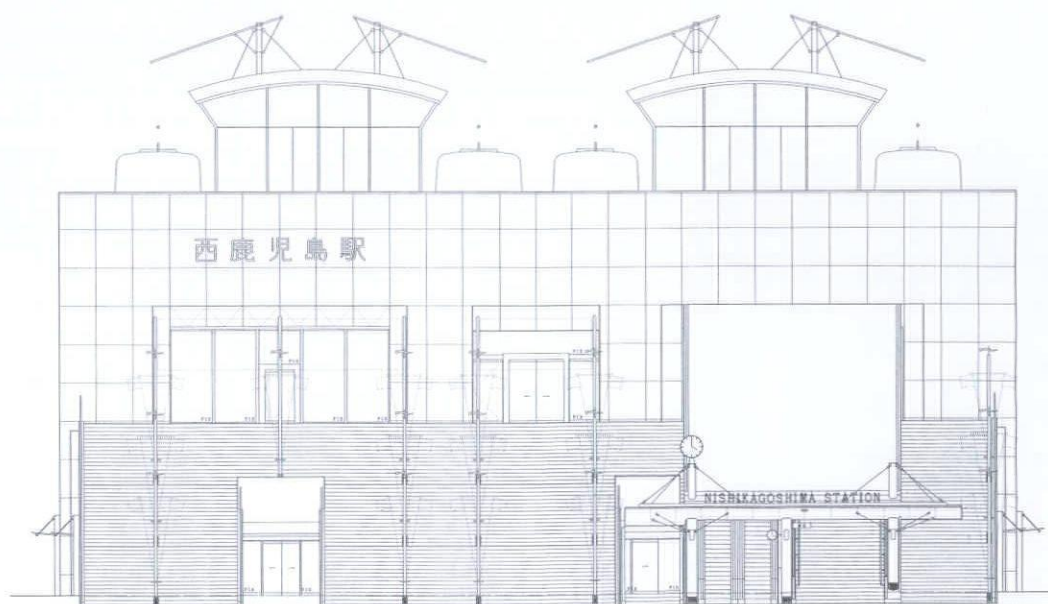
この駅舎の設計条件としてもうひとつ重要なテーマが与えられていた。それは、地域のコミュニティー施設を併設することであった。そこで地域の寄り合いの場として、また旅人が気軽にくつろげるように、緑側と土間のついた和室を設けた。さらに地域住民と旅人、また旅人同志が気安く「縁」を結べるように、駅の要所要所にベンチではなく「縁側」を設けた。

駅は、単なる交通機関の乗降のための施設、商業施設を張り付けるだけではもったいない。人を集め、人と人との接触の機会をつくることは難しい。だが、駅は最初から人が集まる場所である。そう考えれば、商業施設と共存することだけでなく、駅舎を核とし、地域のコミュニティー施設やミュージアムなどの文化公共施設を駅機能と併せ持つような総合的な都市施設をつくるのが可能になるように思う。それには、民間、公共との緊密な協力が必要であることは言うまでもない。

JR九州西鹿児島駅

鹿児島県鹿児島市、1996年

設計＝ドーンデザイン研究所、シティ建築



正面立面図 S=1:300

意匠設計：ドーンデザイン研究所、シテイ建築工房
 構造設計：安井建築設計事務所
 敷地面積：31785.03m²
 建築面積：10480.76m²
 延床面積：13490.29m²
 設計期間：1994年12月～1995年3月
 施工期間：1995年3月～1996年11月



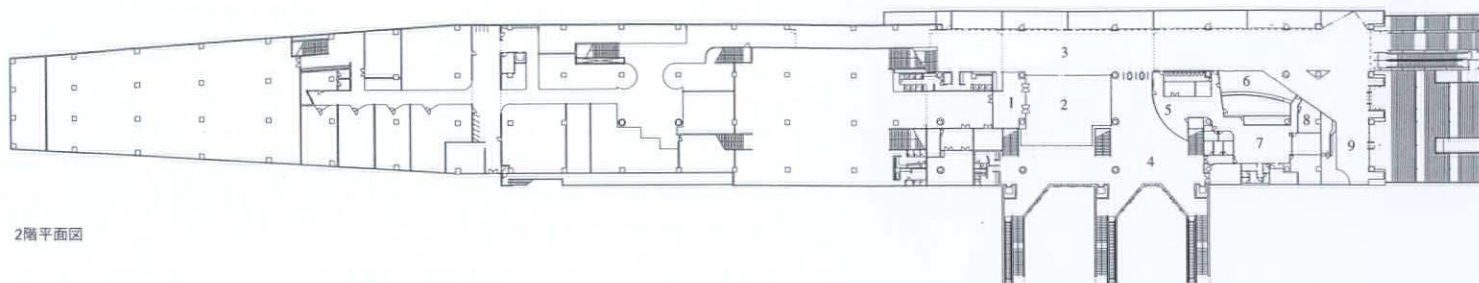
改札口



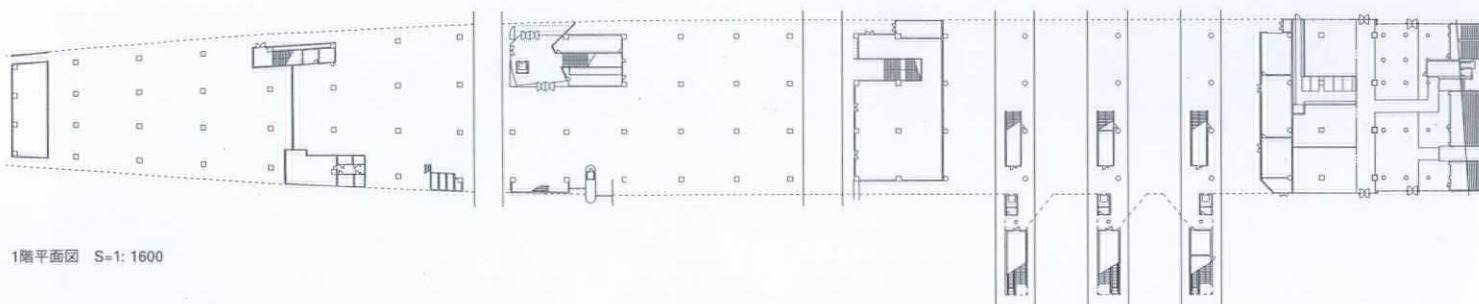
コンコース



カフェ



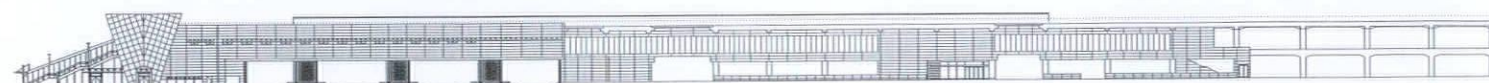
2階平面図



1階平面図 S=1: 1600



立面図



立面図 S=1: 1600



イベント当日の大階段

- 1: 待合室
- 2: 関連事業スペース
- 3: 自由通路橋外コンコース
- 4: 橋内コンコース
- 5: 改札
- 6: みどりの窓口
- 7: 駅事務室
- 8: 応接室
- 9: ティールーム

将来の九州新幹線開業に備えて西鹿児島駅建設は始められた。いつの日か新幹線と在来線が交差することになるトランジット駅を想定した構造となっている。ここは「未完の21世紀の駅」である。

駅の公共空間としてはコンコース、待合、休憩、土産物販売、ロッカー、電話、トイレと最小限の機能に抑えた。それらを動線、サイン、色彩など、単純明快な各デザインでまとめることによって、とにかく「ローコストでわかりやすい駅」とした。駅がいわば「経過措置」中の存在であることから、メンテナンスやランニングコストの節減を考慮に入れて材質、色彩、照明を選んだことは言うま

でもない。また、純粋な商業空間の中にも市や県の窓口が置かれ、クリニックもあって、「公共性」の色合いに濃淡のあるセミ・パブリックスペースを形成している。

「これが我が街の駅だ」と一目でわかるような駅の「顔」をつくることを意識して、正面に大階段「スカリナータ」を設けた。その下は書店や雑貨店など店舗があって、地上レベルからアクセスできる。アルミ製の階段には日々若者やお年寄りか座って語り合い、休息する。花鉢を並べたり、マルチポールに旗やテントを立ててイベントの背景装置にする。駅前で毎月1回の市民コンサートが開かれる時、スカリナータはまるごと観客席と化す……。

駅と市民が空間を自在に使いこなしている。

コンコースを経て大階段への出口に立つと、地上8.5mの位置から街を眺めて一呼吸できるだろう。都会の駅は、周辺のビル群に埋没していて、旅人に未知の場所に足を踏み入れたことを実感させる時間も風景も与えてくれない。さほど高くないアイレベルからの一瞬の俯瞰でも、街への「つなぎ」、街との緩衝地帯として役立つはずである。ちなみに外壁には、地元の旧藩主別邸で見た「豚血下地」壁の色を念頭に、風土になじむベンガラ風の赤を用いた。

東葉高速線船橋日大前駅西口

千葉県船橋市、1996年

日本大学設計グループ、日本鉄道建設公団+パシフィックコンサルタンツ

「建築」と「土木」の融合が求められて久しい。このアーキテクチャとインフラストラクチャの融合が本設計のテーマのひとつである。

建築と土木の融合を多元的に計るべく、まず、土木の領域となる躯体にまで立ち入った断面計画の工夫によって、光を媒体とした環境装置を提案した。具体的には半地下となる改札口階と地下ホーム階をつなぐ縦穴のライトウェル、環境装置によってさまざまな光の演出を計り、地下空間でありながら外部空間との連続性を獲得した。

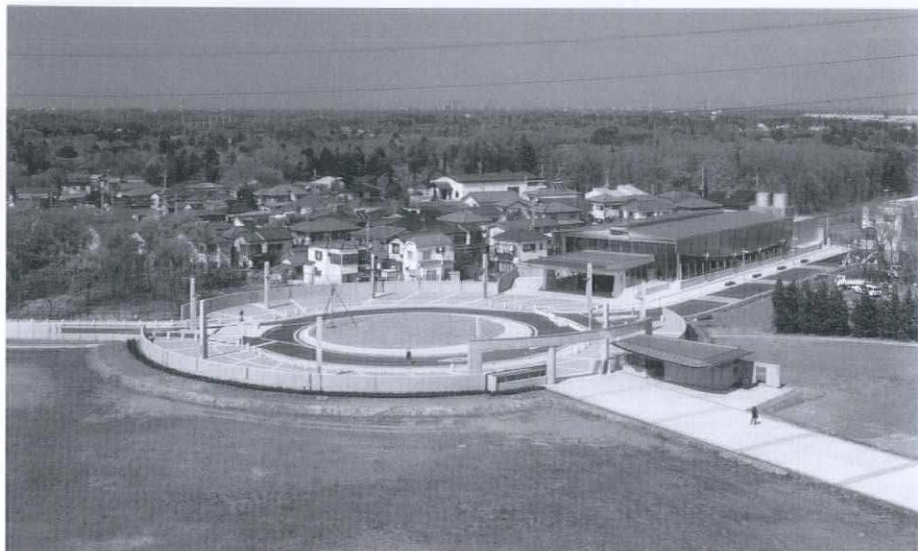
また後者のインフラ間の接続については、駅舎と駅前広場、周辺道路へのアクセス道路の総合的なデザインを行った。具体的にはロータリー型の交通広場システム、歩車共存によるアクセス道路などによって、駅利用者にスムーズなインフラ間の連続性を計った。

第二のテーマは、駅舎が単に乗降による「通過」機能にとどまることなく、よどみ、ふれあいなど「包まれる」ことを期待させるアトリウムの感覚とスピードと飛翔を感じさせる未来的透明性を、新しい架構と新しい機能の導入で具現化したことである。

架構は、自重に強い張弦梁に立体ブレースを組み合わせることでPS力を閉じこめる自旋（安定）構造「Skelsion」が獲得でき、空間の構成が平面的にも断面的にも自由となり、ストリングスによる「あやとり構法」とも言えるプロセスで立体的な空間を生み出した。

機能としては、駅務室と便所の上部をブリッジによって連絡して獲得した多目的スペース。環境装置の結界で売店やテレホンブースを内包したサービスユニットなどを提案している。

以上の提案で、内部空間がストリング群の立体的なテンションヴォールトによって人々が軽やかに包まれたような空間感覚を醸し出している。





意匠構造設計：日本大学設計グループ、日本鉄道建設公団＋パシフィックコンサルタンツ

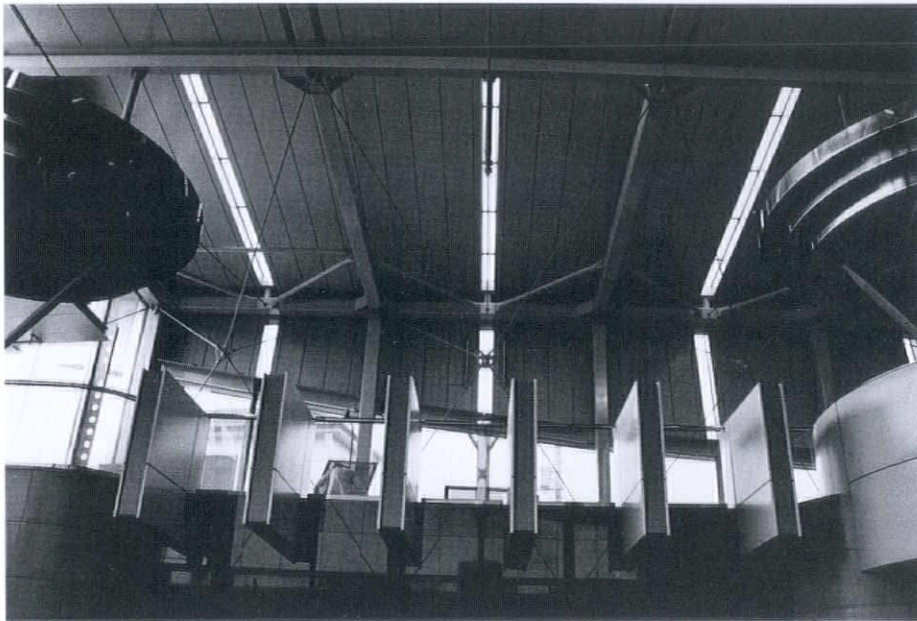
敷地面積：4737.8m²

建築面積：1678.3m²

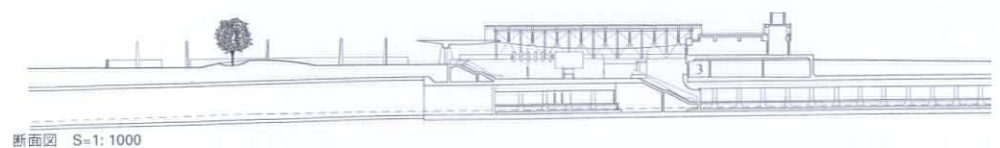
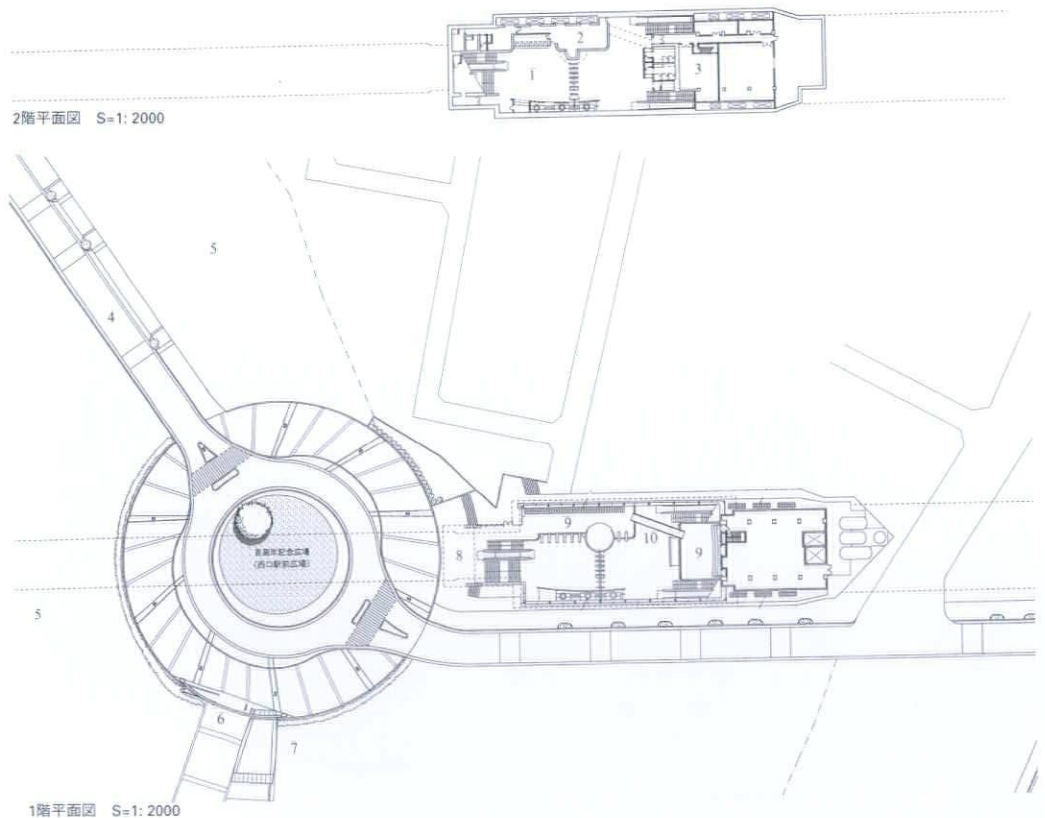
延床面積：4259.5m²

設計期間：1990年4月～1993年7月

施工期間：1993年3月～1996年3月



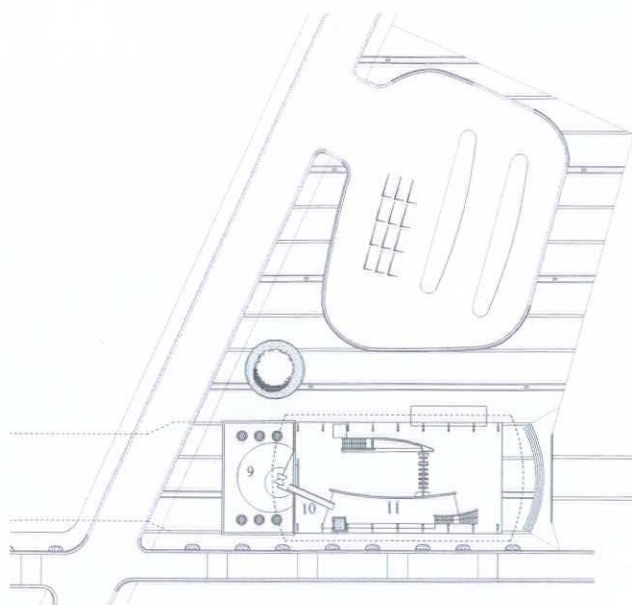
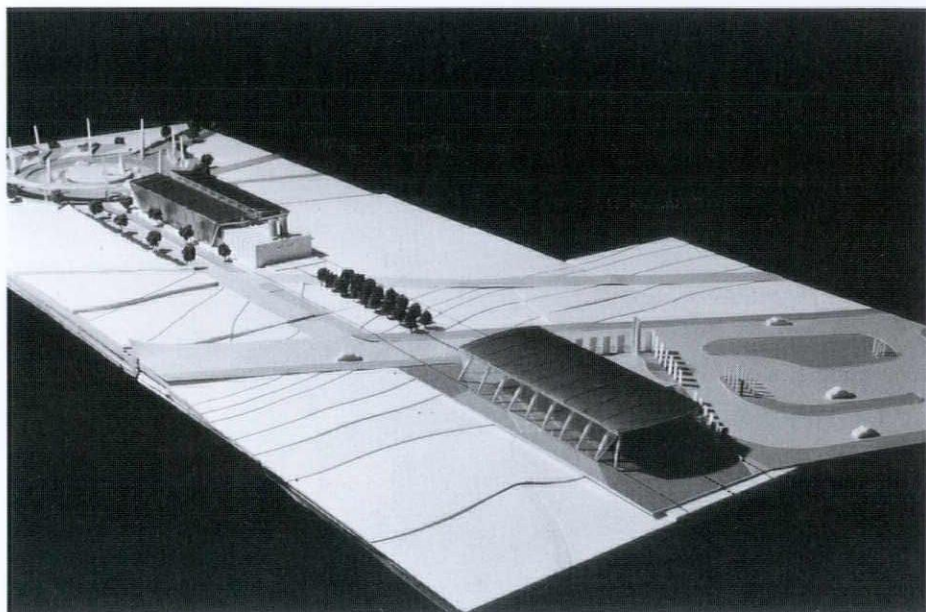
- 1: コンコース
- 2: 駅事務室
- 3: 通信機械室
- 4: 日大通り
- 5: 大学校地
- 6: 中央門
- 7: ゲートハウス
- 8: 西口エントランス
- 9: 多目的スペース
- 10: ブリッジ
- 11: ホーム



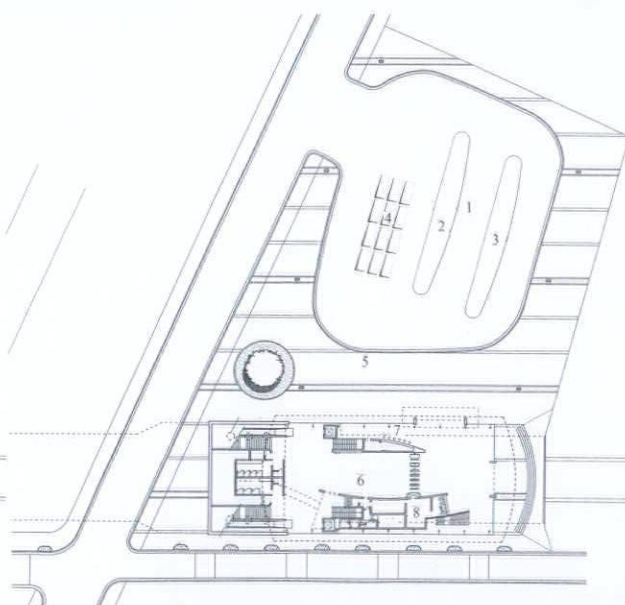
船橋日大前駅東口



東口駅舎、全体イメージ模型写真。西口と同様の構造方式による共通性と屋根の形状を曲面構成としてそれぞれの改札口の形態による独自性を図る

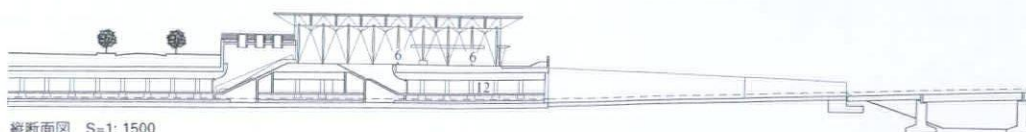


1階平面図 S=1: 1500

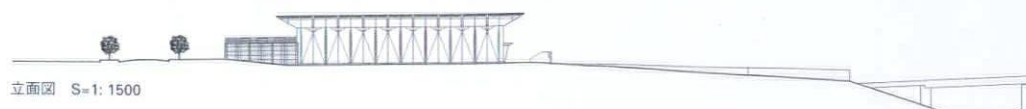


2階平面図

- 1: 東口駅前広場
- 2: 自家用車乗降口
- 3: バス乗降口
- 4: タクシープール
- 5: タクシー乗降口
- 6: コンコース
- 7: 喫茶コーナー
- 8: 駅事務室
- 9: 多目的スペース (屋外広場)
- 10: ブリッジ
- 11: 多目的スペース



縦断面図 S=1: 1500



立面図 S=1: 1500

駅は駅舎ではなく都市である

次世代の駅空間を求めて

伊澤 岬

駅と運河——次世代の交通体系のイメージ

1992年、日本でリニアモーターカーの実用化を目指す開発が話題になったころヨーロッパでマイン・ライン・ドナウ運河が開通した。日本人の感覚からするとなんと時代遅れなど、リニアに未来を、運河に歴史を感じるであろう。この運河はEU統合をきっかけとした人、物、資金の流れの活性化の一つとしてヨーロッパ内陸水運の再構築の枠組みの中に位置づけられ、現在1350tの船舶が航行できる水路のハイウェイともいえるべき交通網のダイナミックな整備と新設が進められている。この運河の拡張計画は経済的側面のみならず、モータリゼーションのもたらした環境的な側面も有している。

そこで私たちが日本での運河の再興を目指し、「房総水の回廊構想」(彰国社、1996年)をはじめ、中海干拓のもう一つの視点から「出雲水の回廊構想」(日刊建設工業新聞1997年6.20)など水の道を提案してきた。モータリゼーションの限界に対し「水の道」や「鉄の道」における大量輸送の期待は大きく、今駅がより注目されてきている。

今世紀最大の駅ビルの完成——JR京都駅

京都駅の新しい建物が圧倒的なボリュームを

現し始めた。指名コンペによって選ばれた原広司氏による提案に、当時建設中の京都ホテルもからんで建物の高さによる景観問題で京都は騒然となった。またご承知のように、京都駅を通る鉄道線は京都を南北に分断し交通のネックとなってきたが、コンペ案によって鉄道路線の見直しが必要でなかった事を知った。

都市における景観そして交通施設との総合化の欠落を見ることができる。京都駅はバブル期、大きな箱物は作ってもインフラを作れなかった日本の多くの都市の象徴といえる。

駅は駅舎ではなく都市である

パリのシャルルドゴール空港にTGVとRER(郊外路線)の駅が1994年完成した。設計者は空港のターミナルのオリジナルコンセプトから最終設計を担当してきた、ポール・アンドレーである。空港を核に鉄道、車の結節点として位置づけスムーズな人の移動を計っている。特にホームを覆う巨大なガラスの屋根は度肝を抜く迫力である。この鉄とガラスによる大空間こそヨーロッパで18世紀に鉄道が開通して以来駅を長大スパンの無柱空間で構成してきた伝統とうなずける。これまで日本の主要駅が終着駅でないためデッド・エンドを覆う大空間が誕生してこなかったと指摘されてき

たが、この空港駅では、通過駅での大空間の可能性を示している。

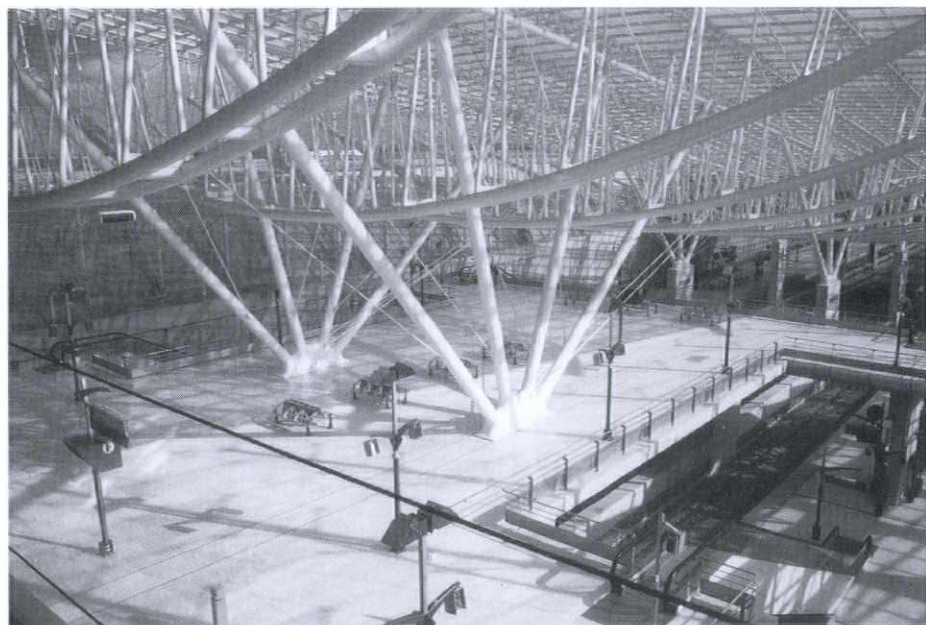
日本は鉄道の技術のみが輸入され、内なる都市としてホーム機能を中心とした豊かな駅空間が導入されず、駅舎機能のみの充実が計られてきた。

ロンドンのシティに近いリバプール・ストリート駅はガラスの天蓋ともいえる装飾的な大空間のある伝統的な駅で、最近大改築した。特にホームとコンコースの大空間に鉄とガラスの現代的な構造によるチューブ状のペデストリアンデッキによる歩行者空間を獲得して小都市を俯瞰して利用者にスムーズな移動と駅のアクティビティを形成している。

このような駅を包み込むアトリウム空間による内部空間の充実は大きな駅に限らない。ロンドンから50km程南のイーストボーン駅は、都市のランドマークとして時計塔をもった重厚な外観の建物ながら地方都市らしい親しみのもてるたたずまいである。この建物に囲まれたホールはヒューマンなスケールのアトリウム空間によって内なる都市を内包して豊かな駅空間を形成している。

日本の代表的な駅舎東京駅は、アムステルダムセントラル駅との共通性で話題になるが、駅としての相違は明確である。第一にホームを覆う大空間の有無、第二に駅の交通結節点としての充実で、アムステルダム駅はその象徴として駅前広場を介して運河「水の道」によって市内と直結している。

このような駅の大空間化、アトリウム化を駅の内なる都市化とすれば、後者インフラ間の融合は駅を交通結節点とみる外なる都市化といえよう。まさに駅は駅舎ではなくして、内にも外にも都市的でなければならない。



フランス、シャルルド・ゴール駅。通過駅ながらヨーロッパの伝統的な大空間を現代的なガラスと鉄で表現している。設計はポール・アンドルー



ベルギー、アントワープ駅。デッドエンドの終着駅においてホーム機能を駅舎が一体となった伝統駅で豊かな駅空間

そこで東京駅を駅たらしめるに、まず大空のイメージとして、リバプール・ストリート駅のようにホームをつなぐ立体的ペデストリアンデッキによって駅を俯瞰する歩行者インフラをもつアトリウム空間をホーム全体に提案したい。また東京駅は位置的に日本橋川に近く、江戸水運の重要な結節点でもあったはずである。この東京駅の伝統が京都駅という今世紀最大最後となる巨大駅ビルの誕生へとつながることとなった。

東京都庁舎のコンペにおいて高層事務所棟の丹下案に対し、磯崎新が、あえてタウンホールを提案した。京都駅のコンペにおいても駅舎ではなく駅を提案した応募案があったならばと悔やまれる。

船橋日大前駅での実験

——アーキテクチャと

インフラストラクチャーの融合

船橋日大前駅は日本大学理工学部のカンパスを横断する地下鉄新線設置にともなう大学百周年記念事業として誘致した請願駅である。

この駅の設計と平行して都営地下鉄12号線の駅舎プロポーザルコンペ(審査: 芦原義信、中村良夫他)に参加し、課題駅としての国立競技場駅と月島駅の提案をし、幸いにも当選した。現在北新宿駅と西大久保駅の実施設計を行っている。これらいくつかの駅舎の設計を通じ感じたことは、まず駅は土木が躯体を担当し建築が仕上げとその役割分担が明快であること、第二に建築としての駅舎が接続す

るインフラとしてのバス、車、そして歩行者にスムーズな連続性がなくとも成立し、結果的に駅舎と交通施設の融合を阻止してきたことである。

次世代の駅の創出には建築と土木の融合、さらにはインフラ間の融合が求められていることを強く感じる。

実は京都駅もこのような社会システムの問題で設計者個人の力には及ばない大きな問題を抱えている。船橋日大前駅は請願駅として特殊ではあるが建築と土木の融合さらにはインフラ間の融合を具体的に試みた小さな実験の成果である。

●いざわ・みさき/日本大学理工学部交通土木工学科教授



リバプール・ストリート駅。時計塔をシンボルとした旧駅舎前に設けられた近代的な新エントランス



イギリス、イーストボーン駅。ヨーロッパの古い駅は必ず時計が内外ともシンボルとして扱われている



イギリス、リバプール・ストリート駅。装飾的な柱、梁による豊かな大空間に、新しくガラスのチューブ状のペデストリアンデッキが設けられ、より立体的なアトリウム空間を構成している



イーストボーン駅。豊かなアトリウム空間による内なる都市化



オランダ、アムステルダム・セントラル駅が「鉄の道」と「水の道」の結接点として機能し、インフラ間のスムーズな移動が計られている

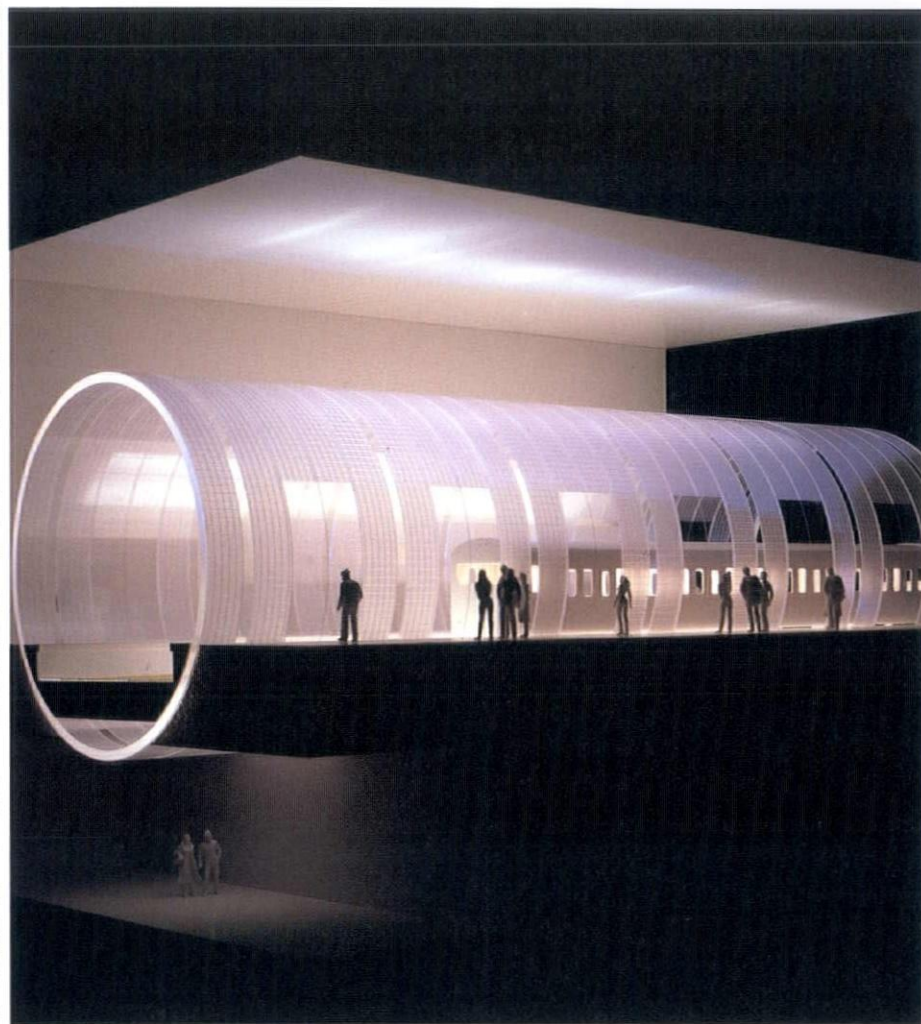


都営地下鉄12号線コンペ当選案。課題駅国立競技場駅におけるアトリウム空間の提案

M in M プロジェクト

博物館動物園駅の進化と再生

若松久男+森徹+植野糾



エナジー・チューブ



M in Mプロジェクト1996。エントランス・エキジビション「過去・現在・未来」



M in Mプロジェクト1995。「光・音・闇」



M in Mプロジェクト1995。「光・音・闇」

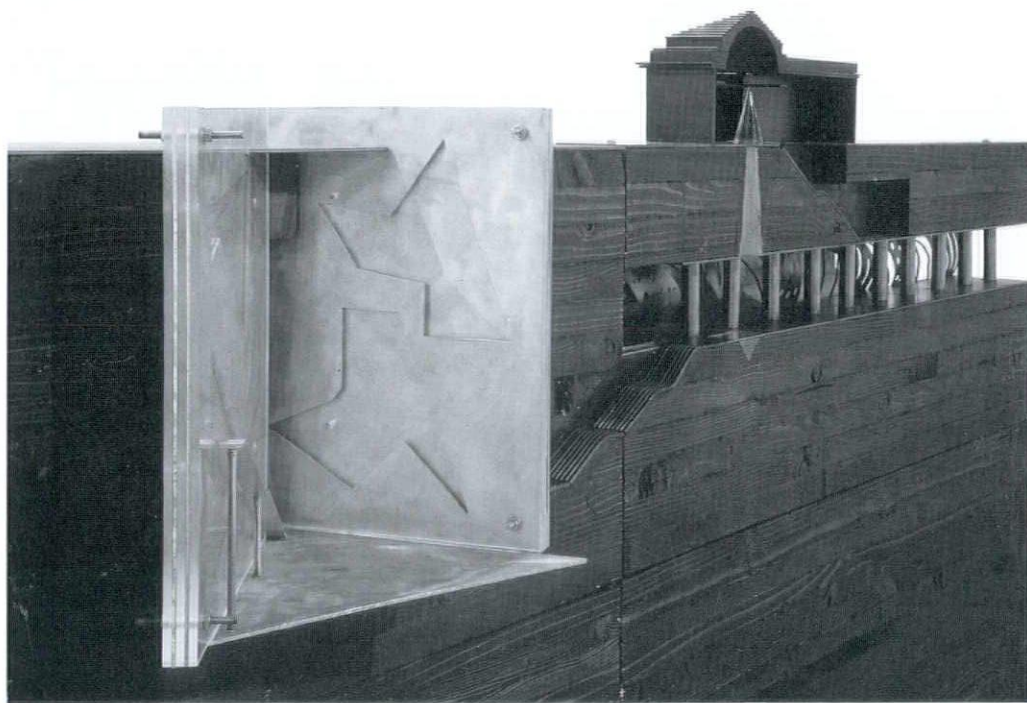
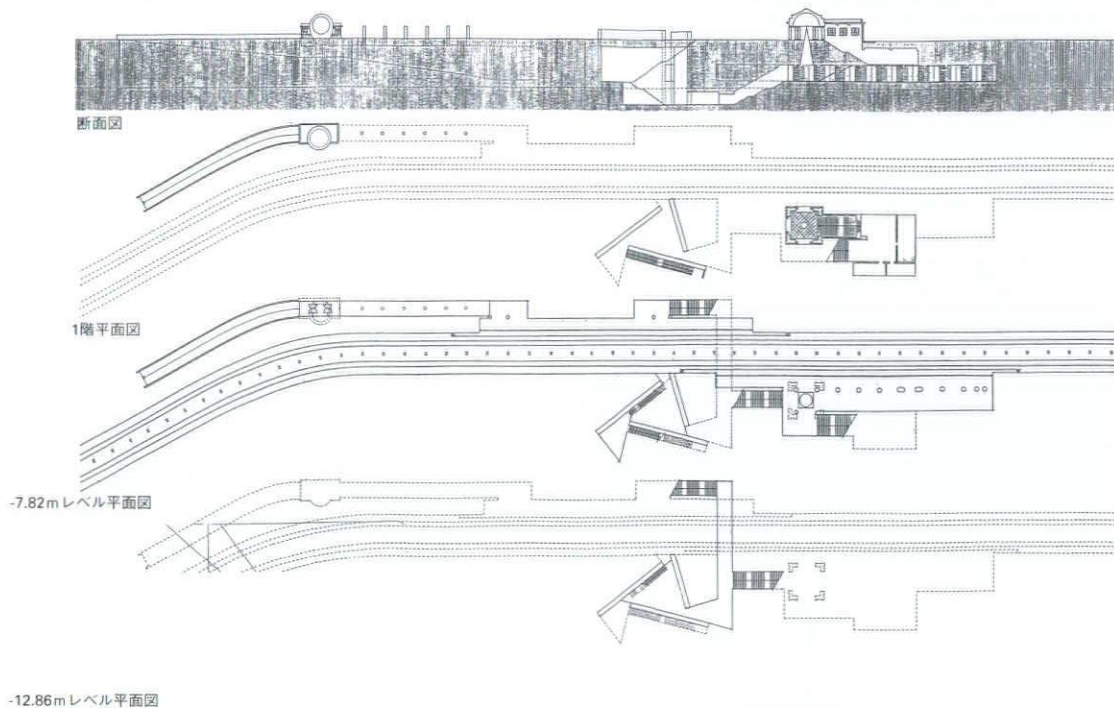
去る3月31日、京成電鉄博物館動物園駅は64年にわたる鉄道駅としての役割を終えた。四両編成が限度のホームの長さでは、増加する輸送量にとっても対応できないとの企業判断の結果である。残されたのは折衷様式ながらも不思議な魅力を放つ地上部の駅舎と、ずれた上下ホームがトポロジカルにつながるこれもまた人々のところを惹きつけて止まない地下駅空間である。駅名に象徴されるように「博覧都市・上野」の中心駅として、往時には大いに賑わったはずであり、ホームに残された象やペンギンの壁画に遠い子供時代の記憶を重ねる人も多い。現に閉鎖の予想されたこの数年の間に、地下壁面は人々の思いの丈を記す落書きで埋まった。

我々建築家と地元ギャラリー・オーナーそして編集者、アーティストなどこの駅の魅力

にひかれて集まった市民有志は、6年前の1991年、博物館動物園駅を都市芸術を軸とした新たなステーションへ進化再生させようと活動を開始した。地下駅（メトロ）のミュージアムということでM in M（Museum in Metro）プロジェクト。構えは大きく、この駅に手を加えることで上野の杜全体の活性化へ広げようとの意図から、グループ名も「上野の杜芸術フォーラム」と名づけた。

活動は三つの柱からなる。具体的「建築計画」の提案、新たなミュージアムで行う内容の「企画」提案、そして「運営」提案である。「建築計画」のポイントは、近代遺産の進化再生という視点だ。博物館的保存文化財への道ではなく、未来的機能が付与されて蘇る動的保存への道としてである。それを引き出すのがとりも直さず空間自体の魅力と都市のつ

ほともいえるこの場所の持つ力なのだろう。その空間の現状に素直に耳を傾けながら、我々は機会を捉えて計画自体を進化させ提案し続けている。「企画」については3年連続で実際に駅とその周辺を用いて行ったインスタレーション・パフォーマンスで実績済みであり、都市の脈動の象徴たる通過電車との間で相互作用をもつ表現活動の可能性を、大いに実感しているところだ。プロジェクトを実現するためには、実際のところ「運営」の戦略が最も重要になる。未だ目途は立っていないが、方向としては市民の自主的ボランティア精神を生かせるものを目指したいと考えている。駅としての扉が閉ざされた今、この三本柱を軸に現実化へ向けて事業面、技術面でのさらに地道な検討が必要であると、一同活動の初心に返っているところなのである。●植野糾



駅の進化論

駅は進化する

全ての用途の建築が時代と共に変容するように、駅も私達の都市の中で、その意味と有りようを変えようとしている。

蒸気機関車の隆盛と共に繁栄したターミナル型の大型駅はすでに役割を終えつつあり、バリのオルセー駅や、マドリッド駅、ワシントンDC駅のように、別の用途に転身した終着駅達は、かつての駅的なものを私達に思い起こさせる。今つくられる駅は、TGVのリール駅に代表されるようにスピードに捧げられた通過型の駅だ。リールでは、その様を強調するように、林立する高層ビルの足元を射抜

いてホームが設けられている。

ここ7年あまり、私達が関わっている博物館動物園駅にも、都市と関わりながら変容する駅の進化が、縮図のように見て取れる。

小さな駅の大きな名前

この小さな駅に冠せられた驚くほど大仰な名称は、そのままこの駅が辿ってきた歴史を物語ることだろう。

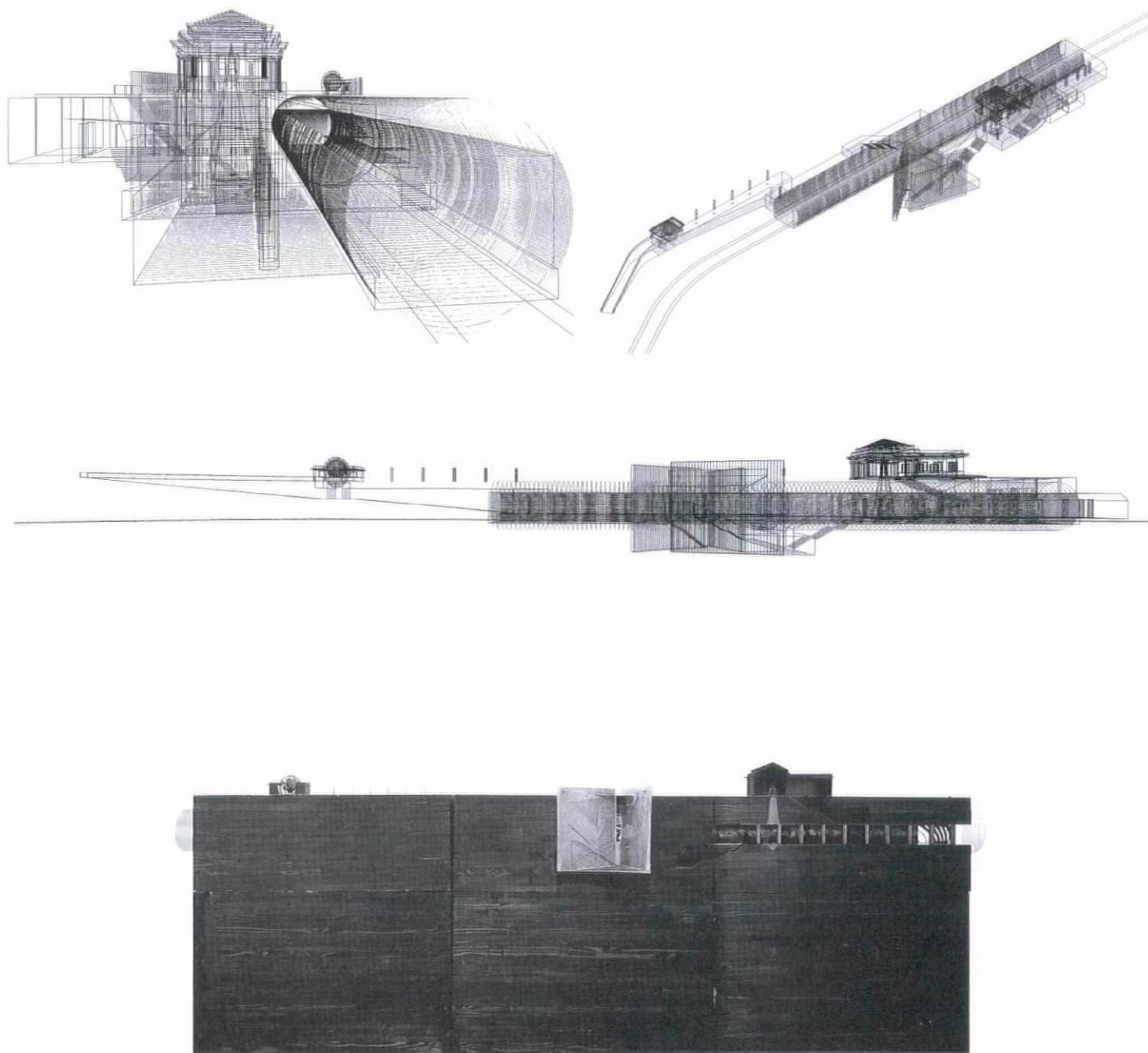
博物館動物園駅は、昭和8年に開通し、64年後の平成9年に閉鎖、通過駅となった。開通は我が国初の地下鉄、銀座線が上野-浅草間を走って人気を博してより、わずか6年後のことで、地下鉄は京成電鉄にとって長年の悲願である帝都乗り入れを可能にする新技術で

もあった。

地上に広がる樹木と歴史的建築群をそのままに保存して、地下軌道は大胆に上野の山を縦断できたのだ。地上に顔を出す出入口は、周囲の名建築に伍すべく、細心の意匠が施された。地中の上り下りのホームは、連絡通路の一点でつながり、その両端は南北に思いきり引き伸ばされている。両端の出入口を国立博物館と上野動物園の双方に近づけようとする配慮が生み出した構造と考えられ、それがこの駅の名前の由来のひとつでもあるわけだが、それだけにとどまらない。

博覧都市の名残

駅の開通から70年近くを遡り、上野の森が徳



川の菩提寺から明治政府の宣伝塔としての博覧都市に進化した往時を思い起こしてみよう。いくどとなく催された博覧会のパヴィリオンが常設化される形で博物館として定着していた当時、動物園は博物館の一セクションであったのだ。博物館動物園駅——その重合的な名称には、現在の諸施設が機能分化した上野の杜にあって、山を挙げての博覧会に沸いていた創世期の知識欲の横溢が感じられ、地中の空洞は、引き裂かれたそれぞれの機能に触手を伸ばそうとしているかのようだ。

その空洞のうち、動物園側の出入口通路は、第二次大戦中防空壕として閉鎖され今日に至った。1978年の成田空港開通は、京成を都心と成田本山を結ぶローカル線から、世界につ

ながる首都動脈として浮上させる。それとともに、成田を目指して上野を出発した車輛が1分足らずで訪れる博物館動物園駅は、停まるのもどかしい存在となり、遂に通過駅となったのである。

新しい駅へ

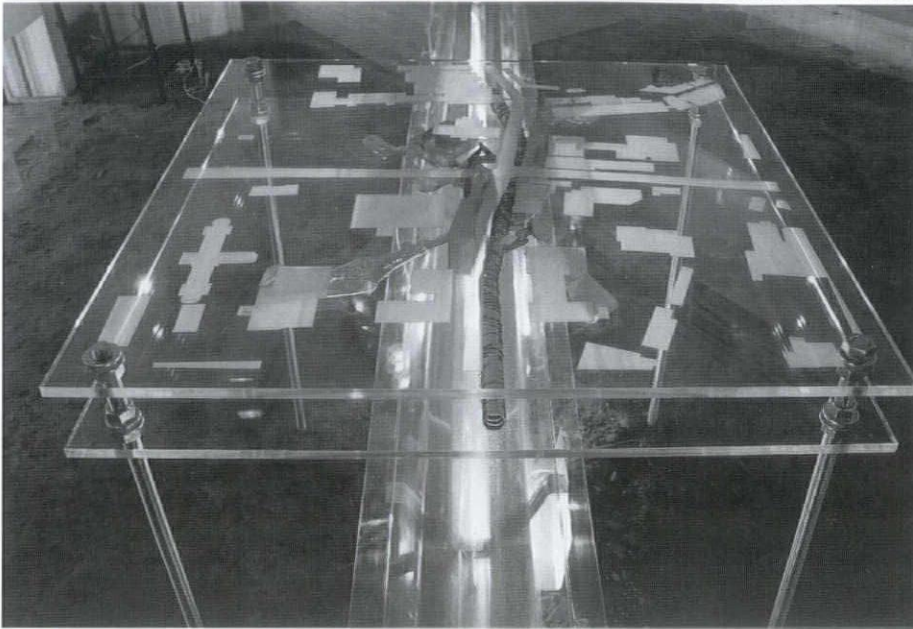
だが、私達はこの駅が死亡したとは思っていないし、駅としての役割を終えたとも考えていない。この駅は、進化するのだ——新しい駅として。まず、私達がここ数年この駅を舞台に実験を重ねてきたように、この時間が止まったようなホームは、現代の息吹を表すモダンアートの格好の舞台となつて、車窓から眺める乗客や、駅舎の扉を再び開けて訪れる

人々に、都市の情報を発信するだろう。

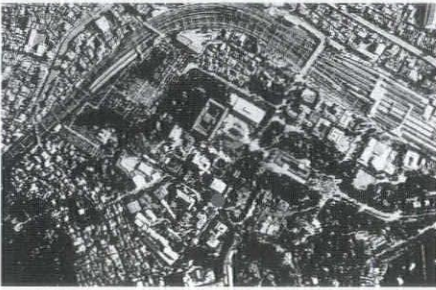
それは、成田から訪れた人々を迎えるこの国の芸術を伝統的に胚胎する上野の杜の博覧精神であるはずだ。そうした発信情報が高速で伝搬するネットワークにおける新しい駅の役割とは別に、もっと即物的には、駅の周辺に近年建設の進む、新施設群（平成館、法隆寺宝物館、新奏楽堂、国立こども図書館）の中心にあって、それらの施設を再編成する地下歩廊ネットワークのターミナルとしての機能を内包しているようにすら思える。

駅の進化は、速さを極めることだけが進歩ではなく、時に減速し、停止することも前進であることを語り始めているのではないか。

（森徹）



M in Mプロジェクト未来モデル



上野の杜航空写真

博物館動物園駅の進化再生計画

都市的文脈

敷地は上野の杜の芸術活動の経穴とも言える重要な地点にある。その不思議な魅力を放って建っている博物館動物園駅は、ピラミッド屋根が特異な折衷様式の上屋はもちろん、トポロジカルな地下空間の構成も含めて、極めて文化的ポテンシャルの高い建築と言える。この類まれな特性を持った建築とその都市的文脈を計画に反映させるべく、周辺近傍からの空間図式の発見を試みた。現在この3月をもって閉ざされてしまったピラミッド型デザインの博物館側出入口と、今は使われていない動物園側出入口、そして正面に位置する現役保存の先達、奏楽堂の3点でできる三角形がそれである。その三角形をベースに地上と地下の脈動を有する複雑な都市的文脈を定着させようとした。

3点を視覚的に関連づけさせるために、地上部分に三枚のガラスのスクリーンを設け、これを上野の杜のこの地点をゲートとすることにより、個別に建ち並ぶ施設の視覚的融合を図った。また地下においては閉鎖的な周辺施設の領域を超えて融合する場の生成を導くようにした。周辺施設の芸術の領域を超した

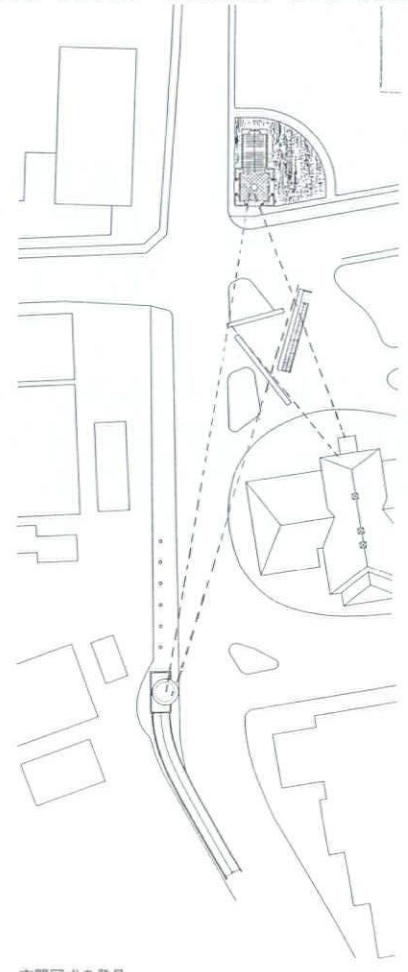
新しい形の芸術活動発見の場として、博物館動物園駅が進化再生していくことが重要な点である。刻々と変わりゆくアートポリス上野にあって、「博物館動物園駅」の名が示すように、異なる領域を再結合していく役割を、この駅に担ってもらいたいと考えている。

Cube of Memory

エジプトの段状ピラミッド風屋根と古代ローマのバンテオン神殿風といった折衷様式も姿を持つ博物館動物園駅の地上部分は、上野公園の片隅に象徴的に位置している。階段を下りに従いタイムスリップしたような空間が展開してくる魅力的な導入口である。この計画はその過去の記憶を保ちつつ、現在、未来への躍動を合わせることをテーマとして保存改修を行う。ヴォールトの真下に内包された円錐トップライトと、地上で取り囲む水盤は、この地点に遺されるべき、新たな意味を認識させる役目を果たすだろうと思われる。

Egg of Prophecy

すでに長い間閉鎖されている動物園側出入口は、一部保存、改修を行い、新たに卵型のガラスの構築物と金属の球体が付加されて、ミュージアムの入口として再生させる。アプロ



空間図式の発見

ーチはスロープ形状をとり、地下部分のスロープは、企画展示室としても機能するように円筒形のトップライトを列柱状に設けている。

Prism Hall & Energy Tube

展示スペースとなる両側のホームは、チューブ状の皮膜で軌道と隔離される。この皮膜は光や、風や、音を、適宜通過させる数種のパネルによって構成される。地下空間内を通過する電車からの光や音や風圧をこの皮膜を用いることにより技術的な制御を行い、環境と直接的な相互浸透するアートの場をつくりだそうとした。通過電車の都市の脈動を展示空間にもたらしこの仕組みを私たちはEnergy Tubeと名付けている。このチューブのほぼ中央で接する三角形のPrism Gateは、地下13mまで掘り下げられ、避難階段、採光、換気装置などの設備を付帯する。地上と地下の光の壁でつなぐ3枚の壁は、夜間の安全で美しい景観をつくりだすことになっている。

現実に都市のエネルギーそのものである電車が通り抜ける神秘的な空間。その鼓動そのものから新たな創造行為が生み出していくという都市芸術（シティ・アート）の場であり、私たちは、これを広い意味でのシティ・アート・ステーションと呼んでいる。（若松久男）

古く懐しい駅々

饗庭孝男

駅といえば人々によく知られた石川啄木の
ふるさと^{なま}の訛なつかし

停車場の人ごみの中にそれを聴きにゆく
という歌が思い出されよう。貧窮の生活を東京で過ごしていた彼が上野駅へゆき、その感激を詠んだものという。新幹線ができるまでのかつてのこの駅にはなおも明治の頃からの雰囲気が残っていた。いかにも東北から上京したという恰好の人たちが、あのガラス張りの天井の下にむれていたものである。

駅は故郷と不可分の関係にあらう。昔、私が近江今津の高校に通っていた頃の饗庭駅には、近大津からのガソリンカーが走る江若鉄道という私鉄の駅であった。小さな木の駅舎から線路を横切って上るプラットホームの端には雑草がしげり、その向うには田圃と葎がそよいでいて琵琶湖がうっすらと見えた。わずか2両ばかりのガソリンカーには人間のみか籠に入った鶏もいて騒々しいこと限りなしであったし、豪雪の頃ともなるとガソリンカーでエンジンがかからないから、男は全員下りてホーム沿いにエンジンがかかるまで車両を押したものであった。

この江若鉄道の終点は近江今津駅で、水上勉が『停車場有情』の中でのべる「特産物とてない庵港といてもいい町」の「淋しい岸を背中に負うた近江今津の、暗いけしき」のある駅なのである。水上勉は京都からここまでガソリンカーで来て、バスに乗りかえ峠をこえてよく若狭本郷まで戻ったからである。

ところで、小さな、懐かしい駅と言えば、もう20年も昔、パリのモンパルナス駅からシャルトルを経てイリエ＝コンブレ駅まで乗ったことがある。フランスの田舎によくある、枠組みがレンガづくりの駅で、まるでマッチ箱のように小さく見える駅であった。父の故郷であるこの町まで少年ブルーストは父に連れられて帰るのである。

「さあ膝の毛布をとりなさい。着いたよ」と彼は父に言われる。駅を出るとすぐ右にこれ又考えるかぎりの小さなホテルが一軒ぼつんと建っていて、駅前から教会前広場へと通じるプラタナスの並木の上に翳^{いれいこも}雲のひろがる寂しい空が見えた。

今は日本と同様フランス国鉄も支線を廃線にしているのが多いため、西大西洋岸近くを



東京、上野駅



鎌倉、稲村ヶ崎駅

走る汽車は小さい電車で、荒れ果てた倉庫と夏草、それに赤錆びた引込線のついた駅をいくつも通りすぎてゆくのである。かつて丹精こめて駅員が植えたに違いないコスモスが野生化して遠い草原と灌木の林の彼方の海から吹いてくる風に揺れているのを見ると寂寥感にたえがたかった。

駅とは人生の縮図のようだ。人々が行き交う。私は駅の食堂でよく食事をした。というのも早くできて、ひとりで気楽でいられるからであった。ヨーロッパを旅している時には私はそうした食堂や立喰いのキオスクを利用した。

日本と違ってヨーロッパでは通過駅ではなく終着駅のように折り返しのかたちで汽車が出入りしている。パリで言えば東駅、北駅、サン・ラザール駅などがそうであり、イタリアではミラノやフィレンツェも同様であった。多くは1900年前後に建てられたものでアール・ヌーヴォー調の潇洒なスタイルをもっており、鉄骨と巨大なガラスの半円天井である。その頃は「鉄」と「ガラス」の時代であり、エッフェル塔や植物園を思い出せばよい。そうした広大な駅にゆっくりと汽車が入ってくる。

出迎えの人々は入線時刻を眺めてから群をなして長いホームへと動いてゆく。タラップに駆けよって抱擁する家族や恋人たち、窓を下ろして、顔を出して手をふる乗客たち、幾分上気した人々のかもし出す熱っぽい雰囲気立ちこめるのであった。古く懐かしい映画の冒頭のように。

赤い細長い箱のような「コンポステ」といわれる改札のあるフランスの駅をのぞけば、ヨーロッパでは構内への出入りは自由である。キオスクがあり、小さなカフェがあり、コーヒーを前に、新聞を読みながら汽車の入ってくるのを待つ風景はいつでも同様なのであった。啄木の歌ではないが、駅は郷愁のただよう世界であり、出発への希望と、別れのかなしさと、出会いへの期待につつまれている。

見送る人と送られる人が長いホームで抱き合い、タラップのところでくちづけをくりかえす。別離の悲哀が眺めている私にも伝わってくる。船の出航のテープほどに情感はこもっていないとはいえ、飛行機のように税関の前で手を振るような味気なさからも遠い。

「出会い」といえば一度私はJRの八王子駅で階段をかけ下りてくる男とホームで彼を見つけて一目散にかけよって抱き合っている女の情景を見たことがあった。はた目にも、それは長い別離のあとの感激の「出会い」と見えた。

駅頭は又さまざまなドラマの舞台でもある。ヴィスコンティの映画『若者たち』の冒頭で



ミラノ中央駅

は、南イタリアから、北の工業地帯の先進都市ミラノへ働きにきた貧しい男たちが、あの巨大な白い駅舎を眺め、圧倒された思いと不安をうかべている点が映し出されている。この場面を見た人は、多分、貧困にあえぐシチリアを描いたヴィスコンティの『揺れる大地』を思い出したことであろう。

ヨーロッパの大都市にはしばしば地方別に出発する駅がある。私はよくウィーンの西駅についたが、ここは何かしら明るい雰囲気があった。それに較べるとフ란ツ・ヨゼフ駅は重く暗い気配が漂っている。というのも西駅はドイツ、スイス、フランスからの客が多いのに対して、後者はかつての東欧諸国からの出入が多かったためであろう。私が1987年にブラハへ向かってこの駅から出発した時は、まだ東欧解体の少し前であり、旅する人も少なく、私は暗い構内を歩いて、霧のたようプラットホームで乗る客車番号を調べて発った。車窓からはどこまでも続く白樺の林、そこを流れる霧が見え、食堂車に行っても相客は誰一人としていなかった。

国境の駅では徹底して検査され、日本人であるのに何故フランス・フランを持っているのかと訊問までされた。帰りのウィーン行きの汽車では、予約した筈なのに私の席に見知らぬ男が座っていた。この駅については、もうひとつ思い出がある。

私がカフカの住所や墓地などを探して歩いた折に雇ったタクシーの運転手が半日つき合ってくれたので、少し余分にオーストリア・シリングで払ったことがあった。荷物を駅に運び入れた彼が、その後、汚い駅の食堂で昼飯をたべている私の窓際のところに戻って来て、コツコツと窓を叩く。

何かと思うと、「お食事がすんだらお話しします」という。終わってから彼の案内でタクシーの中へゆくとドアをびっちりしめてから「旦那の下さったのは料金の2倍です」という。見れば車内の薄くらがりで私は紙幣の単位を間違えていたのである。彼は「こんなに沢山頂くわけにはいかないので半分お返しに來ました」と私に返すのであった。私は彼の律儀さに感動して残っていたチェコの紙幣を全部お礼にさし出した。この取引で彼がドアを締め切ったのは「外貨法違反」でふたりとも逮捕されるおそれがあったからであった。

私は彼に別れを告げ、席をとられてやむなく自由席に移った。ウィーンに近づくとき街の明かりが何と眩しく見えたことか。パリの駅に戻ろう。6つある地方別の駅にはそのおのおのに駅らしい雰囲気があった。モンパルナス駅はブルターニュからの出入口である。魚くさい。駅のまわりには魚料理屋が



ウィーン、フ란ツ・ヨゼフ駅



パリ、モンパルナス駅

いっぱいだ。私はオマール海老のサラダが大好きで大西洋サーモンの燻製とともに食べた。駅から大通りへつづくあたりにはブルターニュ特産のクレープ屋が並んでいる。日本のホテルで「クレープ」と称しているいかがわしいものではなくて、露店で食べさせる、ちょうどオーストリアの駅で売っているフランクフルト・ソーセージと似ている。

東駅はストラスブールを経てドイツに向かう。パリ最大という駅の構内にはいくつかのレストランがあり、そこでは周辺同様、「シュクルート」という酢キャベツの上にソーセージやハムや骨つき肉をのせたゲルマン独特の料理を食べさせてくれる。まわりからはドイツ語がしきりと聞こえてくる。かつて横にすわった老人は私の肩をたたきながら「うまいだろう、又一緒に戦争をやろうな」と言ったものだ。

サン・ラザール駅はモネの絵にもある。かつては「ベル・エポック」の「近代性」の象徴であり、マルセル・ブルーストもこの駅のことをくわしく書いている。ノルマンディへ行く駅だが、夏になると海岸リゾートのホテルや避暑地の広告がいっぱい貼ってあり、そうしたなかに奇妙にも「ヴァカンスで動物たちを捨てないで」という動物愛護協会のピラがある。この駅のまわりも魚料理が多い。

北駅はベルギー、オランダへ行く。第一次大戦の折、ドイツ軍の侵入をうけて命からがら逃げてきたかの地の人々がこの駅でその惨状を人々に話したため、パリの連中は浮き足立ってわれもわれもとボルドーや南仏へ逃げに行ったという話である。私はブリュージュやアムステルダムへはいつもここから乗って行った。

リヨン駅は「オリエンタル急行」が発着するせいか気取った駅だ。かつては金持ちがニースかディジョンを経由してスイスへ行った。第一次も第二次の大戦でも貴金属を身のまわりにいっぱいつけて「貴金属と道連れ」なのだった。

オーステルリッツ駅。ここは私がはじめてヨーロッパの汽車に乗ったところだ。遅い夏の日、私はここから南仏のポーまで乗って行った。「すきま風が嫌いだ」という同席した婆さんにいじめられ、荷物の上げ下ろしはおろか、下車する時はタラップまで荷物をもちたされ、「ムッシュー」の言葉の抑揚ひとつでこきつかわれた思い出の駅だ。

思えば、故郷を出る少年の日の小さな決意から、こともなげにヨーロッパの駅々を乗り降りする大人になってしまった。懐かしい様な駅よ。

●あえば・たかお／文芸評論家



パリ、サン・ラザール駅

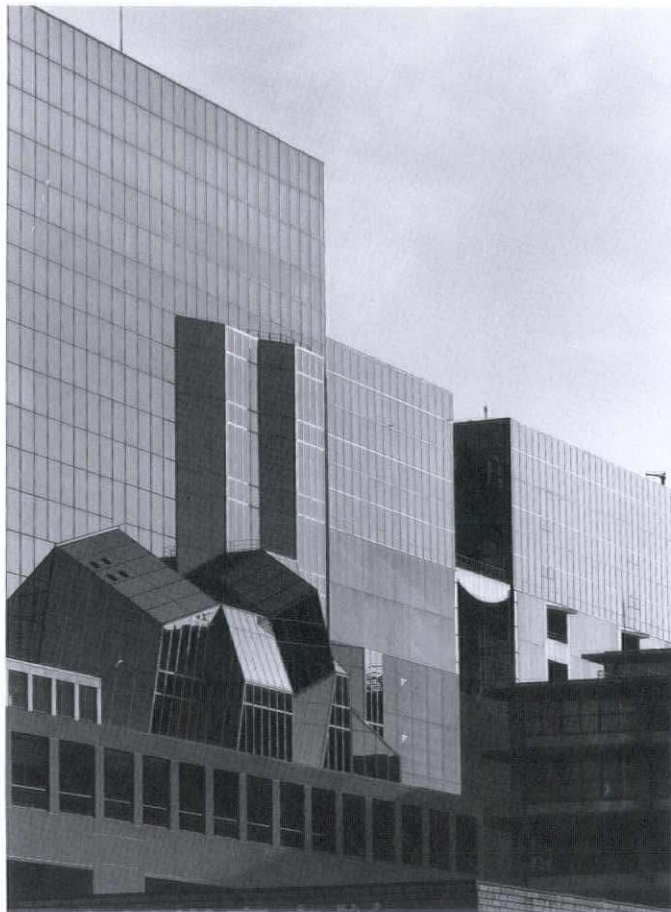


パリ、オーステルリッツ駅

京都駅ビル

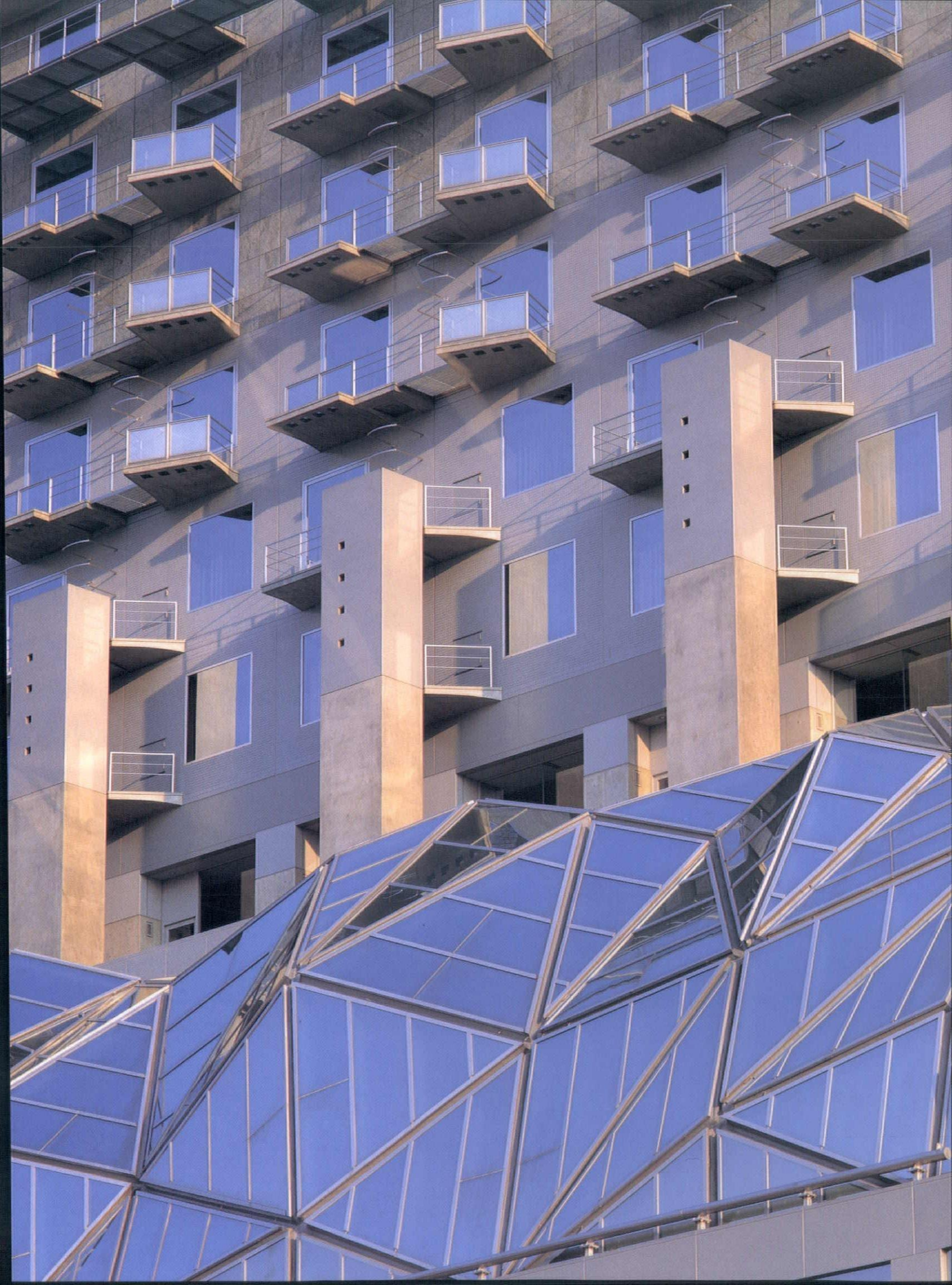
京都府京都市下京区、1997年

設計＝原広司＋アトリエ・ファイ建築研究所

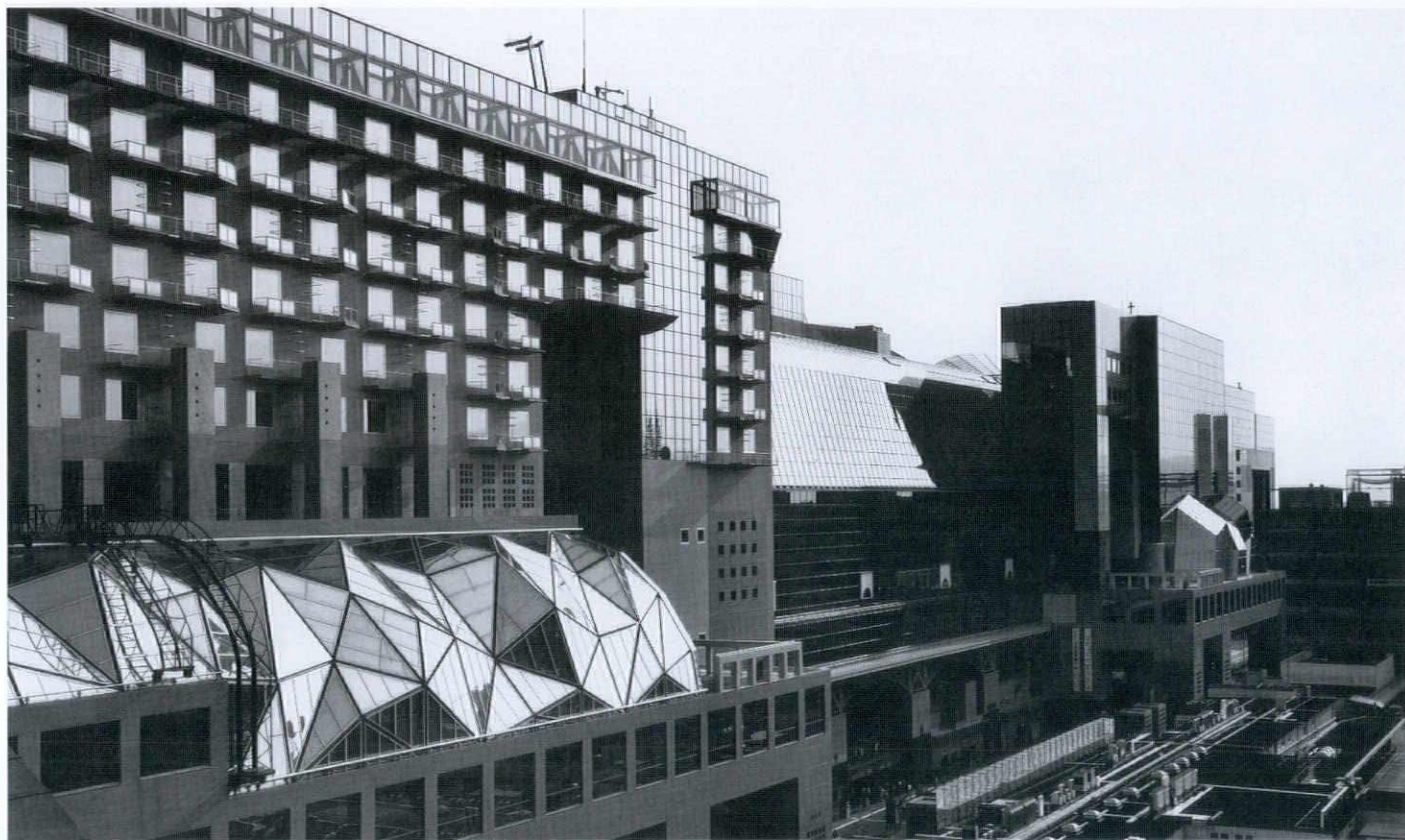


写真＝大野 繁





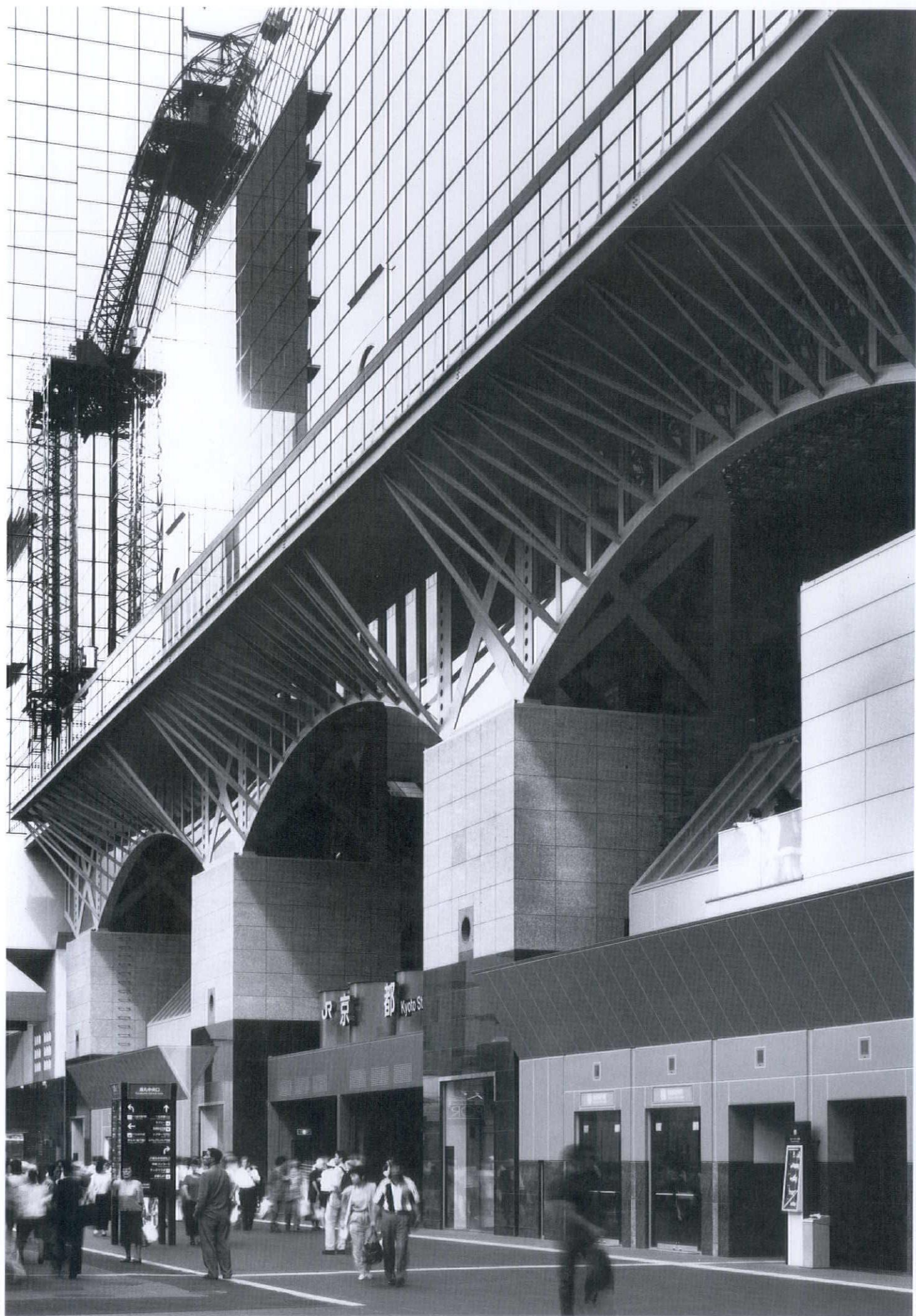
P58: 北側立面詳細1: 室町門型
P59: 北側立面詳細2: ラウンジのガラス屋根とホテル客室外観
P62: ガラスのファサードに映える青空



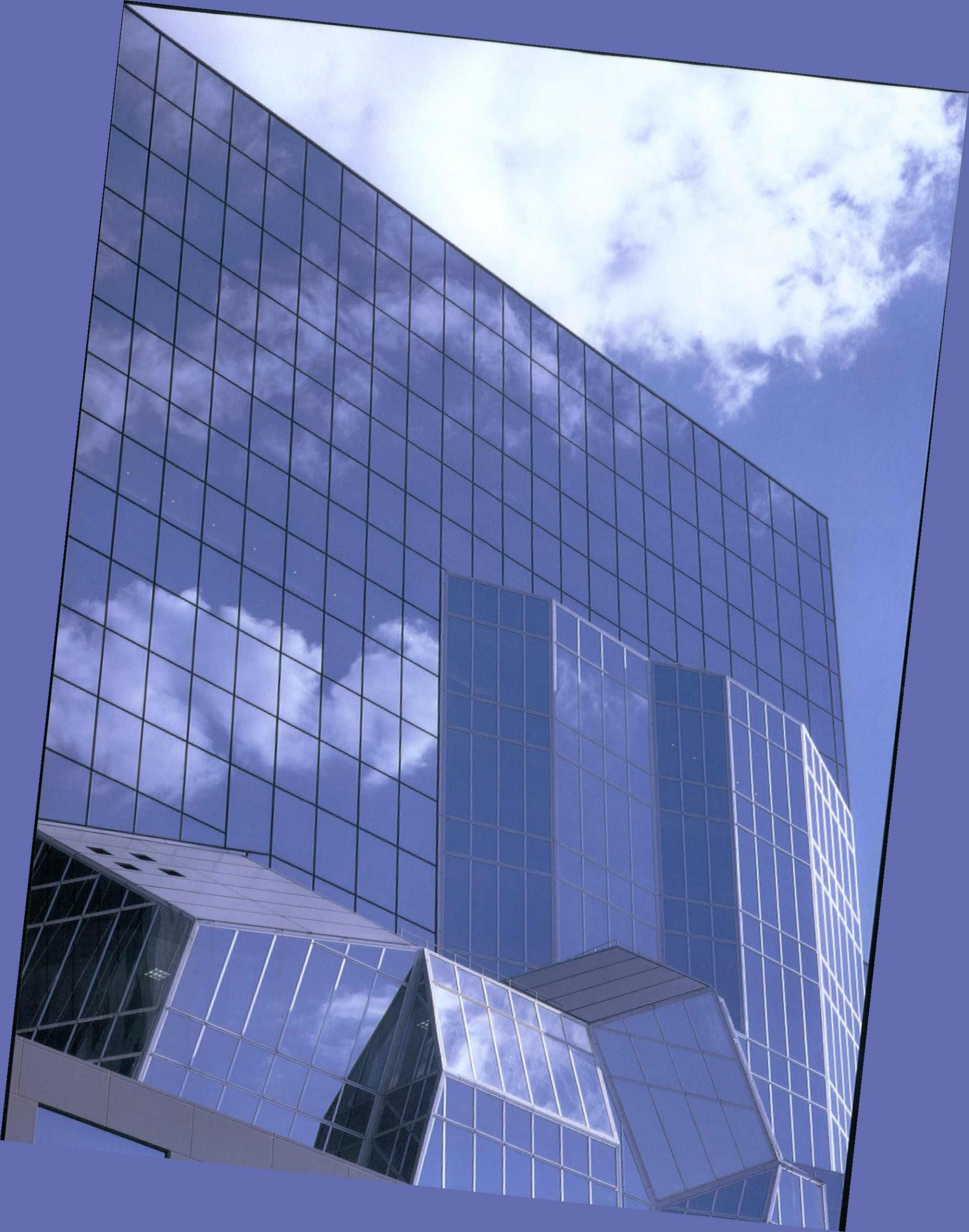
北側立面

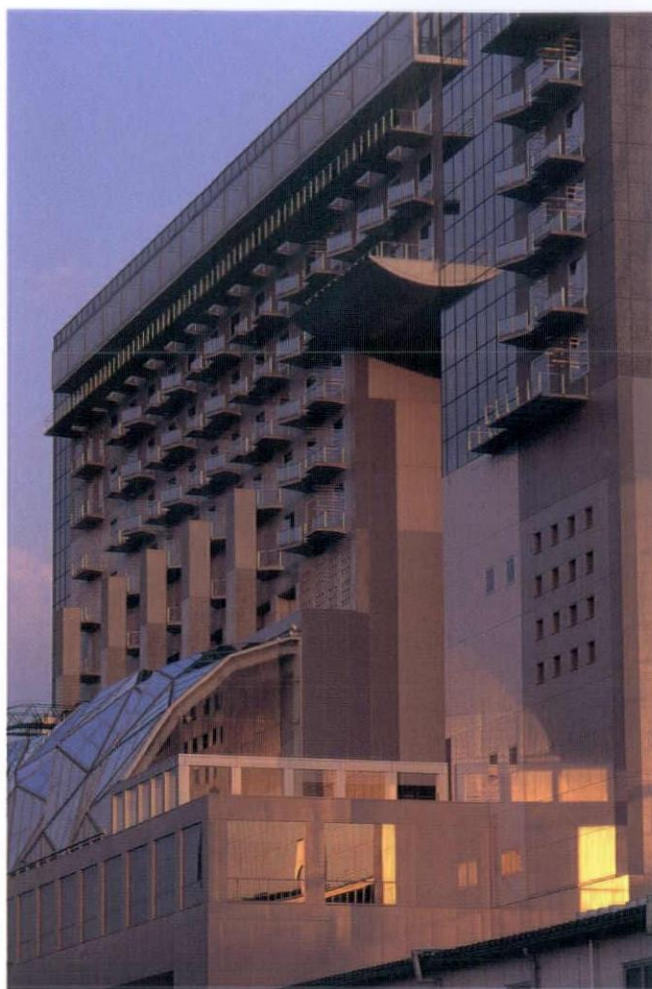


南側立面
SD9709
60

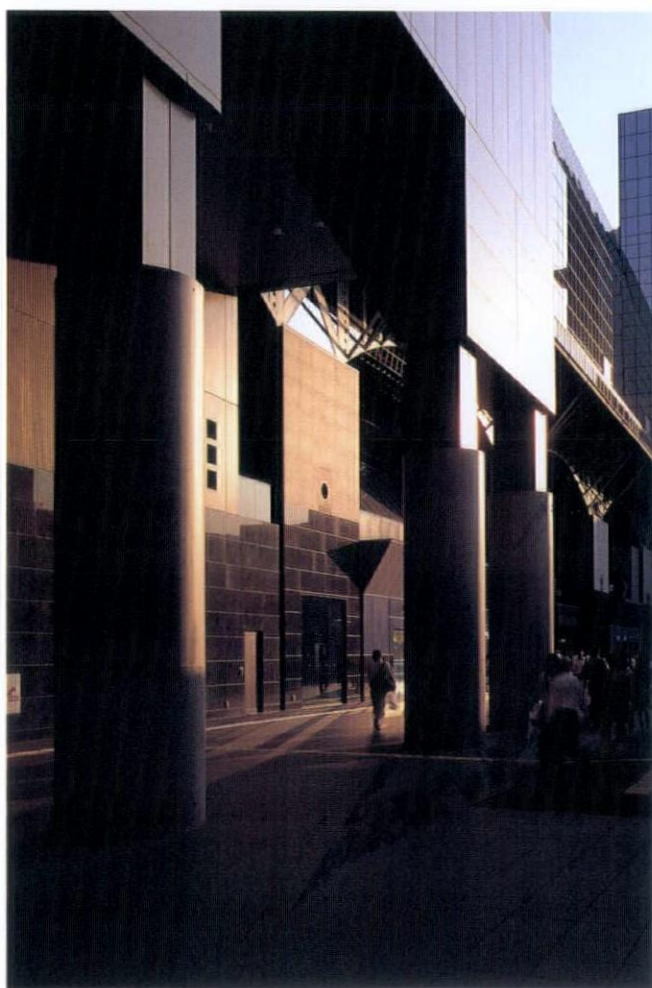


アイレベルから見た北側立面





夕景1



夕景2



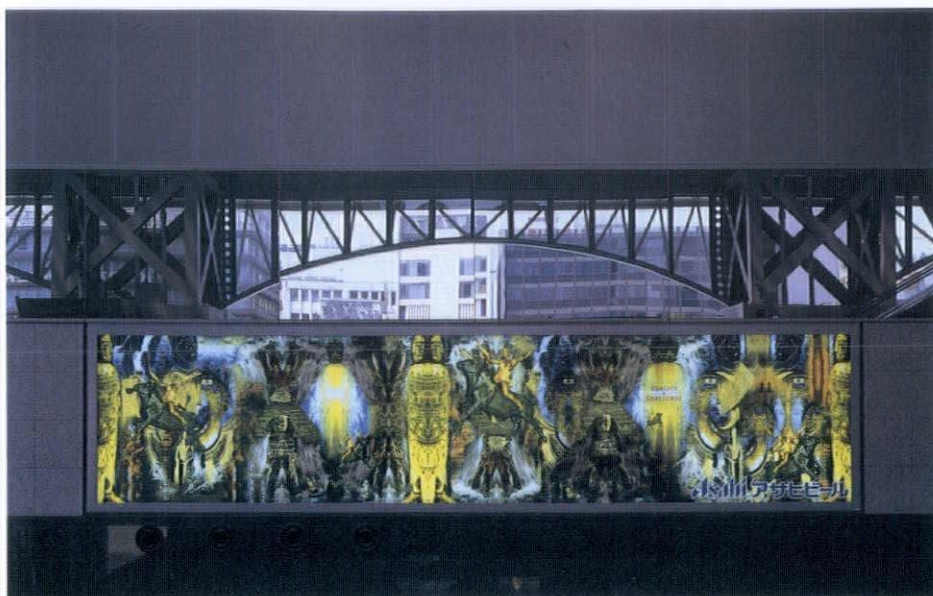
百貨店側から中央コンコースを望む

SD9709



中央コンコース詳細

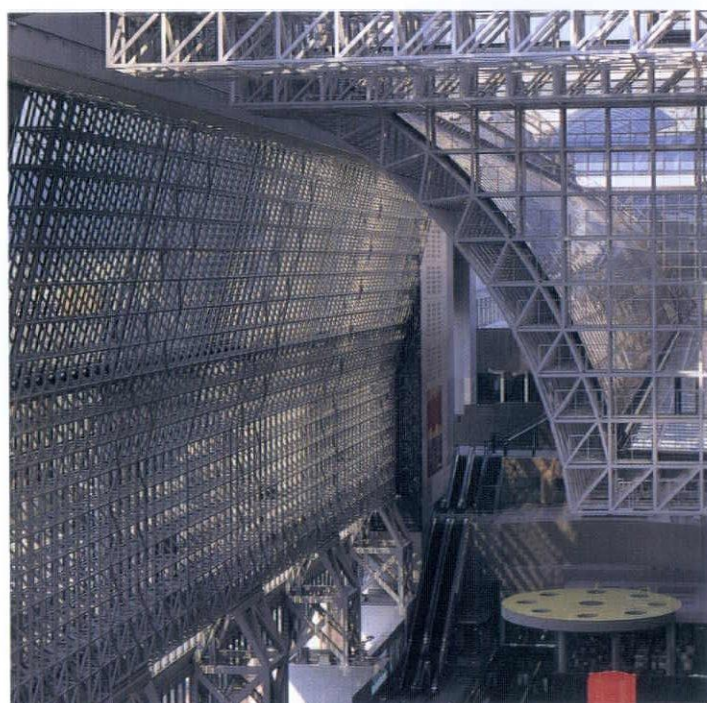




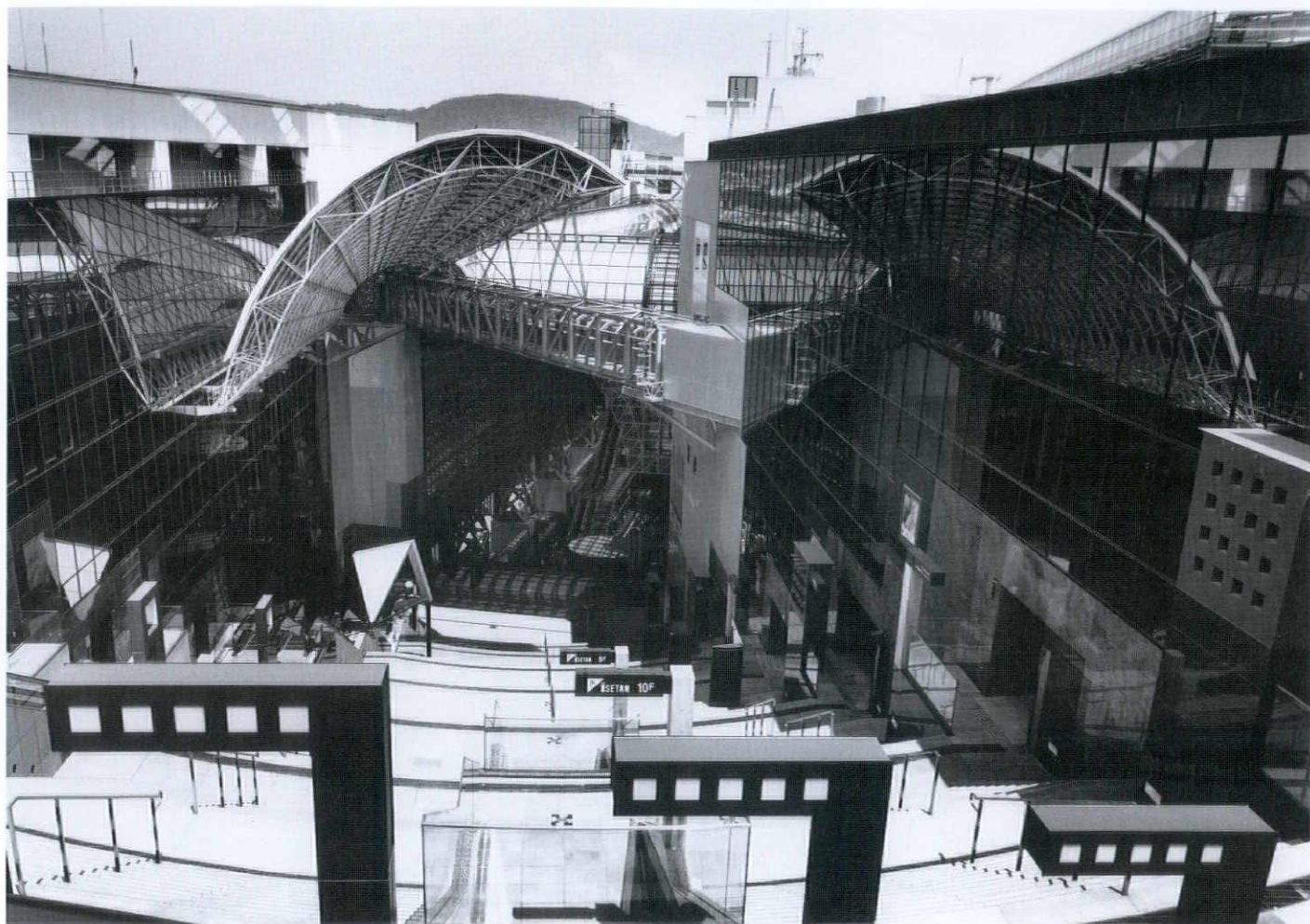
アート広告：横尾忠則



アート広告：ロイ・リキテンスタイン



中央コンコースのガラス屋根を支えるトラス



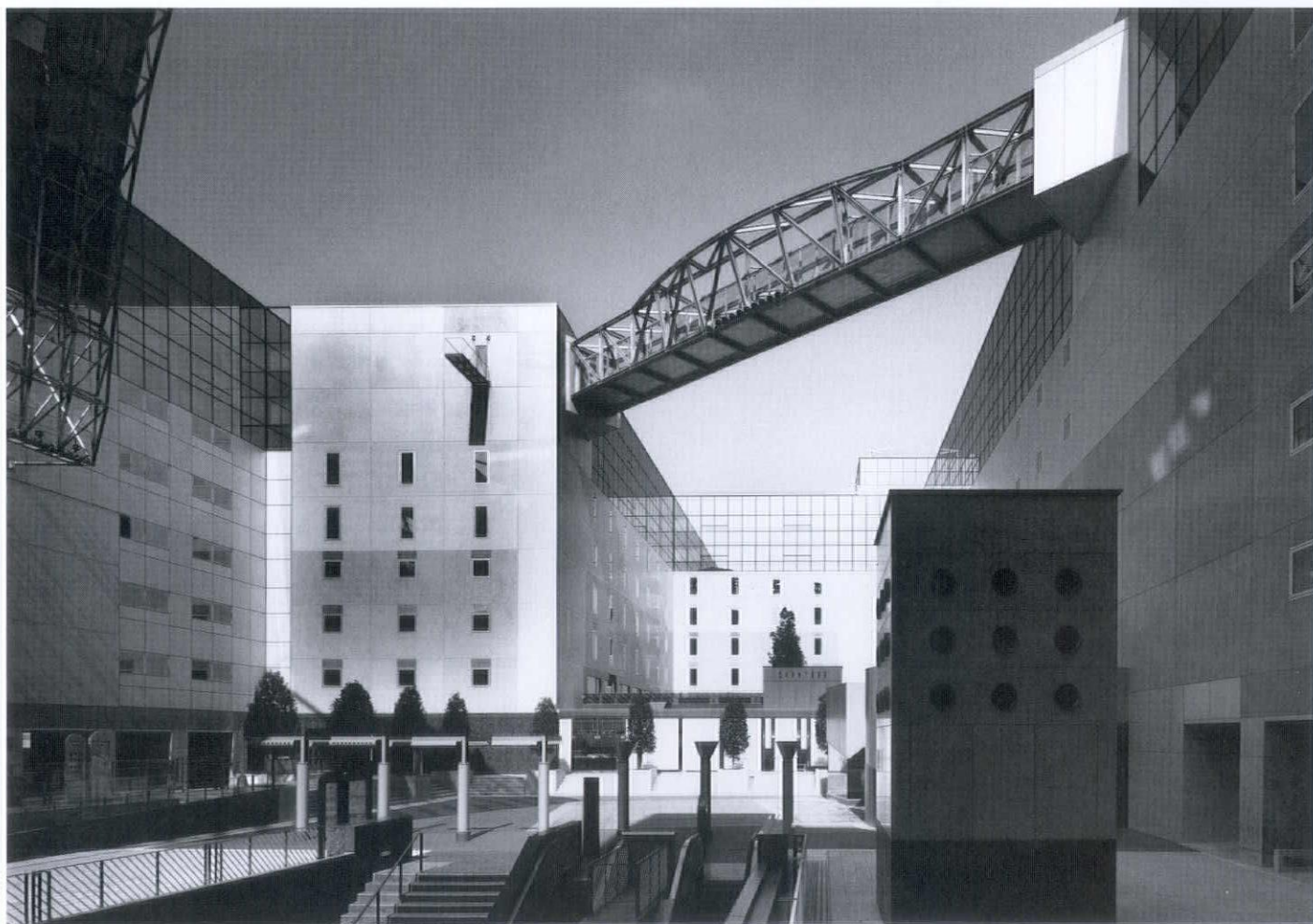
大空広場から大階段を望む



大階段全景

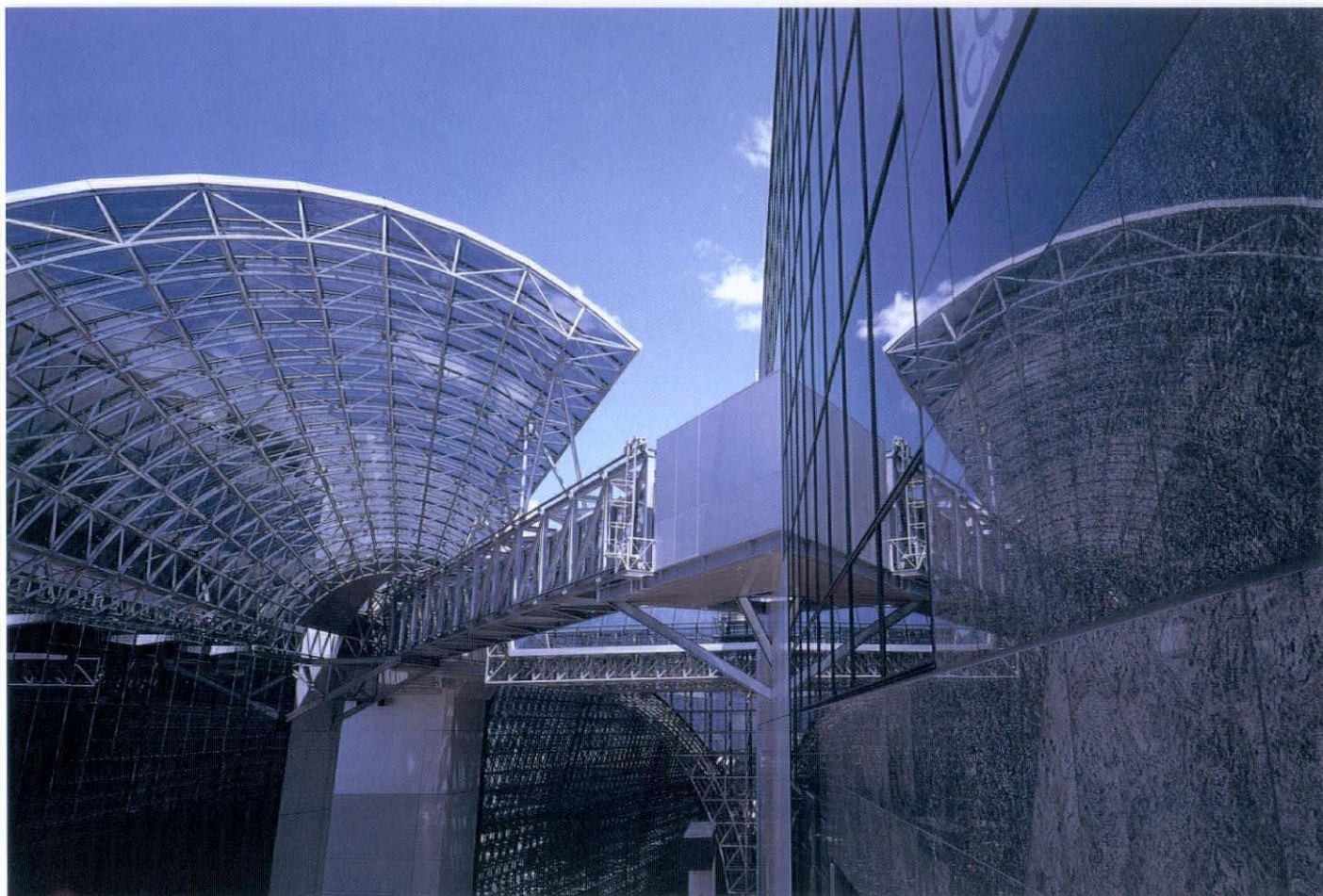


大空広場



東広場

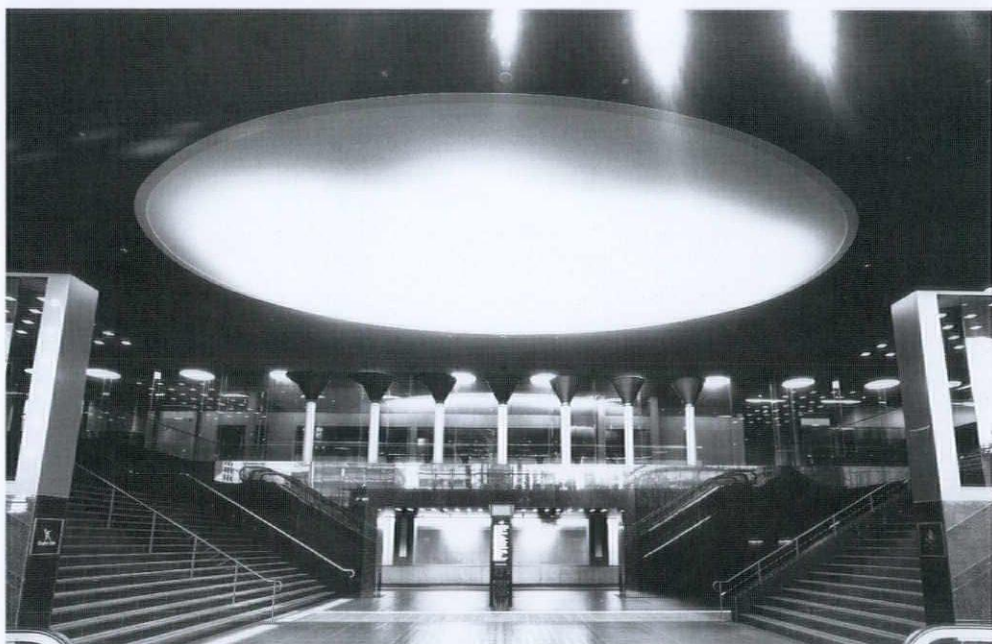




大階段側壁に映える青空



百貨店



ホテル、文化施設エントランス



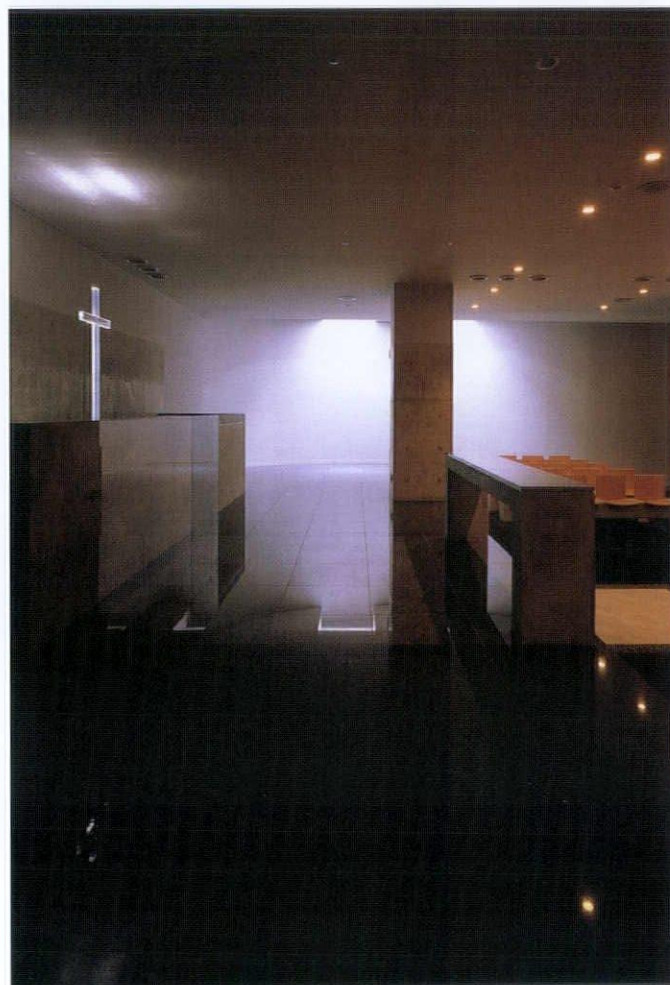
ホテルティールounge



コンベンションホール・ハワイエ



ホテルロビー



チャペル

コンコースをアーバン化する

新京都駅について

川崎 清

周辺の問題

新京都駅は色々な経緯を経ながら、ようやく完成に近付きつつある。1997年7月12日、駅施設の開業、8月9日、文化ホールオープン、9月11日、デパート、ホテル、その他の施設が完成することになっているので、SDでの本特集が組まれる頃には、京都駅はすべて完成していることと思われる。この京都駅はその計画の途中において、またコンペの前後、そして建設中において、その誕生が大きな話題となった。それはいわば京都市が全体で抱える開発と保存をめぐる市民の意識が、この京都駅を鏡にして写し出されたようなものであり、京都の未来に対して期待と不安が集まった。期待とは21世紀へ向かう京都創生のきっかけとなり、京都市経済の活性化と南部開発へのはずみをつけることに対するものであった。しかし、それにも増して大きな不安は、20万m²を越える巨大な駅ビルの出現が京都景観に与える影響の大きさと、JR東海道線が高架化されず、いわば南北分断の障害を残したまま、駅ビル建設を進めることへの不満であった。これらをめぐって、賛否両論の騒然とした世論の中でコンペが行われ、原広司の当選案が決定された。景観問題については460mという横に長い、高さ60mの限界を一応の解答とした。南北分断については、JRの高架化が色々な技術的問題を抱え、早期解決が無理であり、段階的に先に駅ビルをつくり、将来可能な条件がそろった段階で実現するという見通しであった。要するに、ふたつの布石を同時に打つことができないので、一石一石を打ち進めるという考え方であった。代わりに人に対しては、南北を結ぶ自由通路を設けるなど南北の流通を計り、車に対しては京都市では、都市間幹線として烏丸通よりも堀川通を考えており、この堀川通から南の油小路へ抜ける高速道路化を進めている。イメージ的には、京都駅に対しては、南部開発の核となる重要拠点として位置づけられ、経済界などでは、むしろ南北の架け橋となることを期待している。

空間のコンセプト

コンペの段階では、それぞれの案に対する審査員の評価は微妙にずれていたように思う。しかし、その総合的な評価の結果として最後

に原広司の案が浮かび上がった。専門家以外の人に、これだけ巨大な建物が1/500の模型や図面だけで、正確なイメージが伝わったかどうかは疑問であった。しかし、恐らく審査員の中でも建築家は容易に理解できたと思うし、私自身もこの案の最大の特長であるコンコースのアトリウム空間は、当時想像していたものと変わらないものができ上がったと思っている。応募案の中には120mの超高層や門型の大胆な案もあった。しかし、あまりにも外形がモニュメンタルに過ぎるものは日本的都市空間の中で適切な選択ではないと考え、私自身は外形についてこだわらない姿勢を持っていた。さらに、京都駅前広場は非常に貧弱であり、それを補うものとして、豊かな内部空間が望まれるところであった。日本人は日本的な風土気候の中で外部の広場の利用があまり上手いとは言えない。公共広場として、このような内部空間こそが望まれるところである。デパートを内蔵したことにより、必要となる避難階段をポジティブに転化し、地理学的なコンコースと呼ぶ空間の中に大階段をつくったり、空中経路をつくるなど、この建築の空間的な見所は多い。このように、自由で大胆な空間構成が成立したのは、マトリックスと呼ばれるインフラ的な構造フロアを考え出したことにある。建築は縦横のシステムの整合性に拘束されるので、このマトリックス・フロアは空間が硬直化することを解放させる手法であった。この空間は、このような優れたコンセプトの考案によって実現したと言える。

アーバン化された内部空間

日本人は元々アーバンなスケールにあまり慣れ親しんでいるとは言えない。どちらかと言えば、都市であってもヒューマンな感覚で理解しているところがある。我が国の都市空間は外形が整っているというよりも、インテリアの美しい内部空間が街路に面することがより意識されている。特に京都は、ヒューマンスケールの都市である。それだけにこのアーバンスケールの巨大な内部空間が京都市民に与える衝撃は大きい。内部空間のアーバン化という意味では、パリのオルセー美術館にも匹敵する壮大さである。この建築が京都の玄関口として都市空間に強烈なインパクトを与

えることは間違いない。今まで京都は、四条界隈のワンセンター型の都市であったが、この新京都駅の出現によって二極化することになる。そして将来、京都が多極化する前兆にもなる。この京都駅をめぐって、多くの京都論が展開された。それらは今後の京都のために多くの実りをもたらすことになるだろう。都市はそれ自身生きて動いている。議論だけで現実に進まないよりも、実効あるシミュレーションを動かす必要もある。この建築が建築界の中で20世紀の掉尾を飾る作品となるか、21世紀の曙光となるのかは、俄に判断がつかない。しかし、京都にとって確実に新しい方向のムーブメントとなることは間違いない。

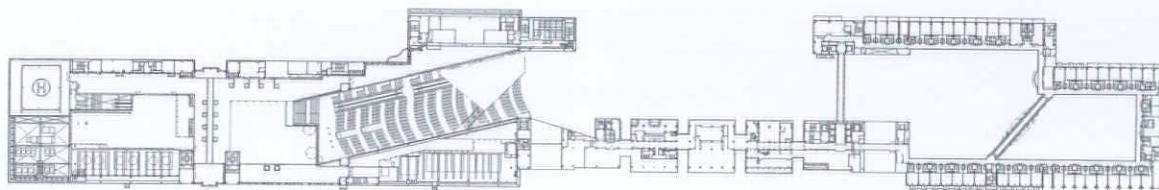
●かわさき・きよし／建築家、立命館大学教授

- 1: プラットホーム
- 2: 出札ロビー (みどりの窓口)
- 3: 出札事務室
- 4: 烏丸中央改札口
- 5: 百貨店売場
- 6: 専門店
- 7: インフォメーション・プラザ
- 8: ホテルティールounge
- 9: ホテルエントランスロビー
- 10: 文化施設エントランスロビー
- 11: レストラン
- 12: プール
- 13: ホワイエ

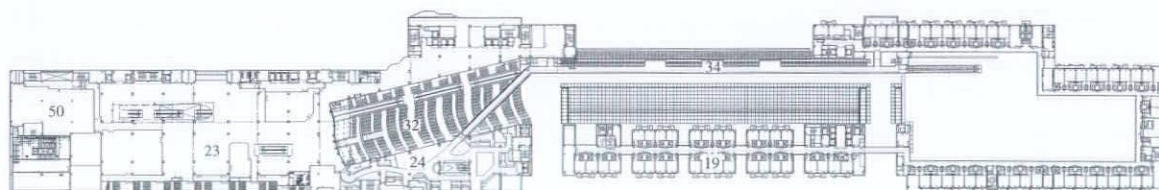
- 14: コンベンションホールA
- 15: 劇場舞台
- 16: 劇場客席
- 17: ホテル事務室
- 18: 劇場楽屋
- 19: ホテル客室
- 20: チャペル
- 21: ホテル会議室
- 22: 京都府旅券事務所
- 23: アミューズメント施設
- 24: フードコート
- 25: 中央コンコース
- 26: 南北自由通路

- 27: テラス
- 28: 南遊歩道
- 29: テラス (室町小路広場)
- 30: テラス (南広場)
- 31: テラス (烏丸小路広場)
- 32: 大階段
- 33: 東広場
- 34: 空中通路 (スカイウェイ)
- 35: 大空広場
- 36: ブリッジA
- 37: ブリッジB
- 38: 車路
- 39: トラックヤード

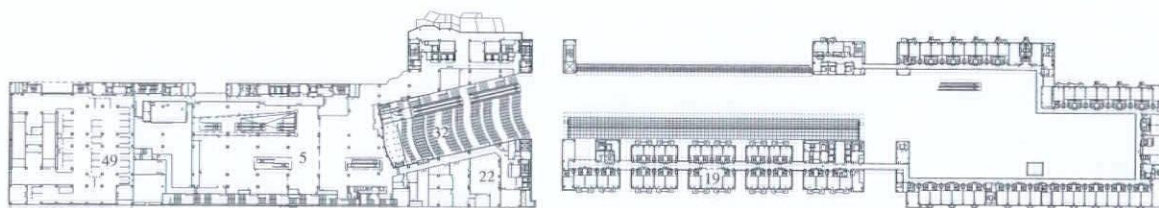
- 40: 百貨店電気室
- 41: 百貨店空調機械室
- 42: 百貨店サブステーション
- 43: 駐車場電気室
- 44: ホテル電気室
- 45: ホテル空調機械室
- 46: ホテルサブステーション
- 47: 文化サブステーション
- 48: 劇場舞台ピット
- 49: 駐車場
- 50: 特高受電室
- 51: 空調機械室
- 52: クーリングタワー置場



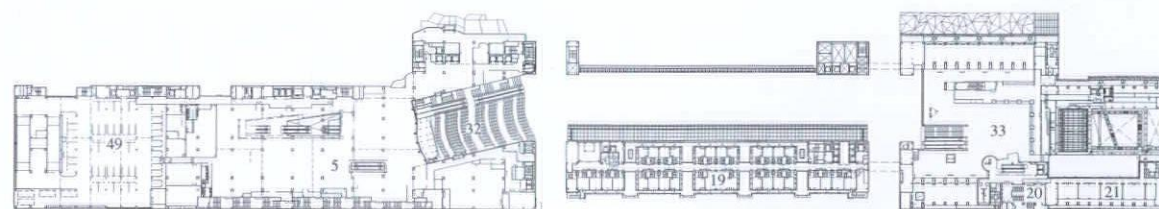
百貨店8階、ホテル16階平面図



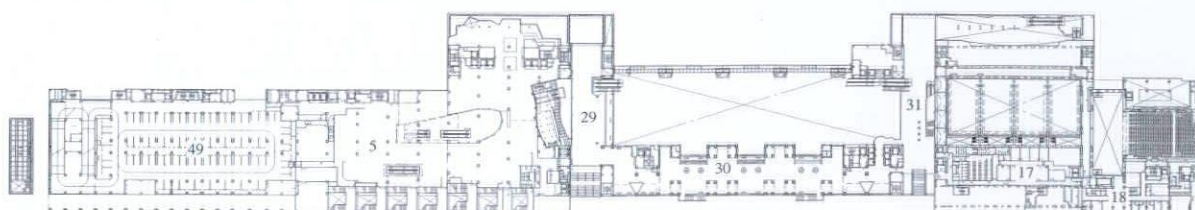
百貨店11階、ホテル13階平面図



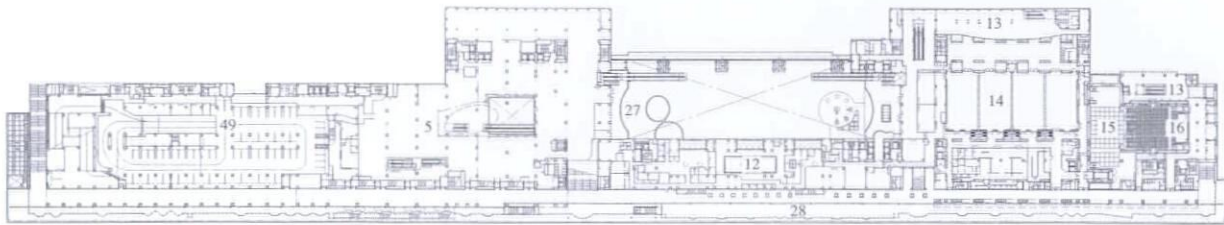
駐車場11階、百貨店9階、ホテル11階平面図



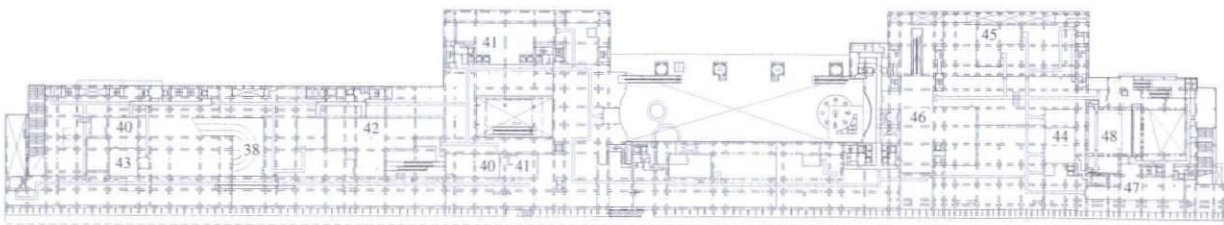
駐車場9階、百貨店8階、ホテル9階、文化施設9階平面図



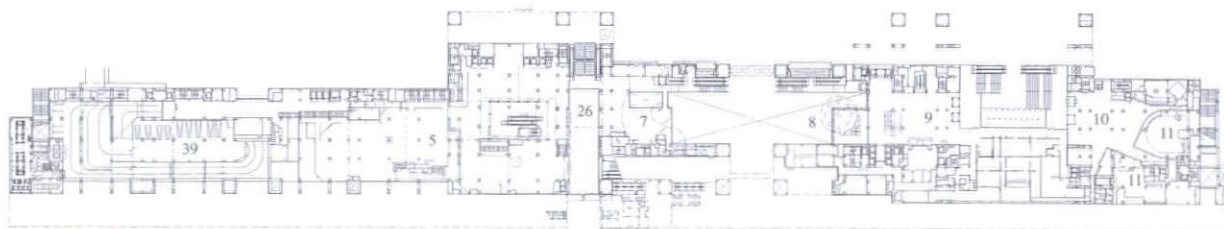
駐車場5階、百貨店5階、ホテル6階、文化施設6階平面図 S=1:3000



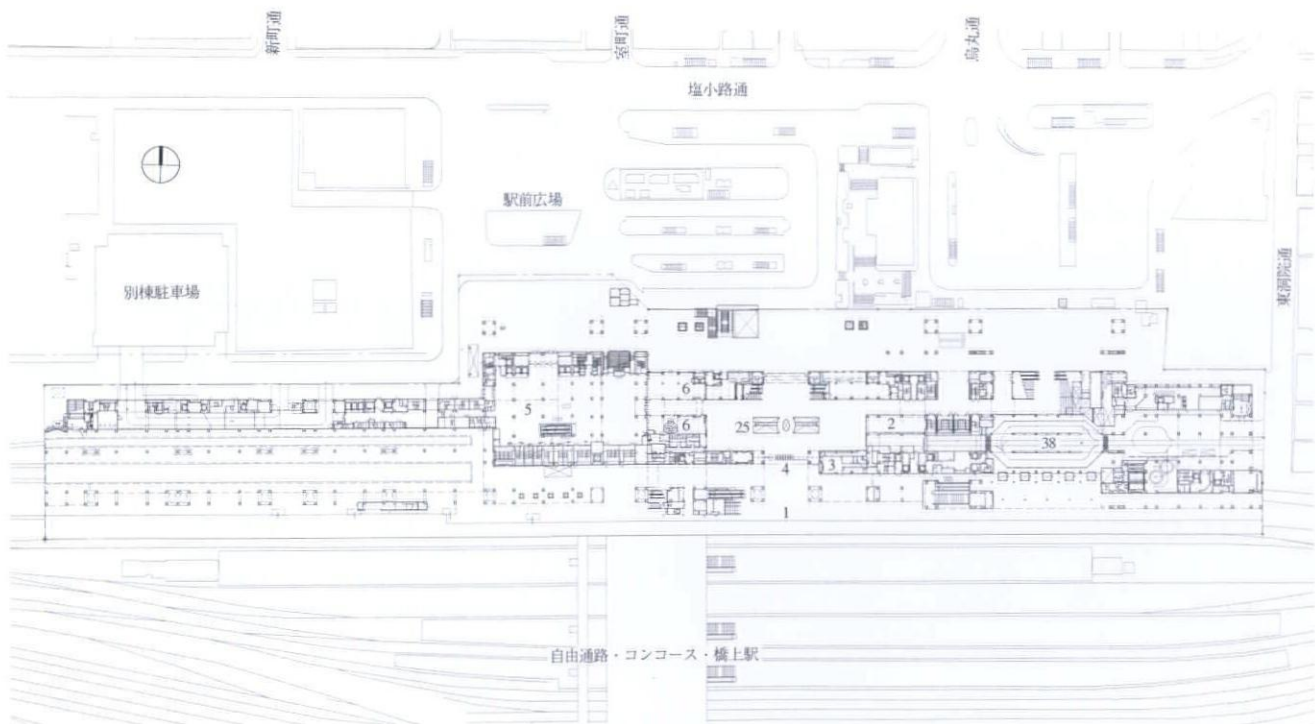
駐車場4階、百貨店4階、ホテル5階平面図



駐車場3階、百貨店3階、ホテル4階平面図

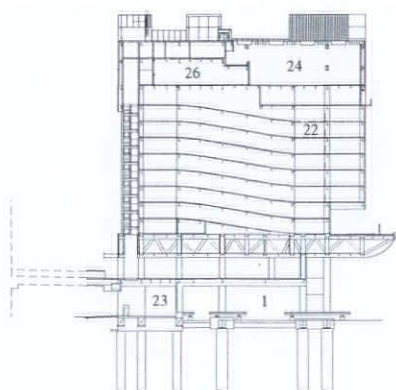
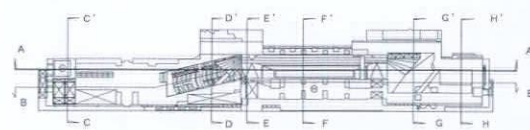


駐車場2階、百貨店2階、ホテル2階平面図

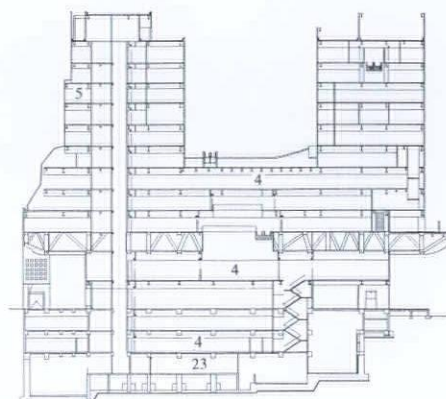


配置図兼1階平面図 S=1:3000

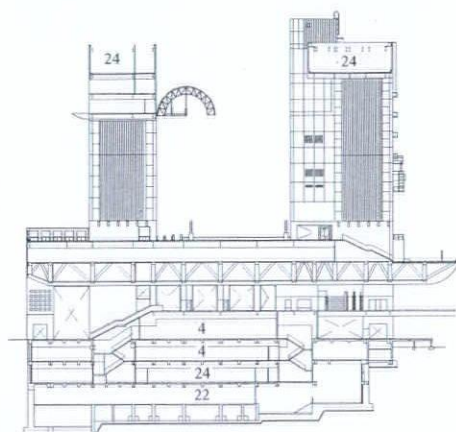
- | | |
|-------------------|------------------|
| 1: プラットフォーム | 14: ホテルエントランスロビー |
| 2: 駅ロビー | 15: ホテル客室 |
| 3: 駅仮眠室 | 16: ホテル廊下 |
| 4: 百貨店売場 | 17: コーヒーショップ |
| 5: 百貨店飲食店 | 18: 中央コンコース |
| 6: 専門店街 | 19: 南北自由通路 |
| 7: ホワイエ | 20: テラス (南広場) |
| 8: コンベンションホールA | 21: 南遊歩道 |
| 9: コンベンションホールB | 22: 駐車場 |
| 10: コンベンションホールC | 23: 車路 |
| 11: 劇場 | 24: 空調機械置場 |
| 12: 文化施設エントランスロビー | 25: ホテルサブステーション |
| 13: レストラン | 26: 特高受電室 |



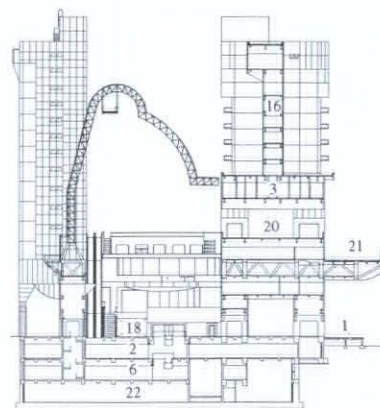
C-C'断面図



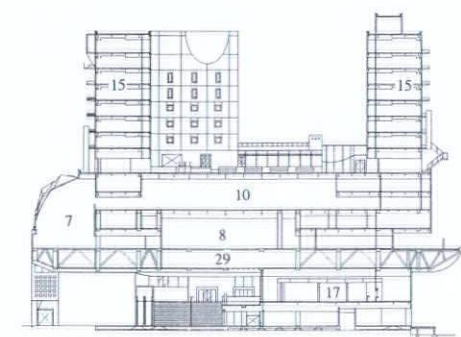
D-D'断面図



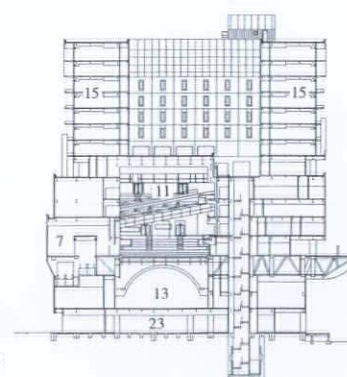
E-E'断面図



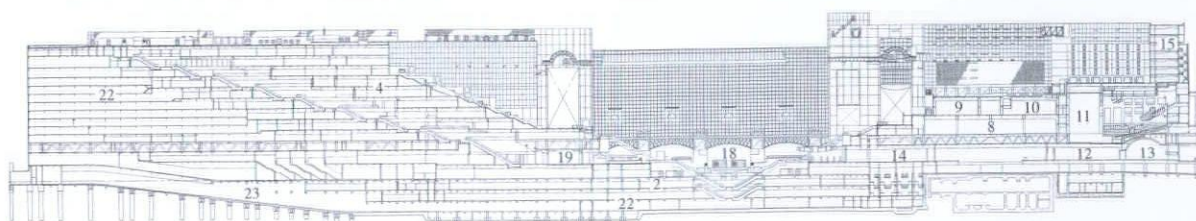
F-F'断面図



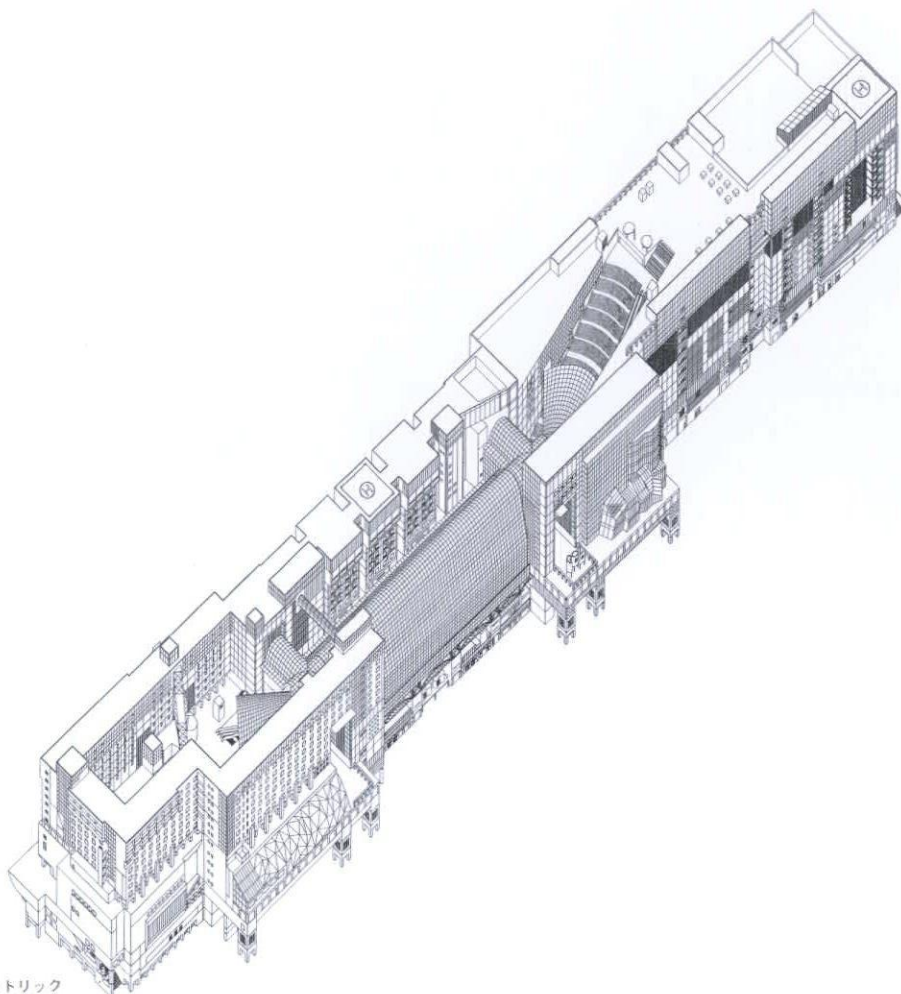
G-G'断面図 S=1:1500



H-H'断面図



A-A'断面図 S=1:3000



アクトノメトリック

設計および工事監理者：

建築：原広司+アトリエ・ファイ建築研究所

構造：木村俊彦構造設計事務所

設備：明野設備研究所、建築設備設計研究所

テナントエリア：

サイン計画：HILOデザイン研究所、ジオグラフィカルコンコース

照明計画：ライティングプランナーズアソシエーツ

ホテル内装：山下設計（ホテル2階ロビー、3階ホワイエ、教会

のみ原広司+アトリエ・ファイ建築研究所）

百貨店、専門店内装：交建設計（百貨店カスケードエスカレー

ター廻りのみ原広司+アトリエ・ファイ建築研究所）

所在地：京都府京都市下京区烏丸通堀小路下ル東堀小路町

主要用途：駅施設、ホテル施設、商業施設、文化施設、駐車場

敷地面積：38,076㎡

建築面積：32,351㎡

延床面積：237,689㎡

規模：地下3階、地上16階（ホテル部）、12階（百貨店部）、塔屋1

階

高さ：最高軒高58.585m、最高高さ59.55m、塔屋上部高さ64.

30m

施設規模：

文化施設：劇場925席

ホテル客室：539室

駐車場台数：646台（別棟駐車場を含めると合計1257台）

構造：

地下階：鉄骨鉄筋コンクリート造

地上階：鉄骨造

杭・基礎：アースドリル杭（一部拡張杭）および壁杭（OWS工

法）

外部仕上：

外壁：ガラスカーテンウォール、プレキャストコンクリートカー

テンウォール、アルミニウムパネル、アルミスパンドレル、

スチールスパンドレル、スチールパネル、ALCパネル、押出成

型セメント板、御影石、大理石、現場打ちコンクリート打放し

仕上/撥水材塗布など

屋根：アスファルト防水の上コンクリート直押エ仕上げ、熱線

反射+網入り合わせガラス

開口部：アルミサッシ（2次電着着色、アルマイト色、焼付塗装、

現場塗装仕上げ）、ステンレスサッシ（ヘアーライン、鏡面仕上

げ）、スチールサッシ（焼付塗装、現場塗装仕上げ）、サスペン

ションガラス

外部床：「百貨店屋上広場（大空広場）」アスファルト防水の上

コンクリート直押エ仕上げ、一部400×600磁器質タイル、御影

石（厚30mm）ウォータージェット仕上「ホテル9階広場（東広

場）」アスファルト防水、シリンドーコンクリートの上、御影石

（厚30mm）ウォータージェット仕上、300角コンクリート平

板ブロック、擬石（厚30mm）粗面仕上、瓦こぼ立て敷き、砂利

敷き「室町、烏丸デッキ（室町小路広場、烏丸小路広場）」アス

ファルト防水、シリンドーコンクリートの上御影石（厚30mm）

ウォータージェット仕上、擬石（厚30mm）粗面仕上「1階コン

コース（中央コンコース）」アスファルト防水、シリンドーコン

クリートの上御影石（厚30mm）ウォータージェット仕上、擬石

（厚30mm）粗面仕上、100角磁器質タイル貼り

内部仕上：

「地下1階、駅ロビー（地下コンコース）」

床：御影石（厚30mm）本磨およびウォータージェット仕上、大

理石（厚30mm）本磨仕上/壁：御影石、大理石（厚25mm）本

磨仕上、石膏ボード12.5mm2枚貼りの上塗装仕上/天井：石膏ボ

ード12.5mm下地岩綿吸音板（一部リブ付）9mm塗装仕上

「1階出札ロビー（きつぷうりば）」

床：御影石（厚30mm）本磨仕上、フリーアクセスフロアタイ

ルカーペット仕上/壁：御影石、大理石（厚25mm）本磨仕上、

石膏ボード12.5mm+9.5mm2枚貼りの上塗装仕上/天井：石膏ボ

ード12.5mm下地岩綿吸音板（一部リブ付）9mm塗装仕上、プレキャスト

コンクリート素地仕上げ天井

「2階自由通路（南北自由通路）」

床：御影石（厚30mm）ウォータージェット仕上、擬石（厚30mm）

粗面仕上/壁：御影石、大理石（厚25mm）本磨仕上、プラスター

ボード12.5mm2枚貼りの上塗装仕上/天井：石膏ボード12.

5mm下地岩綿吸音板（一部リブ付）9mm塗装仕上、石膏ボード

12.5mm+9.0mm2枚貼り塗装仕上、乳白アクリル板1500φ他の光天

井

「2階文化施設エントランスロビー（メインエントランス）」

床：御影石（厚30mm）本磨仕上、フェルト下地カーペット敷き、

ゴムタイル貼り/壁：御影石、大理石（厚25mm）本磨仕上、ス

チール5.0mm溶融亜鉛メッキ仕上、コンクリート打放し仕上、石

膏ボード12.5mm+9.5mm2枚貼り塗装仕上、石膏ボード12.5mm下

地岩綿吸音板（一部リブ付）9mm塗装仕上、アルミスパンドレル

貼り、有孔珪酸カルシウム板6mm塗装仕上、スチールパネル

（一部パンチング加工）貼り、鏡貼り/天井：石膏ボード12.5mm

下地岩綿吸音板（一部リブ付）9mm塗装仕上、石膏ボード12.

5mm+9.0mm2枚貼り塗装仕上、乳白アクリル板1500φ他の光天井

「劇場（グランドシアター）」

床：タイルカーペット/壁：御影石、大理石（厚25mm）本磨、

ジェットバーナー仕上、石膏ボード21mm+15mm2枚貼り塗装仕上

（一部フレキシブルボード塗装仕上）、石膏ボード12.5mm下地岩

綿吸音板（一部リブ付）9mm塗装仕上、グラスウールサランネ

ット押え、有孔珪酸カルシウム板6mm塗装仕上（グラスウール

裏込）/天井：石膏ボード21mm+15mm2枚貼り塗装仕上げ/化粧

天井：石膏ボード12.5mm+9.5mm2枚貼り吸音材吹付仕上、天井

裏グラスウール敷込

「主舞台」

床：米松フローリング/壁：石膏ボード21mm+15mm2枚貼下地

グラスウール・グラスクロス包50mm貼り、一部有孔珪酸カルシ

ウム板6mm塗装仕上/天井：石膏ボード21mm+15mm、グラス

ウール、グラスクロス包50mm貼り

「劇場ホワイエ」

床：フェルト下地カーペット敷き、一部御影石、大理石（厚30mm）

本磨/壁：御影石、大理石（厚25mm）本磨、水磨、ジェットバ

ーナー仕上、石膏ボード12.5mm+9.5mm2枚貼り塗装仕上、コン

クリート打放し仕上、石膏ボード12.5mm下地岩綿吸音板（一部リ

ブ付）9mm塗装仕上/天井：石膏ボード9.5mm2枚貼り塗装仕上、

一部石膏ボード9.5mm下地吸音材吹付仕上、石膏ボード12.5mm

下地岩綿吸音板（一部リブ付）9mm塗装仕上

「2階ホテルロビー（メインロビー）」

床：御影石（厚30mm）本磨仕上、フェルト下地カーペット敷き

/壁：御影石、大理石（厚25mm）本磨仕上、石膏ボード12.5mm

+9.0mm2枚貼り塗装仕上、石膏ボード12.5mm下地岩綿吸音板（一部

リブ付）9mm塗装仕上、人工木材格子吸音壁（グラスウール・

グラスクロス包裏込め）/天井：石膏ボード12.5mm下地岩綿吸

音板（一部リブ付）9mm塗装仕上、石膏ボード9.5mm2枚貼り塗

装仕上、乳白アクリル板1800φ他の光天井

「3階ホテル大宴会場ホワイエ（フラクタルドーム）」

床：大理石（厚30mm）本磨仕上、フェルト下地カーペット敷き

/壁：大理石（厚25mm）本磨仕上、石膏ボード12.5mm+9.5mm2

枚貼り塗装仕上、有孔珪酸カルシウム板6mm塗装仕上、石膏ボ

ード12.5mm下地岩綿吸音板（一部リブ付）9mm塗装仕上、人工木

材格子吸音壁（グラスウール・グラスクロス包裏込め）/天井：

石膏ボード9.5mm2枚貼り塗装仕上、石膏ボード12.5mm下地岩綿

吸音板（一部リブ付）9mm塗装仕上、熱線反射+網入り合わせガ

ラス（乳白シート貼り）

「7階ホテル教会」

床：御影石、大理石（厚30mm）本磨仕上、フェルト下地カーベ

ット敷き/壁：御影石、大理石（厚25mm）本磨仕上、コンク

リート打放し仕上、石膏ボード12.5mm+9.5mm2枚貼り塗装仕上/天

井：石膏ボード9.5mm2枚貼り塗装仕上、人工木材格子天井（グ

ラスウール・グラスクロス包）

「百貨店2階エントランスロビー」

床：大理石（厚30mm）本磨仕上/壁：大理石（厚25mm）本磨

仕上、石膏ボード12.5mm+9.0mm2枚貼り塗装仕上、石膏ボード12.

5mm下地岩綿吸音板（一部リブ付）9mm塗装仕上/天井：石膏

ボード12.5mm下地岩綿吸音板（一部リブ付）9mm塗装仕上、石

膏ボード12.5mm下地ウレタン塗装、一部バーライト吹付仕上

駅空間と公共性

京都駅ビルの設計コンセプトを中心に

横尾忠則×原 広司

原風景としての駅

SD 今回は駅の特集です。そこで京都駅ビルの設計者である原先生と、その京都駅のコンコースに設けられたアート広告の製作者のひとりである横尾先生のおふたりに、「駅」空間にまつわる想いを語って頂ければと思います。まずは、「駅」という場所からイメージされることはどんなことでしょうか。

原 僕は川崎で生まれたんです。京浜急行の川崎駅のそばに住んでいて、当時、コミヤという5階建てのデパートがありまして、そこに川崎市ではただ1台のエレベーターがついてたんです。僕の父親は、表通りからちよつと外れた奥の道で洋服の仕立屋をやっていたんですが、駅と5階建てのデパートの間に家があって、駅が遊び場となっていたし、デパートのエレベーターでも鬼ごっことかくればととか、みんなで遊んでたんですね。ですから、僕には駅とデパートとが比較的素直に結びついてるんですよ。そして、そこから電車に乗ると自由にどこにでも行けるという感じを持っていて、どちらかというと出発点という感じがしてたんです。まもなく田舎へ行ってみると、今度は無人の駅がいっぱいあるんですね。よく西部劇で出てくるじゃないですか、プラットホームだけであるような。どちらかというと、駅というのはああいうもんじゃないかなと。

ですから、今度の京都駅というのは、僕が川崎で知っている都会の中の駅という感じがしないでもないけれど、遊び場みたいな、そんな感じが出ているのかもしれないと思うんです。

横尾 今、原さんのお話をお聞きしていて、うらやましいなと思ったのは、それが僕が子供の頃にあこがれていた風景なんですよ。戦前の乗り物の絵本そっくりの。今の原さんのお話で、エレベーターのあるデパートがあって、そうした駅前境界で遊んでいらしたという、まさにその風景が絵本の絵柄になっていたわけですよ。

そんな光景にすごいあこがれがあって、遠くへ行きたいということと結びついて、駅は何か夢を実現してくれる、最初に出会う現実の場所でもあるし、またそれ自体が夢でもあるなという感じが駅なんですよ。

僕の生まれたところは兵庫県の山間部の、現在は人口3万ぐらいの小さな市ですけど、そこに西脇という駅と新西脇駅というふたつの駅があったんです。現在は西脇という駅がなくなってしまって、玄関のない町で駅がなくなったということで、町自体が完全に空洞化して、なんとも寂しい雰囲気が漂っているんです。

駅は、人が町に出入りする場所でもあるんだけど、僕はそこを通して大阪の親戚の家に連れていってもらえなくて、めったに連れて行ってもらえないので、ある意味で聖地みたいな感じがしていたんですよ。

もうひとつ、駅というと、僕の中ではフィクションなんです。さっきの絵本もフィクションなんですよ。映画の中で描かれる駅ってあるじゃないですか。男と女が出会ったり、別れていくというシーンにはもうびつたりの舞台装置だと思うんですよ。ドラマチックに男と女が別れていく、あるいは再開する場所でもあるんだけど、そういうフィクションとして映画に出てくる駅、そんな場面が僕の記憶の中に沢山あるんですよ。蒸気をパッと立てて、その蒸気の中からボーッと見え隠れするシーンですね。ラストシーンで、そこに「End」なり「Fin」なりという文字が出ますよね。そういうフィクションとしてのファンタジーですよ、僕の中にある駅はね。だから僕にとって駅は、あんまり現実っぽい感じではないんですよ。

原 今は何かが起こるとすれば、空港というレベルだと思うけれど、我々の世代のせいかもしれないけれど、駅は何かありますよね、フィクショナル리티というか。

横尾 物語の装置は時代によって変化しますね。

原 僕は疎開してくる時に、新宿駅から両親の故郷である長野県へ最後へ逃げてくるわけ。汽車のガラスは全部割れてないんですよ。みんなタンスとか何かを車輦にのせて逃げていくわけ。それで、新宿のホームから汽車に乗る時に窓からしか入れない。僕は小学校2年生の終わりの時なんだけど、兄弟たちも抱き抱えられて、窓から、人から人の手渡しで汽車に乗った。

駅って、そういうフィクショナル리티とい

うか、今考えても、子供の時だから複雑な思いも知れてると思うけれど、ある種の感慨というか、生死をかけて汽車に乗っていく。そうすると、途中で空襲になって汽車が止まったりして、なかなか進まないんだけど、映画でもそういうシーンっていっぱいありますよね。新宿駅は、その頃からすごい場所というか、逃げていく場所というか、そういうところだったという記憶がありますね。

横尾 僕は都会で育ってないから、多分、原さんが経験されたことの方がもっと厳しい状況だったと思うんですよ。僕なんか、せいぜいうちの町から奥の方にある町に、お祭りがあってその神社に行くんだけど、そのお祭りはどういうわけかものすごいたくさんの方が集まるんですよ。それで、普通の電車には乗れなくて、貨物列車とか屋根のない貨車に乗せられたことがあります。

僕はインドに行った時、インドの汽車に乗ってる連中を見て、ああ、これだと。もうとにかくありとあらゆるところに人がぶら下がってるんですよ（笑）。それに近い形で我々は乗った。その風景は見方によれば悲惨な風景なんだけど、実際は全然悲惨じゃなくて、それ自体がおもしろくて楽しくて、スリルを味わってるわけですね。みんなが乗るのを待ってて、無理に一番最後に自分がボンと乗って、妙なところにぶら下がってみたい、そういうスリルを味わうんだけど、もうまるで人格なんかあるのかないのかわからない、何か物になったみたいな。それで、その同じ貨車に牛とか豚と一緒に乗っかっていて、その同じところに人間がひしめき合ってるわけですよ。臭いとか、嫌だなとか思いながらね（笑）。

原 駅は、プラットホームにせいぜい屋根がかかっているとしても、吹きさらしで、壁はなくて、基本的に東屋なんですよ。その東屋が何といっても基本であるような気がするの。その東屋が、建築形式の中でもなかなか僕はいいんじゃないかと。基本的には屋根だけのものであるというのが原則だと思うんです。寒いところで小さく囲ってあるという部分はあるけれど、世界のどこでも、そういう吹きさらしの屋根がかかっている、その屋根は大体どこへ行ってもいいものなんですよ。

ね。軽くてね。それと基本的には駅にずっと住んでる人っていないわけですね。

横尾 生活空間じゃないからね。その一部かもしれないけれど。

原 そう。基本的にはひと時のトランジットなんだな。

横尾 そこにとどまるんだったら、外部から守られる壁があったり、テーブルとかベッドとか、いろいろの生活用品が必要だけれど、一切そういうものはないですね。

原 そう。基本的に仮設的でしょう。だから、自ずからもともと映画や舞台のセットみたいな性質を持っているんですね。そうした舞台性みたいなものは、建築の形式として持っていると思うのね。そうした場に人が佇んでいるといった感じ。ヨーロッパなどで、対面のプラットホームから向こうのプラットホームを見る時に、見知らぬ人が立ってる。まばらだったり、集まったりして立っている。その風景はなかなかいいし、今でも日本でも、ときにもものすごい人込みであるけれども、そのホームの反対側から見て人の姿って、僕はなかなかいいと思うのね。人間の見え方としては、かなりいいんじゃないでしょうか。みんな意識して立ってるんじゃないと思うけれど、どこの駅でも、ホームに立ってる姿って、今でも僕は珍しくさまになっているという気がするんです。

横尾 そうですね。何かそこからドラマが発生する、そういう瞬間でもありますよね。一人ひとりがそれぞれの人生のドラマを持っているわけで、そのお互いの関連性があるようで、実はほとんどないでしょう。ないところで、今から何かわけのわからないミステリアスなドラマが始まるんじゃないかなと、そういう予兆のドラマを感じちゃいますよね。

原 きっと人の意識に、今話しているような意識があるんじゃないかと思うのね。

横尾 これは映画なんかでよく見るんだけれど、汽車から降りて、駅の外へ出て、そこで鞆を持ったままボーッと立ってる男の(笑)、そういう風景があるじゃないですか。前から目的をちゃんと持ってその駅にやってきて、行き先も全部わかっているはずなのに、駅の外へ出て、駅の前の広場でボーッとしばらく立って、たばこを吸ってみたりね。そういう

シーンが多いじゃないですか。期待と不安のシーンだね。

原 自分もそうするよね(笑)。駅から出ると、ボヤッと立ったりね(笑)。

横尾 ああいう風景は最近見られないんじゃないかしら。よっぽど田舎へ行ったら、駅を降りてボーッと立ってる人間で、いなくなりましたよね。僕はあれは何かいいなと思って。人生の哀愁を感じますよね(笑)。だから、駅というのは、どうも僕はそういう物語的なものと結びついていくんですね。そういう人たちも自分の物語の主人公になるわけで、その一番なりやすい場所というか、装置が駅かなという感じもするんですね。でも、それは我々の年代の人間だけがそう思うだけで、現代の若い人達に駅のイメージを聞いても、全然違うかもわからないですね。

原 違うかもしれませんね。

駅の持つ都市性

原 この10年ほどは、建築の表情が刻々と変化すること、様相に関心をもって建物をつくってきましたが、京都駅の場合も様相論的建築を当初から意図してきました。コンコースや北の立面の状態にそれが現れています。駅の時間性はもともと建物を様相論的にするのでしょうね。先程から遊び場にこだわっていますが、その理由は定刻といった必然様相に、漠然とした可能様相を挿入しようとしているのでしょうね。

都市における建築では日付が重要だと思うんです。この京都駅は1990年代に建った建物なのだとわかるような。そして、いろいろな技術的にもその時代の流行りがあって、その時代にこういう駅ができましたと。その時に日付を何月何日とちゃんと横尾さんが書いてくれるとか、リキテンシュタインが書いてくれる、そうした手続きが実現したというのは大変ありがたいと思っているんです。

横尾 日にちが重要だとおっしゃったのがすごくおもしろいと思うのは、1日を細分化していくと時間になっていくじゃないですか。駅というのは、みんな時間に引き寄せられて人が集まってきて、時間の集積場所というか、常に人間の意識が流れているように、駅の中には時間がずっと流れていて、もう時間、

時間、時間でしょう。駅ほど時間を認識する場所というのは他にないですね。もう本当に時間を商品化しているような場所で(笑)。あそこに行くと、我々がいかに時間によって生活しているとか、意識さえも時間の流れの中で変化しているということを最も感じやすい場所ですね。考えてみたら変な場所ですね。

それと、原さんの建築というのは割にみんな大空間が多いですね。公共的な大空間は無差別に人が集まって来ますよね。そういう場所だから、ある意味では無差別に全部受け入れなければいけない場所ですね。拒絶する場所ではないことは確かですね。だから、ある特定の人種だけとか、あるいは特定の思想の人の集まる場所より、コンセプトがはっきり建てられやすいじゃないですか。非常にアナーキーな空間ですね。そこがおもしろいと思いますね。

原 京都駅は高さ60mの建物なんだけれど、屋上の60mに近いところから地表のレベルまでの中間に、あるいは地下もありますが、いろいろなレベルで公共的な空間を用意して、全体としては谷を造ろうと思ったんです。そして、横尾さんの作品はその谷底にあるんです(笑)。谷底の絵なんですね。そして、その向かい合った斜面というか、段々の丘陵というか、そうした谷間にどういふふうの人が離合集散するのか、僕は非常に楽しみなんです。

今おっしゃったように、時間が余った人はちょっと見ようかなと思っていろいろ歩き回るに違いない。その時に人はどういふふうに分布するかは予想がつかない。そして、1日20万人なりの人が通過する状態なので、ものすごくあせって走り抜ける人もいれば、ぼんやりしている人もいるでしょう。そういう人たちが一体どういふふうにならなる場所に行ってくれるのかなと想像するのは、非常に楽しみです。

横尾 東京駅なんかすごく複雑だけれど、実際の構造というのは全然見えていませんよね。

原 そう、それがあまりよくないんじゃないかと思って。経済的理由なんでしょうけれど、ホテルとかデパートは面積をとるけれど、京

画家。1936年兵庫県西脇市生まれ。'69年第6回バリエーション青年ビエンナーレ展版画大賞、他受賞多数。'72年ニューヨーク近代美術館で個展を開くなど国際的に高い評価を受ける。'81年グラフィックデザイナーより画家に転向。以後パリ、サンパウロ、バンクーバー、ベネチアの各ビエンナーレに招待出品。'95年毎日芸術賞。'96年ニューヨークADC2部門銀賞。ニューヨーク近代美術館、東京国立近代美術館他、内外80の美術館に作品が収蔵されている。著書に『横尾忠則自伝』『インドへ』『わが座禅修行記』『導かれて、旅』（以上、文芸春秋）『横尾忠則日記人生』（マドラ出版）『名画感応術』（光文社）他多数。作品集に『横尾忠則全図画』『電脳カーニバル』（平凡社）他多数。



都駅の場合でも、駅施設としてはたかだか20%ぐらいしかないんです。建物全体のほんの一部分にすぎません。それを普通に造ると、東京駅のコンコースみたいなものになってしまう。そこで谷にして、そこを人々が通過していくも全体を見渡せるように造ったんです。

さっき、横尾さんのお話にも出てきていたんですけど、駅は、どういう人が来るかわからない、すべての人を受け入れる、そういうスペースであるわけです。ですから、都市の中の玄関口のような部分を造るのだけれど、最初に僕が話した川崎のデパートの、エレベーターがついていたりする、そこらが原風景となった遊び場なんです。みんなが集まって来て、広い意味での遊び場を造ればいいんじゃないかなといった想いがあるわけです。あるいは公園といってもよいのかも知れません。

そして、あるひとつの動き方が規定されるのではなくて、いろいろな道があって、いろいろな道筋で、建物の各部分をめぐって歩ける。それは都市なんですね。都市そのものが京都駅の中に入ってきているというのか、その中に入れ込むというのか、そういう感じになるというかなと思ったんです。

SD 小規模な駅でも、図書室やギャラリーを造ろうとか、集会やイベントができるプラザを造るとか、単に通過するというだけではない駅が徐々にできてきましたが。

横尾 そういう駅もありますよね。うちの郷里から京都へ行く途中だったかな、駅本体の空間はけっこう狭いんですよ。そこに喫茶店があったりレストランがあったり、ギャラリーみたいなものもあったりして、それはたまたまそうなっちゃったんじゃないかと、最初から計画的に造っている駅がありましたね。

駅というの、かなり空想力をかき立てる場所なんだけれど、今日のように次から次へ人間が運ばれていくような、そういう場所になっているから、空想もへったくれもなくなってしまうので、原さんのこういう建物自体がすごく空想的な建物にならざるを得ない、そういうことでこの建物ができ上がったというのもあるんじゃないですかね。駅自体がひとつの空想を生む装置みたいなね。昔はそう

いう意味では、別にそんなことを意図して造らなくてもそこに人が集まって、そこで空想が生まれていたんだけど。

原 京都は特にいろいろな国の人が来るでしょう。それもまた重要なファクターだという気がするのね。いろいろな国の人たちが来て、極めて短時間にせよ、そこを通過していく。そのことはかなりおもしろいというか、都市の縮図みたいな意味があるんですよ。

谷を造ったりして、駅の空間をなぜ大きく造ろうとしているのか、それを思う時に、いろいろな人がそこへ来る、その人の群衆——僕らがよく見えていないすごい大勢の人間達というのか、そういうのが意識にあると思うんです。

こうした新しい現象が、都市の中に非常に大きな空間が出てくる必然性を裏打ちしていると考えられます。

アートと公共性

原 ポスターだったりすると、自分の作品をここに置いてくれという指定はもちろんできませんよね。どこに貼られるかわからないわけでしょう。だからある意味では、パブリックというのか、場所を自分では指定できないというのか、基本的にどこにどう現れるか予測できないわけでしょう。

横尾 例えば、駅の掲示板とか電車の中の中吊りとか、ポスターは駅が対象ですね。ここで駅と結びついちゃうんだけど。フランスだったら広告塔がありますよね。あるいは建物の壁にダークと貼っている。ポスターが掲示される場所が決まっているんですよね。だから、むしろ絵の方がどんな家に置かれるかというのは、その人の意志によって絵の運命が決定していくかなという気はしますね。

原 横尾さんの中に、他の画家でタブローをずっと描いてきた人と意識の差というのがありますか。純粋に、ハイカルチュアとしての絵画をめざしてやってきた人と比べてどうなんでしょうか。

横尾 もともと僕はデザイナーというより画家志望でしたから、生活の必然性みたいなところからある長い期間、グラフィック・デザインをやっていたんですけど、80年代以降、絵画を中心にやり始めたんですよ。そういう

意味では、それがファイン・アートという、一応現代美術という制度の中にカテゴライズされる作品を一方で描いているわけですよ。だから、その作品に関して言うと、僕は、現代美術という制度に飛び込むことによって、やはり制度を受け入れなければいけない。ところが、僕自身が持っている因子というか、僕自身が本来持っている本性みたいなもの、それと現代美術が目指しているものとは合わないということが、ここ数年前から少しずつはつきりしてきたというか、ずれがはつきりしてきたんですよ。自分がずれているということは、自分に問題がもちろんあるわけなんだけれど、何とかそこに入ろうとしても入り切れないものがある。それは何かというと、結局、今の現代美術というのはあくまでもコンセプトを優先してるんですよ。最優先にある現代美術というのは大体コンセプトがまずあって、それに従って制作されていくわけですよ。ところが、僕は実はコンセプトというのを自分の中でのすごく拒絶している何かがあるということを感じたんです。僕は割に直観的に頭にひらめくものから描いていく。そのひらめいたものは理不尽にやってくるものだから、何を意図しているか僕の中でそれを理論化できない、あるいは言語化できない部分があるわけです。しかし、それは衝動として僕の中から突き上げてくる強烈な印象だから、まずそれを描くわけです。そうしたら、それを描いている間に次は何を描くべきかというのがまた浮かんでくる。だんだんそれが増えてきて、最終的に飽和点に達してそれをやめるわけです。そして、でき上がったから、「ああ、そうか、僕が描きたかったのは実はこの絵なんだな」ということがわかるんです。最初にコンセプトがあるのじゃなくて、でき上がった後にコンセプトが立ち上がってくる。それはコンセプトという概念で呼ぶものじゃない、もっと生理的な欲求なんですよ。

他のアーティストは、最初にコンセプトを自分の経験とその人の思想とか哲学からできるだけ理論化して造っていくわけですよ。それと僕とはまず全然方向が違う。そうすると、現代美術の今のあり方に対して、僕は「ノー」とは言わないまでも、何もすり合わせる必要



原 広司 (はら・ひろし)

建築家、東京大学名誉教授。1936年神奈川県川崎市生まれ。'59年東京大学工学部建築学科卒業。'64年東京大学数物系大学院建築学専攻博士課程修了。同年東洋大学工学部建築学科助教授。'69年東京大学生産技術研究所助教授。'82年東京大学生産技術研究所教授。'86年日本建築学会賞(田崎美術館)、『88年第1回村野藤吾賞(ヤマトインターナショナル)』、サントリー学芸賞(著書『空間(機能から様相へ)』)、『89年中部建築賞(飯田市美術館)』、『93年日経BP技術賞大賞(梅田スカイビル)』、『97年東京大学を退官、同年東京大学名誉教授。'70年〜設計活動はアトリエ・ファイ建築研究所と共同。著書に『住居集合論1〜5』(鹿島出版会)『空間(機能から様相へ)』(岩波書店)他多数。

は全くないなという感じですね。だから、僕は僕個人としての現代美術を生んでいけばいいんじゃないかという、そういう立場に立ちましたね。そこが違いですね。

原 今の話をお伺いしていると、自然の一部としての横尾さんという存在の中にすべてがあるという——東洋的な感じで言うと、おまえ自身がアートマンでありブラフマンであるといった響きを感じるんですけど、そういうことなのかしらね。

横尾 ヨーロッパの近代主義の、「私という主体が絵を描くんだ」という、そういう教育を我々は受けたし、そういう気持ちで僕は美術界に飛び込んだんですよ。ところが、どうもそうじゃない。もちろんそういう部分もある。しかし、さっき言ったように、全く理不尽に内発する印象が非常に強いんですね。それに従って描こうとしたときは、これは僕の主体なのか、客体なのか、ということを考えちゃうわけですよ。どうもこれは主体という自信がないんですよ。それは外部からのインスピレーション、あるいは僕の内部の無意識か、あるいは魂の部分からの情報が伝達されて、「描きたい!」という思いですね。それを思想にすりかえることさえできない、自立した強さを持っている印象ですよ。

しかし一般的には、自己表現の中にはかなり利己表現もあるんじゃないかと思うんです。私利私欲とか。「これで成功してやろう」とか、「これで世の中変えてやろう」とか、「びっくりさせてやろう」とか、そういうエゴイズムがありますよね。ところが、ふっと湧いてくるものにはそれがないような気がするんです。だから極端に言うと、僕はそれをキャッチして、それを再現、具体化する装置でいいんじゃないかと思うわけです。自分自身が道具になった方がある意味で楽なんです。

この前日枝神社で、ものすごく洗練された神楽を見たんですよ。それを見たら、確かにうまいなと思ったけれど、全然感動しないんですよ。非常に知的認識ができるようなものだったんですよ。それは現代性ということで見ると、確かに評価に値するものかも知れない。しかし、それには感動というものが全く欠落しているんですよ。

ところが、宮崎の高千穂で見た夜神楽は、踊っている人達は、自転車屋のおじさんとか、お豆腐屋のおじさんとか、そういう人たちがはっきりがやっていると。それにすごい感動したんです。下手ですけどね。それで、なぜ感動したかという、我々見ている客に全然こびてないんですよ。その人達は五穀豊穡のために来年の採り入れを祈願したり、今年の採り入れに対して感謝するとか、そういう神に対する奉納のために踊ってる。それを感じた時に、そうか、僕たちは割と客席の方に向いて絵を描いたりいろいろやっていると。大衆というのを設定して。それはちょっとおかしいぞと思ったんです。その夜神楽と同じように、一回、神という媒介者を通して、そこからもう一度大衆の中に降りていく、これの方が最も理想的というか、東洋的なんじゃないかなと思うんです。

原 それは横尾さんのデビューの頃から変わってないね。その作り方というか、表現の仕方というのは。

横尾 でも、時々、現代美術では僕のこういう発想はだめなのかなと思って。やっぱりちゃんと体系的な思想を持って、それでやらなといかんのかなと思ってたけれど、やっぱりそれはだめでした(笑)。

若い人たちを見ている、国際舞台に進出することとか、そのためにはどういう戦略を立てればいいのかみたいなことをコミッショナーと一緒に考えたりしているわけですよ。何をしてるのかなと思うね。短い人間の一生の中でその人にとって、それがどれほど重要なものかと考えると、僕は何も重要じゃないと思う。もっと自分自身の魂に貢献することの方が大事で、美術界に貢献する必要なか何もないんじゃないかなと思っちゃうんですよ。

でも僕がそれを批判したってそれが改善されるはずないわけだし、僕自身が自分の現代美術を生めばいいんじゃないかと思うんです。

原 公共性というか、横尾さん自身が何かひとつの反射盤みたいなものでしょう。横尾さん自身に何か映ってるんですよ。一種の反射盤としての表現者というか。自分の中にすべてが内在しているというわけではなしに、あるひとつの、それはきっと大事なものを

なんだろうけれど、その大事なものを反射しているという感じに受け取られるんですよ。それ自体に公共性があると思われます。

宇宙や自然の秩序であるとか原理であるかと思われるけれど、何か重要なものが横尾さんを介して反射されているんですね。その反射されているものが表現であると思うんです。そうすると、それは反射盤である限り公共性が成立しているということなんじゃないかしらね。表現者が媒介者となることによって公共性をリアライズしてゆく。これは重要なひとつの考え方だと思うんです。

(1997年6月25日 於アトリエ・ファイ建築研究所)

写真クレジット

美川町提供 p.8、p.10下

川崎清十環境・建築事務所 p.10左上、p.10左下、p.11左下

大鉄工業 p.10右上、p.10右下、p.11上

伊藤邦明 p.12、p.14

植村正春 p.15、p.20、p.54～56

古館克明 p.22、p.23

堀内広治 p.25、p.26上、下左、下中

平井広行 p.28、p.29、p.30上、p.31

JR東日本提供 p.32～p.33

岡本公二 p.34、p.36

畑亮 p.37上、p.38

川田茂 p.40

四宮佑次 p.41上

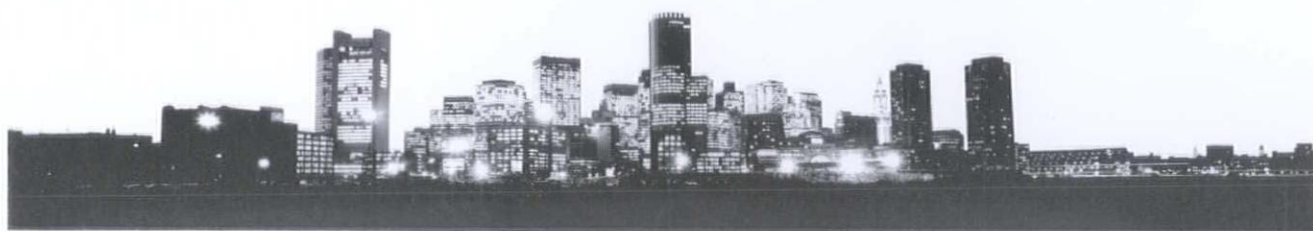
藤原武史 p.41下3点

伊澤岬 p.43～p.48

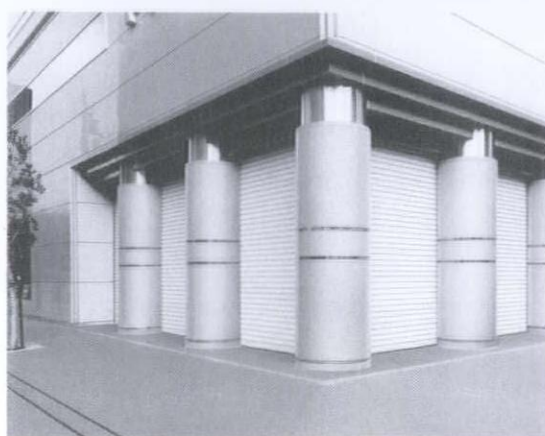
上野の杜芸術フォーラム p.49～p.52

杉崎行恭 p.53

大野繁 p.57～74



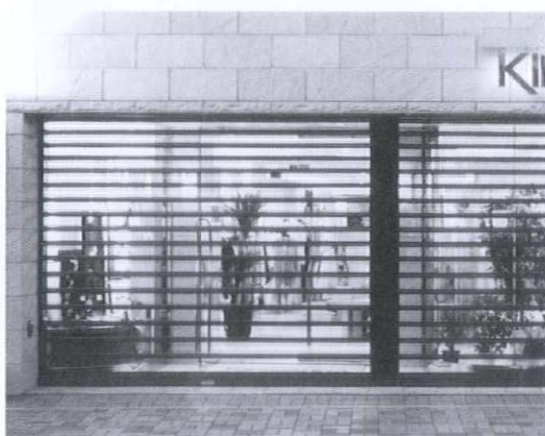
この街の、人と夢を守るために。



ビル用重量シャッター



住宅用窓シャッター



店舗用透明シャッター

ビル建材、店装建材、住宅建材：e t c。私たち三和シャッターは多彩な商品の提供と、サービス&ケアで、みなさまの暮らしに貢献してきました。ビルや工場の開口部を守るさまざまなシャッター。店頭を彩り、ファサードをつくるさまざまなドア。その街に住む人そして夢をまもるために、24時間ががんばりつづけています。これからは三和シャッターは、総合建材のトップブランド企業としてみなさまの暮らしに役立つ活動ができるよう努力していきたいと思ひます。

三和シャッター工業株式会社

本社 〒163-04 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビル52階 Tel.03(3346)3011(代表)

SD

SD Review 1997

The 16th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings

〔入選者〕

浅野 静/エトスアソシエイツ+新井 清一/
アライアーキテクト

今村雅樹+佐久間菜穂子/今村雅樹アーキテクト

大野 勝+境 静也+鉾岩 崇/佐藤総合計画

金井謙介+西田勇人

金子泰洋

川人洋志

建築研究室高安重+事務所+佐久間達也+

橋爪宏直+重富博之

佐藤孝秋/フォレストシップ

タカマスヨシコ

西沢立衛

東日本旅客鉄道株式会社+JRE設計+

鈴木エドワード建築設計事務所

藤本壮介

松澤 穰

松本 明

三浦明彦+安田幸一+神成 健+北川啓一/日建設計

SD

〔審査員〕

香山壽夫 (建築家、東京大学教授)

渡辺邦夫 (構造家)

岸 和郎 (建築家、京都工芸繊維大学助教授)

團 紀彦 (建築家)

R e v i e w

〔主催〕 鹿島出版会SD編集部

〔後援〕 朝倉不動産株式会社

〔協賛〕 ノールインターナショナルジャパン

〔大阪展共催〕 大阪芸術大学

〔東京展〕

会期:1997年9月10日(水)~9月21日(日)

12:00~19:00

会場:東京都渋谷区猿楽町18-8

ヒルサイドテラスF棟 ヒルサイドフォーラム

e w

SDレビュー1997

第16回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

[大阪展]

会期:1997年9月26日<金>—10月2日<木>

10:00—16:00

会場:大阪府南河内郡河内町東山

大阪芸術大学芸術情報センター展示ホール

[問い合わせ先]

鹿島出版会SD編集部

107 東京都港区赤坂6-5-13

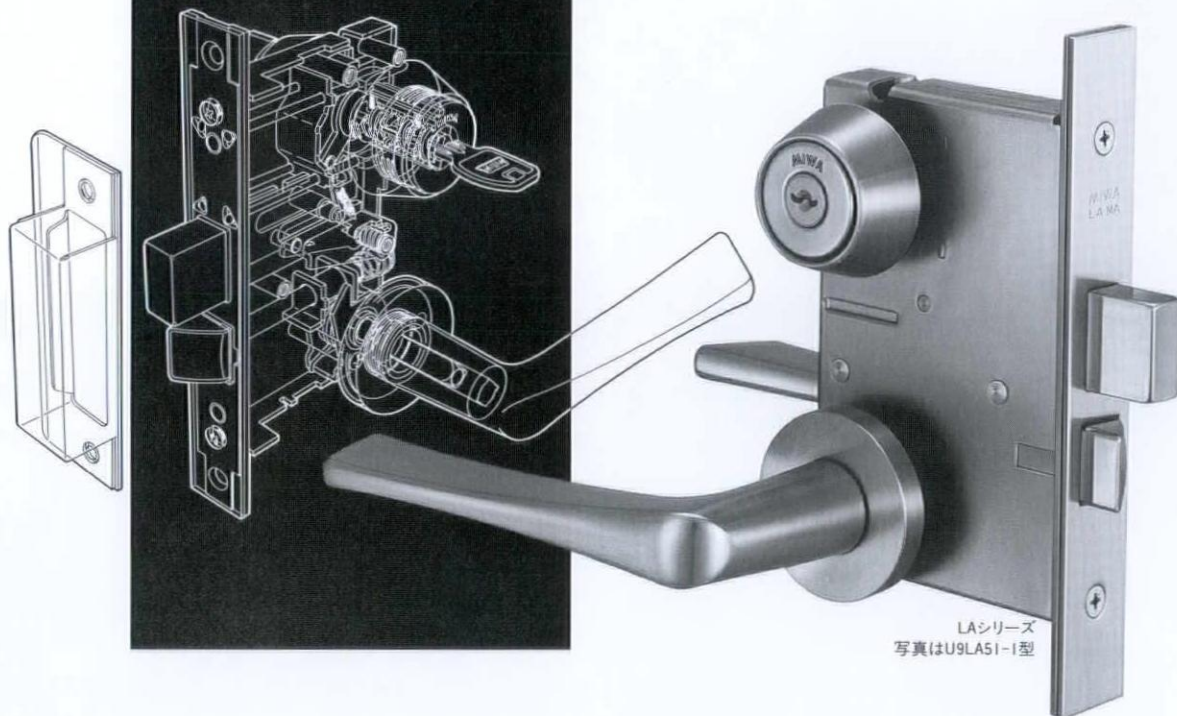
tel:03-5561-2555 fax:03-5561-2565

大阪展:大阪芸術大学建築学科合同研究室

585 大阪府南河内郡河内町東山

tel:0721-93-3781





高品質な錠前を社会に提供するために。

昭和32年。MIWAは社会の安全には真に信頼できる錠前が不可欠と考え、独自のアイデアで「HM型本締り付きモノロック」を開発。その品質の高さは、同じ基本設計のまま今日でも生産が続けられているほどです。

しかし現在は、より防犯性の高いケースロックタイプが主流。MIWAの製品群の中でも広く信頼を得て、最も生産台数が多い中心的な製品がLAシリーズです。誕生以来およそ10年の間に約1,200万セットの採用実績をもつこのレバーハンドルタイプのケースロックに、MIWAの技術と理念がどのように活かされているか、それをあらためてご紹介しましょう。

①錠前は、まず堅牢でなくてはならない。

錠前はなによりも堅牢でなくてはなりません。さまざまな破壊工作を想定し、各部の部品を大きくしっかりと設計することで暴力破壊に対する対破壊強度を高めています。

たとえばLAシリーズのデッドボルト。不正な押し込みやこじ開けに耐えるため、押し込み強度

は10,000N(約1,000kg強)レベルで設計。断面わずか25×12mmほどのデッドボルトの先端で、14～15人もの体重が支えられる計算になります。また一定の性能を長年維持する耐久性も大切です。すべての銅製部品に防錆メッキを施し、スプリングにはステンレス材を使用して錆や磨耗、変質を極力防止。完成した試作品は、あらゆる部品への荷重テストや破壊テスト、数十万回もの繰り返しテスト、塩水噴霧テストなどを行って耐久性を確かめました。しかも、生産ラインの中からランダムに抽出した製品も同じテストを行い、その品質を維持しています。

②カギ違いが多くなくてはならない。

対破壊強度、耐久性とともに錠前の基本条件となるのがカギ違いです。今日はシリンダー錠が主流ですが、シリンダーには複雑なキーシステム



を構築するとカギ違い数が急激に減少してしまう共通の特性があります。そのため錠前が広く普及し、しかもなんらかのキーシステムが構築される今日では、とにかく膨大なカギ違い数が不可欠です。そこでMIWAは新たに「U9」シリンダーを開発。もちろんLAシリーズにも標準装備されています。

ロータリーディスク方式を採用した「U9」シリンダーは約1億3400万通りものカギ違いを得ながら、キーシステムを構築しても原理的に比較的小さいカギ違い数が減少しない特長があり、大

規模な工事や複雑なキーシステムにも安心してご採用いただけます。しかも不正解錠に強く、カギの抜き差し感も滑らかになりました。

③気持ちよく使える作動感も大切。

カギの挿入感やレバーハンドルの操作感など、滑らかな感触や作動音も大切です。LAシリーズでは部品のはめ合い公差をより精密に見直し、ラッチボルトをはじめ所要所にナイロンなど樹脂系素材を多用。感覚的な満足感も得られるよう配慮しています。

④多様化するニーズに細やかに応える。

LAシリーズにはカタログ記載の仕様だけでも「U9」を含む4種類のシリンダー、7種類の機能、5通りのバックセット寸法、5段階の扉厚範囲があります。さらに30種類ものレバーハンドルのデザインが用意され、その材質と仕上げを組み合わせると約100通りものバリエーションになります。これらを単純に掛算すると約7万種類にも及ぶことになりますが、もちろん組み合わせは自由です。

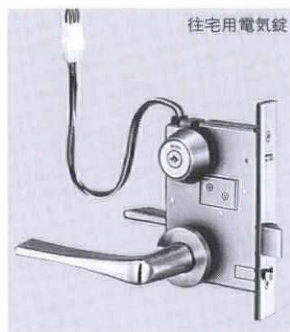
⑤柔軟に展開できなければならない。



LAシリーズの完成度の高いメカニズムは、さまざまな製品に展開されています。新世代のラン



〈美和ロック〉が見えてくる LAシリーズ。



ダムテンキーロックやハイブリッドカードロック、住宅用電気錠などもLAシリーズのメカニズムがベース。ドアメーカーやサッシメーカーの制成品として特注デザインやプッシュプルタイプの機構にも対応し、広く採用されています。さらにリバーシブルキーや大型のサムターンなど、各部を操作しやすいよう配慮したさまざまな高齢者向け製品を用意。その展開の広さで優れた資質を証明しています。

⑥効率的な新しい生産方式が不可欠。

このように、幅広いラインナップを持つLAシリーズを受注し生産するためには「量産の中で一個作りをも可能にする」効率のよい生産体制が不可欠になります。

MIWAでは長年の研究の結果「すべての工程であらゆるムリとムダを省く」「必要なものを必要なときに、必要な数だけ作る」という明快なコンセプトを得ました。三重県伊勢市郊外にある新鋭の玉城工場。そこではプレスや冷間鍛造、機械加工からメッキ、溶接、研磨、そして組み立てと工程順にレイアウトされた最新鋭の設備による一貫生産ラインを敷き、ひとりで複数の工程を受け持つ多工程持ち方式を採用。工作機械と人の巧みなリンクによって、個々に異なる注文にも素早く対応する独自の多品種少量生産を実現しています。



る新鋭の玉城工場。そこではプレスや冷間鍛造、機械加工からメッキ、溶接、研磨、そして組み立てと工程順にレイアウトされた最新鋭の設備による一貫生産ラインを敷き、ひとりで複数の工程を受け持つ多工程持ち方式を採用。工作機械と人の巧みなリンクによって、個々に異なる注文にも素早く対応する独自の多品種少量生産を実現しています。

⑦アフターサービス体制も必要。

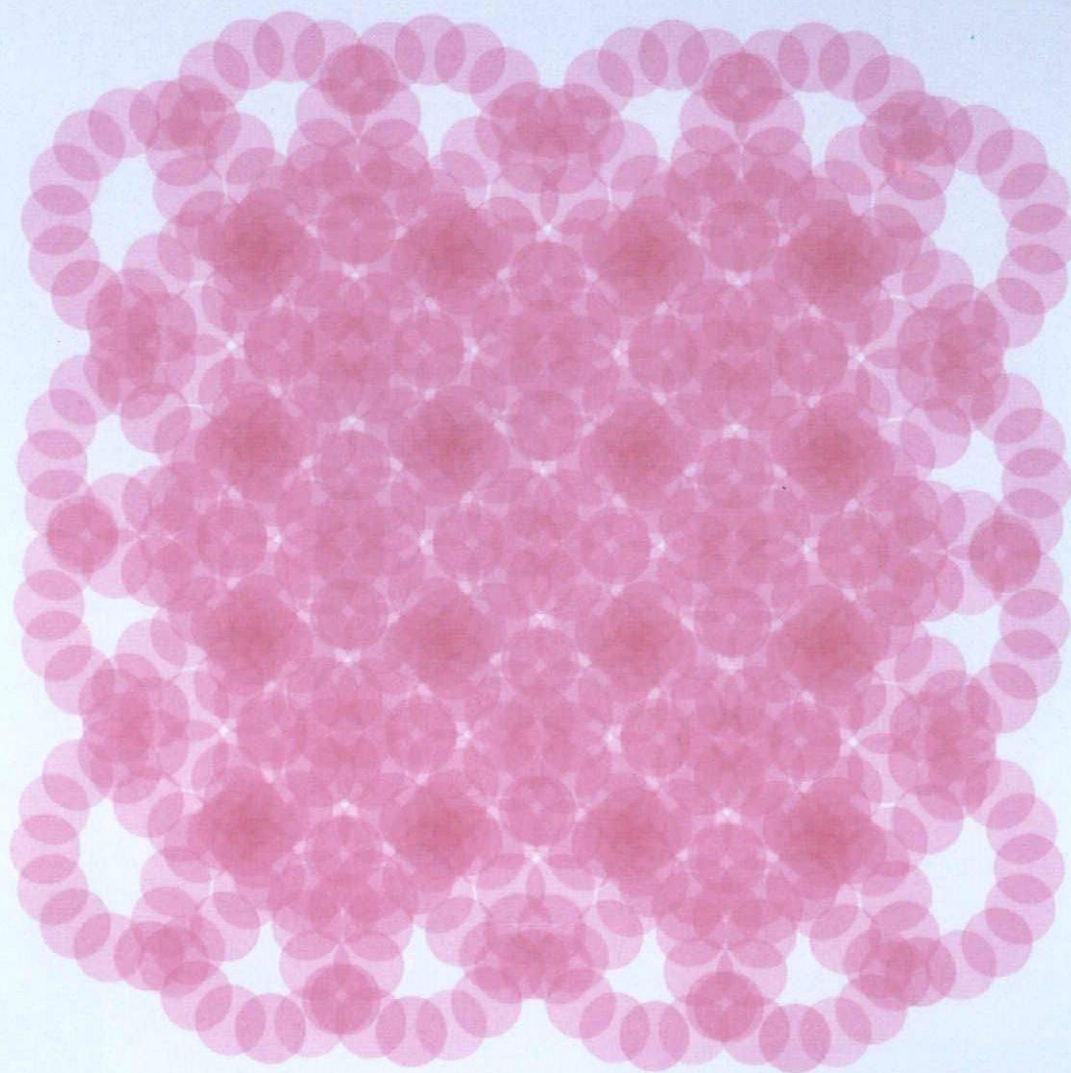
どんなに優れた錠前でもアフターサービスなしでは、真の安心は得られません。MIWAでは錠の調整、修理、交換からセキュリティシステムの施工までを良心的に行うアフターサービス体制の整備も、メーカーの社会的責任だと考えています。そこで組織したのが、「SD」(美和ロックサービス代行店)です。

「SD」は専用の研修施設で専門知識と実技、社会的モラルの研修を行い、厳重な資格審査の上で優秀なロックスマス(錠前技術者)だけを認定。確かな技術と信用できるアフターサービスを提供するシステムで、現在約600店が全国各地で活躍しています。



MIWAの理念を象徴するLAシリーズ。

LAシリーズは、お客さまに満足していただくために精魂込めて考え、製造し、アフターサービスを行っている製品です。1セット約1万円前後という手頃な価格帯にありながら、そこには技術のすべてと創立以来持ち続けてきた「人の生命財産を守り、快適で安全な社会づくりに貢献する」という理念が、あますことなく込められているのです。これからはMIWAはこの基本を忘れず、あらゆるお客さまからの、あらゆるご要望にお応えできるセキュリティ機器メーカーを目指します。



1/30

Hiroshi Tomura 95

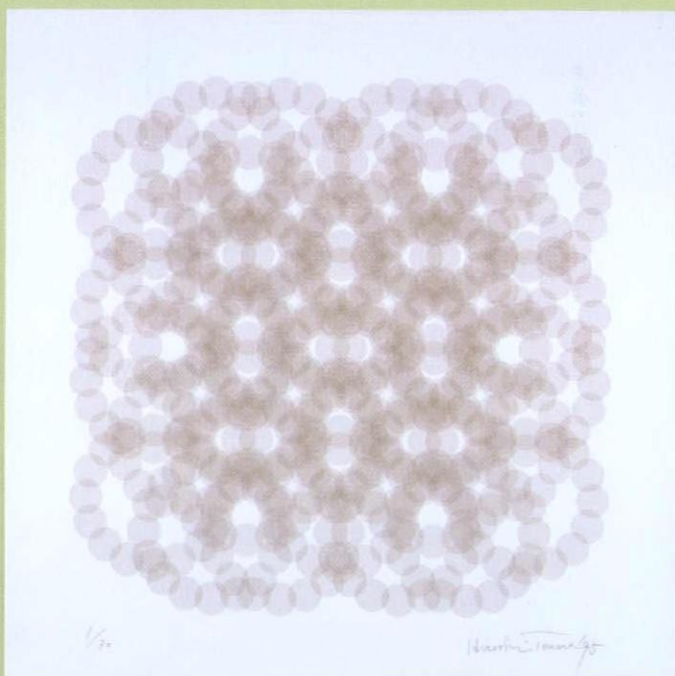
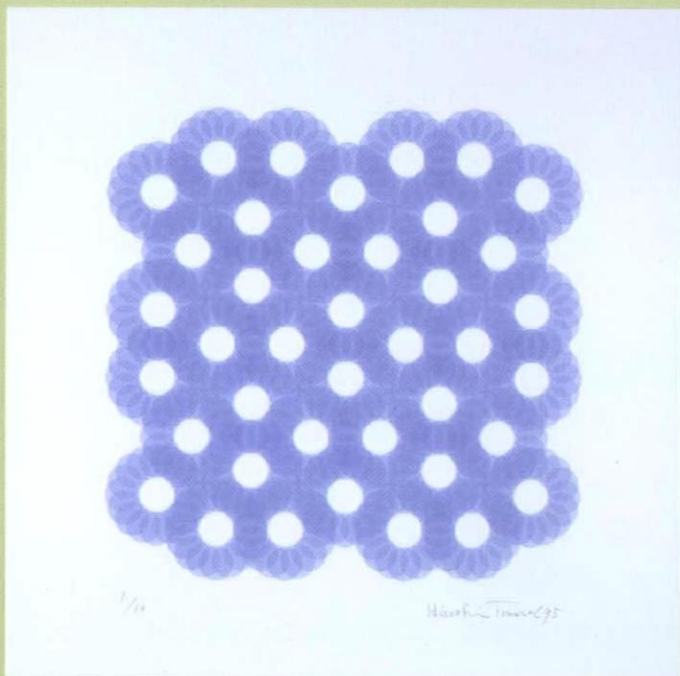
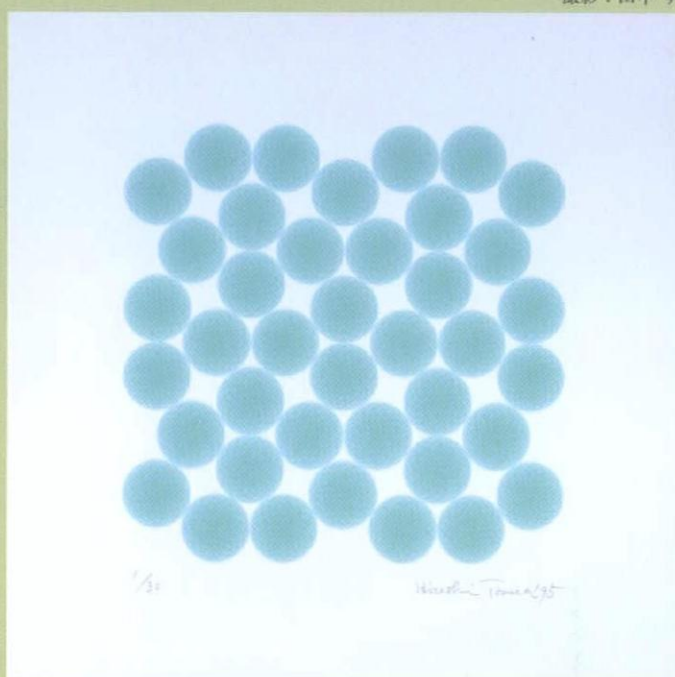
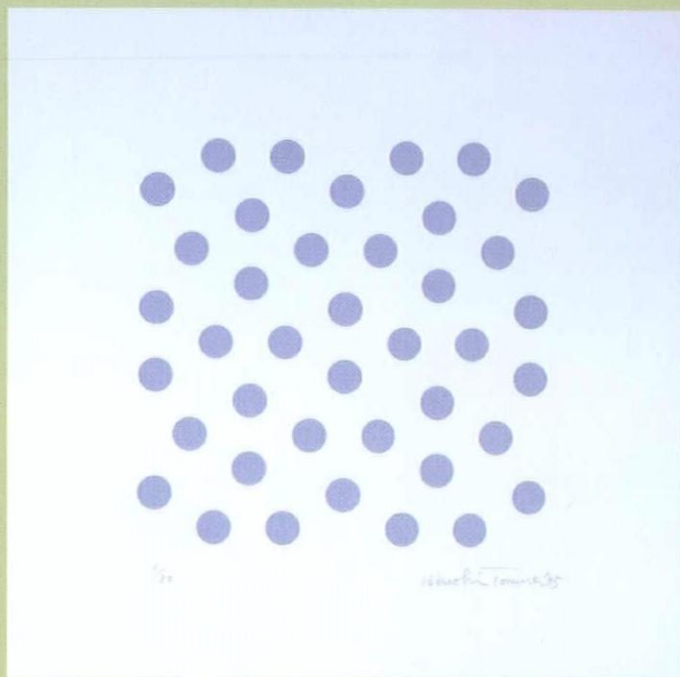
点・線・面・立体・空間・時間・無限。確かに、これらは不可思議な時空を解釈するために得られた、単なる分析要素であるかも知れない。しかし、我々人類は、無から始まり、点・線・面へと時空を織り成すかのごとくに進化発展してきた。

そして、次なる次元の扉を探している。成長し続けなくてはならないのだ。動き続けることは生命あるもの、形象あるものの宿命である。

けれども、ただひたすらに動き続けてきたのではない。まるで次元の扉のある境界線が、随所に点在するかのように、そこには揺らぎや

静止がある。均一に動き続けていたならば、そこには動きはなく、未来永劫静止しているのと同然だ。均一なる成長・動きは、単一次元上での出来事であり、空しい退屈な不変の時空である。

揺らぎ、止まらなければならない。止まるためには動いていなくてはならない。点・線・面・立体・空間・時間の概念は、その揺らぎとふと立ち止まった一瞬の時空の安らぎだ。それゆえに、我々は、時の流れを感じ、時空のなめらかな肌合いに触れる。そして、次なる次元の扉をノックするのだ。



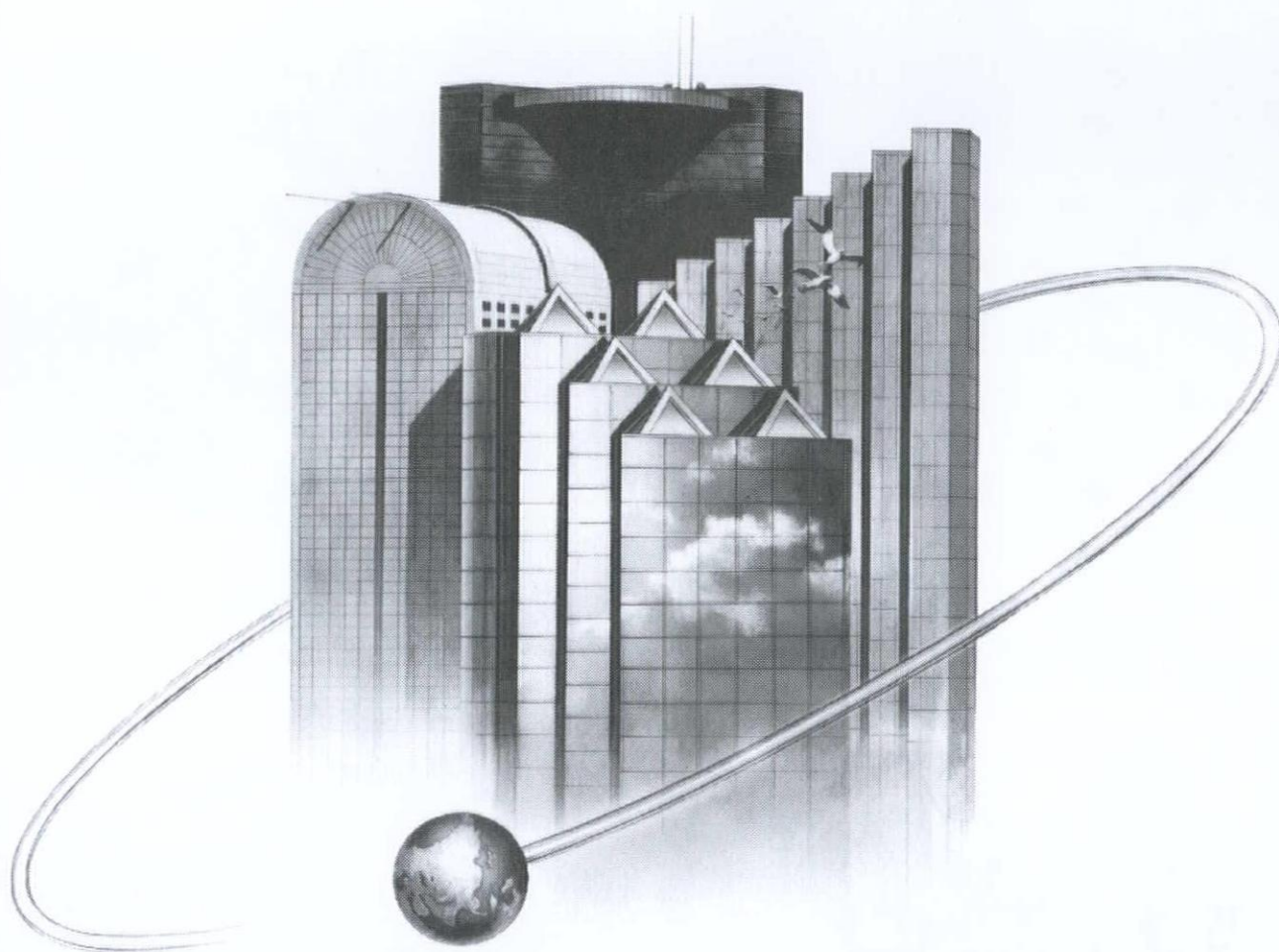
先号の「躍動するボブ・マーリー」での、水玉で表した正三角形と正方形に連続模様を、今回、写真撮影をする代わりに、16版刷りのシルクスクリーンによる版画によって試みた。右ページ左上の水玉模様がその原型である。他の作品はその原型を、それぞれ回転半径を徐々に変えて制作したものである。この操作により原型のパターンに潜んでいる、隠れた次元をあらわにしてくれる。動いていて止まっている、または、止まっていて動いている。将来、日常空間や建築物の壁面も、このような表皮を持つようになるであろう。

無数の個別なものが集まりながら、全体的な和をつくる「魔方陣」、そして、「100色のタイルを均一に張る方法」、これらとこの「ムーヴィング・ディメンション」は全く共通のテーマである。そして、この「トムの時空形象学—アップル・トモロジー」全般に互って流れる重要な概念でもあると理解していただけるであろう。

今、「ムーブ・フォルム」のごとく一度動かしたこれらを、再び止める。再度動き出し、出発するための、次元の扉が開く。

●とむら・ひろし／造形美術家

快適創造



人と自然と機能が調和した理想の快適環境を。

人と自然、そして機能が調和した新しい快適環境を創造する。

それが三機工業のめざす総合エンジニアリングです。

都市、コミュニティ、産業施設…人を取りまくさまざまな環境について考え、

その理想を迫いつづけている三機工業は、

いま、地球環境という視点にたって、すばらしい未来にむけての新しい環境のかたちを提案しています。



三機工業株式会社

〒100 東京都千代田区有楽町1-4-1 TEL.03 (3502) 6111

隔月連載

ポーランドのドイツアヴァンギャルド

構成=長谷川 章

第3回

ブレスラウ美術工芸アカデミー／ペトラ・ヘルシャー

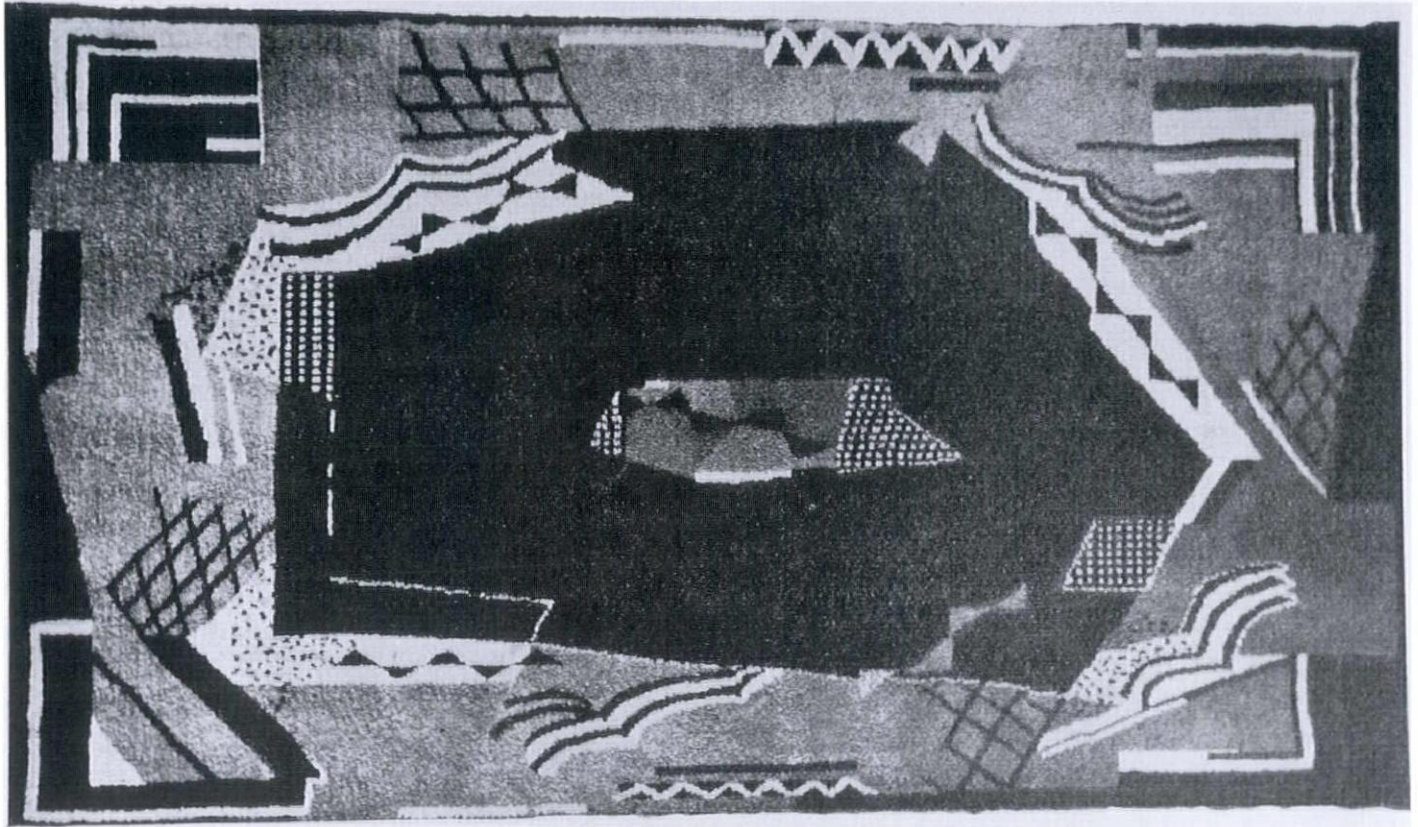


図1 白と灰色と青のグラデーションによる手編カーペット 作者=オスカー・モル 製作=テキスタイル工房 出典=『Schlesische Monatshefte 4号』1927年

オスカー・モルは1875年にシレジア地方のブリークに生まれた。そもそも生物を大学で専攻していたがその傍らで絵画を学んでいた。彼は1907年にパリでマチスに出合った。マチスの装飾要素の大胆な展開を見せたフォーヴィズムはその後のモルの画家の活動に大きな影響を及ぼした。1918年にはブレスラウのアカデミーへ招聘されて教育に携わり、1925年よりアカデミーの校長に就き大胆な教育改革を進める。それまで絵画の世界にこだわっていたモルは1927年初めてテキスタイルの世界に足を踏み入れた。こうして自ら応用美術の世界を開拓し、建築教育でも工芸との関係を重視した。しかしナチスが台頭し始めた1932年にはデュッセルドルフのアカデミーに移るが1935年より芸術活動を禁じられる。1947年ベルリンにて死亡。



図2 静物画 作者=オスカー・モル
出典=『Schlesische Monatshefte 2号』1925年

1930年1月18日から2月9日までモルはアカデミーの新しい教育カリキュラムの成果を公開した。この展覧会には絵画、彫刻、グラフィック、建築、工芸の分野が網羅されていた。モルとともにベルリンから招聘されたブリュッケのオットー・ミュラーを始めシュレンマーやラーディンクなど錚々たる教授陣の作品が展示された。このカタログの前書きでモルはアカデミーの使命について「現在の価値観や時代思潮を把握して新しいフォルムを生み出すことにあり、それはセンセーショナルなことではなく必然である」と述べている。よって「対象物から離れて、それを解体しキュビズムや構成主義の中にその可能性を見いだした」のである。それは第一次大戦後に自らの使命を自覚した芸術家に共通した時代精神のひとつの現れであったといえよう。(長谷川)

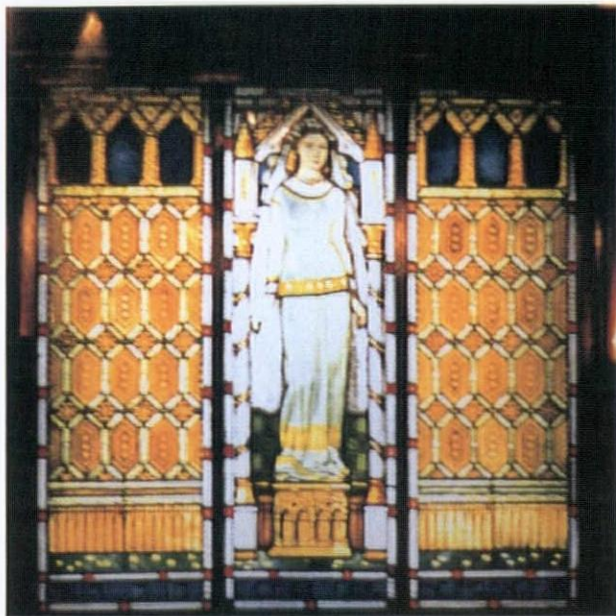


図3 ステンドグラス(レーヴェンベルクの市庁舎の「婚礼の間」) 1906年
作者=ハンス・ロスマン
出典=撮影筆者 1992年

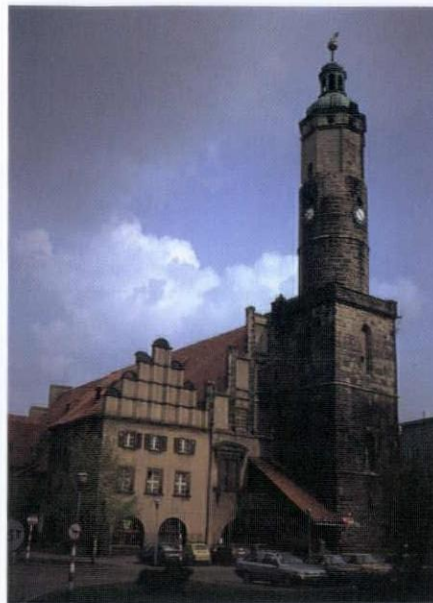


図5 レーヴェンベルクの市庁舎1902-1904年(塔部分は1504年)
作者=ハンス・ベルツィヒ撮影筆者、1992年



図4 レーヴェンベルクの都市をモチーフとした壁のテキスタイルの試作(レーヴェンベルクの市庁舎の「婚礼の間」) 1906年
作者=マックス・ヴィスリツェヌス



図6 金が象眼された青銅の格子
(レーヴェンベルクの市庁舎の「婚礼の間」) 1906年
作者=テオドル・フォン・ゴーセン 撮影筆者、1992年



図7 ドイツ工作連盟住宅展「Wohnung und Werkraum」ポスター、1929年
作者=ヨハネス・モルツァーン
出典=「Poelzig, Endell, Moll und die Kunstakademie Breslau」展カタログ、1965年



図8 マルチの教会 1906年
作者=ハンス・ベルツィヒ
撮影筆者、1992年



図9 マルチの教会（合唱隊席のステンドグラス）1906年
作者=ハンス・ロスマン(?) 撮影筆者、1992年

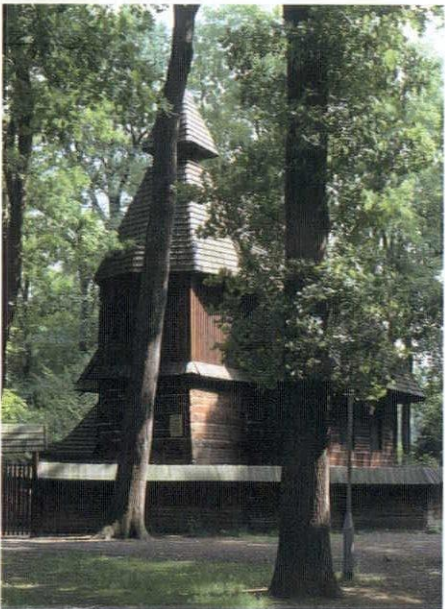


図10 シュロトルツ教会 1913年
作者=テオドル・エッフェンベルガー(再建)
撮影筆者、1993年

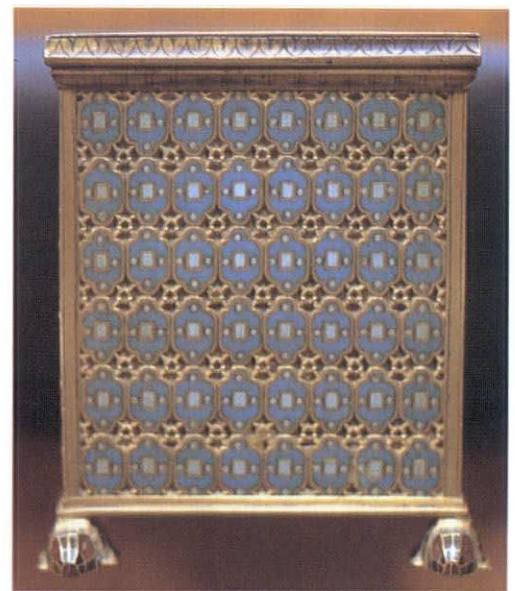


図11 七宝焼の箱
作者=テオドル・フォン・ゴーセン



図12 リ・ヴィネッキ=トルンのデザインによるカーペットの再現
作者=ヨハネス・リッケルト
出典=ミュルハイム市立美術館所蔵

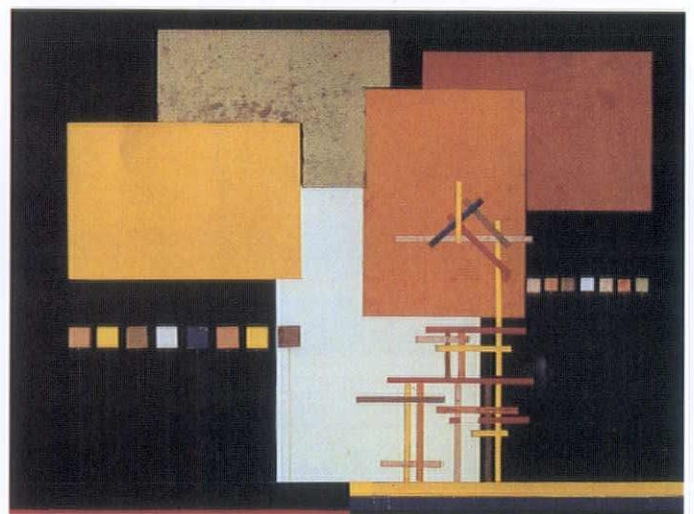


図13 イゴル・ストランヴィンスキーのオペラ『Die Nachtigall』の舞台デザイン
作者=オスカー・シュレンマー
出典=『Oskar Schlemmer, Monographie und Oeuvre-Katalog』1979年, Karin von Maur著

ドイツの近代建築運動の実態を探るには現在のポーランドのシレジア地方ブレスラウに設立された芸術アカデミーの存在を看過するわけにはいかない。そもそもこのアカデミーの母体となる美術学校の設立には次のような歴史的背景があった。即ち18世紀にはこのシレジア地方南部はハプスブルク家に属していた。しかしプロシア領となるにともない、その文化的損失を補うためにこのブレスラウに1791年美術学校が設立されたのである。それが近代建築の歴史に登場し始めるのはハンス・ベルツィヒが校長に就任した1911年の頃からである。しかしその前後の詳細については今まで詳しく知られていなかった。すでにベルリン芸術アカデミーは1965年に『ベルツィヒ、エンデル、モル——ブレスラウ芸術アカデミー1911

～1932』展を開催したが、その全体像についての研究が一気に展開したのはやはり1991年の東西ドイツの統一とそれに伴う東ヨーロッパの解放を待たねばならなかった。今回原稿を依頼したペトラ・ヘルシャー女史はキール大学美術史学科博士課程に在籍している若き研究者であり、このアカデミーの研究に6年来取り組み、この程その研究に対して学位が授与されることとなった。その膨大な研究全てを紹介するには誌面に限りがある。そこで短いながらもその骨格となる歴史的な流れや係わった人物の関係を中心にこのポーランドにおける近代芸術運動の全貌が判るようにと無理に執筆願った次第である。(長谷川)

工芸学校の誕生

ヨゼフ・バクストン (1801-65年) が設計したクリスタルパレスを会場に1851年ロンドンで開催された第一回万国博覧会やそれ以降の博覧会では、ドイツの工業製品のデザインがまだ歴史主義に拘束されていることが如実に示された。ドイツ製品はイギリスやアメリカの工業製品に較べてその素材や機能が古臭く、とても国際市場に應えるものではなかった。やがて19世紀後半になるとプロイセンでは国をあげて工芸デザインに力を入れ始めた。

『南ケンジントン博物館 (現在のヴィクトリア・アルバート博物館)』付属の製図学校では職人教育が行われていた。趣味の良いセンスが要求されていたこのイギリスの製図学校を手本にして、やっとドイツ語圏にもそれに比類しうる学校が設立されるようになった。即ち1861年にウィーンでは『美術応用工業博物館』が設立され、1862年にはその付属の『工芸学校』が開校されたのである。

しかし驚いたことにプロイセンではこうした動向はすでに18世紀終わり頃に認められていた。フリードリヒII世はプロイセンの中でも特に工業が発展していた県に県立美術学校を設立していた。この学校では職人のための

製図の授業が行われ、さらに工業製品用のデザインが試みられていた。ところがこの学校の多くは成果を上げることは出来なかった。というのは職人も産業界も彼等のデザインについて芸術家からとやかく指示を受けることを嫌ったからである。彼等には芸術家が生産工程や素材の性質について何も理解してないと思われたのだ。

こうして多くの学校が閉鎖されていく中で、存続したひとつが1791年にブレスラウに設立された県立美術学校であった。この学校はその後波乱に満ちた歴史を辿ることとなる。即ちウィーンの『美術応用工業美術館』の『工芸学校』を卒業した装飾デザイナーであり製図教師であったヘルマン・アドルフ・キューン (1849-1902年) [図14] を招聘し『王立美術工芸学校 (Königliche Kunst und Kunstgewerbeschule)』と名称を改め、後にはさらに『美術工芸アカデミー (Akademie für Kunst und Kunstgewerbe)』へと名称を再変更していく歴史がここに始まったのである。

ブレスラウ市民や名を成した芸術家たちは、すでに時代遅れとなった既存の学校を伝統ある美術アカデミーへ蘇生させようと努力したがうまくいかなかった。しかしプロイセンが

工芸生産品の品質の向上に努めていることを背景として、キューンは典型的な美術専門クラスとは別に初めて『工芸専門クラス』というものを設けることに成功した。しかしその教育内容は確立されたものではなかった。美術専門クラスのコースでは画家のカール・エルンスト・モルゲンシュテルン教授 (1859-1928年) が風景画クラス [図15] を担当した。自身が歴史絵画家として名を馳せたエドゥアルド・ケンプファー教授 (1859-1934年) は肖像画クラスを、彫刻家のアルベルト・ヴェルナー＝シュヴァルツブルク教授 (1857-1911年) は彫刻クラスを担当した。彼は1900年に竣工した大学校舎増築棟のレリーフの製作を担当した。『人物デッサンクラス』はアーノルド・ブッシュ教授 (1876-1951年) が担当した。

その他にも家具工房や青銅鑄造工房も設立された。さらにキューンの友人でウィーンの学校を同期で卒業した装飾画家のハインリヒ・イルマン教授による『装飾絵画クラス』、彫刻家のヴィルヘルム・シュヴァルツバッハ教授 (1862年生) による『工芸模型クラス』、さらにマジョルカ陶器、ガラス、磁器、木材、絹、革といった実用的な『工芸絵画および設計クラス』 [図16] は画家のマックス・ヴィスリッ

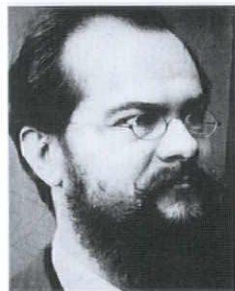


図14 ヘルマン・アドルフ・キューンの肖像写真
出典＝シュタイアーマルク州立記録保管所蔵



図15 Am Kynast
作者＝カール・エルンスト・モルゲンシュテルン (風景画クラス)
出典＝『シュレジエン6号』1912/13年

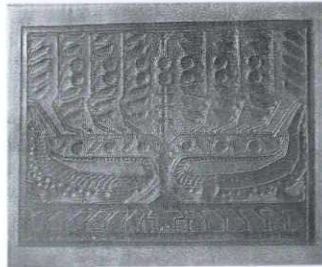


図16 革装丁されたアルバム
作者＝ヴァンダ・ビプロヴィッツ
出典＝『Schlesien8号』1914/15年



図17 テオドル・フォン・ゴーセン教授の彫金クラスの学生作品
指導マイスター＝ティルマン・シュミッツ
出典＝『Schlesien6号』1912/13年

エヌス教授(1861-1957年)が担当した。『建築製図および設計クラス』は1898年に指物師やろくろ細工師や彫金家を対象に設けられた。さらにキューンはこの工房の拡張計画案を提示した。例えば彼は青銅鑄金工房の拡張と金属と卑金属の打ち出し細工や彫金細工の工房の新設や[図17]、また同時に磁器とガラス工芸のための工房や七宝焼きの工房[図11]も設けようと考えていたのだ。キューンのこうした工房の設立の狙いはシレジア地方の工業と職人とを結び付けることにあった。

シレジア地方のテキスタイル産業が高い関心を示したことに応えて、キューンは彼の助手であるゲルトウルト・ダウベルト女史の協力により産業と結び付けた刺繍の授業[図18]を開設した。その一方で『建築製図および設計クラス』とその工房の指導者として、実は建築家ではなく工業生産を前提としたデザイナーを探し続けていた(しかし1900年頃にはこの工業デザイン自体は当り前のこととなった)。カール・ハーンという Breslau の家具マイスターを退けて、結果としてこのクラスの指導教授には建築家のハンス・ベルツィヒ(1869-1936年)が就任した。しかしこうした新しい動きは Breslau の学校が唯一のケースではなかった。芸術家と職人の共同授業という『バウハウス』で謳われた教育理念は19世紀の終わり頃にはごく一般的にどの工芸学校でも見受けられるようになっていた。

校長ハンス・ベルツィヒの時代

1902年にヘルマン・アドルフ・キューンが死ぬとその後継者が問題となったが、当初ベルツィヒには候補者の噂すら立たなかった。Breslau の芸術家の間では芸術アカデミーの教育理念を代表する画家レオポルド・フォン・カルクロイト(1855-1928年)が最有力候補と見なされていた。それはシレジア地方における威信を獲得しようとする芸術アカデミーの意向を反映していた。一方ベルツィヒの友人でドレスデン工科大学で教鞭をとっていた

建築家フリッツ・シューマッハー教授(1869-1947年)はプロイセン政府の指示を背景に有力候補に上がってきた。しかし彼は堅く固辞し、こうしてベルツィヒは初めて校長の候補者に浮上してきた。その背景を考えると、彼がこの Breslau の学校に就任して一年目に、彼が担当した『建築と芸術家具の専門クラス』の学生とともに、カール・ヴィルヘルムII世の妹であるザクセン=マイニゲンの皇太子妃シャルロッテ(1860-1919年)の依頼を受けて、シレジア地方のクルムヒューベルの街に計画された将校女子寮のために彩り豊かな伝統的な家具をモチーフにデザインをまとめた内装を設計していたことが、最終的には Breslau の学校の校長にベルツィヒが指名されることを決定的にしたと思われる。

ベルツィヒはヘルマン・キューンの教育プログラムを継承し工房の拡張に尽力した。また設計活動ではローヴェンベルク市庁舎[図5、19、20]が完成した。この市庁舎には『婚礼の間』と名付けられた部屋があるが、これは多くのクラスや工房の協力により建築を全てに渡って総合的にデザインした最初の作品である。しかしそれ以前にも1904年に行われたセントルイス世界博覧会で政府によって計画されたものや、ベルツィヒがその工芸的意義を高く評価した1906年の『ドレスデン工芸博覧会』のためにベルツィヒが構想したものは、最終的には1907年にベルリンにおいて示された。

1903年初頭以来ベルツィヒはローヴェンベルク市庁舎の増改築の仕事で多忙を極めていた。1階にはマーケットホールが造られた。それは幅の広い通路をもつアーケードがあり既存の小さな小売店が配列された。そのアーケードに沿うように瓦屋根が架けられて、深い影を落とし彫塑的な外観を呈している。内部に階段ホールがある建物の張り出し部分にもこのアーケードは連続している[図20]。

このアーケードには多くのレリーフがある。それは『装飾彫刻クラス』の指導していたイ

グナティウス・タシュナー教授(1871-1913年)によってデザインされ、彼の学生によって製作された。例えば『漁師』[図21]や『果物の売りの娘』といった商売人や、紋章の動物である『獅子の像』の他『都市書記』といったものである。

市庁舎の増築部分の2階の細長いプランは幾つかの正方形に割り込まれている。そこに設けられた『婚礼の間』[図22]では今日でもなお結婚式が行われているが、その木仕上の内装はベルツィヒのデザインに基づいて学校の家具工房によって製作されたものである。その柱や梁や天井にはバラやキツバや松の枝や檜の枝からなる唐草紋様が施されているが、それは同年に靴クラスの担当を引き継いだテオドル・フォン・ゴーセン教授(1873-1943年)のデザインによるものだ。この部屋ではドイツのメルヘンの世界の形態が躍動している。この部屋の正面には小さな部屋があるが、その間仕切には金を像眼した青銅の格子が設けられている[図3]。また王冠のシャンデリアにはこの部屋の主旨に沿ってギリシャ神話に因んだ結婚の神々をいただいている[図24]。マックス・ヴィスリツェヌスとヴァンダ・ビプロヴィッツ(1878-1954年)両教授の指導のもとで設立された織工房でのテキスタイル作品がこの部屋の色彩のアクセントになっている[図4、25]。同様に1903年から『装飾製図および絵画クラス』の指導をしているハンス・ロスマン教授(1868-1915年)によるステンドグラスの作品[図3]も同様にこの空間の祝祭的な雰囲気を出している。

ローヴェンベルク市庁舎の空間は象徴的なデザインであるが、それに対して1904年にベルツィヒが設計した『大都市郊外における裕福な家庭の戸建住宅』は実用的な空間デザインであった。しかしこの漆喰仕上げの木組住宅は、当時 Breslau の手工業者連盟によって開催された『手工業工芸博覧会』のために建てられたものであって、博覧会が終わると取り壊されてしまった[図26]。実は1903/04



図18 作者=テキスタイル・クラスの学生作品
出典=『Schlesien 6号』1912/13年

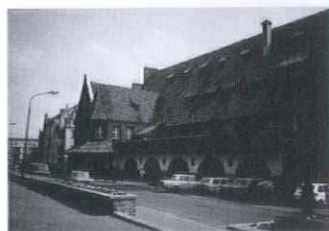


図19 レーヴェンベルクの市庁舎(アーケード部分)
作者=ハンス・ベルツィヒ 1902-04年
出典=撮影筆者 1992年

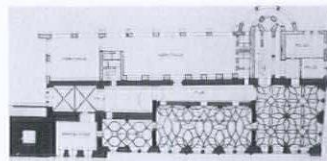


図20 レーヴェンベルクの市庁舎 平面図
作者=ハンス・ベルツィヒ 1902-04年
出典=『Die Kunst』1907年



図21 漁師(レーヴェンベルクの市庁舎のレリーフ)
作者=イグナティウス・タシュナー
出典=撮影筆者 1992年

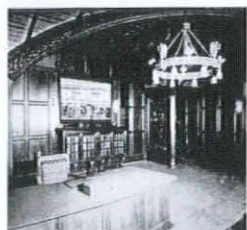


図22 婚礼の部屋(レーヴェンベルクの市庁舎)
1906年
出典=『Schlesien 1号』1908年

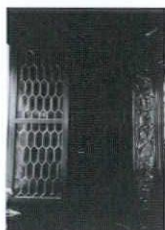


図23 木製の柱(レーヴェンベルクの市庁舎の
婚礼の部屋) 1906年
作者=テオドル・フォン・ゴーゼン設計によ
る彫刻家の作品、撮影筆者 1992年



図24 シャンデリアの婚礼の神
(レーヴェンベルクの市庁舎の「婚礼の間」) 1906
年
作者=テオドル・フォン・ゴーゼン設計による
彫刻家の作品
出典=撮影筆者 1992年



図25 レーヴェンベルクの都市をモチーフとし
た壁のテキスタイルのための下絵(レーヴェンベ
ルクの市庁舎の「婚礼の間」) 1906年
作者=マックス・ヴィスリツェヌス

年すでにブレウラウの「工芸考古学博物館」主催の設計競技「中産階級の居間」[図27]に学校は参加していたものの、それは単なる一室の内装に限定されていた。それに対してこの「戸建住宅」では住宅全体を総合的にデザインできたのである。それは実に1901年マチルデの丘に造られたダウムシュタット芸術家コロニーの住宅に匹敵するものといえる。しかし Breslau のこの「戸建住宅」が特異なのは学生の協力のもとで内装を行ったことである[図28、29]。同じようなことはベルツィヒが設計した唯一の教会においても言えるだろう。それはシレジア地方のマルチという村の教会であり、その外観には様式化された伝統的木組工法のデザインを認めることができる[図8]。内部の聖歌隊席のステンドグラス[図9]や王冠の形をしたシャンデリア[図30]はともにレーヴェンベルク市庁舎のものに良く似ており、先生と学生の共同作品であることが察せられる。

ベルツィヒはまた1911年にボーゼンでの『工業と商業と農業のための東ドイツ博覧会』のバヴィリオンとしてあの有名な給水塔[図31]を設計した。その最上階には将来給水塔として水槽が設置されることとなっていたが、博覧会の期間中は窓が設けられて臨時のレストランとして利用されていた。レストランの内部には Breslau の美術学校で教えていたアーノルド・ブッシュ(1876-1951年)とハンス・

ロスマン(1868-1915年)と彼の学生の協力による油絵が架けられた[図32]。一方でベルツィヒは解放戦争(1813年に Breslau でプロイセン国民がナポレオン軍に勝利を取った戦争)の百周年記念祭のための Breslau の計画にも着手していた。この記念祭のために建てられた Breslau 市都市建築監督官マックス・ベルク設計の「世紀のホール」とハンス・ベルツィヒ設計の「歴史展示館」および「バーグラ」はよく知られているが、この会場の一隅に建つ小さなシュロトルツ教会[図10、33]はあまり知られていない。1910年に設立された「故郷文化保護のためのシレジア同盟」の共同設立者のひとりである建築家テオドル・エッフェンベルガー(1892-1968年)は、シレジア地方のハイデブレックという地にあった、すでに荒廃したこの木造教会を展覧会の敷地に修復再建することに成功した。この教会の内装は1912年から Breslau の学校で『装飾絵画および製図クラス』を指導していたフランス風画家のフィデリック・パウチ教授(1877-1959年)とその学生の協力によって行われた[図34]。

1900年に設立された『市立手工業工芸学校(Stadtische Handwerker und Kunstgewerbeschule)』と名称が混同されないように、1911年にベルツィヒの学校は『王立美術工芸アカデミー』に改称された。そしてこの学校は第一次世界大戦勃発に至るまで Breslau に

おける芸術活動を統括するような存在であり続けた。ゴーゼンが代表を務めた「シレジア芸術家同盟」[図35]は1907年創設されたが、その目的は主にこの学校の先生や学生の作品を展覧会によってシレジアの内外に紹介することにあった。代表を変えながらこの同盟は1941年まで存続した。

アオグスト・エンデルの挑戦

ベルツィヒが1916年に Breslau を去ってから2年間校長の席は第一次世界大戦のために空白の時代が余儀なくされた。その間には W. グロピウス、H. テセノウ、B. タウトあるいは Breslau 芸術アカデミーの教授であるテオドル・フォン・ゴーゼンが次期校長候補として俎上にのぼったが、最終的にベルリンの建築家のアオグスト・エンデル(1871-1925年)が校長に就任した。

経済的にも厳しい時代に施設の拡充はエンデルにとっても重荷であった。その一方で「市立手工業工芸学校」が次第に力を付けアカデミーの失墜を目論み始めた。両大戦間のドイツでは芸術家には特に厳しい状況であったことも手伝って、エンデルは昔のマチス派のオスカー・モル(1875-1947年)[図2]とブリュッケのオットー・ミュラー(1874-1930年)[図36]を絵画クラスの指導教授として Breslau に招聘することに成功した。このふたりはベルリン時代の友人であった。ミュラー



図26 住宅(玄関側のファサード) 1905年
作者=ハンス・ベルツィヒ
出典=『Das Familienhaus, Breslau 1905』
Karl Masner 著



図27 居間 1904年
出典=『Kunstgewerbeblatt 1907』



図28 住宅(食堂)
作者=ハンス・ベルツィヒ
出典=『Das Familienhaus, Breslau 1905』
Karl Masner 著



図29 住宅(居間)
作者=ハンス・ベルツィヒ
出典=『Das Familienhaus, Breslau 1905』
Karl Masner 著



図30 マルチの教会(王冠のシャンデリア) 1906年
作者=ハンス・ベルツィヒ
出典=撮影者 1992年



図31 ボーゼンの給水塔(外観) 1911年
作者=ハンス・ベルツィヒ
出典=「Industriebau」 1911年



図32 ボーゼンの給水塔(レストランの内観、
絵画が飾られている) 1911年
作者=ハンス・ベルツィヒ
絵画=ハンス・ロスマン、アーノルド・ブッシュ
および学生
出典=「Schlesien 5号」 1911/12年



図33 シュロトルツ教会 1913年
作者=再建 テオドル・エッフェンベルガー
出典=ベルリン=ダーレム国立記録保管所所蔵

は画家カール・ハヌシュ(1881-1969年)とともにかねてより学生側から要望の強かった印刷工房の設立に取り組み、一方モルは絵画世界に留まった。今にしてみればブレスラウ芸術アカデミーの将来の発展のために協力を申し出た者はエンデルのベルリン時代の仲間達であったことがよくわかる。こうした中に建築家アドルフ・ラーディンク教授(1888-1957年)がいた。彼はエンデルとともにまず『工芸クラス』の指導にあたり、工芸の多様な技術を統合する試みに取り組んだ。ところでラーディンクは「ワイマール時代」の若い芸術家達のひとりであったが、彼等はモダニズムとして工芸をとらえてはいなかった。そうした芸術家とは自らと一線を画していたのだ。よってモルが画家として第一線に立つ者と自認しているように、ラーディンクは自らを建築家と自認していた。そして彼にとって「応用芸術という言葉」の意味するところは「ただ人を驚かせるもの」でしかなかった。こうしてブレスラウでの活動を始めた頃の彼の作品は建築しか知られていない[図37]。この嫌われ者の『工芸クラス』の指導者を求めてラーディンクは建築家ハンス・シャロウン(1893-1972年)に巡り合った。シャロウンにラーディンクは『応用芸術学科』の共同指導を提案し、建築と工芸を対等に扱うクラスを目指した。しかしシャロウンは建築と工芸を同じ土俵で扱うことに何の疑問も持っていなかった

のである。

オスカー・モルの改革

シャロウンが1925年にブレスラウ芸術アカデミーに来たとき、残念ながら彼はアオグスト・エンデルと出会うことができなかった。彼は同年ベルリンで死んだ。

アオグスト・エンデルは彼の後継者にアドルフ・ラーディンクを考えていたようだが、しかし新しい校長の候補者として彼の名前が出ることはなかった。新聞ブレスラウ・ターゲスプレッセ紙を見ると、当時『バウハウス』とともにワイマールから追い出されたワルター・グロピウスやエンデルの前任者のハンス・ベルツィヒが後継者として考えられていたようだ。結果として「単なる画家」であったオスカー・モルが選ばれた時に、このブレスラウ・ターゲスプレッセ紙は「シレジアの平凡性の恥ずべき結末」と酷評した。

しかしオスカー・モルが校長に就任した時には幸運にも多くの教員が定年退職を迎えた。つまり彼は多くの新しい教員を入れることが出来たのである。こうしてモルは有名な芸術家を次々学校へ招聘することに成功した。例えば「新即物主義」のアレクサンダー・カノルト(1881-1939年)[図38]やカルロ・メンゼ(1886-1965年)[図39]といった画家や、あるいは彫刻家ロベルト・ベトノルツ(1882-1973年)があげられる。そして工芸学科はハ

ンス・シャロウンとアドルフ・ラーディンクに任された。1926年には彼等の教育理念を基本にしてデッサウのバウハウスを参考に「予備課程」が設けられ、パウル・ドベルス教授(1885-1959年)が指導に当たった。そしてラーディンクとシャロウンの総合指導のもとで工芸関係の工房とクラスを統合して『工芸学科』を設置した。またアニ・アデルマンのもとで厚紙工房を、そしてエディット・リショフスキーが先ず、後にアナ・ラーディンクに引き継がれることとなる染織工房を設立した。その後1926年にはリ・ヴィネッキ=トルン(1876-1953年)という元ワイマールの工芸学校の校長アンリ・ヴァン・ド・ヴェルド(1863-1957年)の教え子をテキスタイル工房の教授として招聘することに成功した。[図12、40]。こうして学校のカリキュラムの拡充を達成した時に、初めて画家モルは工芸に興味を持ち始めた。彼の最初の工芸作品である手編カーペット[図1]が製作された。こうしてモルを中心に1927年にはブレスラウでテキスタイルの展覧会が行われた。このブレスラウの作品は直接『バウハウス』の作品と比較しても決して遜色のないものであった。1年遅れて磁器作家のヨゼフ・ヴィネッキ(1882-1949年)が仲間に加わった。彼はリ・ヴィネッキ=トルンの旧夫であったが、そもそも彼はヴァン・ド・ヴェルドの元アシスタントでワイマールの磁器工房の指導者であった。たとえ彼が家具製作の

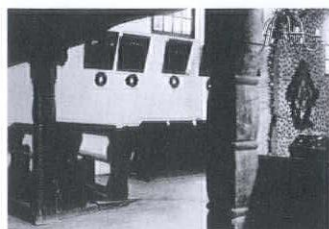


図34 シュロトルツ教会(内観) 1913年
内装=フィデリク・パウチ教授および学生
出典=ベルリン=ダーレム国立記録保管所所蔵



図35 「シレジア芸術家同盟」の印章
出典=ビルニッツ城応用美術博物館所蔵



図36 女性の裸体画
作者=ヨハネス・リッケルト(オットー・ミュラー教授のクラス)
出典=ミューンハイム市美術館



図37 オッドフェロウハウス(竣工時のファサード) 1927年
作者=アドルフ・ラーディンク
出典=「Schlesische Monatshefte 4号」1927年



図38 静物画IX 1925年
作者=アレクサンダー・カノルト
出典=「200 Jahre Kunstschulen Breslau」
展図録 1988年 ヴィースバーデン文化局刊



図39 労働 (ブレスラウ税務署大会議室の壁面部分) 1924年
作者=カルロ・メンゼ
出典=「Schlesische Monatshefte 4号」1927年

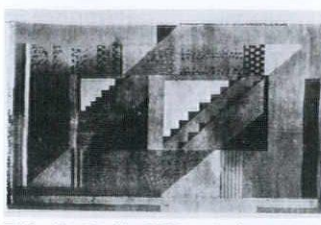


図40 緑と青と茶の手編カーペット
作者=リ・ヴィネッキトトルン
出典=「Schlesische Monatshefte 4号」1927年

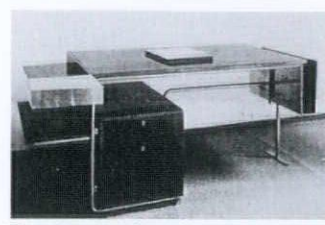


図41 机 1929年
作者=ヨゼフ・ヴィネッキ
出典=「The Studio」1931年

領域での体験がなくてもモルは彼に家具工房を任せた。すでに1929年に彼は最初の作品[図41、42]をブレスラウで開催されたドイツ工作連盟の展覧会『WUWA (Wohnung und Werkraum Werkbundaustellung: 住宅と労働空間展)』に出展している。この住宅展ではラーディングやシャロウンの建築作品が中心的役割を果たしたが、それを除けば建築以外でこの展覧会を決定づけたのは、1925年にマクデブルクの工芸学校からブレスラウのアカデミーへ招聘されたグラフィックデザイナーのヨハネス・モルツァーン教授(1892-1965年)[図43]のポスター[図7]であった。

アカデミーの終焉

しかしアカデミーは常に批判を受けていた。金にもならない創作活動をしている芸術家たちとは異なって、経済的に保証されたアカデミーの先生たちは中立的な立場にある者としてブレスラウ政府からの仕事の依頼を受けた。そして頻りに展覧会の審査委員が依頼され、その結果他の芸術家に較べて仕事や展覧会に出展する頻度が高くなった。その一方でアカデミーの教師の作風に対する批判が寄せられるようになった。あまりにモダンでアブストラクトであるというのだ。そして世論はやがてその伝統的素材や表現を模索している『市立手工業工芸学校』に味方するようになり始めていた。

1929年には『パウハウス』教師のオスカー

(1888-1943年) およびカスカ・シュレンマー(1883-1966年)を招聘し、ブレスラウアカデミー付属工房として舞台美術クラスを設立するに至った。しかし残念ながら舞台の授業はイゴル・ストラヴィンスキーのバレエ『レナルド』『サヨナキドリ』[図13]の公演を最後に中断することとなった。実は舞台美術の權威で『市立手工業工芸学校』で教鞭をとっていた装飾画家であるハンス・ヴィルダーマンは人々が思っていたことを代弁するようにしばしば批判した。即ちアカデミーをよく思わない人々はアカデミーこそモダンでアブストラクトな芸術を志向する芸術家たちの、つまりホルシェビキ思想の巣窟であると批判していたのである。そうした折の1930年に、ちょうどブレスラウに招聘されたオスカー・シュレンマーがデッサウ『パウハウス』の校舎の壁に作成した作品を、テューリンゲン州政府が取り壊すという決議を行った。これを契機にブレスラウの市民も自分たちの考え方が正しいのではないかと感じ始めた。1931年にゲオルグ・ムッヘ(1895-1987年)[図44]とともに『パウハウス』の芸術家をひとりブレスラウに招聘したときに——たとえ彼が最後のたった半年パウハウスで教えただけなのだが——アカデミーへの批判は高まっていった。右翼やNSDPA(ナチス; ドイツ国家社会主義労働党)を支持しているブレスラウの人々にとってアカデミーは——当時の言葉を借りると——「頹廢そして非民族的」芸術の中心地で

あったのだ。こうした社会の動向にニューヨークの証券経済恐慌に始まった世界経済危機が拍車をかけた。すでに1930年9月にはブレスラウ芸術アカデミーの教員の減給の噂が広まり、1年後にはさらにアカデミーの閉鎖が噂となった。ラーディングとシャロウンは『市立手工業工芸学校』と『美術工芸アカデミー』が合併できないかと試みたが[図45]、カリキュラムにおいて合意に達せず失敗に終わった。1932年4月アカデミーの全教員は解雇通告を受けた。例外として学校に残ることができたのはアトリエ利用の延長契約を直前に済ませていた者だけだった。テオドル・フォン・ゴーセンやヨハネス・モルツァーンやゲオルグ・ムッヘそしてロベルト・ベトノルツは彼等の契約を理由に1933年までマイスターのアトリエで授業を継続して行うことができた。しかし1933年夏には彼等もまた解雇通告を受けることとなった。そして空き家となったこのアカデミーの校舎に引越して来たものこそ『市立手工業工芸学校』であったのだ。

アカデミーが閉鎖されてから数ヶ月後の1933年12月17日にはブレスラウのシレジア造形美術館では『1918-33年の芸術思潮展』が開催された。それは1937年にミュンヘンで行われることとなる『頹廢芸術展』の前身となるものであった。会場ではブレスラウ美術工芸アカデミーの教授や学生の多彩な芸術活動の全貌を見ることができた。

●Petra Hölischer/キール大学美術史学科



図42 コーヒーポット 1929年
作者=ヨゼフ・ヴィネッキ
出典=「Rassegna <Breslavia>」1989年



図43 招待状(国立美術工芸アカデミー展覧会) 1929年
作者=ヨハネス・モルツァーン
出典=ブレスラウ国立近代美術館資料室所蔵

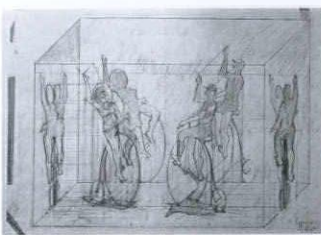


図44 2台の自転車(レプリカ)
作者=ヨハネス・リッケルト(ゲオルグ・ムッヘ教授のクラスの学生)
出典=ミュールハイム市立美術館所蔵

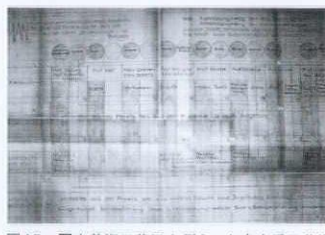


図45 国立美術工芸アカデミーと市立手工芸学校の合併計画
作者=アドルフ・ラーディング、ハンス・シャロウン
出典=ベルリン美術アカデミー建築資料記録保管所所蔵

連載：世界の現代美術館探訪

美術館は生まれ変わる

第3回

複合された美術館空間／水沢 勉

フランクフルトの13の美術館

■ W. O. M² (21世紀美術館調査隊)

太田泰人／神奈川県立近代美術館学芸員

水沢 勉／神奈川県立近代美術館学芸員

渡辺真理／建築家、法政大学教授

松岡智子／倉敷芸術大学芸術学部講師



メイン河にかかるアイゼルナー・シュテークから南側の「美術館河岸」を望む。中央が工芸博物館の新館

十数年前であれば、ドイツの代表的な商業都市フランクフルト・アム・マインで数日を過ごす人はビジネスマン以外には、ブックフェアの時の出版関係者ぐらいだったのではなかろうか。この商業都市に文化の薫りを求めてわざわざ旅行してきて長逗留する人はほとんどいなかったといっても過言ではなかった。その都市が機能性の高い郊外の国際飛行場によって名高いのも、より多くの人間の通過点であることが最優先にされる施設である以上、皮肉でもなんでもなくおのずと納得がゆく。

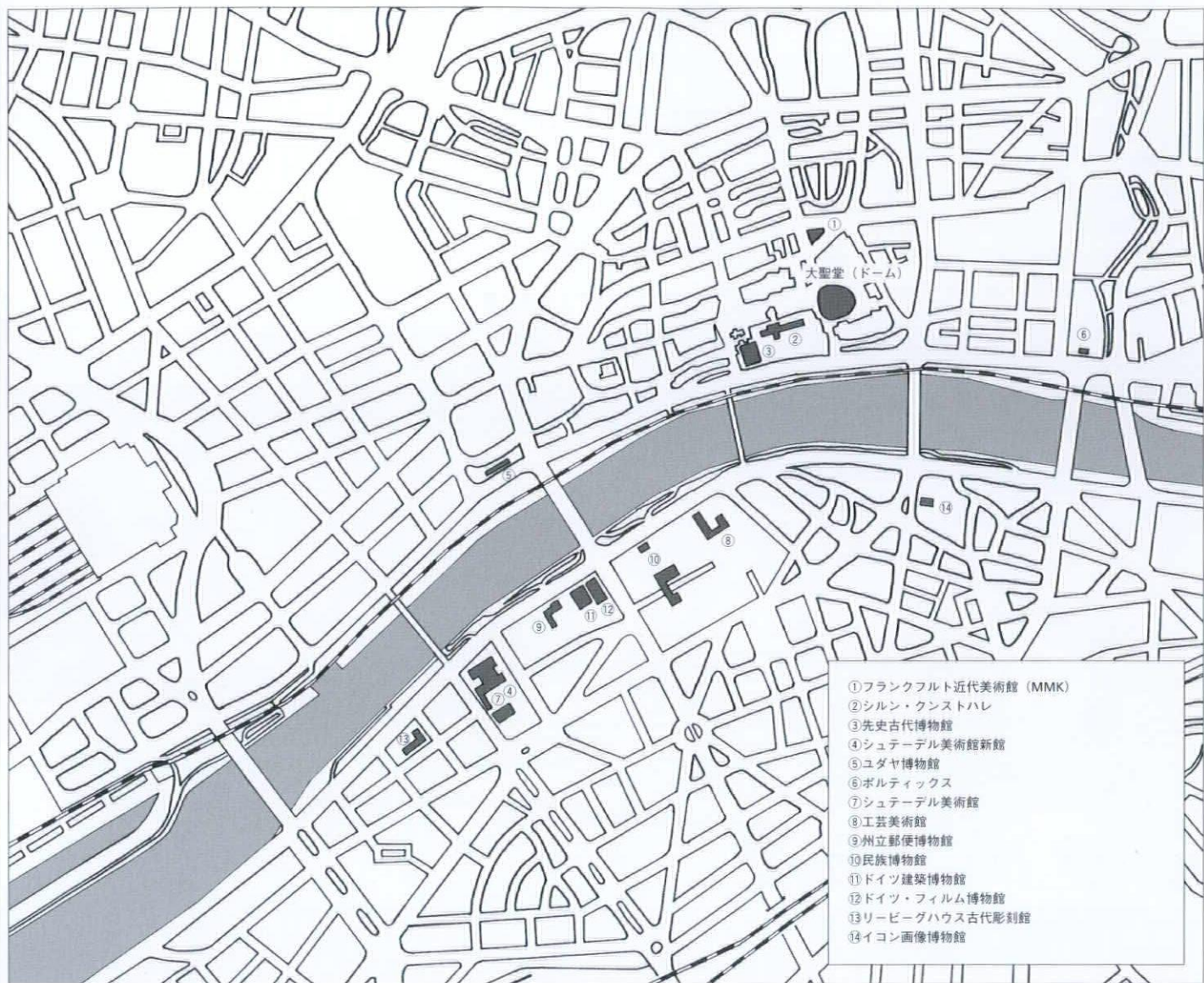
しかし、おそらく、80年代から90年代初めにかけて事態は急速に変化することになった。今日、現代美術に関心を持つ人間であれば、1990年に完成したハンス・ホライン設計の〈フランクフルト近代美術館〉(通称MMK)を、英語風に「エム・エム・ケー」と呼ばなければ、話題に参加するためのスノビッシュな資格を剥脱されたに等しく、ダンスの動向を論じるのにフォーサイス率いるフランクフルト・バレエ団を無視することはもはや誰にも許されまい。商業地区の中心部に聳えるド

イチェ・バンクのツイン・タワーの内部には、ボイスを含む現代美術のコレクションがひしめき、建築、工芸、映画、アイコン、民俗など、さまざまな領域に関する専門美術館・博物館がマイン河沿いに居並び、それを市民たちは「美術館河岸」と誇らしげに呼ぶ(ただし、ビジネス街の一角のまさに三角形の土地に建てられているMMKのことはタクシーの運転手たちは「ケーキの切れっぱし」と呼んで少し馬鹿にする気配がある。きっと彼らは世界中からやってくるいわゆる現代美術好きを自称する人間たちの本性を本能的に見抜いているのにちがいない)。

散文的な金融都市は、今や確実に、ある特殊な、世界でもあまり例をみない文化空間に変貌したのだ。そのためにひとつの美術館ではなく、13もの複数の新築、増築、あるいは改修をほどこされた博物館施設が連動するネットワークとして複合した、全体としてもひとつのみえない美術館空間を、フランクフルト・アム・マインという都市は、バブル的といってさしつかえのない好景気を背景に形

成しようとした。それが成功したのかどうかは、その全貌が出現し終えた今、ドイツ統一後、経済が停滞した今こそ静かに問われるべきであろう。

ここで、すでに日本でもしばしば紹介されるMMK(最近では京都と東京の両国立近代美術館で開催された「プロジェクト・フォー・サヴァイヴァル」展での展示活動の紹介が記憶に新しい)をはじめとしてそれらの美術館のひとつひとつを論じることは、諦めなければなるまい。むしろ、それらが複合され形成される美術館空間の質にこそ注目する必要がある。日本が同時期に県単位から市町村の単位にいたるまで無数の公立の美術館を林立させたとき、それらの多くは、規模の大小はあってもかなり酷似した、点として孤立した「総合的」な美術館であったことは否めないだろう。例えば、「現代」とはっきり名称に冠している東京都現代美術館の場合であっても、そのコレクションの形成には、府立美術館時代と東京都美術館時代の活動が重要な貢



フランクフルト・アム・マイン周辺図

地図作成＝内田 伸

献を果たしているのだが、その「総合性」をかなり意識的に「現代」によって補完しようとしているためにコレクション本来の「遺産」がまるで「遺物」のようにみえはじめてきたのは、じつに皮肉な成り行きというべきである。木場の大空間をあとにしたとき、おそらく誰もが次にどこに行こうかと途方に暮れる、あるいは、(その結果かもしれないが)どこにも行く気がなくなるのは、この美術館が孤立した「点」の鑑をまとっているからにはほかならない。

マイン南岸のいちばん外れにある〈リーピークハウス古代彫刻館〉を、例えば、フランクフルト・アム・マインの美術館巡りの起点にしてみよう。エルンスト・ウルリヒ・シュレーダーとトマス・ヴァルシャウアーというフランクフルト市の営繕部で働いていた、どちらかという地味な経歴のふたりの建築家の共作が、1990年に完成したこの彫刻館の増築部分である。19世紀末の典型的な歴史主義様式のヴィラが1907年に増築されたものの途中で放棄されていたものに目立たないよう

にさらに彼らの増築部分が接続されている。わずか718㎡の空間は建築的な個性をけっして明確に主張してはいないが、フランクフルト市の美術館計画の基準ともいえるべきものを教えてくれている。「歴史的構造とそれを満たしている実質は根本的に変更されることはなく、注意深く整備され、補完され、解釈しなおされる。すなわち、街路も広場もそのままの姿で残り、もっぱら細部に手が増えられるのだ。家々もヴィラも教会もそのままでありながら、それとは別の使われ方をするのだ。ここでは、町は、新たに生み出されるのではなく、待ち受けられているのである」(ヴィットーリオ・マニャーゴ・ランブニャーニ)。リーピークハウス古代彫刻館は、そのまま「待ち受けられるべき」町の広がりとなっている。

しかし、その隣にある〈シュテーデル美術館〉にあの有名なレンブラントの『眼をえぐられるサムソン』やフェルメールの『地理学者』を観に行く前に、マイン河の北に位置する旧市街をやはり訪れておくべきかもしれな

い。大聖堂から中央広場へと向かう軸線のマイン河よりに建てられているフランクフルト市立博物館は、1972年に建てられた重々しいブルータリズム的な打ち放しの鉄筋コンクリート建築で、華やかなスター建築家たちの作品が今やあちこちに象眼されて「ポスト・モダン」的の繚乱を呈しているフランクフルトのなかでは、どちらかといえば冴えない見逃しかねない存在である。しかし、グレコ・ローマ時代の考古学的出土品から現代の都市景観にいたるまでの市の歴史を教えてくれるこの博物館は、ランブニャーニが「変更されることはない」といっていた「歴史的構造」がいかに徹底して第二次世界大戦の連合軍の攻撃によって破壊されつくしたかを教えてくれる。崩れかけた大聖堂だけになったフランクフルト市の模型があって、攻撃のすさまじさをどんな言葉よりも雄弁に伝えてくれる。第一次世界大戦後からかなりの長期間にわたってフランクフルトの画家であったマックス・ベックマンの描いた、あの濃密な傑作『シナゴグ』(シュテーデル美術館蔵)の境界がど



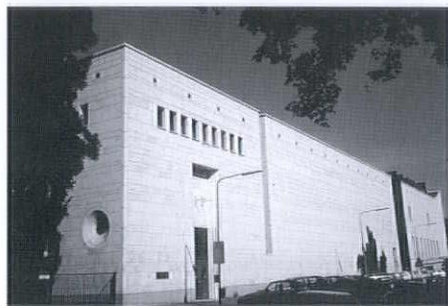
フランクフルト近代美術館 (MMK) ①



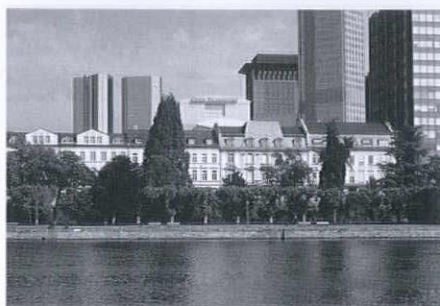
シルン・クンストハレ②



先史古代博物館③



シュテューデル美術館新館④



ユダヤ博物館⑤



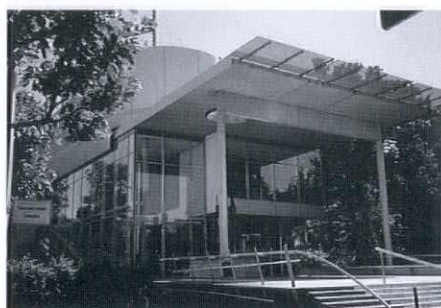
ボルティックス⑥



シュテューデル美術館⑦



工芸美術館新館⑧



州立郵便博物館⑨

の回りであるかもまったく見当がつかないほどだ(実は、そのシナゴグの奇妙な玉葱形のドームを頂いたユダヤ教会自体は、ナチがユダヤ人に対する暴力行為を大規模に露骨に開始した1938年11月8日の「水晶の夜」にすでに破壊されていたこと、つまりいわば二重に壊されたことは、あとで13の美術館施設のひとつユダヤ博物館に立ち寄れば教えられることになるだろう)。残されたのは、より正確に言うならば、「歴史的構造」そのものではなく、その「記憶」の方だったのである。

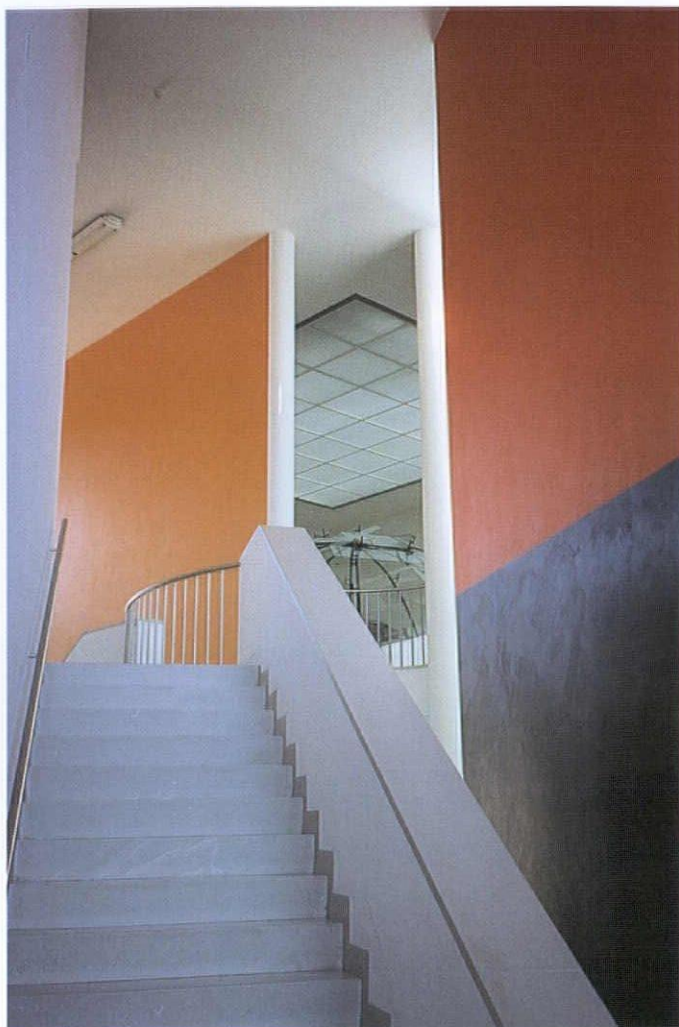
ビル・ヴィオラのビデオ・インスタレーション、ジェームズ・タレルの光の部屋、河原温のデート・ペインティングの部屋、小品とはいえ空間の制約を見事に逆手にとったナム・ジュン・パイクやボルタンスキーらの作品が常設されているMMKは、パーゼルからやってきた館長ジャン・クリストフ・アマンがあいかわらずの辣腕ぶりを発揮している。1996年6月から始まった現代作家のグループ展「舞台転換X」では、日本から参加した荒木経惟がグンター・フェルクの「壁画」の

ある狭い階段室を利用して、カラー・コピーによって歌舞伎町の空間を増殖させ、観客の視線の高さの目立つ場所に「小股開き」のショットを紛れさせ、若者たちの関心と上品な招待客たちの矜持を買っていた。「現代」がすでに「現代」を侵食しているようなゲリラ的な展示方法が、この不規則な空間分節と複雑な高低差をもったホライズの展示空間を活活性化させる有効な手立てであることをアマンはよく心得ている。できたばかりの頃には、ウィーンを想起させずにはおかない、繊細で、ある意味で鼻につく華奢なカフェの部分は、今ではビジネス街の陳腐さにゆっくりと侵食され、周囲に少し馴染んできたようにみえる。

この4000㎡強の有効面積しかないMMKがいかにも使い勝手の悪い小型美術館であるのにたいしてドーム近くの展示施設としては10000㎡を越える大型のシルン・クンストハレ(1985年竣工)は、あくまでも大規模な展覧会のための施設であるが、音楽学校や工房も併設され、文化センター的な性格が与えられている。大型とはいえ、展示空間は自然採

光による開放性の強いものであり、圧迫感はほとんど感じられない。しかし、音楽学校の音響がどうしてもエントランス・ホール(これもけっして大げさなものではない)に漏れて聞こえてきてしまい、ロンドンのバービカン・アート・ギャラリーほどではないにしても、あまり落ち着いた雰囲気であるとはいことができない。しかし、ローマ時代とカロリング朝の城壁の遺構に寄り添うように配慮されている平面プランは、この施設をけっして威圧的なものにさせていないことはやはり注目する必要がある。あくまでも大聖堂がフランクフルトの最重要のランドマークであることを認識した上で、13の博物館施設のスケールが決定され、「歴史的構造」が大切にされていることが、この実用一点張りとも見えるシルン・クンストハレの場合でも、いや、だからこそというべきか、確認できるのである。

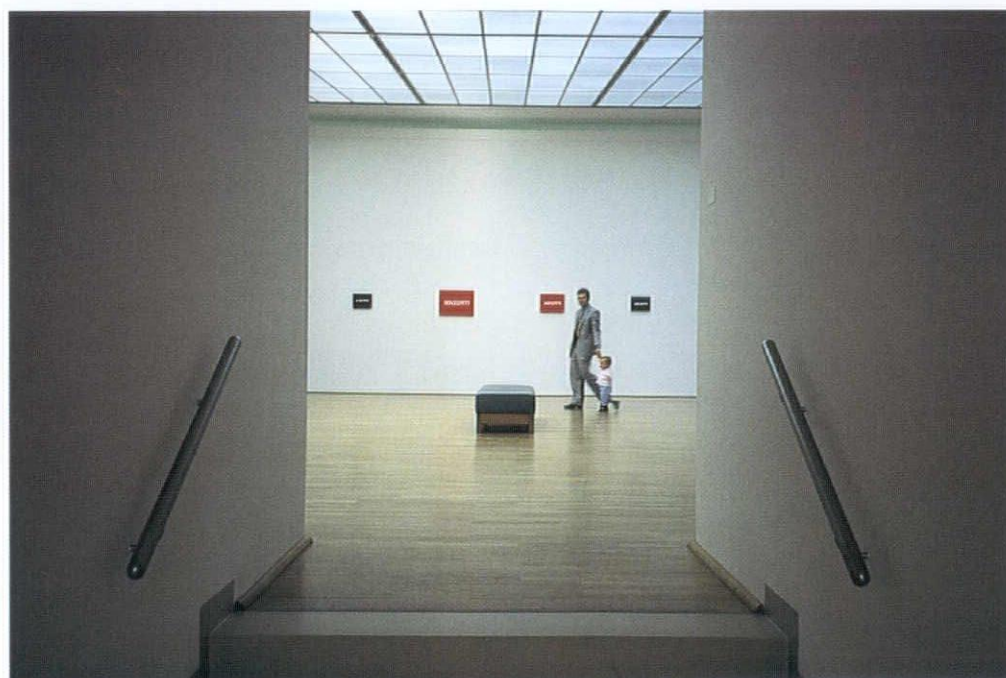
考えてみれば、オスヴァルト・マティアス・ウンガースの記念すべき傑作、〈ドイツ建築博物館〉(1984年竣工)こそ、こうした「歴史的構造」への機略に富んだアプローチにほかな



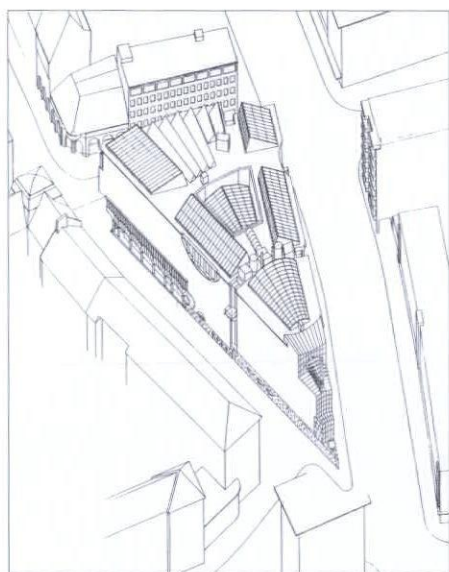
ほぼ中央部の階段室。壁面はギュンター・フェルクの作品



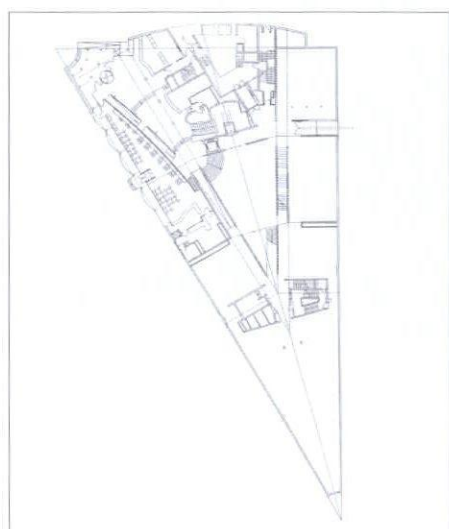
MMK3階から市街を望む。密閉性の高いMMKの数少ない息抜きの効果がある



最上階の見せ場。河原温の「日付絵画」シリーズが常設されている



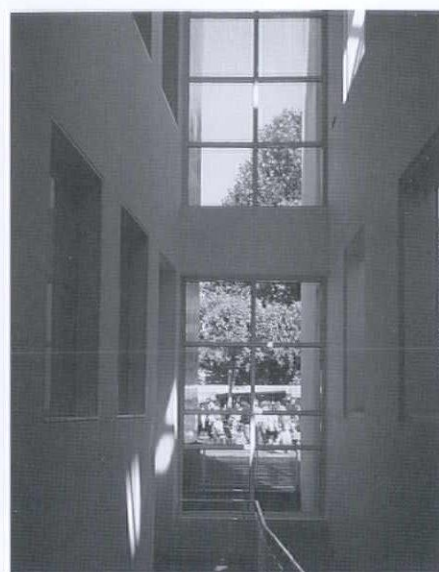
MMKアイソメ図



MMK1階平面図



工芸美術館新館。地下への階段。北側のガラス窓からはメイン河が望める



工芸博物館新館。2階展示室へと通じる階段部分



工芸博物館新館。階段室は天井からも側面からも自然光が降り注ぐ。展示室の暗さの落差が鑑賞には少しつらい

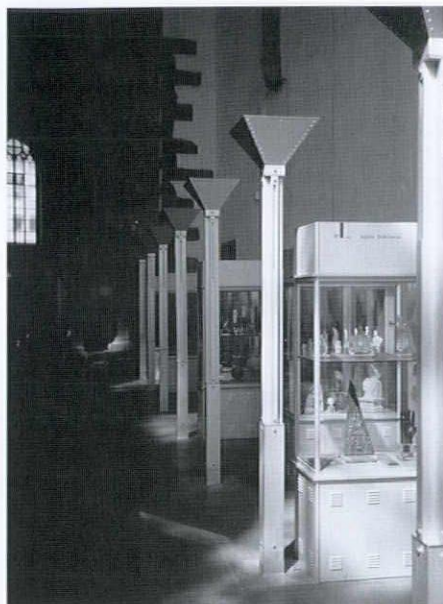
らなかったのではなかろうか。凡庸の極みともいべき既存のヴィラのファサードをそのまま残して、内部にもうひとつ建築的構造体を組み入れ、凡庸さこそが表現している「歴史的構造」そのものを展示するための実用的な空間にとどまらず、展示されるべき物へと反転させるというコンセプトは、ある意味では、日常的な経済行為に支配されてきたフランクフルトという商業都市の「歴史的構造」全体にはあえて手を加えないことによって、都市そのものを一種の展示物へと変換させるような美術館空間をつくり出すという隠されたコンセプトへとそのまま拡大していくものではなかろうか。「歴史的構造」に抗うのではなく、応えることによって逆に美術館がその「歴史的構造」をあぶりだし、いわば都市全体を美術館化するという壮大なプログラム——そのような実験としてフランクフルト市の美術館建設は疑いなく評価することができよう。

美術館河岸のシュテッデル美術館のフレマー

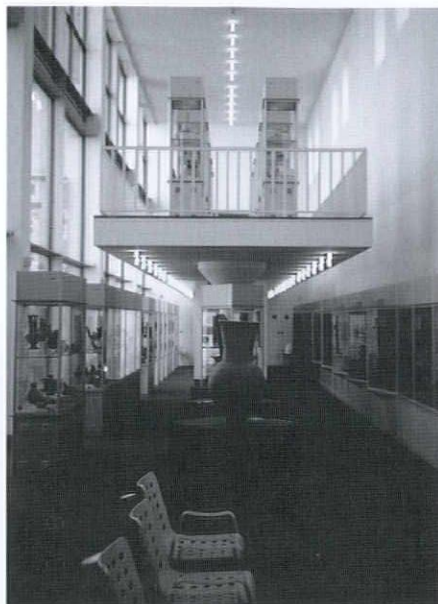
ルの画家や、クレー、ベックマン、キーファーなどの傑作群をみた後の逆上した頭には、旧館のプロポーションを基にしたグリッドを単位にするリチャード・マイヤー設計の〈工芸博物館の新館〉(1985年竣工)の透明で軽快な構造は心地よいし、はるかに小規模で際立った才気にも乏しいが、摺り鉢形を逆さにしたガラス天井の吹き抜けとなっている〈州立郵便博物館〉(1990年竣工)のメイン展示室の解放感も捨てがたい。ほとんどが内部改装であるが、メイン北岸に面してドイツ建築博物館の向かい側に建っている〈ユダヤ博物館〉は、あの音楽家を生んだことで名高いメンデルスゾーン一族の資料などによってフランクフルトのユダヤ人の苦節に満ちた歴史を教えてくれる。フランクフルトにおける精神の「歴史的構造」を知るためにはぜひとも訪れる必要がある。建築のほぼ半分(約1000㎡)が企画展示に当てられ、充実した展覧会が定期的に開催されている(1996年6月に私が訪れたときには「ユダヤ人と労働運動」という総合的な資料展が開かれていた。けっして最先端の技

術を贅沢に駆使した展示ではなかったものの、ニューヨークの最下層のユダヤ人たちが仕立て屋の仕事に従事していた「汗の部屋」の再現は、最良のイリヤ・カバコフ作品にけっして劣るものではなかった)。

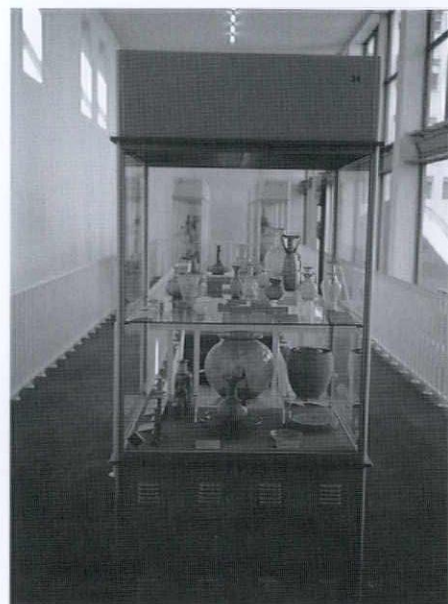
このユダヤ博物館から大聖堂に向かってウンターメイン橋を右手に過ぎて歩いていくと左手のやや奥まったところにカルメル会修道院を改修し、増築した〈先史古代博物館〉(1989年竣工)がある。カルメル会修道院教会の南側の翼部に接続するように建てられ、赤と白の砂岩のプレートで表面が仕上げられ、プレートの中央部には留め金が輝いて美しいリズム感を生み出している。北側に廻りこめば、微妙な曲線を壁面が描きだしており、〈ノルトライン・ヴェストファーレン州立美術館の新館〉を知っている人ならば、同じ建築家(ヨーゼフ・パウル・クライヒウス)であることが直感できるかもしれない。教会内部のゴシック・アーチの空間に配されたガラス・ケースも美しいが、それ以上に、新館の低めの天井高とガラス・ケース内の小さな考



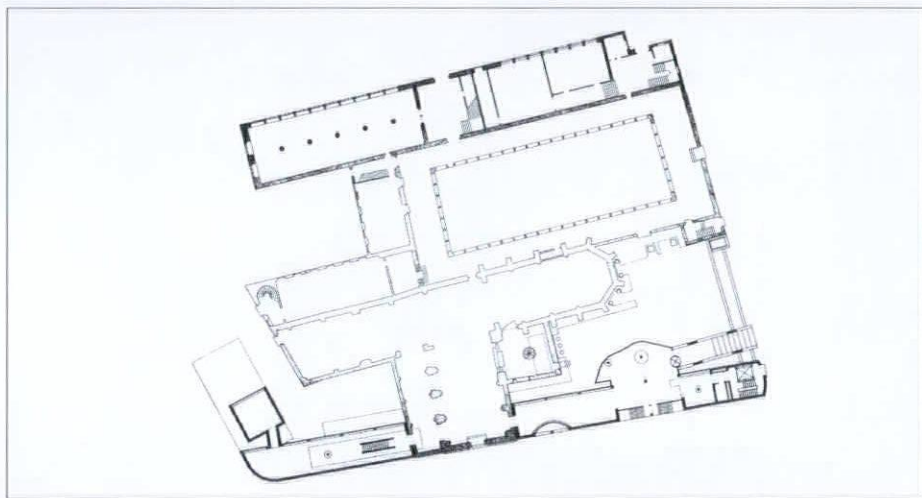
先史古代博物館。教会部分の展示。教会そのものにはほとんど手が加えられていない



先史古代博物館新館。天井高は教会のものと同じだが、中2階がありそこにガラスケースが並ぶ



先史古代博物館のガラスケース。構造体そのものの存在感を抑制させ、周囲へと溶け込ませる効果がある



先史古代博物館1階平面図



先史古代博物館に接続する修道院のギャラリー。歴史がうまくパッケージされ、現代へと接続されている

古学的遺物のスケールがちょうどよく調和しており、そのふたつの異質の空間の対比が印象的である。また、修道院の中庭は強化ガラスで外気を遮断し、回廊部分と修道院内部がまさにギャラリーとなって地元のアーティストの作品が並べられている。この宗教建築は、博物館・ギャラリー施設として見事に現代に蘇生したといっても過言ではなからう。

メイン河北岸をさらに下って、ベックマンが何度も描いた有名なアイゼルナー・シュテーク（鉄橋）を過ぎ、もうひとつ橋を渡らずにそのままゆくとやがてオーバーメイン橋にたどりつく。その橋のたもとにもうひとつ、とても小さな、しかし、けっして忘れることのできない展示空間がある。〈ポルティクス〉。まさに第二次世界大戦でほとんどが破壊されてしまった1848年に建てられた市立図書館のわずかに残った南側ファサード（＝ポルティクス）に合体した施設である。床面積140㎡、総工費33万マルク、1987年竣工。ギャラリーの両側面にあるオフィス、お手洗いなどは、まさに工事用コンテナがそのまま4つ使わ

れているだけである。この考えられるかぎり簡素な展示空間は、もっぱら現代美術のための新作発表の場に用いられている（1988年に制作されたゲルハルト・リヒターの『バーダー・マインホーフ事件』の連作もここで発表されている）。もちろん、この信じられないほどに小さな「美術館」が世界中に知られているのは、そのキュレーションにかかわっているカスパー・ケーニヒの発言力に負うところが少なくない。やはり、どんな美術館をつくらうとも、最後は人がそれを動かすのだ。と、こんな当たり前のことを考えながら、もう一度、オーバーメイン橋から「美術館河岸」を眺めやってみる。ケーニヒ、アマン、あるいはフランクフルト・クンストフェラインの古典的な顎ひげのペーター・バイヤーマイヤーなどの実力派キュレーターたちの顔が浮かんでくる。彼らは、この町で存分に活躍し、フランクフルトを現代美術の発信地に確かに変貌させた。しかし、やがて彼らも「歴史的構造」のなかに静かに回収されていくだろう。変わらないのはメイン河の流れだけだ。この河が

あるからこそ、「歴史的構造」は、現在に息づくのではあるまいか。「隅田川……」とつぶやきながら、東京の木場のあたりとそのメインの眺めをわたしは重ねていたのだった。

●みずさわ・つとむ／神奈川県立近代美術館 主任学芸員

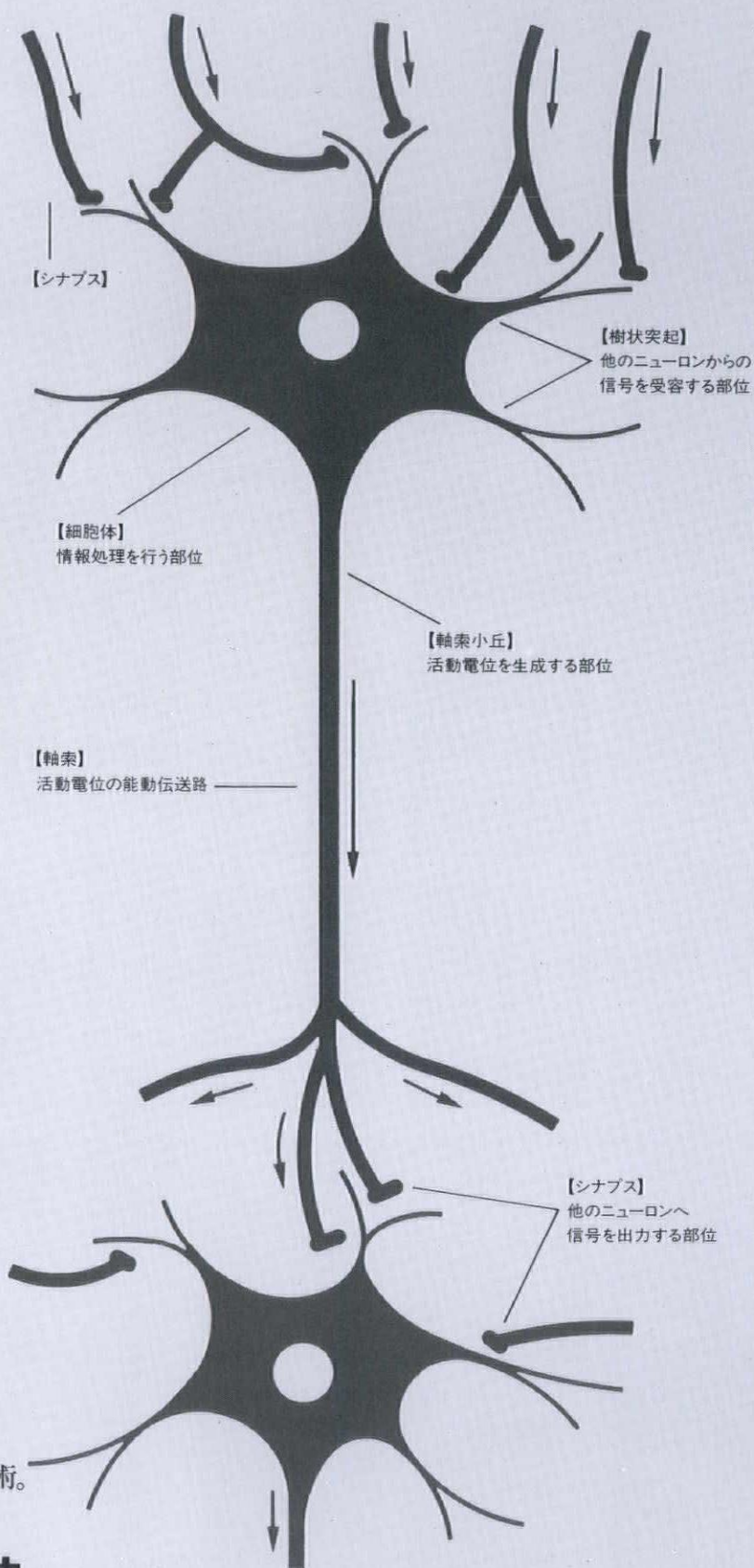
美術館データ

●フランクフルト近代美術館
（Museum für Moderne Kunst）
竣工年＝1990年
設計者＝ハンス・ホライン（Hans Hollein）

図版出典

Museum Architektur in Frankfurt 1980-1990,
Prestel-Verlag

21世紀の空調は、人間の脳神経がお手本になる。



私たちは「ニューラルネットワーク」理論を応用した、次世代の空調システムの開発に取り組んでいます。誰もが心地よい空気を作り出すことは、本来、極めて微妙なコントロールを必要とします。もっと簡単かつ鋭敏に、人が求める快適さを感じできないだろうか。そのテーマに答えるべく、私たちは生体の脳回路に着目。脳の神経細胞が行う高度な学習機能や適応能力を応用することで、エア・デザインング技術の新たな主流となるシステム研究を始めています。

東洋熱工業株式会社 〒104 東京都中央区京橋2-5-12 TEL 03-3562-1351

時代の呼吸に応える技術。



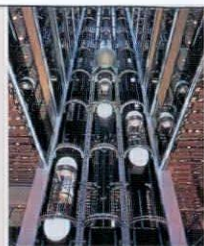
東 熱

HITACHI

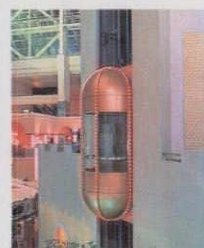
広がる生活空間を、
やさしく、
速やかに結びます。

日立エレベーター・エスカレーター

地上数百メートルの超高層ビルから一戸建ての住宅まで。日立は、ますます多層化する暮らしを、より快適にするエレベーター・エスカレーターの研究・開発を続けています。たとえば、定格速度810m/分の超高速エレベーターや、身近な暮らしの中で利用される車いす用ステップ付きエスカレーター、ホームエレベーターなど、施設に応じた設備で、誰もが住みやすい街づくりをサポートします。



Hotel & Residence



Public Space



Office Building



Shopping Center



超高速エレベーターから、ホームエレベーターまで。

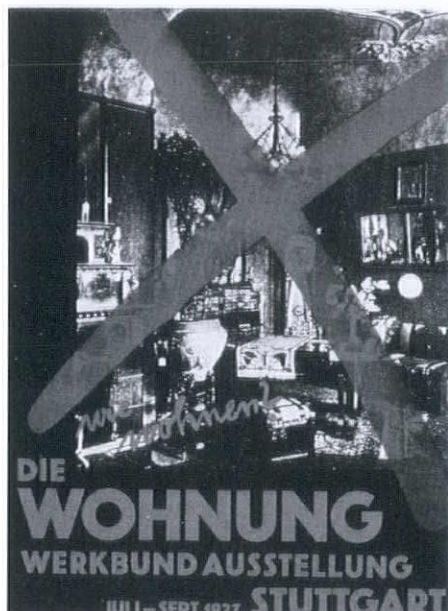


株式会社 日立製作所

お問い合わせは＝電機システム事業本部 昇降機事業部/電機システム統括営業本部 〒101-10 東京都千代田区神田駿河台四丁目6番地
電話/(03)3258-1111(大代)または最寄りの支社へ 北海道(011)261-3131・東北(022)223-0121・横浜(045)451-5000
北陸(0764)33-8511・中部(052)243-3111・関西(06)616-1111・中国(082)223-4111・四国(0878)31-2111・九州(092)852-1111

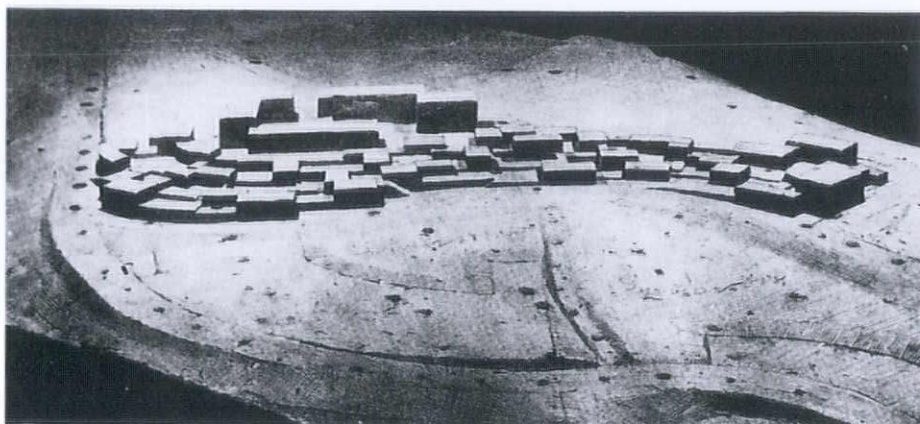
ワイセンホーフ・ジードルング住宅展の時代背景とその意義

長谷川 章

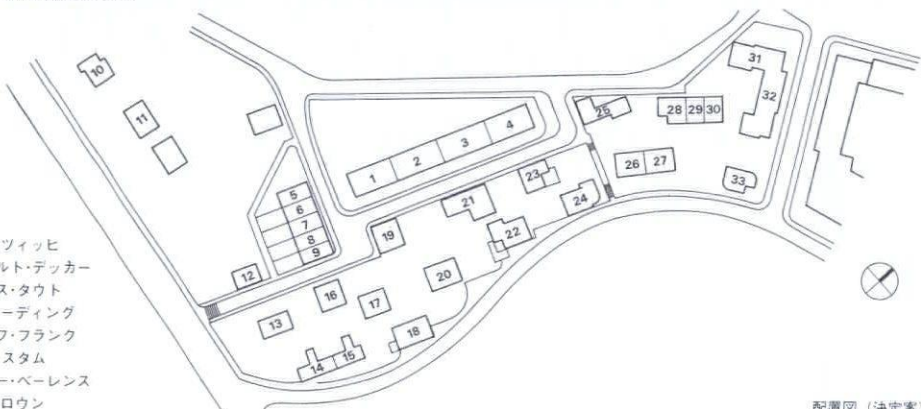


当時のポスター。黒地に赤い文字で「如何に住むべきか？」と書かれている

- | | |
|-----------------------------|-------------------|
| 1~4: ルートヴィッヒ・ミース・ファン・デル・ローエ | 20: ハンス・ベルツィッヒ |
| 5~9: ヤコプス・ヨハネス・ピーテル・アウト | 21~22: リヒャルト・デッカー |
| 10: ヴィクトル・ブルジョア | 23~24: マックス・タウト |
| 11~12: アドルフ・グスタフ・シュネッケ | 25: アドルフ・ラーディング |
| 13~15: ル・コルビュジエ+ピエール・ジャンヌレ | 26~27: ヨーゼフ・フランク |
| 16~17: ヴァルター・グロピウス | 28~30: マルト・スタム |
| 18: ルートヴィッヒ・ヒルパーズアイマー | 31~32: ペーター・ペーレンス |
| 19: ブルーノ・タウト | 33: ハンス・シャロウン |



当初の計画案モデル



配置図（決定案）

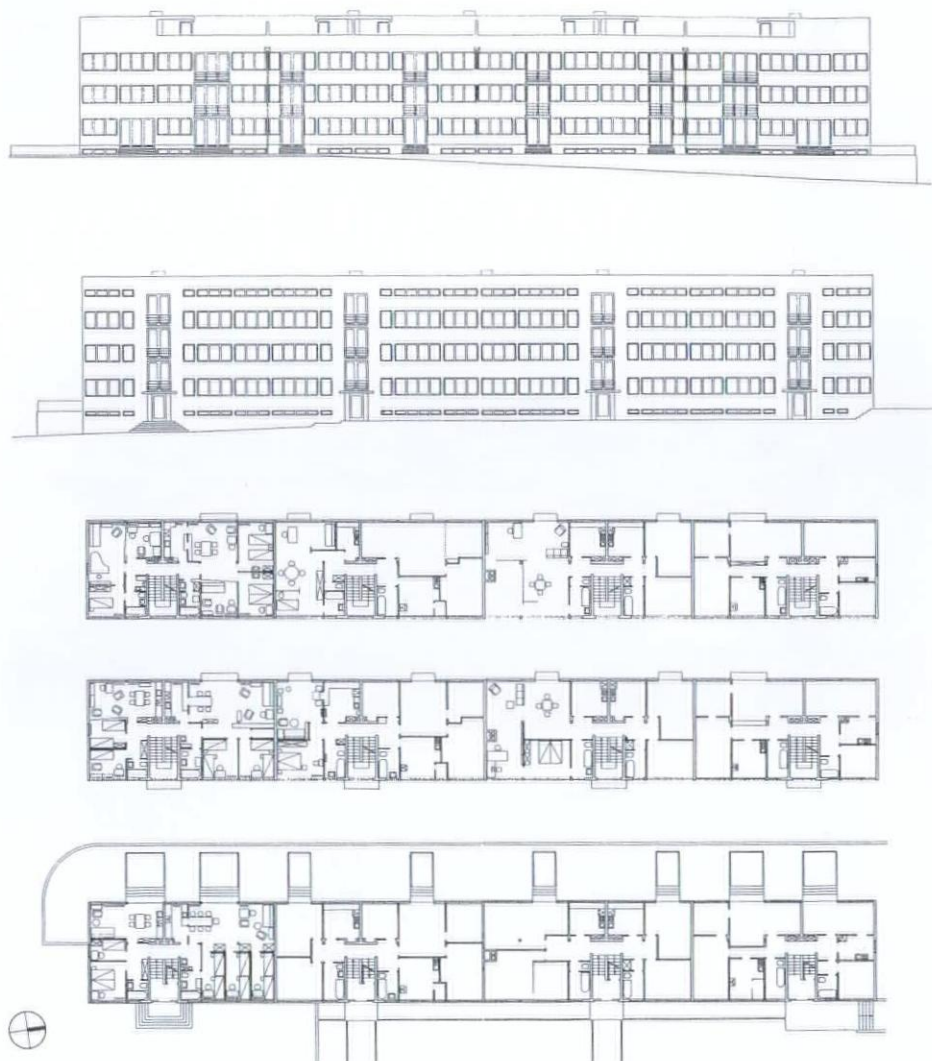
ドイツの近代住宅建築の幕開けを象徴したワイセンホーフでの住宅展を紹介する展覧会がギャラリー・タイセイで開催されている。「モダン・ハウジングの実験場」というこの展覧会のタイトルは、まさにこの1927年に開催された当時のこのジードルングの主旨そのものであり、その全貌が俯瞰できる貴重な機会であると言えよう。オープニングにはシュトゥットガルトからカーリン・キルシュ教授が招かれ、彼女の講演会と広島大学杉本俊多教授との対談が行われた。この企画展はドイツ対外文化交流研究所による世界巡回展の一貫であり日本展が13ヶ国目である。そこでこれを機にこのワイセンホーフ・ジードルングについて改めて考え直してみたいと思う。

ドイツ工作連盟の野望

そもそもこの事業主体となったドイツ工作連盟について述べてはなるまい。ドイツ工作連盟は実は現在も存続している。キルシュ教授の話によれば会員は現在4000名を数えるのだという。創設は1907年10月に遡る。当時

の通産省の役人であったヘルマン・ムテジウスが音頭をとってミュンヘンにペーター・ペーレンス、テオドル・フィッシャー、ヨーゼフ・ホフマン、ヨーゼフ・マリア・オルブリヒといった建築家やヘレラウのドイツ工房、ミュンヘンの芸術・工芸連盟、ウィーン工房、ブルックマン銀製品工房、イエナのディーデリックス出版社などの企業を集めて設立した。事の発端は19世紀末にイギリスの水晶宮で開催された世界博覧会においてドイツの製品が、その素材やデザインにおいていかにも古臭く世界市場では商品価値がないことを痛感させられたからである。また産業革命に遅れをとったドイツはこの大量生産の時代に確かに遅れを取っていたことは事実である。当時の先進国はイギリスである。その建築の状況を調査するためにドイツから派遣されたのがこのムテジウスであり、1904年にはその報告書ともいべき『イギリスの住宅』が出版されたが、1911年にヴァスムート社からライトの作品集が出版されるまでは、ドイツの建築家にとって座右の書となっていたといわれる。ま

たムテジウスは当時のドイツの芸術アカデミーの人事を司り、帰国直後ベルツィッヒをドレスラウのアカデミーの校長に、ブルーノ・パウルをベルリンのアカデミー、そしてペーレンスをデュッセルドルフのアカデミーの校長にそれぞれ任命した。こうしてムテジウスは建築や工芸品を職人の世界から工業の世界へと移行させることに尽力した。しかしその野望は1914年に開催されたドイツ工作連盟ケルン博では失敗に終わった。それは当時の表現主義建築の花園と化し、有名なオルブリヒとムテジウスの芸術論争が繰り広げられた。1924年ヴェルテンブルク支部において「フォルム」展が開催されたが、これが契機となった。この装飾のないフォルムを追求した展覧会に招かれたのがミースである。ここでこの思想を住宅建築に反映した展覧会のアイデアがうまれた。1925年3月にベルリンでの工作連盟の理事会で承認された。ミースとヴァルター・クルト・ペーレントが顧問に任命され1926年には参加建築家が決定された。1927年3月に着工され、そのオープニングは同年7



ミース・ファン・デル・ローエ ハウス1 (アパートメント、現存)

月23日という突貫工事が繰り広げられたのである。しかし世界中から50万人を集めたこの住宅展は大成功をおさめ9月の閉会後も訪れる人は絶えなかったといわれる。

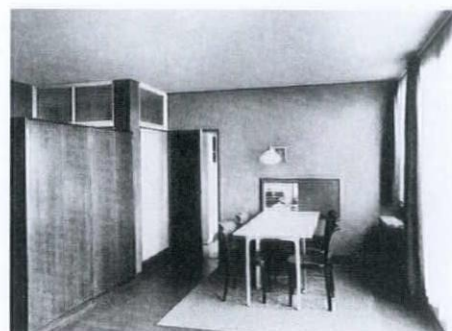
バラ色の建築家たち

実はこの展覧会は1930年にベルリンで計画されていた『世界建築博覧会』のための小手調べのようなものであった。しかし結果として経済恐慌によりこの博覧会は縮小されワイセンホーフ・ジードルングの方が歴史的な1ページを華やかに飾ることとなった。この中心的会場と並んで工芸館では構法や家具製品の展示が行われ、また別の展示会場では新しい建築の時代を予感させる諸外国の建築作品が写真パネルで紹介された。

ワイセンホーフ・ジードルング展に招待する建築家で一番もめたのはル・コルビュジエであった。1926年8月の会議ではスイス系フランス人である彼は「ドイツ民族の敵」であるとしてリストから外されそうになった。それを説得したのがミースである。当時ル・

コルビュジエは世界的スターであり、この住宅展を成功させるためにも彼は不可欠な建築家であったのだ。フーゴー・ヘーリンクはベルリンのツェーレンドルフの工事が住境で参加できなかった。またH.テセノウやE.メンデルゾーンも参加が見送られ、その3名に代わってリストに加えられたのがB.タウト、H.ペルツイヒ、H.シャロウンであった。このB.タウトは弟マックスほど住宅建築では有名ではなく、マックスが推薦して兄ブルーノの参加が促された経緯がある。こうして1926年11月に15名の招待建築家が確定された。後に2名が追加され17名の建築家により21棟63戸の住宅が建設されたのである。

しかし順調に現場が進んだわけではなかった。特にル・コルビュジエの場合は悲惨であった。この会場の南端に建つ彼の住宅は予定の工費を倍以上に上回った。ミースはル・コルビュジエに依頼するときは35RM(ライヒスマルク) / m²で約720m²、総工費25,000RMの条件をつけた。しかし結果として西側に建つ住宅は82RM / m²で総工費は64,695RMとなっ



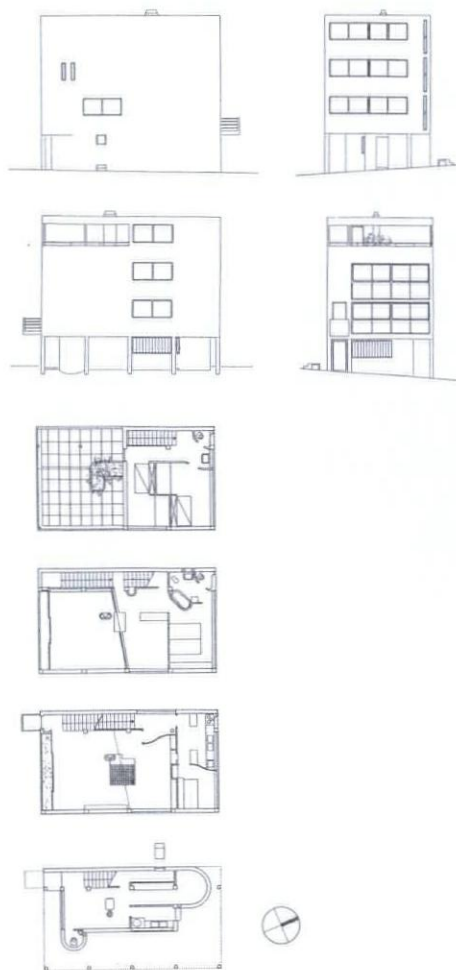
リビング



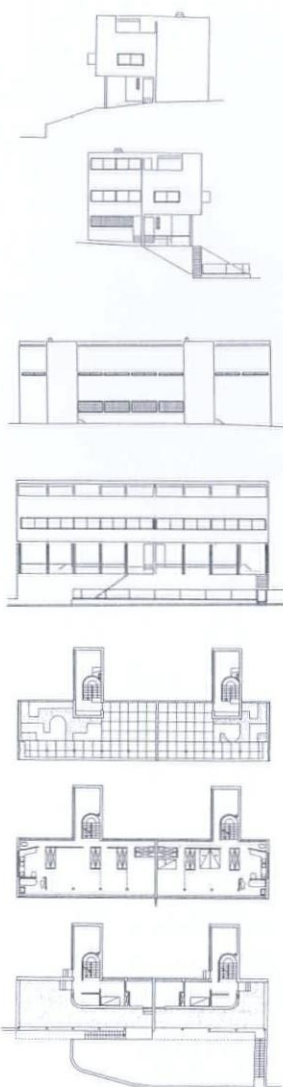
コルビュジエとミース (シュトゥットガルト、1926年11月22日)

た。また東側に建つ住宅も大幅に予算オーバーしており市当局から北側半分の建設中止が勧告された。また彼は丘の傾斜を読み間違えこの2棟を渡るブリッジができなかったのである。こうして当時彼のアトリエに勤めていたアルフレッド・ロートが現場を担当しル・コルビュジエはパリで途方に暮れていた。こうした苦労は彼ばかりではなかったが、それぞれの建築家に支払われた設計料は一律300万円程度であったといわれる。

これは80年代ベルリンで行われたIBA建築展でも同様なことが生じたが、建築家は設計だけ委託され施工段階はすべて市当局が勝手に行った。そのためヒルベルザイマーの住宅では安価な既製サッシュが取り付けられ内部の家具も市販の既製品が並べられ、竣工後見に来た本人が自分で設計した住宅の前を通り過ぎようとした程であった。こうしたことは彼の住宅だけではなかった。ほとんどの住宅は当初予算を5割上回りシャロウンの住宅においては予算の2.5倍という途方もないものとなった。またグロピウスの住宅ではデッサウの



ル・コルビュジエ+P・ジャンヌレ ハウス13 (1世帯住宅、現存)



ル・コルビュジエ+P・ジャンヌレ ハウス14、15 (2世帯住宅、現存)



南側からハウス13 (左) とハウス14、15 (右) を望む



ユンカース社による最新工法により建築の工業化、規格化、プレハブ化を提案したが結果として組積造となり漆喰を塗って仕上げられた。これで浮いた工費がル・コルビュジエの住宅に割り当てられた。しかしこうして建てられた住宅の内オープニングに間に合ったのは半数に過ぎなかったのである。

しかし私が注目したのは当時マルト・スタムの住宅がラベンダーブルーに塗り込められていたということだ。これはスタムが白を指示していたものが現場で勝手に塗られていたのである。そしてタウトの住宅は指示通りに「絵の具箱をひっくり返した」ように原色で各面が塗り分けられていた。今回の展示資料の中に当時の画家が描いたワイセンホーフ・ジードルングの絵があるが、そこには赤と黄色に染まったタウトの住宅が確認できる。その赤い外壁に西日が反射して隣の家の家が真赤に染まり消防車が駆けつけたという嘘のようなエピソードが語り継がれている。そしてミースの住宅はなんとバラ色に塗り込められていたのである。現在ではなぜか「白い住

宅展」というイメージが固定しつつあるがそれは単なる神話に過ぎなかったようだ。そもそもこの敷地の元の地主がワイセン (白) 氏であっただけであって、それがいつの間にか混同されて「ワイセンホーフ・ジードルング」=「白い住宅展」と盲信する人が出てきたのだろう。

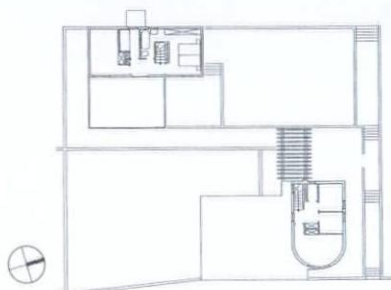
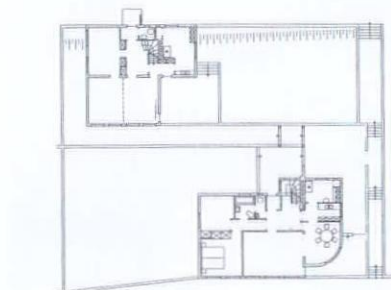
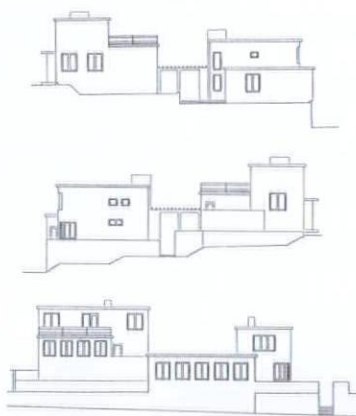
住宅の時代

しかしなぜ住宅展なのであろうか。もう少し気の利いた博覧会があっても良さそうなものだ。しかし当時注目されていたのは住宅なのである。そもそも第一次世界大戦後ドイツはザール地方を譲渡するなど国土を失うばかりでなく住宅にも多くの被害がでた。このためワイマール時代においては経済が復興するには国民の住宅を供給することが火急の課題となったのである。しかしそれだけではない。ワイマール共和国はこれまでの古典的な保守国家を脱皮して新しい社会を目指していた。工業化は都市の人口集中を助長し、それまで農業国であったドイツに都市の中産階級を生

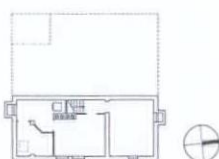
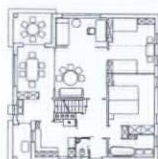
み出し女性も社会に積極的に出ていった。

フランクフルト・キッチン設計者として有名なマルガレーテ・シュッテ=リホツキイは主婦の台所での作業を分析して動線に即した効率の良い台所を提案した。それは国鉄の食堂車の台所から発想したものであるが、現在のシステム・キッチンにも遜色はない。女性の家事労働からの解放が叫ばれたのだ。さらに興味深いのはドイツ工作連盟を創設したムテジウスの設計した集合住宅である。それは「アインキュッヘンハウス (台所がひとつの集合住宅)」と呼ばれた。4階建のこのアパートには16世帯入居できるが部屋には台所がない。地下階がすべて台所となっており住人の注文ですべての食事はリフトで各世帯に届けられるようになっていた。働く女性のための極限的住宅だ。

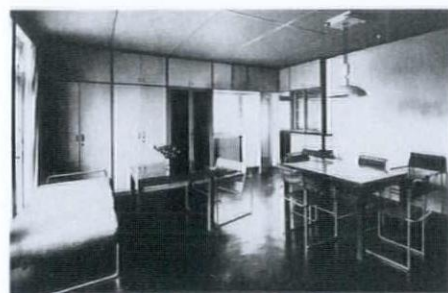
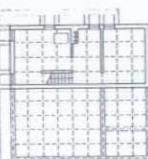
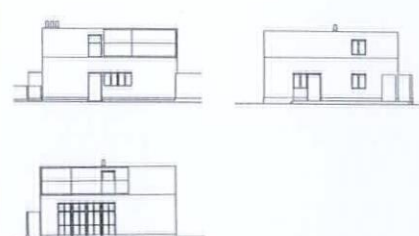
さらに個々の住宅建築ばかりでなく田園都市協会によるタウンプランニングが進められて新しい住宅都市が次々と建設され始めた。パウハウスのマイスターハウスが1926年に完成し、テルテンのジードルングは1928年に完



マックス・タウト ハウス24 (1世帯住宅)



ブルーノ・タウト ハウス19 (1世帯住宅)



ヴァルター・グロピウス ハウス16 (1世帯住宅)

成している。またタウトのブリッツ大ジードルンクが着工されたのが1926年である。その翌年にこのワイセンホーフ・ジードルング展が開催されている。住宅は新しい生活、新しい社会、新しい技術を象徴するものとしてドイツばかりでなくヨーロッパ全土で注目されたのである。

現代への位置付け

ミースがこのワイセンホーフ・ジードルング展について工作連盟機関誌『フォルム』の中で記しているのは「合理化と形式化」であった。しかしあくまで「方向性を絞らずにそれぞれの建築家にこの時代精神の表現としての住宅を設計してもらい建築家個人の個性が出るような実験的住宅展」として捉え画一化を避けようとしていたようだ。いや「結果を問わない」とまで言い切っているのである。またミースが勧めたのは他の芸術家たちとのコラボレーションである。例えばミースの設計した24戸の住宅では29人の建築家に内装を委託している。しかしそこで彼が指示したの

は色や材質ではない。つまり「若い独身男性の住居」であるとか「キャリアウーマンの住居」というように都市が生んだ新しいタイプの市民のための空間の提案を試みているのである。

こうしたミースの提示した課題は現在の我々の都市住居の課題でもある。しかしすでに70前から取り組まれていたとすれば、それは当時からほとんど住宅は進歩していない、あるいは住宅という空間が新しい社会の問題を解決する手段としては相応しくないということではないだろうか。ル・コルビュジエが追求したコンクリートによるピロティや連想窓といった当時の「新しい住宅」は今となってはありきたりなデザインにまで陥っている。それを決定付けたのは70年代にリチャード・マイヤーが「木造」でル・コルビュジエを洗練させたような真っ白な別荘でデビューした時であろう。あの時代精神を担って作り出されたワイセンホーフ・ジードルングは単なるファッションとして70年代に生まれ変わった。その建築が生み出された時代や国といった背

景を一切無視して単なる形態として現在に継承されてしまっている。ワイセンホーフ・ジードルングは「時代の象徴としての住宅」でありそれを踏まえずに形態だけ見ては「森」は見えない。ワイセンホーフ・ジードルングの建築家たちは時代の鏡として建築に時代を映し出す事に成功したが、それを現在われわれが果たして読み取れるのだろうか。今回のワイセンホーフ・ジードルングの展覧会は観る者にとって一種の踏み絵のように思われた。

●はせがわ・あきら／建築家、東京造形大学助教授

モダン・ハウジングの実験場
ワイセンホーフジードルング1927-
会期＝1997年6月30日～8月29日
会場＝ギャラリー・タイセイ
図版提供、協力＝ギャラリー・タイセイ

『夢の場所・夢の建築』

吉武泰水＝著

A5判 200頁

工作舎 2500円

夢の中に現れた建築、空間をテーマに、25年にわたる自らの夢の記録から、なぜ夢には自分が育った場所がよく現れるのか、夢に現れる建築、空間はどういう場所なのか、といった問題に考察を加える。また、横尾忠則、F.カフカなど東西の夢の記録者達の見た建築空間をも読み解く。造本、杉浦康平。



『Anyone』

磯崎新・浅田彰＝監修

A5判 300頁

NTT出版 3400円

1991年から2001年までの10年間に、毎年1回開催される「Any」コンファレンス第1回「Anyone」の増補改訂版。特別鼎談「ANYコンファレンスの軌跡」を掲載。磯崎新、浅田彰、田中純が過去7回のコンファレンスを振り返る。他に、デリダ、アイゼンマンによる往復書簡なども掲載。



『新世代建築家シリーズ——カンボバエザ』

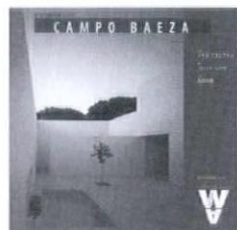
O.リエラオヘーダル・L.H.グエッラ＝編

西森陸雄＝監修

A4変形版 132頁

グラフィック社 2500円

次世代を担う若手建築家を紹介する新シリーズの第1弾。今回のアルベルト・カンボバエザはスペインに生まれ、現在コーネル大学、E.T.H.チューリッヒ、ペンシルヴェニア大学などで教鞭を執る。数々の賞を受賞し、スペインでは多数の公共建築を手掛ける。



『agorabrix 1991-1997』

鈴木豊＝写真

B4変形判 114頁

国代耐火工業所 12000円

アゴラブリックスを使用した建築を、外装に焦点を当てて撮影、それぞれの作品が持つテクスチャの特徴を表現して、一般の竣工写真とは一線を画している。多木浩二によるテキストの他、アゴラブリックスを使う現場の声として大野幸、東泰規、安田幸一ら3人の建築家による座談会も収録。



『ザ・ラスベガス』

武藤聖一＝著

A4判 180頁

商店建築社 4667円

商店建築別冊88。ギャンブルの街「ラスベガス」はここ数年で変身を図り、現在では家族連れで楽しめるアミューズメント・シティとなっている。本書ではホテル+カジノ、レストランなどを豊富な写真で紹介。榎本弘之による「ラスベガスの建築——解説のための鍵」を併載。



『風景のコスモロジー』

吉村元男＝著

B5判 222頁

鹿島出版会 1800円

膨張し続ける現代文明は、地球と共生できるのか。著者はこれに対する答を古代世界のコスモロジーに求め、〈新梅田シティ〉や〈万博記念公園〉などのランドスケープを行っている。環境保全が急務である今、著者の言うような思い切った行動が必要かもしれない。



日立電線

情報とエネルギーの
ネットワークをつくる
日立電線



情報やエネルギーを伝える技術を中心に、人と人、人と世界を結ぶグローバルなネットワークをつくり、「私達の住む地球をまわってくつむ」。日立電線は、いま、快適で豊かな暮らしの創造をめざして多彩な活動を展開しています。21世紀に向かって、ますます進展する情報化社会——たえず革新を続ける情報・通信、エレクトロニクス、エネルギーの世界でひとつの大きな役割を担っているもの——それは、ハイテク技術を駆使した日立電線の製品です。

日立電線株式会社 東京(03)3216-1616

書評

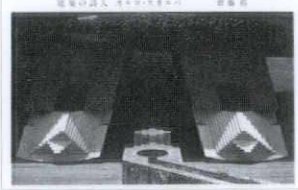
『建築の詩人 カルロ・スカルパ』

齋藤裕＝著

300×300mm 264頁

TOTO出版 9524円

CARLO SCARPA



評者＝

長尾重武

カルロ・スカルパ頌

——詩人、建築家への愛

1978年暮れ、日本オリベッティ社の友人から電話で、カルロ・スカルパが仙台の藤崎百貨店の階段から転げ落ち、入院したと連絡が入った。間もなくスカルパは入院先の病院で他界した。まったく思いがけない出来事だった。スカルパの年譜、伝記には必ず「仙台で没す」と記されるのか、と考えると感慨深かった。

スカルパをめぐる、建築家が書きたい文章に久しぶりに出会った。齋藤裕「虚構への夢想」である。齋藤の写真で綴るカルロ・スカルパ作品集の巻頭を飾るこの一文は、すべて〈プリオン家の墓地〉に捧げられ、建築と敷地について、情熱をかためて感じとり、理解しようとする試みが綴られたものだ。

「建築には芸術となる可能性がある。それは墓地をつくること以外にない」。アドルフ・ロースの文章をエピグラムとして引きながら、時空の交差点、スカルパ・ステップ、織りなす光、浮かぶ建築、魂をつなぐ水(以上小見出し)について論じながら、著者の対象への肉迫が、読んでいる者を静かな思考へと誘うのである。プリオン家の墓地は、デザインが優れていることで有名な家電メーカー、プリオン・ヴェガ社を一代で築き上げたジュゼッペ・プリオン没後に、息子のエンニョ・プリオンによって発意された広大な墓地である。齋藤はこの墓地を8度も訪れ、ある日は夜明けから日没までこの地に佇んだという。北イタリアのトレヴィゾ地方の片田舎、サン・ヴィートの共同墓地の一角を占めるこの墓地をこの20年ほどの間にこれほど度々訪ねた人は稀だろう。そして、それだけでは足りず、カルロ・スカルパの息子、トビア・スカルパを訪ね、エンニョ・プリオンにインタビ

ューを行っている。このインタビュー記事がやはり掲載されていて、名作の生まれる瞬間と建設のプロセスを語っていて興味津々たるものがある。

カルロ・スカルパを追えば、当然、スカルパ最後の助手、豊田博之に出会うだろう。本書は齋藤裕を中心として、豊田がスカルパ論を書き、古谷誠章がカルロ・スカルパの作品年譜、解説を記して一冊に仕立て上げられた。古谷はルガーノのマリオ・ボッタ事務所に勤務した経験を持つ。

すでに、齋藤裕は同じ出版社から『ルイス・バラガンの建築』と『フェリクス・キャンデラの世界』を出している。齋藤の作品を改めて見てみると、ていねいな作り方の中に一貫した姿勢が見て取れる一方で、全体として見れば色々な要素が混在していて面白い。本書『カルロ・スカルパ』を読むと、彼が最もこだわり続けているものは何かが見えてくるような気がする。ルイス・バラガンへのこだわりも彼らしく思われるのだが、彼にとって、やはりスカルパの方が重いのではないか。

豊田博之とも久しぶりでこの本の中で再会した。彼の「スカルパが奏でる詩への軌跡」は、スカルパの最後の助手らしく「職人と生き続けるスカルパ」を描き出していて感銘深い。ものをつくるとはどういうことか、という本質的な問いにひとつの答えを与えているからである。しかしその答えを実行するのは難しい。

いずれにしても、本書は建築の面白さ、奥深さ、豊かさを教えてくれる優れた一冊である。

●ながお・しげたけ／武蔵野美術大学教授

Metropolitan Library

9月の評者＝

橋爪紳也

『ボケベル・ケータイ主義』は、携帯電話やPHS、ボケベルなどの「移動体通信メディア」を「ケータイ・メディア」と認識、その普及が開きつつある新しいライフ・スタイルと、コミュニケーションの変容について論じる意欲的な論集である。

富田論文は、「インティメイト・ストレンジャーの時代」の到来を予告する。特定の場所を繋ぐ従来の電話と比べて、「ケータイ・メディア」は人と人とを直接連絡することから、利用者同士の「親密性」は高くなる。ただ、「留守電機能」を活用すれば、その関係性をうまく切断することができる。またボケベルや電子メールでの情報交換は、一方通行のメディアを擬似的に双方向に利用しているに過ぎない。

結果、私達は、好きな時に好きな人に「発信」でき、好きな時に欲する情報だけを「受信」できる。

互いのペースを乱さずに他者との親密さ、疎遠さを調節できる。コミュニケーションを成立させない、わざと遅延させるという「選択肢」も生まれる。

そこにおいて、新しい「他者観」が成立する。とりわけ「匿名空間」として確保されたメディアの中では、自在な受信と切断の自由を前提に、ストレンジャーとの間に「親密」な関係を維持することができるのだ。

実際、女子高生達は、どこの誰だか知らないがボケベルで連絡を取り合うだけの「ベル友」を多く持つ。「見知らぬ人」と、「親密」で、かついつでもリセットできる関係を保っている。著者は現象分析に徹しているが、この「近しい他人達」「インティメイト・ストレンジャー」という概念は、都市におけるコミュニティの変容を論じる際にも、「重要な鍵」となると思う。

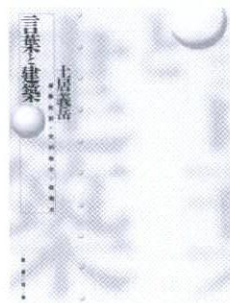
『言葉と建築』

——建築批評の史的地平と諸概念——

土居義岳＝著

A5判 367頁

建築技術社 3800円



評者＝

田中 純

建築史のポリティクス

本書のタイトルはミシェル・フーコーの『言葉と物』を連想させずにはおかない。フーコーの著作が「人文科学の考古学」をうたったものであったように、本書が取り組んでいるのは、建築史そのものの歴史、建築批評そのものの批評を、広範なパースペクティブでおこなおうとする言説分析にはかならない。そこで方法とされているのは、「建築」を論じ評価する枠組みを形成する「言葉」をあくまで対象として、そのルールと呼ぶべき一定の規則性を析出しつつ、さらに、言説の歴史の連続性ではなく、このルールが変容する認識論的な切断にこそ着目することである。著者は「様式」や「空間」といった、われわれが建築の記述、分析において自明なものとして見なしている概念が、実は歴史的な産物であり、ある時代的な断面においてはじめて登場してきたことを、一つ一つ丹念に検証していく。ウィトルウィウスからルネサンスの建築論、フランス・アカデミズムの理論やヘーゲルの美学講義、アロイス・リーゲルやハインリッヒ・ヴェルフリンといった美術史学の創始者たちの著作まで、この分析の場に召還されるテキストは多岐にわたり、それらを通じて本書の問題機制は明瞭に輪郭づけられており、読者はきわめて見通しの良い建築史（というよりも建築をめぐる言説の歴史）の見取り図を得ることができる。簡潔ながら丁寧に付けられた註や詳細をきわめた文献リストと相まって、本書は建築史という知の領域への、まったく新しい導入の書になりうるだろう。

もとより本書は、単なる学説史的な書物ではなく、例えば近代建築運動の評価や「ゲニウス・ロキ」論の流行などをめぐり、それぞれの時代において「言葉」が担った政治性を的確に指摘している。そのような文脈におい

て、1960年代から80年代にかけての建築批評の「近代」批判が、実はヘーゲルにおいて典型的な、理念型化された「時代精神」としての「近代」の存在を前提にしていたという構図が明らかにされることになる。そして、ここでさらに重要なのは、本書の論述が西欧建築史のなかで完結することなく、議論の中心をなす諸概念が近代日本において受容され、独自に展開されたそのプロセスや、日本の建築論に特有な「言霊」観といった主題が分析のもう一つの核をなしている点である。伊東忠太や堀口捨己にはじまり、磯崎新や原広司、あるいは鈴木博之や藤森照信といった建築史家たちの言説が、この二重化された分析のネットワークのなかに位置づけられ、批判の対象とされる。本書を読む経験がとりわけスリリングなものとなるのは、歴史的な認識を武器に、建築批評のアクチュアルな状況に切り込む、この批判の局面にはかならない。

本書を通じて著者が対峙しているものはまず第一に、ヘーゲルによって完成され、われわれがいまだにとらわれている認識論的な枠組みである。なるほど明示されている議論の焦点はそこにあるが、しかし、本書を読み進むうちに虚焦点として執拗に浮かび上がってくるのは、磯崎や鈴木といった日本の現在の建築史的言説を形成してきた人々の存在であり、彼らが体现している、日本において近代批判をおこなうことの二重の困難である。見通しの良さが図式的なものになりかねないところで、本書にそれを越えた緊張を与えているのは、この困難を自覚しつつ展開される著者の批判そのものの批評的な（つまり危機意識的な）政治性であるといえるだろう。

●たなか・じゅん／東京大学大学院助教授

岡田論文は自動車の運転中に携帯電話を使用することで多発した事故をめぐって、マナーやモラルといった次元ではなく、「クルマ社会」の限界という視点から問題提起するもの。確かに「通信する自由」と「移動する自由」「ドライビングの快楽」との境にあって、新しい「移動体」のありようが検討されるべきだろう。

松田論文は、流布している「情報弱者」解放論を整理、「女性」「高齢者」「障害者」のみを念頭に置き、「情報弱者」と分類する発想の問題点を指摘するもの。納得できるところが多く、また先に深い問題があることを予感させる。アメリカでは「情報化」が、人種間の階層的な格差を拡大しつつあるという認識も一部にあるらしい。

この種の「ケータイ・メディア」が生む環境、ひいては空間と移動体とのありようについて、都市研

究者、建築家から新しい分析がもっとあって良いのでは、というのが1冊を通じての率直な読後感。黒川紀章氏が『ホモ・モーベンス』で論じて以来、メルクマールとなる論考はないのではないか。

『ポケベル・ケータイ主義』
「インティメイト・ストレンジャーの時代」
富田英典＝著
「ケータイとクルマのあいだに」
岡田朋之＝著
「ポケベル・ケータイはドラエモンの道具なの？」
松田美佐＝著
ジャストシステム社 1500円

安藤忠雄建築展 境界を越えて——新旧の対話

新旧相互の刺激的な対話を試みた大山崎山荘美術館とイタリア、トレビソのベネトンアートスクールの計画過程を紹介する。

会期：1997年9月13日(土)～10月19日(日)

時間：10:00～17:00(最終入館は16:30まで)

同時開催講演会：1997年9月9日(火) 入場無料

会場：大山崎山荘美術館 京都府乙訓郡大山崎町小字銭原5-3 Tel：075-957-3123

京都精華大学情報館オープニング記念 国際シンポジウム

テーマ：美術と建築の壁を破る

——東アジアの視点から

日時：1997年10月4日(土) 13:00～18:15

場所：京都精華大学(入場無料)

コーディネーター：渡辺真理(建築家)

基調講演：木村重信(国立国際美術館館長)

パネリスト：小林陸一郎(彫刻家)、中橋克成(彫刻家)、妹島和世(建築家)、青木淳(建築家)、笠原芳光(宗教学／芸術批評)、黄賢秀(彫刻家)、張永和(建築家)、季鐵男(建築家)

申込み方法：氏名、住所、電話番号を明記の上、ハガキまたはFaxで事務局に申し込む

申込先：〒606 京都市左京区岩倉木野町137 京都精華大学情報館シンポジウム係

Tel：075-702-5343 Fax：075-702-4076

ワールド・プロセッサー'97 インゴ・ギュンター展

ワールド・プロセッサーは、ドイツのメディア・アーティスト、インゴ・ギュンターが1986年から手掛けている作品群である。中に電球が入った直径30cmほどの地球儀に、オゾンホール、熱帯雨林の現象、100ヶ国語の地球、TVの普及率、現在紛争が起こっている地域、ウィトゲンシュタインの世界など、抽象的な世界を表したものである。

期間：1997年9月19日(金)～11月16日(日)

会場：東長寺講堂P3

入場料：500円

問い合わせ：P3 Tel：03-3353-6866

ビニールハウス 夢の探求 北嶋俊写真展

会期：1997年9月2日(火)～9月15日(月)

時間：11:00～20:00 会期中無休

会場：ハウジングミュージアムギャラリー 大阪市北区梅田2-5-25ハービスOSAKA4階

Tel：06-343-7100

第2回 海外照明探偵団ツアー 究極のアミューズメントシティ、ラスベガス 最先端の光の技術を求めて

現地のデザイナーとの交流や、先端照明メーカーの視察も含み、楽しく調査、学習することを目的とする。また、LDI'97というエンターテイメント照明の最新技術フェアも同時視察する。またロサンゼルスでは、全米で活躍中の照明デザイナーChip Israel氏が、最新の商業施設や建築物を紹介する。

日程：1997年10月24日(金)～10月30日(木)

費用：268,000円

同行コーディネーター：面出薫(照明探偵団 団長)

問い合わせ：株式会社ライティングプランナーズ アソシエーツ 担当：葛西

Tel：03-5469-1022 Fax：03-5469-1023

Museum of Urban Landscape & Environment MoULE 原風景美術館

10月に名古屋国際会議場で開催される「名古屋世界都市景観会議'97」における全体テーマである「都市風景の生成」に沿って、イベント・プログラムのひとつとして「MoULE 原風景美術館」を行う。会場は、「ガイアポリス(風景都市)」「ギャラリー(製品のギャラリー)」「アルカイヴ(情報の収蔵庫)」の3つのエリアで構成され、未来の都市景観のあり方を追求する、市民に開かれた体感的、学習的、実験的な場となる。

会期：1997年10月6日(月)～10月9日(木)

時間：12:00～20:00(初日は15:00～)

会場：名古屋国際会議場白馬ホール(入場無料)

問い合わせ：有限会社アートパラダイス

愛知県名古屋市中区三の丸3-1-1

Tel：052-332-1151 Fax：052-972-0083

宮城県美術館公開製作 阿部仁史「Land-Pack」展

ワークショップを通じて、屋外インスタレーション「Land-Pack」を製作、展示するとともに、模型、パネルも展示する。

会期：

公開製作「Land-Pack」：9月15日(月)～10月3日(金)

「Land-Pack」展示：10月6日(月)～10月31日(金)

模型、パネル展示：9月6日(土)～10月31日(金)

同時開催講演会

テーマ：

9月13日(土) 建築の造り方

9月20日(土)、21日(日) Land-Packの造り方

10月4日(土) 建築とLand-Pack

会場：宮城県美術館

宮城県仙台市青葉区川内元支倉34-1

Tel：022-221-2111 担当：創作室、大嶋

第7回横浜まちなみ景観賞 作品募集

対象：横浜市内にあるまちなみ、建築、広場、プロムナード、サイン、モニュメントなどで、横浜らしい魅力に溢れているもの、歴史や伝統ある風土を生かしているもの、水や緑など自然が息づいているもの、まちのにぎわいづくりに貢献しているもの、安らぎと潤いをもたらしているもの、個性的でデザインに優れているもの、継続的な活動や工夫により魅力が増しているもの、その他地域の魅力となっているもの。なお事業として実施されたものについては、おおむね10年以内に取り組みされたものとする。

応募、推薦方法：官製ハガキに、推薦する施設または場所の名称、所在地、推薦理由、応募者の住所、氏名、電話番号、年齢、職業を明記し下記まで送付

締切：1997年9月30日(火) 当日消印有効

審査選考：横浜市都市美対策審議会(会長：渡辺定夫 東京大学名誉教授、工学院大学教授)の審査結果に基づき、横浜市長が決定

問い合わせ：横浜市都市計画局都市デザイン室内「横浜まちなみ景観賞」事務局

〒231-80 横浜市中区港町1-1 Tel：045-671-2023

イタリア現代建築展 イメージの可能性 ある精神科医の提言にもとづく試み

ものを創るという行為、すなわち人間の内面で動いている無意識的なイメージが形になっていくプロセスにおいて、その内なるイメージが創造の源になっていることに着目し、若手建築家と精神科医が共同で、彼らの無意識的なイメージを実際の建築プロジェクト上に表すという試みを紹介する。

展覧会

会期：1997年9月10日(水)～9月27日(土)

会場：TNブロープ(日曜、祝日休館、入場無料)

会館時間：11:00～19:30(最終入場19:00)

同時開催 シンポジウム「いま、建築の創造とは」

人間、自然、場所、歴史の再考

内容：人間と環境にまつわる諸問題が浮上してきている現在、自然や場所、歴史など様々なファクターから建築を見直し、あらためて建築をつくることの意義や根本的な姿勢を問い直す。

講師：フランコ・ブリーニ(建築家、ヴェネツィア建築大学教授)、ウーゴ・トニエッティ(建築家、フィレンツェ大学建築学部講師)、横文彦(建築家／都市プランナー)、岡田哲史(建築家)

日時：1997年9月11日(木) 18:00～20:00

会場：イタリア文化会館ホール(入場無料)

東京都千代田区九段南2-1-30

申込み方法：往復ハガキの往信面に、氏名、会社名、郵便番号、住所、電話番号、E-mailアドレスを、返信面に宛先を明記の上、TNブロープ宛に申し込む

申込み期限：1997年9月3日(水) 当日消印有効

申込み、問い合わせ先：TNブロープ

東京都港区六本木5-14-35 Tel：03-3505-8800

ジャスパー・ジョーンズ展

ジャスパー・ジョーンズ展
会期：1997年6月28日～8月17日
会場：東京都現代美術館

6月27日～8月17日まで、東京都現代美術館においてジャスパー・ジョーンズ展が開催された。昨年20年ぶりにニューヨーク近代美術館で行われた回顧展の巡回展である。

今回の展覧会では、ジョーンズの出世作となった『旗』や『標的』のシリーズから始まり、95年の近作までが展示されている。その間40年。24歳から66歳のジャスパー・ジョーンズの作家としての歩みをじっくり見ることができる。

ジャスパー・ジョーンズの絵画を見る時、そこに何が描かれているのかと常に考えさせられる。例えば『旗』であれば、これは「旗」なのか、「記号」なのか、「絵」なのか、はたまた単なる「色彩構成」なのかと……。

ジョーンズ本人が「作品はそれ自体であって欲しい」と語っている以上、答えは個々の観客の中であって、共通の明解な答えは無いのだが、初期の『旗』『標的』から70年代の「クロス・ハッチ」、80年代からの「多様な引用による構成」と変化する題材を前にしては、自らの答えを探し出すことさえなかなか難しい。

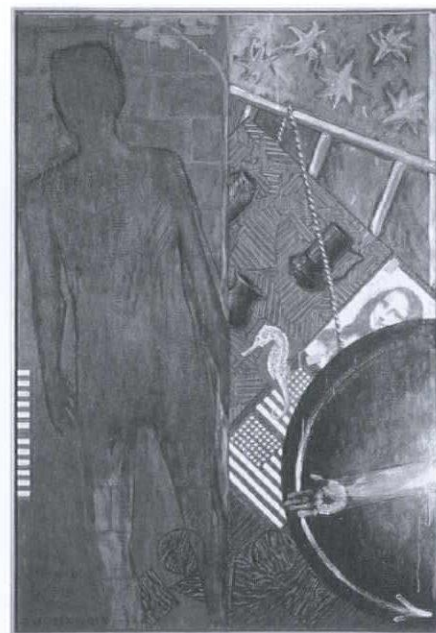
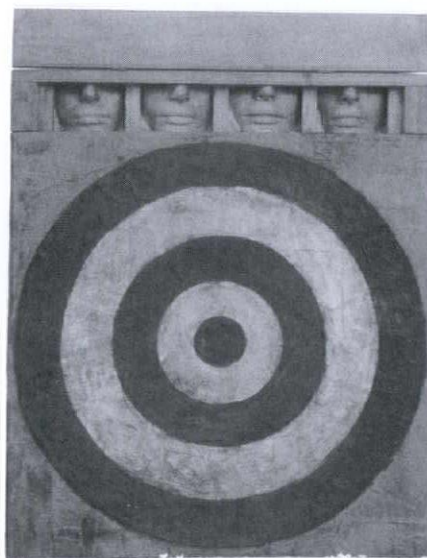
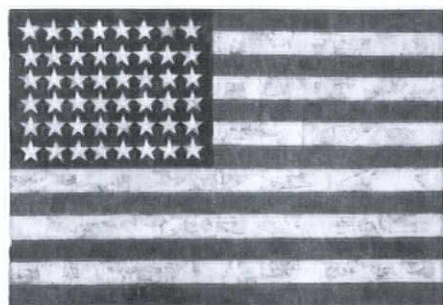
今回の展覧会では、その謎を解く手がかりとなるリーフレットが入場者全員に渡され

た。現代美術を見るにはそれなりの知識と訓練のようなものが必要になってしまいがちなのだが、こういった手がかりとなるガイドがあるだけでも随分と観客の反応は違ってくるだろう。実際、会場の至る所でリーフレットを読みながら絵と向かい合っている人をたくさん見かけた。公共の美術館で現代美術を展示している以上、こういった試みはぜひ今後も続けて欲しい。

ジョーンズの作品に話を戻すが、よく知られた初期の作品とは異なり、82年以降の作品を初めて目にし、意外な印象を受けた人も多いことと思う。この作風の転換は興味深い。それまでは禁欲的なまでに描く対象を絞っていたのに比べ、レオナルド・ダ・ヴィンチの「モナリザ」やピカソの作品、画廊主レオ・キャステリの写真といった具体的なイメージが画面にひろがり、自分の過去の作品や自分の影さえもそこに描かれている。あるいは、絵画史に残る作家たちの作品をなぞり、自己の作品にその輪郭線を描いていたりする。複写すること（プラスチックの上にインクでなぞって描く『トレーシング』という作品も多数展示されている）と、同じ構成のものを

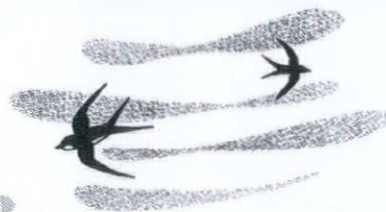
繰り返し描くことは初期の頃から行われているが、抽出と構成（もしくは合成）という新たな要素が作品に加わってきているように思える。これはまるで音楽界でいえば現在主流となりつつあるサンプリング・ミュージックのようなものではないだろうか。いやむしろそのあっけらかんとした引用、構成はDJ的と言ってしまうてもよいのかもしれない。ジョーンズの作品には時代を読み、現在もしくは少し先の時代に何が必要かを的確に捉え続け、時代の先駆けとなり続けている感がある。巨匠、巨匠と過去の存在とせず、あらためてじっくりとジョーンズの作品を見直すことは広い意味での今後の芸術界の動きを捉え直すいい機会と思えた。(Y. O.)

左上：『旗』1954-55年、布にエンコースティック、油彩、カラー
ジュ、合板にマウント（パネル3枚組）、ニューヨーク近代美術館蔵
左下：『塗られたブロンズ（ビール缶）』1960年、ブロンズ（着色）、
ルートヴィヒ美術館蔵
中央：『4つの顔のある標的』1955年、キャンバスにエンコースティ
ック、新聞、布、木箱に入った石膏像、ニューヨーク近代美術館蔵
右：『夏』1985年、キャンバスにエンコースティック、フィリップ・
ジョンソン蔵
©1996 Jasper Johns / Licensed by VAGA, New York, NY /
SPDA, Tokyo



空気の歳時記

ツバメが渡ってきたか確かめたくて
入り江に近い河原を歩く。
頬に当たる風は冷たいが、
水面の眩さはもう紛れもなく春だ。



春

目をこらすと
何の稚魚だろうか
スイスイと元気である。
何万年も繰り返されてきた
自然の鼓動を体の奥に
感じる瞬間。
ビューイ、ビューイ。
澄みわたった空気に、
待望の囁りを聞いた。

林道を逸れて、森へ深く入る。

額に汗をにじませながら、

一步一步標高を稼ぐ。

セミの合唱に負けじと

梢で声を

張り上げているのは

クロツグミだろうか。

樹齢は数百年に

及ぶだろう、

ブナの巨木を見上げると、



夏

突然、時間の感覚が薄れていく。
鬱蒼とした空気のなかで
息もつまるような濃緑の季節。

尾根を越えてくる風の冷たさで

季節の深まりを知る。

山の秋は短い。

頂から麓へ向かって

早くも赤や黄に色づきはじめた

林の中を歩くと、

よく南へ旅する渡り鳥に出会う。



秋

例えば、エゾビタキ。
ヒラリヒラリと木の葉のように
舞いながら
フライ&キャッチを繰り返す
この鳥が姿を消す頃、
あたりは冬の長い眠りに入るのだ。

休日。ちょっと早起きして

近くの山に足を運んでみた。

枯れ落ちた木の葉を

踏むたびに

ガサッガサッという音が

林全体に響き渡る。

見上げると

餌を探しているのだろうか、

シジュウカラの仲間の群れが

盛んに鳴き交わしながら

枝から枝へ飛び回っている。



冬

凍てついた空気のなかで
精一杯生きている小さな命。

日本の四季の空気を、ずっと考えてきています。

◆ 新菱冷熱
SHINRYO CORPORATION

本社：〒160 東京都新宿区西谷2-4 ☎03-3357-2151 代 支社：札幌・仙台・千葉・横浜・名古屋・富山・大阪・広島・福岡

■丸橋 浩

海外建築情報リミックス

12Architects

#9: Philippe Starck

Staff: 太田浩史 (東京大学生産技術研究所助手)、小川次郎 (東京工業大学坂本研究室)、西沢立衛 (妹島和世建築設計事務所)、堀井義博 (ユービーエム)、丸橋 浩 (アーキペルク)

条件のデザイン

デザインの力とは、モノの形を整えることや差異を作り出すことだけでなく、モノの操作を通してモノが引き寄せる文脈を書き換えたり、状況を刷新させたりすることにある。何より状況や現象を生成させるのに秘儀的な魔法や呪文を使わぬところがよい。つまり、「あたたかい」「やさしい」「ぬくもり」「にぎわい」「森のような」「風のような」などと現象を言葉で説明することなしに、モノとしてモノの配列のみでそれらを記述する力。それこそがデザインの恐るべき力ではないだろうか。デザインは状況を組み立て直すために目に見えぬモノの意味論を説いたり、モノの存在論を問うたりすることなしに、モノの具体的な操作を通して、モノの配列を通して、そうしたものに到達することが可能なのだ。モノの操作はモノが引き寄せる文脈への意識なしに成立はしない。それは必然的にモノが作動する状況の操作を確実に射程にしている。

ここで、フィリップ・スタルクを取り上げる理由はこのこと以外にない。もちろん、スタルクを巡って複数の視点が展開していることも

事実ではある。ただ今回は、このようなデザインの力についての考察からスタルクを切断する。「条件のデザイン」ということで。

「条件のデザイン」とは、ベルナール・チュミの言葉から借用させてもらった。チュミ曰く、「我々の現代の状況の性質を理解し、それに伴うメディアのプロ

セスを理解することで、建築家たちは新しい都市をつくり、空間とイベントの新しい関係をつくり出すような条件を構築する可能性を持つようになるのです。建築とはデザインの条件を扱うものではなく、条件のデザインを扱うものなのです」。

デザインされたモノがいかにか世界を変え得るかということではなく、デザインの行われるその瞬間に、世界から条件を切り分けた時点で、すでにデザイナーは世界を書き換えている。もはや建築家は自らのデザインを条件づける(いいわけ?)ようなデザインのためのデザインに頓着している場合ではなく、デザインが必然的に引き寄せてくる文脈や状況を戦略的に組み立ててゆく必要があるのだという。チュミに従えば、建築家はデザインを通して直接的に現象や状況を操作する可能性に開かれていることになる。そういえばプログラム論は、建築をブ

12Architects #9: Philippe Starck

おいしいキッチン用品のつくり方

峯島亜紀子

スタルクのキッチン・シリーズ「フェトゥー」。フライ返し、おたま、チーズカッター。スプーン、ナイフ、フォーク。陶器製のお皿やカップ。ありとあらゆるキッチン用品が、吊るせるようにデザインされている。普通なら、スプーンやフォークは一束にまとめて引き出しにしまわれ、お皿やカップは戸棚に納められてしまうのに、このフェイトウのスプーンやナイフときたら、ツリーに1本ずつかけてテーブルの上に飾られるのを、お皿やカップは壁にかけられるのを、待っているかのようだ。これらは、本来置かれるべき位置を離れ、より人の近くに新しい居場所を獲得しようとして企んでいる。とはいっても、スプーンが引き出しに、カップが戸棚にしまえなくなるわけではないのだから、そこに暴力的なおいはしない。あくまでも使う人の意志にゆだねた、柔らかな位置の揺さぶりが仕掛けられているのだ。なんて、おいしい!

スタルクは、人と物の間を近づけようとする。ここで私が人と物の間の距離という時は意識上での距離、つまり人が物に感じる愛着とでもいうべきものを含んでいる。こういったものは、本来物理的に測りようがないが、キッチン用品というポータブルな道具のデザインに際して取られた、穏やかな位置の揺さぶりという物理的な距離の戦略は、そのまま意識的な親密性を生む戦略として読み取ることができる。ある物を、人がそばにおいて大事にしたくなるような物にすること、それがスタルク・デザインの目指すところなのではないだろうか。例えば、「ジュシー・サリフ」という名前のついたバクテリア

のようなレモン絞り器。本当なら棚の一番奥にしまわれるような物なのに、なんだかかわいくて、ついテーブルの上に置きたくてしまう。ここでもやはり、物が人に近寄ってくる。スタルクは、物が人に近づいてゆく作用をデザインしている、と言い換えてもいいかもしれない。

ところで、このスプーンやフォークの枝にはホルダーに掛けられるように大きな穴が開けられ、カップなどは取っ手がないばかり一方に引っ張られるように歪められて変形しているのだが、これらの吊るせるようにするための変形が、結果的にスタルクらしい滑らかな曲線を呈したフォルムの生成に至っていることは、とても興味深い。このようにスタルク製品を観察していくと、それらのフォルムがある種共通のスタルクらしさを持っているにも拘わらず、その生成のきっかけが実に多彩であることに驚かされる。レモン絞り器の場合は、普通当たり前のごとく備わっている受け皿部分を排除してしまうことで、必然的にあのタッパの高さも薄かれる、といった次第。これらふたつをとっても、キッチン・シリーズが足し算なら、レモン絞り器は引き算というくらい、発想も手法も異なっている。ここに共通に見出せることといえば、彼自身が道具と戯れ、それらと対話することから生じるに違いない、遊び心である。吊すにしても、とっぱらうにしても、機能性とは程遠いことであり、それは自分自身が使う物(つまり道具)に親しく関わっていかうという態度、ただそれだけによって支えられている。

機能性を突きつめた道具が持つような、人に対す

る物の絶対服従な関係ではなく、人と物の間の、もっと親しい、おいしい関係。それこそがスタルク製品の魅力だと思うのだが、それはマニュアル化された一定の手法や、表層的な意味操作からは生じ得ない。こんなスタルクの道具達は、道具/建築という枠を越えて、デザインとは何かという問いを、私に投げかけてくる。(aminejim@arch.metro-u.ac.jp)

図版出典:「BRUTUS」97年1/15号



壁に吊る下がつたお皿とカップとツリー状のホルダーにかけられたスプーンやフォーク

ログラムとしての空間の配列に還元化することによって、建築の書き換え、つまりプログラム自体が操作可能なことを我々にまざまざと見せつけてくれた。そのプログラム論の小気味良さは、建築が作動させていると考えられている現象や状況といったものを可視的に操作できる図式を作り出したことにつくる。そのような操作を通して、プログラム論は罪悪的な形態操作の審美性を表立っては排除できた。そして建築が必然的に引き寄せる空間的な問題はひとまずは先送りし、形態や空間という媒介なしに建築が作動させる現象をあたかも直接に操作する可能性を開いたともいえる。つまりは、形態をプログラムの図式として定義し、プログラムと建物との密接性を実現させることによって、建築に対するプログラムの絶大なる影響力が明らかにされた。その功罪は別に問われるとしても、ここに建築を決定づける初期条件の設定ということが大きく浮かび上がったのである。

デザインの初期条件の設定、裏返って初期条件の設定がいかにデザインを決定づけているかをスタルクを通して考察することが、今回のテーマである。このような初期条件への執拗な意識は、デザインという行為そのものを厳しく問い直すことに他ならないし、またそれは世界に対するデザインの批評性を問いたすことでもある。初期条件を書き換えることこそがデザインであるとするならば、それがどれほどの有効な批評力として働いているかを検証せねばなるまい。それはここに提示された各論によって、それぞれ追及されているはずだ。

ひとつ例を引こう。通信販売会社トロワ・スイス社から4900フラン

で売り出された家の箱詰めキット。要するにそれは図面を売っているわけだが、ただ設計図書を見るだけというぞんざいなものではないことはそのキットの内容物を見れば一目瞭然である。それは(1)50分の1の一般設計図(2)50分の1の木製枠組の詳細図(3)電気配線や配管・暖房システムの設備図(4)建築作業のインデックスファイル(5)スタルク自身が建設工程を説明するビデオ(6)コンセプトや行政手続きなどの解説ノート(7)記録記入用の白紙のノート(8)金槌(家の建築に個人が参加することのシンボル)(9)屋根のてっぺんに取り付けるフランス国旗。800万部配布され、フランスの家庭の3分の1が読んでいることとなる、フランス国内第二位の通販シェアを持つスイス・トロワ社のカタログを利用するスタルクの流通への戦略もさることながら、購入者の物を作る喜びを演出するような(7)(8)(9)などを入れるあたり心憎いかぎりだ。それはモノのデザインによって、住み手の情緒へと到達しようとする試みだと読み解くことができよう。住宅にまわりつく文脈を甘い言葉でオブラートに包むようなやり方ではなく、状況の醸造を前提に、それらがモノとして明確に落とし込まれていることにスタルクの凄さを感じることができる。彼がそうしたデザインを行うことが可能なのは、通販によって何が売られているかを精密に分析しているからにほかならないだろう。

モノが現象することを前提としながら、現象をあくまでモノのデザインとして記述しようとするスタルクの意志に興味はつきない。(BXG03056@niftyserve.or.jp)

12Architects #9: Philippe Starck

条件の再定義

三好隆之

「ところで、眼鏡というプロダクトが敷地をもっている」とすると、それは、大きさ、形、色、テクスチャ、地形の起伏などにおいて、千差万別な「顔」であると考えられる。当然のことではあるが、その敷地は固有性を持っている。ある眼鏡をかけるために敷地の形状を変形する人はまずいない。これまでの眼鏡は、敷地の形状を強調するにせよ隠蔽するにせよ、ヒンジの小さなネジを専門の人が調整して各々の敷地にフィットさせるか、何もしないでも敷地にフィットするものが選ばれるかのどちらかであった。敷地そのものを変形することができない以上、眼鏡は敷地に対しては全て特殊解にならざるを得なかった。

特殊解をもってしまふことが眼鏡のデザインにおける必然的な条件となってしまうことに疑問を抱いたスタルクは、あらゆる敷地にフィットするようにデザインされた万能眼鏡をデザインした。アラン・ミクリから販売されている〈スタルク・アイズ〉だ。一見何の変哲もないかに見えるこの眼鏡、手にした瞬間従来の眼鏡とは全く違うことがわかる。ヒンジの部分人間の腕のように三次元的な自由度をもって動かすことができるようになっているのである。この自由度こそがスタルクの求めていたものであり、不可欠な要素である。この眼鏡は、人体の関節のメカニズムに関する研究を5000時間、眼鏡に関する研究を3500時間という膨大な研究に基づいてできた代物なのである。最終的にはたった2mm四方に凝縮されたディテールがあらゆる敷地に応える普遍解を生み出した。

従来の特殊解としての眼鏡は、レンズと枝の関節であるヒンジは0から90度くらいまで平面的に回転するもの、ということをも前提としてデザインされた眼鏡であった。結果として前提そのものが眼鏡の形式をつくってしまった。その呪縛から逃れることができなかった眼鏡には、もはや形態的な差異しか残されるものはなく、眼鏡はいつまでたっても眼鏡でしかなかった。一方で、眼鏡のデザインが前提としていた条件そのものを問い直すことで〈スタルク・アイズ〉は、特殊解から一気に普遍解としての眼鏡に昇華することができたのではない。三次元的に回転してしまうヒンジは、レンズと枝の関係を一意に指定してくれることはもはやなく、眼鏡と呼べるかどうかとも疑わしい。というも「眼鏡を掛ける」という以上の行為を誘発するアフオーダンスを持っているように見えて仕方がないからだ。

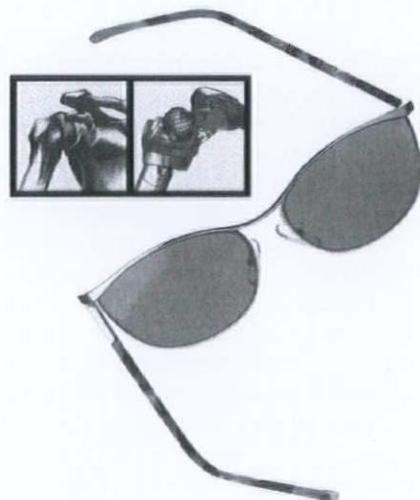
そんな〈スタルク・アイズ〉をデザインする背景には、「No Design」というスタルクの新たな哲学があった。あのディテールの膨大な研究を見る限り、この眼鏡は「No Design」どころか「Over Design」である。つまりここでは設計しているかどうかを問うているのではない。「No Design」の「No」は、設計をしないことでも、差異をなくすことでもない。それは既成の形式の枠内で差異を増幅することのみにデザインの領域が限定されてしまったことを否定するための「No」なのである。

デザインされたものがあらかじめ与えられてしまっている条件そのものを再定義することで、デザインは力をもつと同時にその領域を拡大する。そのよ

うなデザインの姿勢を「No Design」は示しているのではないだろうか。

これは眼鏡の革命だ。
(東京大学生産技術研究所藤井研究室、miyoshi@cc.iis.u-tokyo.ac.jp)

図版出典:『BRUTUS』97年1/1・15号、マガジンハウス



〈スタルク・アイズ〉

椅子とユーモア

僕の友人の彫刻家の先生が、以前、奇妙な家具のデザインに凝っていたという話を聞いたことがある。いろんな家具があって、詳しいことは忘れてしまったが、その中でもちょっと変わった椅子があった。形は一見普通で、座り心地も普通である。どこが変わっているかという、例えば肘掛けのところに穴が開いていて、そこに弦が5本張ってあったり、脚台が堅木でできていて、ヒンジのような金物で微妙に動くようになっていたりする。それらのディテールはそんなに目立つものでないで、普通に座っている分には普通の椅子である。ところが、僕の友人がその椅子に座って先生と話し込み始めると、非常に話しぶりがいい。僕の友人は、指でテーブルとか身近なものを軽く繰り返したたく癖を持っているのだが、この椅子で先生と議論をする場合は、その癖によって狙いましたように肘掛けの穴の五弦をはじいてしまい、無意識のジェスチャーによって、自分があまり望まないような美しいメロディが、自分の反復癖と同じリズムで室内に響きわたってしまう。また、友人は興奮し始めると、膝を揺する癖がある。特に激論に突入し始めると、その膝の揺れはすごい。しかし、先生の椅子の上で行われるこの膝揺らしは、足下に仕掛けられたパーカッション装置

によって、妙にかわいい木魚のようなサウンドを生み出してしまうのである。いくら友人が興奮しようと、議論がいくら加熱しようと、その椅子は、非常にユーモラスかつ冷静に、議論のリズムに合わせて、美しいメロディとパーカッションのアンサンブルを奏でまくる。先生はこの椅子をデザインするにあたって、機能性を重視している、といった。といっても、「快適に座る」という機能を目指すという意味ではない。というよりは、椅子の周辺に巻き起こってくる「座る」以外の様々なアクティビティを、椅子の条件として重視している。先生によれば、座る人は必ず、まずタバコを吸うとか、テーブルにはおづえをつくとか、脚を組むとか、何か必ず「座る」以外のことをやっているのであって、純粋に「座る」という機能のみを実践する人はあまりいないということだ。先生は、「座る」ことそのものよりも、「座る」こととほぼ同時に発生している「座る」以外の機能を、椅子のデザインによって拡大している。しかし僕がここで感銘を受けたのは、先生のデザインが、椅子という家具の中に「座る」以外の機能を発見した、ということだけでもない。ここで興味深いのは、椅子を椅子たらしめる条件であると思われていた「座る」という機能が持つ特権性を、「座る」以外という機能をやたらとデフォルメすることによって剥奪してゆく過程が、五弦による変拍子のメロディとか、木魚の幸福そうなりズムとかに変換されて、ユーモラスに表出してしまうことである。友人と先生の議論を常に侵害しつつも、一方で議論の文脈を音楽が反復するかのように、議論に平行して謎の音楽が流れ続けるというユーモ

12Architects #9: Philippe Starck

人とモノとの笑顔な関係

長崎辰哉

ジュシー・サリフ 1990-1991

一見ナニコレ、火星人？ 実はレモン絞り器。ホントに絞れるかやってみました。てっぺんにレモンをぎゅっと押し付けると滴る果汁が滑らかでエッチなボディをつつと伝い、下の鋭いエッジに集約されてポタポタ落ちてゆく。うーん、美しい。思わず笑顔。レモン絞りってこんなに楽しかったっけ？ もう1個絞っちゃおうと。

O.N.F コレクション 1994

何だよこの机、部品足りずに足下ガバガバ。不良品？ ん、待てよ？ このカード持って森へ行って下さいだ？ という訳でやって来ましたよ、森へ。あ、おっちゃんカード持って来たけどさ、どーすりゃいいの？ え、こっち来い？ あんた木を切り始めてどうしよっての？ 一日中見てろってのかい？ はあ、丸太やるからもう帰れ？ どうなってんのかね。それにしても森ってとっても気持ちいい。人は、こんな美しい自然を破壊する。いかんねえ。今日は勉強になっちゃいました。さて帰って来たはいいけどさ、どうしたもんかね、この机。なにに？ 貰った丸太で机の足を固定する事ができますだ？ 思わずニマリな〜るほど。自然は大切にしましょう。これぞ本当の勉強机！ なんちゃて。

デザインとは物語を構築し表現する行為だと思う。

近代までの物語の主題は、神、そして権力であり、それらを美しくシンボリックに表現することがデザインの中心課題だった。ピラミッド、神殿、宮殿、

寺社仏閣、城郭など。そこでは美こそが全てであり、例えばオーダーといった部分にせよ、バルテノン神殿といった全体にせよ、モノ自身に圧倒的な美(物語)が与えられ、人を支配し、従えていた。人は美というシンボルを生み出すことに全力を注いでいた。

産業革命以降、物語の主題は神から機能へと移った。そして機能という物語は、機械として表現された。車、船、飛行機といった機械が世界旅行という夢物語を実現し、コルビュジエの「住宅は住むための機械である」の言葉通り、サヴォア邸が合理的な生活という物語を象徴した。近代とは、人がモノを征服し完全にコントロールする時代だった。そこでは効率こそが最大の美德とされ、人は機械を生み出すことに没頭した。

いずれの時代も、モノ自体に物語が込められており、人とモノの関係が一方向的であった点で共通する。しかし、このような二項対立的図式は、あらゆるものが相対的に捉えられる現在、もはや有効性を失った。ならばどんな物語が現代のデザインに求められているのか？ フィリップ・スタルクのデザインはこの問いによく答えているように思う。

スタルクは、モノ自身の美しさや機能性の追求を最優先課題とはしていない。彼が生み出すのは、レモンを絞る時に見られる自然法則への感動であり、森で丸太を買って初めて実感する自然資源への愛情であり、それらを通じモノへの愛着を獲得した時に生まれる喜びの笑顔である。

この笑顔に至る過程こそが、彼の求める物語なのではないか。それは人とモノとの関係の物語でもある。彼のデザインにおいて、モノは、神でも機能でもなく、笑顔に至る関係の物語を生産する媒介として作用する。彼は人とモノとの笑顔な関係を表現するデザイナーなのだ。

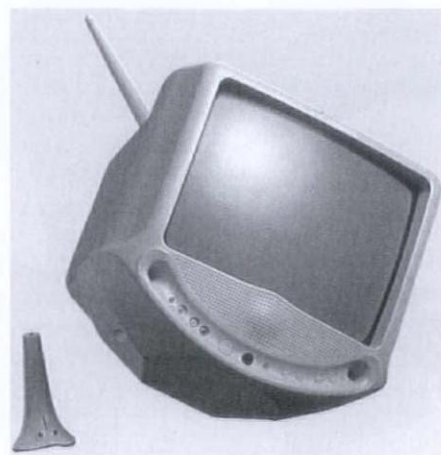
彼のデザインが常に新しい魅力をもって我々に迫るのは、彼が扱う物語が笑顔に象徴される人とモノとの関係に込められているからであり、その関係が両方向的(インタラクティブ)であるからではないだろうか。

え？ モノは笑わないじゃないかって？ 何をおっしゃいますか。Zeo TVをご覧くださいませ。彼のTVはいつだって笑顔を絶やさないのです！(東京大学大学院大野研究室、nagasaki@mpf.t.u.tokyo.ac.jp)

図版出典: "STARCK", Taschen, 「AXIS」59号、アクシス



O.N.F.コレクションのテーブル



(ゼオ(ポータブルテレビ))

アを、この椅子は持っているのである。

ということで、話がいつまでもたってもフィリップ・スタルクに辿り着かないが、僕が言いたいのは、そのようなことが、スタルクの家具やプロダクトやインテリアの中に探せば探すほど、どんどん見つけることができるということである。香港のペニンシュラホテルのレストランで彼がデザインした椅子は、形態的には普通である。変わっているところは、全ての椅子の背カバーに人間の顔がプリントされていることである。各々の椅子にプリントされている顔が全て違って、どれも彼の友人の顔である。椅子はテーブルの前に置かれることによって常に全体像が見えず、背部分の半分くらいしかテーブルの上に飛び出ない。すると、この椅子がテーブルを囲むと、友人達(顔写真としての)が常にテーブル上に鼻から上だけ覗かせて、かわいいというか不気味である。この風景は、本物の人間が着席すると失われてしまう。その代わり誰もいない場合にだけ、異様になごやかな団らの空間が出現しているのである。この食卓は、例えば友人にキャンセルされた人の孤独な夕食も、スタルクの友人たちが総出で顔半分だけテーブルに参加することによって、楽しい夕食の時間を取り戻してくれるという、不気味ながら非常に優しい団らを創出している。ここで目指されている「機能」は、椅子にとって最小限かつ特権的な条件であるはずの「座る」という機能ではない。椅子をめぐって起こる、「座る」以外の色々な機能——ははっきりいってどうだっていい機能——の方が、彼にとっては色々な謎やユーモアを背負ってやってきてくれるもので

あり、そっちの方が、椅子を椅子としてデザインするための条件としては、はるかに重要なのである。なぜなら、機能によって椅子を分割する図式よりは、そのような図式をぶちこわすユーモアの方が、はるかに偉大だからである。(BXT00214@niftyserve.or.jp)



ペニンシュラ・ホテル内レストラン「フェリックス」

□7月より当コーナーにおいて、E-mailのメーリング・リストによる意見交換の場を設けました。このメーリング・リスト(ML)というシステムは、常にメールの送付先を指定のアドレスにすることによって、「海外建築情報」というコミュニケーションの場を、ネットワーク上でも公開するというものです。このコーナーに参加されていても、いなくても是非登録し、議論に参加してみてください。

メーリング・リストの登録方法およびアドレスは、鹿島出版会のホーム・ページ(http://www.kajima.co.jp/kajima_mail/publish/index.htm)をご覧ください。

次回予告

#10: Buckminster Fuller

12Architects #9: Philippe Starck

スタルクというクール・メディア

飯田都之磨

スタルクという「作家」はいた。

しかし、「作家」という存在ではなく、スタルクはメディアに近い存在になってきたように思える。しかも、凶暴なクール・メディアに。「クール・メディア」という30年も昔にマクルーハンによって唱えられたジャーナリスティックな言葉がスタルクの作品を前にして思い浮かんできた。

メディアの手法

デザインは、自らを購買の対象とすることで拡大してきたが、メディアは、自らを対象としないことでその力を拡大してきた。メディアは、情報の加工、つまり我々のイメージに引き起こす変化(=意味作用)を扱う。

A wall is wall...「壁」は壁であり、「歯ブラシ」は歯ブラシ以上にはなれない。新しい機能を考えようとする欲望を一時的に取り払って、ものの持っている基本的な意味が我々に及ぼす作用を先に捉えて、我々の認識の側から組み立て直す。このような判断中止が、スタルクの作品のどこか根底にある。そして、その古い意味のパターンを加速させ、新しいパターンを生み出す。

「意味の加速」。これが、スタルクがメディアから持ち込んだ手法ではないだろうか。メディアは、話し言葉から活字、さらにTVというように、情報をより瞬間的な知覚ができるまでに加速させてきた。メディアの速度自体が新しい生活様式を生んできた。

スタルクもまた、意味という情報を加速させ、

我々がその物に対して抱く意味作用を変化させる。

アサヒのビアホールが衝撃を与えるのは、金色の炎のオブジェと、黒い塊の建物が、都市建築のビルボードとしての意味と、機能を包み込むブラック・ボックスとしての意味を加速させ、意味の文脈を瞬間的に知覚させるからである。意味は理解されるものではなく、我々の意識に意図的に打ち込まれ、建築の機能が表層に立ち現れたものというよりも、我々の意識の側から建築に貼り付けられたものという方がおそらく近いであろう。加速された意味は、新しい意味作用を伴う。スタルクがデザインしたテレビ(ゼオ)は、スピーカーを笑う口の形にすることで、突然、「喋りかける」テレビになる。汚れから手を守る鍔のついた中世の剣を思わせるトイレ用ブラシで、使う人は汚れと「格闘する」のである。スタルクのデザインの中心は、機能というよりは、もののもつ基本的な意味を加速することによって、日常におけるものに対するイメージの変化を引き起こすことにある。意味ではなく、意味作用を変えていくから、我々はスタルクの作品を前に行為を引き起こさせられるのである。

スタルクというクール・メディア

かつて、マクルーハンはメディアをふたつに分けた。絵画などの情報密度の高いものをホットメディア、漫画やテレビ、電話などの情報量を少なくして参与性のあるものをクール・メディアとして区別した。ホット・メディアによって感覚は麻痺させられるが、クール・メディアによって、感覚は巻き込まれるのである。スタルクは、90年に入って、急激に情報量を減らしてきた。〈プリンス・アハ〉は、昔、椅子が木箱であったように、台としての意味と、入れ物としての意味を取りだした情報量の少ないものであるが、それは日常の風景を巻き込んでいくのである。

根源的な意味を、情報量を最小限にして伝えれば、人は、感覚を埋め合わせるために精神機能のいっさいを巻き込んでいくのである。スタルクの場合、クール・メディアの浸透性を持ちながら、さらに、その意識の作用についてはかなり厳密である。

意識の中に浸透すること、それは日常の風景の中に浸透することと同義である。

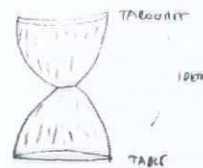
巻き込まれた精神が、日常の風景をつくる。巻き込まれる精神とは、スタルクのデザインの場合、ものの基本的な意味に対する感情である。

ものの意味に対する感情のみが残る風景。

このような風景をつくるのが、スタルクの目的であるような気がする。そして、この「作家」は美の牙城を離れ、日常の風景の中に「クール・メディア」のような透明な存在として、自らをも組み立て直し始めているような気がするのである。

(toshimaro@aqr.calmnet.ne.jp)

図版出典: "STARCK", Taschen, 「domus」 781号

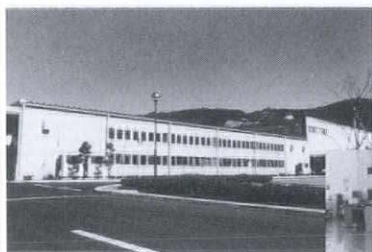


〈プリンス・アハ〉のスケッチ



〈プリンス・アハ〉

製造業



アマノ(株)様
20HP×7台



主な導入理由
GHP採用で特別高圧電力の回避

ガスで冷房 ガスで暖房 ヤマハガスヒートポンプエアコン

SCHOOL大学



静岡産業大学様
20HP×8台、7.5HP×14台、
5HP×11台、3HP×2台

快適空調への多様なニーズに
ヤマハがおこたえしています

ホテル・旅館

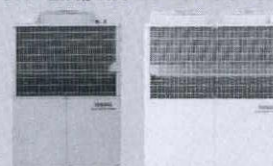


八幡屋様(母畑温泉)
20HP×10台、13HP×3台、
10HP×4台



主な導入理由
ランニングコストの削減

Y-HOTシステム搭載。 GHPビル用マルチエアコンMシリーズ



YMCJ280M-B
10HPビル用マルチ
YMCJ355M-B
13HPビル用マルチ
YMCJ450M-A
16HPビル用マルチ
YMCJ560M-A
20HPビル用マルチ

ヤマハ独自の新技术Y-HOTシステムがGHPのメリットを最大限に生かします。

●画期的な暖房能力

外気温2℃以下時に定格の110%の暖房能力を発揮。
外気温-20℃まで(寒冷地仕様。標準仕様は-5℃まで)
の広い範囲でパワフルな暖房運転が可能。

●ロング配管長

冷媒配管長は、実長100m相当長125mのロング配管、同
一冷媒系統の室内ユニット間高低差は15mと長く、ホテル、
病院などの縦配管ニーズに容易に対応。
また室外・室内ユニット間高低差は室外ユニットが下に設
置された場合や、室内ユニットの接続容量、運転台数、低
外気温冷房による制約を受けず50mと高くとり、設計自由
度が格段に向上しています。

●低外気温冷房範囲の拡大

標準仕様で外気温-5℃まで、寒冷地仕様で-10℃ま
で安定した冷房運転が可能。年間冷房ニーズに対応。

●16台異能力マルチ

異容量・異タイプの室内ユニットを室外ユニット容量の
50%から130%の範囲内で、1台から最大16台まで接続
し、個別運転が可能です。

●豊富な室内ユニットバリエーション

最小J22形から最大J560形まで、インテリア性を重視し
た豊富な室内ユニットバリエーションで、さまざまな用途に
適した機種を選択できます。

受賞

市村産業賞
貢献賞

Y-HOTシステム

●優遇税制

GHPは「総合エネルギー政策推進投資促進税制」が
適用され設置のコストダウンが図れます。
次のどちらかを選択して適用されます。
1.税額控除(7%) 2.特別償却(30%)
※詳しくは下記のお問い合わせ先にお尋ねください。

北海道営業部

〒063 北海道札幌市西区二十四軒一条7丁目3番13号
TEL.011-612-6417

東北営業部

〒983 宮城県仙台市宮城野区日の出町3丁目8-36
TEL.022-284-6121

東京営業部

〒331 埼玉県大宮市大成町3丁目311番地1号
TEL.048-653-4325

中部営業部

〒462 愛知県名古屋市中区北通2丁目34番地
TEL.052-917-1555

関西営業部

〒550 大阪府大阪市西区北堀江3丁目6-13
TEL.06-535-5565

中国営業部

〒734 広島県広島市南区東雲3丁目16-8
TEL.082-581-1174

四国営業部

〒760 香川県高松市上福岡町字宮東984-1
TEL.0878-35-2777

九州営業部

〒812 福岡県福岡市博多区上牟田1丁目11-1
TEL.092-411-3618

YAMAHA

ヤマハ発動機株式会社
〒438 静岡県静岡市新井2500
GHP事業部 TEL.0538-37-4455

いま開幕、 スポーツ ニューステージ。

多目的スペースがスポーツアリーナに一変！



ロビンズ・オールスターは、シカゴブルズなどのNBA公式戦やアトランタオリンピックのメイン会場など、世界中で広く使われている本格的なフローリングによるポータブル・スポーツ・フロアシステムです。

- プレーヤーへの衝撃を吸収する弾力性に加え、永年の使用にも反りや狂いを起こさない高品質設計。
- 独特のジョイント・ロッキング方式により、短時間での組立て・取外しが可能で、しかも優れた収納性。

コンベンション施設、インドアスタジアムを短時間でバスケットボールやバレーボール、バドミントンなどに最適なスポーツアリーナに変身させることができるフローリングシステムです。

ロビンズ FIBA・JBA・NBA公認コート

オールスター

ポータブル スポーツフロア システム

good new days
人間らしい美しい未来を

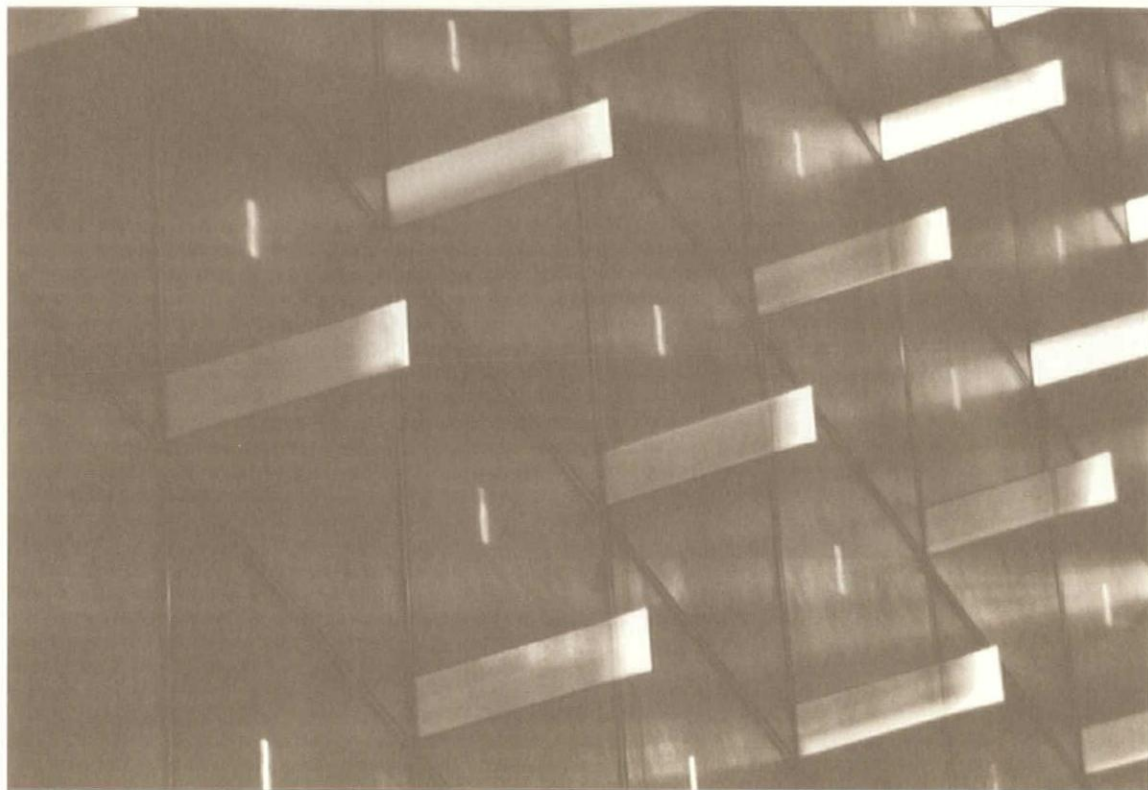
ヤナセ

総輸入元 株式会社 ヤナセ
商事事業部

東京都港区芝浦一丁目6-38 千105
TEL. (03) 3452-4311

本社 ■ 大阪支店 ■ 名古屋支店 ■ 福岡支店 ■ 札幌支店 ■ ヤナセ東北 ■ ヤナセ静岡
03(3452)4311 06(488)9801 052(241)2531 092(522)1331 011(231)2313 022(221)4171 054(261)4105

詳しい資料を差しあげます。ハガキに資料請求券を貼付のうえ、ヤナセ 商事事業部までお送りください。



ディクロイック・ライト・フィールド／設計：ジェームズ・カーペンターズ・デザイン

9710

特集

ガラス建築

地震国である日本では、ガラスを多用する建築は生まれにくかった。しかし近年、外国のガラス構法、技術の導入に伴い、日本でもガラスを積極的に用いた建築が増え、ひとつのムーヴメントにもなった感がある。本特集では、ガラスの透明性だけではなく、光学的特性や構造的特性など、幅広いガラスの性質を建築に取り入れた作品を紹介し、ガラス建築の今日性と可能性を探る。

作品＝葛西臨海公園展望広場レストハウス／谷口吉生、ホテルP／伊東豊雄、水・ガラス／隈研吾、コナミ那須研修所／日建設計、オフィスD／村上徹、熊野古道なかへち美術館／妹島和世・西沢立衛、ヴィンタートゥーア美術館の増築／ギゴン・アンド・ゴヤー、ベンセム・ハウス／ベンセム・クロウエル・アーキテクトン、アコム／ベン・ファン・ベルケル、ネアンデルタール美術館／ギュンター・ザンブ・ケルプ、ホテル・ケンピンスキ・ミュンヘン／マーフィー・ヤーン、行政福祉センター／オディル・ドウコック・アンド・ブノ・コルネット、他全約30作品

文＝難波和彦、今川憲英、安藤正雄、小川晋一、山下秀之、下村純一、他

座談会：伊東豊雄×今川憲英×難波和彦

ガラスメーカー3社へのインタビュー

インタビュアー：横田輝生

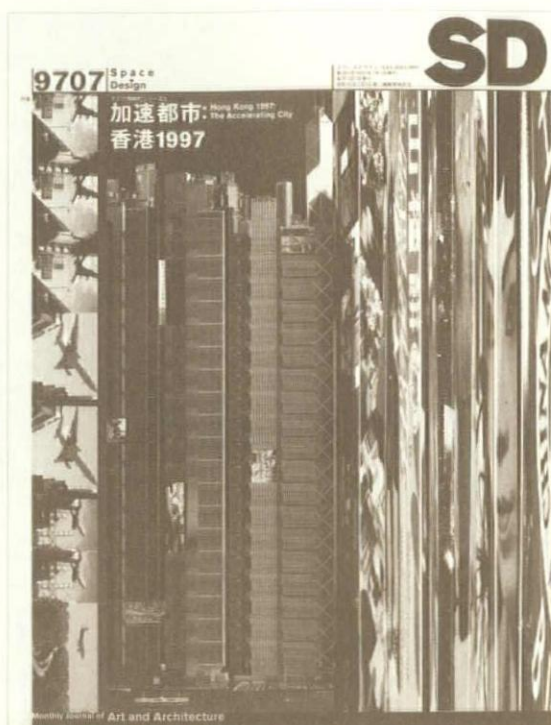
ガラス建築年表：今川憲英

連載：

・短期隔月連載：ネットワークの極意3／伊藤公文

・世界の現代美術館探訪4／松岡智子

・海外建築情報リミックス：12 Architects #10「バックミンスター・フラー」



9707

特集

加速都市・香港1997

1997年7月1日に中国返還を迎えた香港。本特集では「速度」をテーマに香港の現況に触れながら、動き続ける都市「香港」の姿を、建築家、グラフィック・デザイナー、写真家によるヴィジュアル作品、現地取材インタビュー、写真により紹介する。

1章：総論／世界の中の香港

戦前、戦後の香港の姿を辿り、返還後の未来を推論する。

[文] 村松伸

2章：速度の記述——8人の描く香港の可能性

境界、密度、交通、流動性などのキーワードのもとに、作家達が、現在の香港のイメージをグラフィカルに表現する。

[参加作家] A.チャン、貝島桃代、A.クライン+K.ダイサム、他。

[監修] 小嶋一浩

3章：速度の設計者たち

香港を拠点にアジアで活躍する建築家達に、事務所の運営、PADSプロジェクト等をインタビューする。

[インタビュー+文] 木下光

4章：イギリスが描いた21世紀のためのブループリント

港湾と空港に関連するインフラストラクチャーと埋め立て事業計画であるPADSプロジェクトの現況報告。

[文] 松田直則

新連載：世界の現代美術館探訪1／太田泰人（神奈川近代美術館主任研究員）＋渡辺真理（建築家）

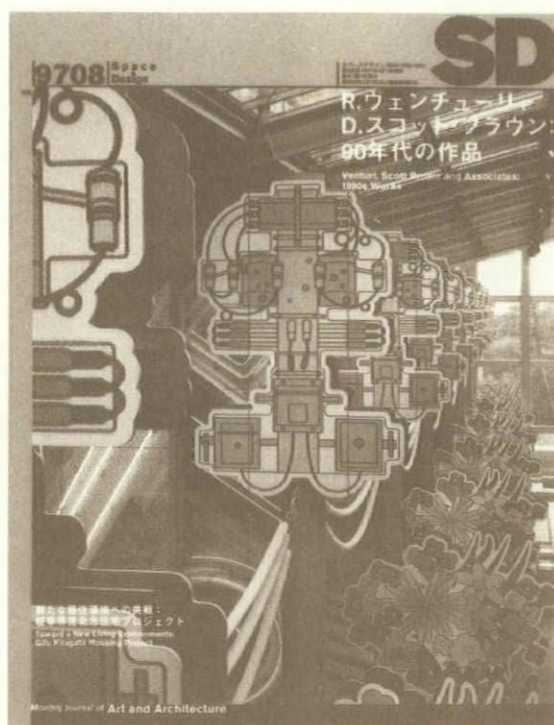
短期隔月連載：ポーランドのドイツ・アヴァンギャルド2／長谷川章

連載：トムの時空形象学22／戸村浩

連載：サイバートーク7 インターフェイス／岡崎泰之

連載：海外建築情報リミックス：12 Architects #7「ジャン・ヌーベル」

定価=2,000円／本体1,905円



9708

特集

R.ヴェンチュリー+D.スコット・ブラウン：90年代の仕事

今世紀後半の建築界に、作品においても著作においても大きな刺激を与え続けてきたヴェンチュリー+スコット・ブラウン。その刺激とは、シンボリズム、伝統、文化、地域性等々を通しての建築デザインにおける警句であるとも言える。本特集では、日本での処女作となる〈メルバルク日光霧降〉を中心に、90年代の仕事を紹介する。

作品＝メルバルク日光霧降、ペンシルバニア大学学生センター、ホワイトホール・フェリーターミナル計画、ハーバード大学メモリアルホール改修、デラウェア大学学生センター、バード大学図書館増築、サンディエゴ現代美術館増改築、ナショナルギャラリー・サンズベリー館、他

文＝R.ヴェンチュリー、香山壽夫、安山宜之、曾我部昌史、他

岐阜県営北方住宅プロジェクト

公営住宅に新たな視点を求めて、磯崎新がコーディネイトする女性の建築家、ランドスケープアーキテクトらの試みを紹介。

文＝磯崎新、松永安光（建築家）

参加者＝クリスティン・ホーレイ、エリザベス・ディラー、妹島和世、高橋晶子、マーサ・シュワルツ、宮脇愛子、福沢エミ

短期隔月連載：ネットワークの極意2／伊藤公文

連載：世界の現代美術館探訪2／太田泰人

連載：トムの時空形象学23／戸村浩

連載：海外建築情報リミックス：12 Architects #8「ロバート・ヴェンチュリー」

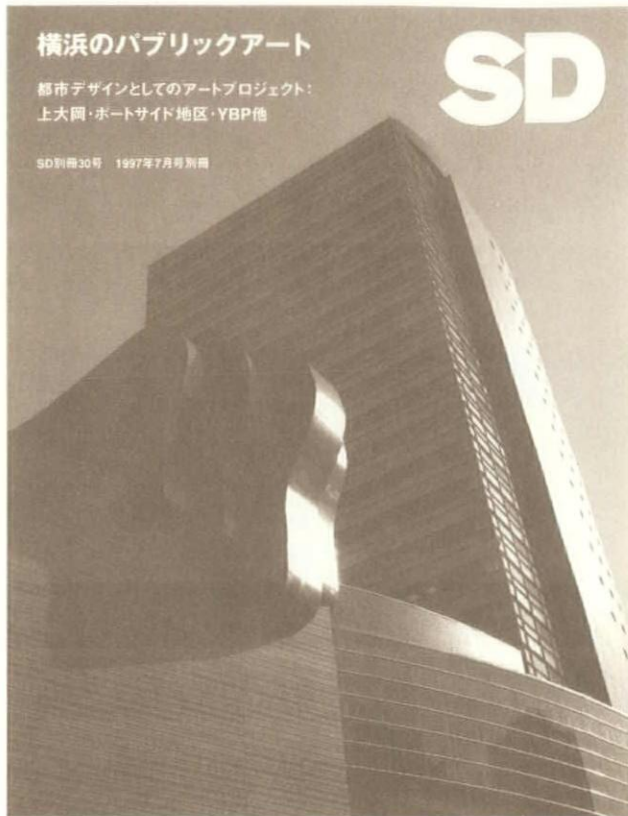
特別定価=2,400円／本体2,286円

横浜のパブリックアート

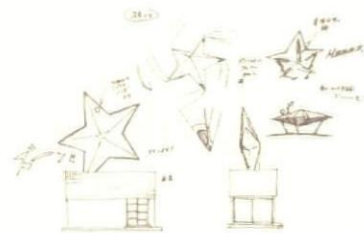
都市デザインとしてのアートプロジェクト：
上大岡・ポートサイド地区・YBP他

SD別冊30号 1997年7月号別冊

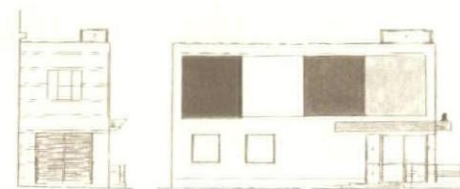
SD



奈良美智の初期スケッチ



交番のプロポーザル



倉重光則の交番のプロポーザル

SD別冊30

横浜のパブリックアート

ー都市デザインとしてのアートプロジェクト：
上大岡・ポートサイド地区・YBP他

判型・体裁：A4 判変形・並製

総頁：132頁

定価：3000円(本体=2857円)

発売中！！

都市デザインのパイオニアとして、またリーダーとして大きな役割を果たし、常にその動向が注目され続けてきた横浜市。

その活動の歩みは、すでにSD別冊11号「横浜＝都市計画の実践的手法ーその都市づくりのあゆみ」と、SD別冊22号「都市デザイン横浜ーその発想と展開」にまとめられてきた。

SD別冊30号は、それらに続くものとして、主としてパブリックアートに関わる取り組みを中心に、これまで行われてきた主なプロジェクトを詳細に紹介するものである。

アート、都市計画、都市デザインに関心を持つすべての人を対象に、デザインの意図、事業の内容を詳述し、評価を加え、都市デザインとパブリックアートの向かうべき道を示す。

第1部：ゆめおおおかアートプロジェクト（上大岡駅周辺再開発計画）

座談会／北川フラム、緒川たまき、南條史生

作品／18人の作家による19の作品

奈良美智、平川典俊、村上隆、倉重光則、方振寧、木津文哉、須田悦弘、吉水浩、福田美蘭、長澤伸穂、小沢剛、平林薫、岡崎乾二郎、高柳恵理、PHスタジオ、チェ・ジョンファ、ナウイン・ラワンチャイクン、シムリン・ギル

第2部：横浜市のパブリックアートの展開

座談会：松葉一清、南條史生、木下眞男、国吉直行

ヨコハマ・ビジネスパーク

ポートサイド地区

横浜彫刻展

金沢地区研究所群

麒麟横浜ピアビレッジ

都心部での活動

論文：松葉一清、松井みどり、山東めぐみ、彦坂裕、谷新、他

SD別冊



新刊

22 古典主義建築

— オーダーの詩学 —

アレクサンダー・ツォニス 著
リアーヌ・ルフェーブル

藤井博巳, 丸山洋志, 藤山哲朗訳

A5判 224頁 定価3,502円

古典主義建築を概観することにより、形の構造から古典的建築物を捉え直す方法を探るもの。多彩な凡例とその構成規則に対する分析により、建築のみならず音楽、絵画、演劇が共有する古典主義の生成規則を明らかにする。

〈主要目次〉

- | | |
|-----------|-----------------|
| 序文ならびに謝辞 | II 古典建築作品 |
| 理性の目：構成原理 | 4. 建築の韻律分析 |
| I 構成の規則 | 5. 並列：建築の行進 |
| 1. 配列：枠組 | III なぜ古典主義か |
| 2. 種類：各要素 | 6. 群配列：対立と軌轢 |
| 3. 均衡：関係性 | 7. 批評的古典主義：悲劇効果 |

既刊書

① アールデコの摩天楼 小林克弘著 A5・272頁 定価3,502円

② 屋外空間の生活とデザイン J. ゲール著 北原理雄訳 A5・248頁 定価3,399円

③ 近代建築の系譜(上) W.J.R. カーティス著 五島朋子, 澤村明, 末廣香織共訳 1900年以後 A5・400頁 定価4,738円

④ 近代建築の系譜(下) W.J.R. カーティス著 五島朋子, 澤村明, 末廣香織共訳 1900年以後 A5・400頁 定価4,738円

⑤ アーキテクト R. ルイス著 六鹿正治訳 建築家とは何か A5・306頁 定価3,914円

⑥ デザインの思考過程 P. ロウ著 奥山健二訳 A5・256頁 定価3,399円

⑦ ガウディの七つの主張 鳥居徳敏著 A5・224頁 定価2,987円

⑧ イタリア・ルネッサンスの建築 P. マレー著 長尾重武訳 A5・280頁 定価3,811円

⑨ 光と風と構造 R. マーク著 飯田喜四郎訳 A5・192頁 定価2,987円

⑩ パタンランゲージによる住宅の建設 C. アレグザンダー他著 中埜博監訳 A5・288頁 定価3,708円

⑪ デ・アーキテクチュア J. ワインズ著 大島哲蔵, 三好庸隆共訳 脱建築としての建築 A5・322頁 定価4,326円

⑫ コラージュ・シティ C. ロウ, F. コッター著 渡辺真理訳 A5・288頁 定価3,914円

⑬ ミース再考 K. フランプトン他著 澤村明, EAT訳 その今日的意味 A5・224頁 定価3,399円

⑭ ルイス・カーン建築論集 L. カーン著 前田忠直編訳 A5・258頁 定価3,708円

⑮ メガロポリスを超えて J. ゴットマン, R.A. ハーバー共編 宮川泰夫訳 A5・352頁 定価5,871円

⑯ 18世紀の建築 J. サマーソン著 堀内正昭訳 バロックと新古典主義 A5・208頁 定価3,502円

⑰ デザイニング・ドリームス D. アルブレヒト著 萩正勝訳 映画に見る近代建築 A5・272頁 定価4,017円

⑱ アダムの家 J. リクワート著 黒石いずみ訳 建築の原型とその展開 A5・296頁 定価4,120円

⑲ 圏外からの建築 D. アグレスト著 大島哲蔵訳 映画・写真・鏡・身体 A5・240頁 定価3,708円

⑳ 建築と非建築のはざままで R. ハービンソン著 浜田邦裕訳 A5・208頁 定価3,193円

㉑ 空間を生きる R. ボフィール著 太田泰人訳 A5・192頁 定価2,987円

鹿島出版会 建築図書案内



※表示価格には消費税は含まれておりません。

手法がーカウンター・アーキテクチャ

磯崎 新著 A5・¥3,800

建築の解体ー一九六八年の建築情況

磯崎 新著 A5・¥4,200

空間へー根源へと遡行する思考

磯崎 新著 A5・¥4,600

造物主義論ーデミウルゴモルフィスム

磯崎 新著 A5・¥3,800

始源のもどきージャパネスキゼーション

磯崎 新著 A5・¥3,800

見立ての手法ー日本的空間の読解

磯崎 新著 A5・¥3,400

イメージゲームー異文化との遭遇

磯崎 新著 A5・¥3,400

建築の世界ー意味と場所

C.ノルベルグ=シュルツ著 前川道郎, 前田忠直共訳 B4変・¥8,700

建築の形態言語ーデザイン・計算・認知について

W.ミッチェル著 長倉威彦訳 B5・¥6,200

建築理論の創造ー環境デザインにおける行動科学の役割

J.ラング著 高橋鷹志監訳, 今井ゆかり訳 A5・¥6,300

建築美論の歩み

井上充夫著 A5・¥4,400

アメリカの機械時代ー1918~1941年

R.G.ウィルソン他著 永田 喬訳 A4・¥13,000

世界の高齢者住宅ープライバシーと自立の実現

J.D.ホグランド著 湯川利和, 延藤安弘共訳 A5・¥3,400

記憶に残る場所

D.リンデン他著 有岡 孝訳 A5・¥4,400

アースワークの地平ー環境芸術から都市空間まで

J.パーズレイ著 三谷 徹訳 B5・¥7,600

移ろいの風景論ー五感・ことば・天気

小林 亨著 A5・¥3,800

劇場ー舞台芸術のための建築計画と設計

R.ハム著 劇場技術研究会訳 B5・¥6,200

スウェーデンの住環境計画

S.ティーベイ編著 外山 義訳 A5・¥4,500

仕組まれた意匠ー京都空間の研究

川崎 清, 小林正美, 大森正夫共著 A5・¥4,200

ハウジング・デザインー理論と実践

I.コフーン他共著 湯川利和監訳 B5・¥11,700

驚異の工匠たちー知られざる建築の博物誌

B.ルドフスキー著 渡辺武信訳 A5・¥3,800

人工楽園ー19世紀の温室とウインターガーデン

S.コッペルカム著 堀内正昭訳 A4変・¥17,800

アトリウム建築ー発展とデザイン

R.サクソン著 古瀬 敏, 荒川豊彦共著 A4・¥5,400

商業空間とアトリウムー室内歩行者空間のデザイン

M.J.ペドナー著 古瀬 敏訳 A4変・¥9,400

新しいガラスアーケード

H&H.K.ニーダーヴェールマイアー共著 青木英明訳 A4変・¥9,515

インテリジェントビルの計画ーOAオフィスづくりのノウハウ

鹿島出版会編 A5・¥2,700

建築のファシリティ・マネジメント

建築FM研究会編著 A5・¥3,000

音楽のための建築ー17世紀から現代にいたる建築家と音楽家と聴衆

M.フォーサイス著 長友宗重, 別宮貞徳共訳 B5・¥12,000

空間音響

J.ブラウエル, 森本政之, 後藤敏幸編著 A5・¥4,700

室内環境デザインの新しい視点

鹿島昭一著 A5・¥2,800

建物のライフサイクルコスト分析

A.J.デリソッラ, S.J.キルク共著 千住鎮雄訳 B5・¥4,900

都市と建築のパブリックスペースーヘルツベルハーの建築講義録

H.ヘルツベルハー著 森島清太訳 B5・¥6,700

都市と建築の解剖学ー形態分析によって[設計戦略]を読む

J.ペイカー著 富岡義人訳 B5・¥5,800

ビルディング・エンベロブ^[ハイテック・コンストラクション1]

A.ブルックス, C.グレッグ共著 難波和彦, 佐々木睦朗監訳 B5・¥4,500

コネクションズ^[ハイテック・コンストラクション2]

A.ブルックス, C.グレッグ共著 難波和彦, 佐々木睦朗監訳 B5・¥4,500

スーパーシェッズ^[ハイテック・コンストラクション3]

C.ウィルキンソン著 難波和彦, 佐々木睦朗監訳 B5・¥4,500

建築関連雑誌

ARCHITECTURAL MAGAZINES' BACK NUMBER FAIR

バックナンバーフェア'97

'97.10/4(土) ~ 11/16(日)

全国32書店
同時開催

■出品出版社・出品予定誌

(株)エー・アンド・ユー [a+u]

(株)鹿島出版会 [SD]

(株)建築技術 [建築技術]

(株)建築資料研究社 [住宅建築・CONFORT・造景]

(株)建築知識 [建築知識・バトマガ・建築知識スーパームック]

(株)彰国社 [建築文化・施工・ディテール]

(株)商店建築社 [商店建築・Wind]

(株)新建築社 [新建築・住宅特集・JA]

(株)マルモ出版 [ランドスケープデザイン・マイガーデン]

※増刊・別冊含む

中部地方

- 新潟 紀伊國屋書店 新潟店 2階 TEL.025-241-5281
- 富山 BOOKSなかた 本店 (10/4~11/30) TEL.0764-92-1192
- 金沢 BOOKSなかた 柳橋店 TEL.076-258-5861
- 長野 平安堂 長野店 2階 TEL.0262-24-0363
- 静岡 静岡谷島屋 本店 2階 (10/10~11/29) TEL.054-254-1301
- 名古屋 丸善 名古屋栄店 2階 (10/4~10/31) TEL.052-261-2251

中国地方

- 岡山 丸善 岡山シンフォニービル店 B1階 TEL.086-233-4640
- 広島 丸善 広島本通店 3階 TEL.082-247-8763

四国地方

- 高松 宮脇書店 本店 2階 TEL.0878-51-3733

北海道

- 札幌 丸善 札幌南一条店 4階 TEL.011-241-7254
- 旭川 ブックセンター富貴堂MEGA 6階 TEL.0166-29-2888

東北地方

- 仙台 丸善 仙台一番町店 (10/4~10/20) TEL.022-224-8018

関東地方

- 宇都宮 宇都宮ブックセンター 2階 TEL.028-627-7700
- 前橋 煥乎堂 2階 (10/1~11/30) TEL.027-235-8111
- 東京 三省堂書店 神田本店 5階 TEL.03-3233-3312
- 丸善 日本橋店 2階 (10/12~11/8) TEL.03-3272-7211
- 八重洲ブックセンター 本店 3階 (10/1~10/31) TEL.03-3281-8203
- 紀伊國屋書店 新宿本店 4階 TEL.03-3354-0131
- 大盛堂書店 5階 TEL.03-3463-0511
- リプロ 池袋店 4階 (10/1~11/16) TEL.03-5992-6990
- 横浜 有隣堂 本店書籍館 4階 TEL.045-261-1231
- 藤沢 有隣堂 藤沢店 4階 (10/4~10/26) TEL.0466-26-1411

近畿地方

- 京都 丸善 京都河原町店 (11/1~11/30) TEL.075-241-2168
- 大阪 旭屋書店 本店 4階 (9/26~10/31) TEL.06-313-1191
- 紀伊國屋書店 梅田本店 (10/3~10/17) TEL.06-372-5821
- 丸善 なんばOCAT店 5階 (9/26~11/16) TEL.06-635-3225
- 神戸 ジュンク堂書店 三宮店 B1階 TEL.078-392-1001

九州地方

- 北九州 ブックセンタークエスト 小倉店 2階 TEL.093-522-3924
- 福岡 紀伊國屋書店 福岡店 6階 TEL.092-721-7755
- 熊本 紀伊國屋書店 熊本本店 (10/4~11/3) TEL.096-322-5531
- 大分 晃星堂書店 (10/4~12/31) TEL.0975-33-0231
- 鹿児島 ジュンク堂書店 鹿児島店 M2階 TEL.099-239-1221

建築関連雑誌
出版社9社の
協賛により、

バックナンバー
19誌を一堂に出品。

全国主要都市の
32書店で同時開催。

※一部の書店では開催期間が異なります。



9605 Architecture of Diversity and Harmony: Recent Works of von Gerkan, Marg and Partner: They are known for the winning of competition many times. Introducing their '90's works including competition designs. Texts: Masahiko Yamashita, Klaus-Dieter Waiss **The Sea and Architecture: Suzuki Ryoji's Latest Work:** Sagishima Project 'Ring', House in Sagishima. ¥1,988



9606 111 Chairs Designed by Architects: Reintroducing 111 chairs designed by overseas architects from 19 century to now. Architects: Adolf Loos, Charles Rennie Mackintosh, Antonio Gaudi, Otto Wagner, Eliel Saarinen, Walter Gropius, El Lissitzky, Erik Gunnar Asplund, Le Corbusier, Mies van Der Rohe, Bruno Taut, Charles Eames, Carlo Scarpa, Aldo Rossi, etc. ¥3,059



9607 The Architecture of Kameki Tsuchiura: A Reappraisal: Reintroduce Kameki Tsuchiura's works before and after world war II. Works: Tsuchiura House I and II, Tokuda Building, Hosaka Clinic, etc. **Multi-unit Housing by the Kenchiku Design Studio:** Introduce the idea of housing which Kenchiku Design Studio have kept showing new FH HOYA-II project. ¥1,988



9608 Michael Hopkins and Partners: Introduce the important works by M. Hopkins and Partners. Hopkins House, The Inland Revenue Centre, Bracken House, Schlumberger Cambridge Research Centre, David Mellor Offices and Showroom, New Parliamentary Building, etc. **Visiting Dreams of Light and Space: Donald Judd's and Walter De Maria:** Text: Fumio Nanjo ¥2,447



9609 The Heyday of the Modern House in Denmark: Introduces Danish modern houses of the '50s and '60s: Summer Residence of Niels Bohr, Vilhelm Wohlert; Soholm I, Arne Jacobsen; Kingo Houses, Jorn Utzon; etc. text: L.B.Jorgensen, Riichi Miyake, etc. **Yemen: Mountaintop Villages and Tower Houses:** Photo+Text: Ashikawa Research Institute ¥1,988



9610 Light and Space in the Middle Ages: Romanesque Architecture of Central and Southern France: Introduces Romanesque church and monastery. Abbaye du Thoronet, Abbaye St-Martine de Canigou, etc. Photo: Koji Horiuchi, text: Shuji Hanyu, etc. **Studies of Two Cities:** text: Yoichi Iijima, Minoru Tanokura **Ninety-seven Chairs:** text and photo: The Poor Boys Enterprise ¥1,988



9611 Akira Kuryu: Introduces the works crystalizing the fine collaboration supported by his outstanding direction. Okazaki Art and Historical Museum, Core Yamakuni, Patrie+Kiyosato Museum of Photographic Art, Uemura Naomi Memorial Museum, Carnival Showcase, etc. text: Yoichi Iijima, etc. **Project pour La Chapelle de St. Vigor de Mieux Par Takubo-3** ¥2,548



9612 SD Review 1996: Publishing the result of SD Review contest with comments from the screening committee. Participants : Justus Pysall and Peter Ruge, Masami Takahashi, Nagisa Kidosaki & Associates. **From the Recent Works of Jun Itami:** Chapel of Stone, Chapel of Wood and Chapel of Earth. ¥1,988



9701 Shoei Yoh: 12 Calisthenics for Architecture: Introduces major works demonstrating the "calisthenics" prescribed for architecture under twelve categories. Uchino Community Center for Seniors and Children, Sundial, Welfare Facility for Seniors, Glass House with Breathing Grating, etc. ¥3,059



9702 Frameworks and Space for Wood: Twenty-five examples of architecture in Japan and Around the world featuring the beauties of wood as architectural material. **The New Generation of Architects Exciting Asia:** Looks at architecture and metropolises in Asia and how they will look in the future. ¥1,988



9703 Minimal Space Architecture: Introduces simple architecture we call 'minimal': John Pawson (John Pawson House, Jigsaw), Shinichi Ogawa (Glass House), Waro Kishi (House in Nipponbashi), Toshiaki Isida (NOS House). Text: Hiroshi Maruyama, Tsuyoshi Matsuhata, etc. **Tokyo International Forum:** Photo: Koji Horiuchi. ¥1,988



9704 Expanding Horizons of Digital Design: introduces projects creating new environment of architecture and city with computer and network technology. Texts: Noriyuki Tajima, Sigeyuki Yamaguchi, Eisi Katsura, Michael Benedikt, Masaki Hujihata, Akihiro Kubota, Ken Sakamura, Naohito Okude, Mitsuo Morozumi, etc ¥3,059



9705 Afra & Tobia Scarpa and Benetton: They have worked together for about 30 years. Introducing the office building, warehouse, shops etc they designed. Text+Interview: Hiroyuki Toyota. **Pisa and the Works of Massimo Carmassi:** Casa Muti, Restoration of the Teatro G.verdi, etc ¥2,000



9706 Takahiko Yanagisawa: The Composition of Theatrical Space: Introduces recent works focusing on the elements. New National Theatre, Tokyo Opera City, etc. Text: Muneshige Nagatomo, Yoshiaki Ogura, Shouzo Motosugi, Junichi Kawamura Discussion: Masato Kawamukai and Takahiko Yanagisawa **Swedish Good Design: Undecorated Form Design** ¥2,000



9707 Hong Kong 1997: The Accelerating City Grasping the aspect of Hong Kong through visual works by artists and interview with architects. artists: Alan Chan, Tycoon Graphics, Satoshi Asakawa, Shin Egashira, etc. Supervision: Shin Muramatsu, Kazuhiro Kojima, Hikaru Kinoshita, text: Naonori Matsuda ¥2,000



9708 Venturi, Scott Brown and Associates: 1990's Works: Focuses on the first work in Japan, Mielparque Nikko Kirifuri and introduces 1990's works such as Seattle Art Museum and Additions, Renovations and Restoration, San Diego Museum of Contemporary Art. **Toward a New Living Environments:** Gifu Kitagata Housing Project ¥2,400

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. SD endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of SD is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to Space Design and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:
Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107, Japan
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card

Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:

☐ Please enter my SUBSCRIPTION to
Space Design,
starting in

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

☐ Please process my order for the following BACK
ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of SD:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges(¥1,500 per order)
3. Postage(determined upon receipt of order)

Alvar Aalto

A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life: 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2

His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2

Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work: Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake

Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980: Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2

13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai

Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sasei-ken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo

Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brought forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3

29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2

Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito

9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu

All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiko Hayakawa

His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii

His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany

Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989

Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoei Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut

Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition

Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix: List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections: Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates

Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun

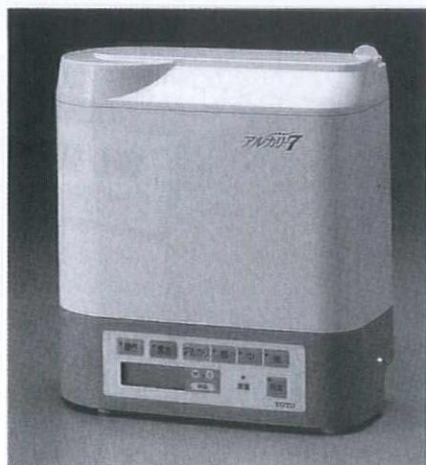
Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World

Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

● アルカリイオン水 生成器
アルカリ 7

● 東陶機器株式会社



東陶機器株式会社では、水道水をろ過してつくった清水を、さらに電気分解してアルカリイオン水と酸性水を作る装置、アルカリ 7 を新発売した。大切なミネラル分は残しながら、pH（酸性度・アルカリ度を示す数値）を調節することで、ごく普通の水道水から、おいしさだけでなく健康や美容にも良い水を作り出す。

特長

- ①活性炭カートリッジを1日1回、タイマーで加熱して再生するので、浄化性能はそのまま、7年間交換せずに使い続けられる。
- ②大面積の中空糸膜と活性炭素繊維との二重のフィルターで水を浄化。水道水中の残留塩素、雑菌、鉛やカビはもちろん発ガン性があるといわれるトリハロメタンも80%以上を除去する。
- ③アルカリイオン水が毎分3リットル、酸性水は毎分3リットル、清水なら毎分4リットルと独自の技術で大流量を実現した。
- ④混合栓でも気軽に使える熱水ブザー付き。
- ⑤清水通水部は、抗菌仕様。
- ⑥電気代は1カ月で約212円、家計にやさしい低コスト。

価格

108,000円（据え置き形）

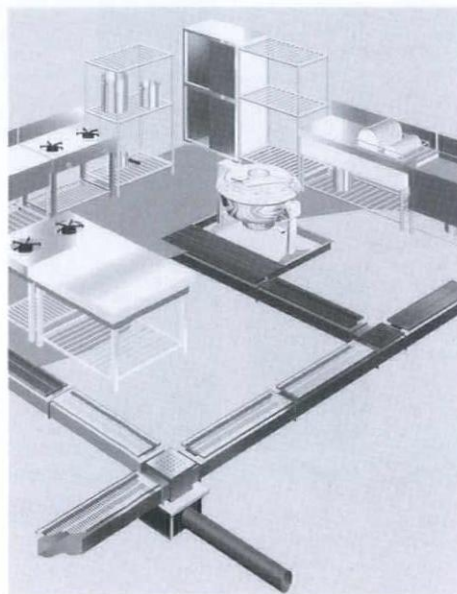
東陶機器株式会社

福岡県北九州市小倉北区中島2丁目1番1号

〒802 Tel 0120-03-1010【お客様相談室】

● H・ビット
**厨房用ステンレス
側溝システム**

● ホーコス株式会社



ホーコス株式会社では、衛生、省力化、美観、耐久性すべてをクリアするステンレス製、厨房用側溝排水システムを新発売した。従来からのモルタル側溝は劣化し、掃除がしづらい、補修工事が必要だ、ということがあった。これからの厨房側溝は、ステンレス製で安心・快適な厨房が完成する。

特長

- ①側溝、側溝蓋、排水桝すべてステンレス製(SUS304)なので、耐久性、耐食性が抜群である。
- ②ステンレス製なので汚れがつきにくく、衛生的である。汚れても容易に清掃できる。
- ③従来のコンクリート（モルタル）側溝のように型枠作業が不要で簡単に施工できる。
- ④ストレート、チーズ、エルボタイプの側溝、排水桝などの組合せで、自由に厨房レイアウトができる。また、厨房に合わせた側溝システムが完成する。

ホーコス株式会社 東京支店

東京都大田区仲六郷3丁目28番5号

〒144 Tel 03-3735-5831

● 内装化粧シート
ルミディア 耐シガレットタイプAC
ルミディア アートグラフィックス

● リンテック株式会社



リンテック株式会社では、内装化粧シート、ルミディアの用途拡大を図るため、「耐シガレットタイプAC」と写真やコンピューターグラフィックスなどのフルカラー原稿をルミディア上に忠実に再現する同社独自の「ルミディア アートグラフィックス」システムを新発売した。耐シガレットタイプACは、従来のルミディアに特殊加工を施し、シート表面に高い耐熱性を付与した。そのため、着火したタバコが万一放置されても、シート表面の変形や焦げ付きはほとんどなく、付着したタバコのヤニなども簡単にふき取ることができる。意匠性の面でも、木目調（3品種）、落ち着きのあるアイボリー系の無地単色とレザータイプが揃っているので、ホテルやレストラン、オフィスなどで使用されるテーブル天板、カウンタートップ、什器に利用できる。ルミディア アートグラフィックスは、オリジナル原稿をコンピューターで画像処理し、出力したものを加工して粘着シート化するため、1枚からでも低コストでオリジナル化粧シートが製作できる。色彩の鮮やかさや微妙なグラデーション、複雑で繊細なディテールも忠実に再現するので、店舗やホテルなどの室内装飾やアミューズメント施設の視覚効果アップなど、インテリア空間の演出に幅広く展開できる。

リンテック株式会社 広報室

東京都板橋区本町23番23号

〒173 Tel 03-5248-7741

● 防火・防煙シャッター

ファイアーマクリーン

● ニチアス株式会社

東工シャッター株式会社



ニチアス株式会社では、東工シャッター㈱と金属製シャッターのかわりに、耐熱ガラスクロスを利用した新しいタイプの防火・防煙シャッター、ファイアーマクリーンを共同開発した。同製品は、甲種防火戸の耐火試験と遮煙試験に合格している。現状、認定は新しい材質のシャッターということで建築基準法38条個別認定で扱われている。

特長

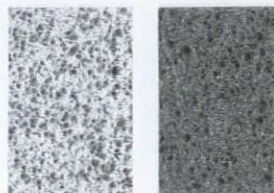
- ①シャッターのスラット部分に使われている耐熱ガラスクロスは厚さが薄く、軽量でスラット部の重量は金属製に較べ約1/7になった。そのため、個々の部材も小型化できた。
- ②高さ450mmの有効スペースがあれば、幅8m×高さ4mのシャッターが収納でき、省スペース化が図れる。金属製の場合は、約700mmを必要とする。
- ③ガイドレールの溝幅は、10mmですむので、すっきりしたラインになり、優れた意匠性を発揮する。金属製の場合は、溝幅を約25mm必要とする。
- ④シャッター降下時に金属性の音が出ず、非常時のパニック現象を抑制し、かつ軽量なので、シャッターに潰される危険もない。

ニチアス株式会社 建材事業本部
東京都港区芝大門1丁目1番26号
〒105 Tel 03-3433-7256

● 塗料

オキシパウダー PUN-御影

● 水谷ペイント株式会社



白御影1号

黒御影2号



黒御影3号

赤御影4号

水谷ペイント㈱では、新規模様粉体塗料、オキシパウダー PUN-御影を新発売した。同製品は、ポリエステル樹脂の粉体塗料で、御影石の模様を再現したものであり、従来になかった粉体塗料の新たな用途が期待される。色の種類は、白御影1号、黒御影2号、黒御影3号、赤御影4号がある。主な用途は、エクステリア、インテリア、建具類、事務機器、OA機器、電化製品、スポーツ用品と雑貨類など。また、構造物などの苛酷な条件下で使用される用途には、専用のトップコートを上塗りすることで、塗り上がりに深みをもたせ、大幅に耐候性・耐汚染性が向上するオキシパウダー PSクリヤーを併せて発売した。

特長

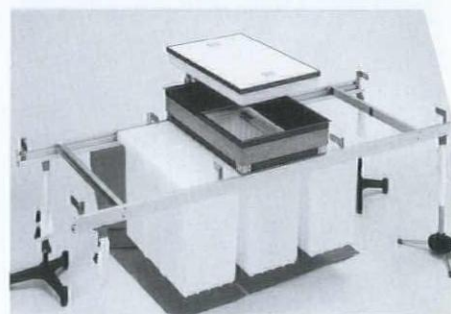
- ①ポリエステル樹脂のため、外部・内部のいずれの用途にも適する。
- ②ベースカラーとアクセントカラーの組合わせで、様々なトーンが出る。
- ③1回塗りですべて仕上がる。
- ④ダイキャスト製品など、表面の粗いものでもカバーする。
- ⑤常備在庫品であるため、1ケース(15kg)から、即納できる。

水谷ペイント株式会社
大阪市淀川区西三国4丁目3番90号
〒532 Tel 06-391-3151

● 床下収納庫

床下収納庫 断熱タイプ

● 三協アルミニウム工業株式会社



三協アルミニウム工業㈱では、暮らしの広がりと共にニーズの高まってきた床下の収納スペースの活用に応じて、新たに高気密・高断熱住宅仕様の床下収納庫、断熱タイプを2モデル追加発売して、バリエーションの幅を広げた。同製品は、蓋内部に、50mm厚のウレタンフォームを納めた一枚蓋形式を採用した。同時に、2分割した緑枠の動きにより、室内と室外の熱伝導を抑え、断熱性を大幅にアップした。また、蓋と緑枠とのあわせ部をダブルパッキング(タイト材)にして、気密性も向上させた。今回追加したのは、スライドタイプとシングルタイプの2モデル。シングルタイプは、蓋を開ければ収納物をひと目で確認できるので、使用頻度の高い場所に最適である。ボックスも簡単に取り外せて、手入れが楽である。スライドタイプは、収納ボックスがレールで左右にスライドするので、小さな開口部で床下面積を広く使え、収納品の多いキッチンなどに適している。床面間口寸法は、シングルタイプ 606×606mm 内容量105ℓ、スライドタイプ 606×400mm 内容量141ℓ。

価格

シングルタイプ 35,000円
スライドタイプ 55,000円

三協アルミニウム工業株式会社 広報室
富山県高岡市早川70番
〒933 Tel 0766-20-2332

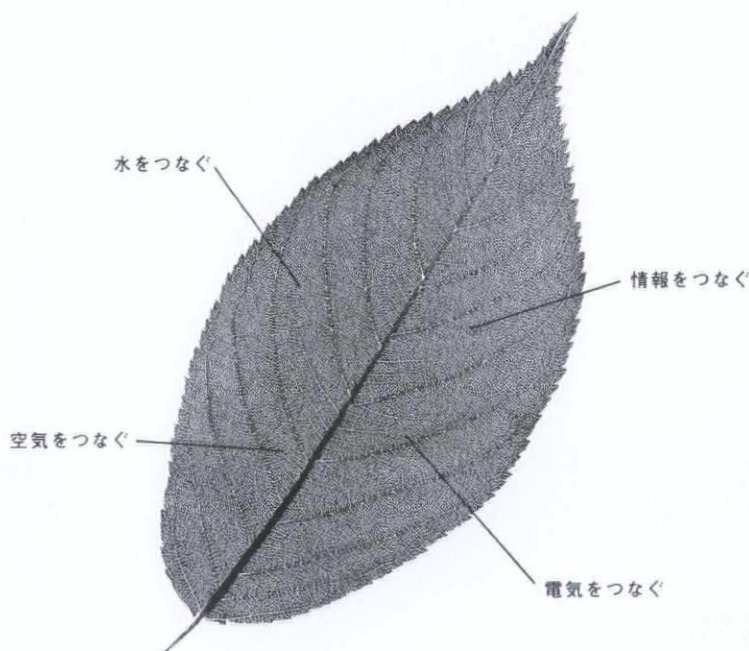
ビルの、工場の、街の、 すみずみに、つながろう。

私たちの仕事は、ビルに、工場に、
街に、生命を与える葉脈として、
そのすみずみにつながっています。
もっと、人が快適になる環境へ。

総合設備業の

リーディング・カンパニーとして、
先端の技術で、高度な未来を
提案し続けます。

あなたと快適をむすびます。



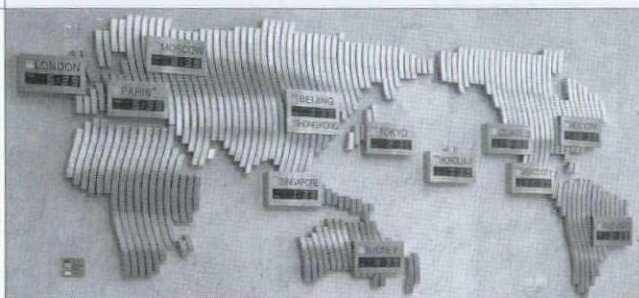
住友電設株式会社

大阪本社 〒550 大阪市西区阿波座2-1-4 Tel 06 (537) 3400
東京本社 〒105 東京都港区芝2-2-17 Tel 03 (3454) 7311

営業種目：電気設備／空調・給排水・衛生設備／
プラント設備／情報通信設備／電力流通設備／その他

語りかける視覚クリエイター。

サインは、材質のもつ個性や才能を十分生かし発揮させるもの。
時代のニーズに先駆けたクリエイティブ感覚と技術で、
金属、ガラス、アクリル、フィルム、光源etcとあらゆる材質に挑戦。
プラスαの語りかけをクリエイイトする——(株)サトー工芸社です。



Sign / Communication



**SATO
KOHGEISYA**
HEAD OFFICE
1-28-11 Horifune Kita-ku Tokyo 114 Japan.
Tel.03-3911-8308 Fax.03-3912-8002
FACTORY
3-17-25 Ryoke Kawaguchi-shi Saitama-ken 332 Japan.
Tel.048-222-3120 Fax.048-222-3122

株式会社 **サトー工芸社**

●本 社/〒114 東京都北区堀船1-28-11 Tel.03-3911-8308 ●工 場/〒332 埼玉県川口市領家3-17-25 Tel.048-222-3120(代)

N 日章工業株式会社

●本 社 〒101 東京都千代田区内神田 3-11-7 (日立神田別館) ☎03-3254-3000
 ●大阪支店 〒541 大阪市中央区高麗橋 2-4-6 (大正不動産ビル 6 階) ☎06-201-5704
 ●仙台営業所 〒980 仙台市青葉区中央 3-2-27 (日産生命ビル) ☎0222-21-6989

日立製作所エレベーター・機電特約店
 日立製作所 O A システム特約店
 日立金属フリーアクセス・ハイベース特約店
 旭化成建材パイル・ヘーベル代理店
 大和ハウス工業代理店

施設商品

エレベーター・エスカレーター
 立体駐車場設備 (新明和工業)
 バスユニット (日立化成工業)
 住宅機器類
 集中浄化槽
 受水槽
 ソーラー
 受変電設備

自家発電設備
 無停電定電圧定周波電源装置
 ビル監視制御装置
 冷暖房空調設備
 通信設備
 ターボ冷凍機・吸収式冷凍機
 各種ポンプ設備・換気設備

OAシステム機器

パーソナルコンピューター
 ワードプロセッサ
 ファクシミリ
 オフィスコンピューター

ハイスプリット・ハイベース
 鉄骨
 大昭和ユニボード

建設商品

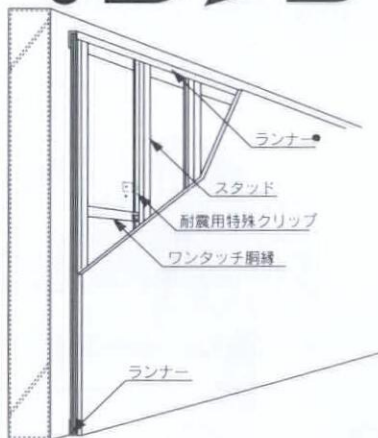
クロラクレーン
 ショベル
 軽量鉄骨プレハブ規格建築物
 軽量鉄骨系プレハブ住宅

建材商品

AHSパイル
 ヘーベル
 フリーアクセスフロア

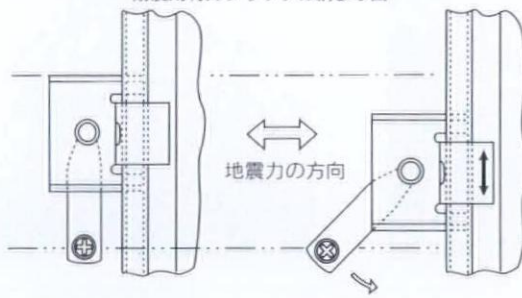
地震に強い!! 層間変位1/60に対応 マンテン® ジシンサク™ 30 地震策 PAT.P

耐震用鋼製壁下地材



耐震用特殊クリップを採用

耐震用特殊クリップの納まり図



通常の状態

地震力が加わった状態
 耐震用特殊クリップはスタッドを
 (レール代わりにして) 上下運動する

避難通路 (階段室、
 エレベーターホール、
 廊下) には耐震壁が
 必要です。

【特長】

1. 壁厚の仕上り寸法が
 小さいので (30mm)、
 室内空間を有効に活
 用できます。
2. 外壁からの振動に左
 右されない「耐震用
 特殊クリップ」採用
 により、地震の振動に
 よる内壁面の損傷を
 防ぎます。
3. 壁の高さは3,500mm
 まで可能です。

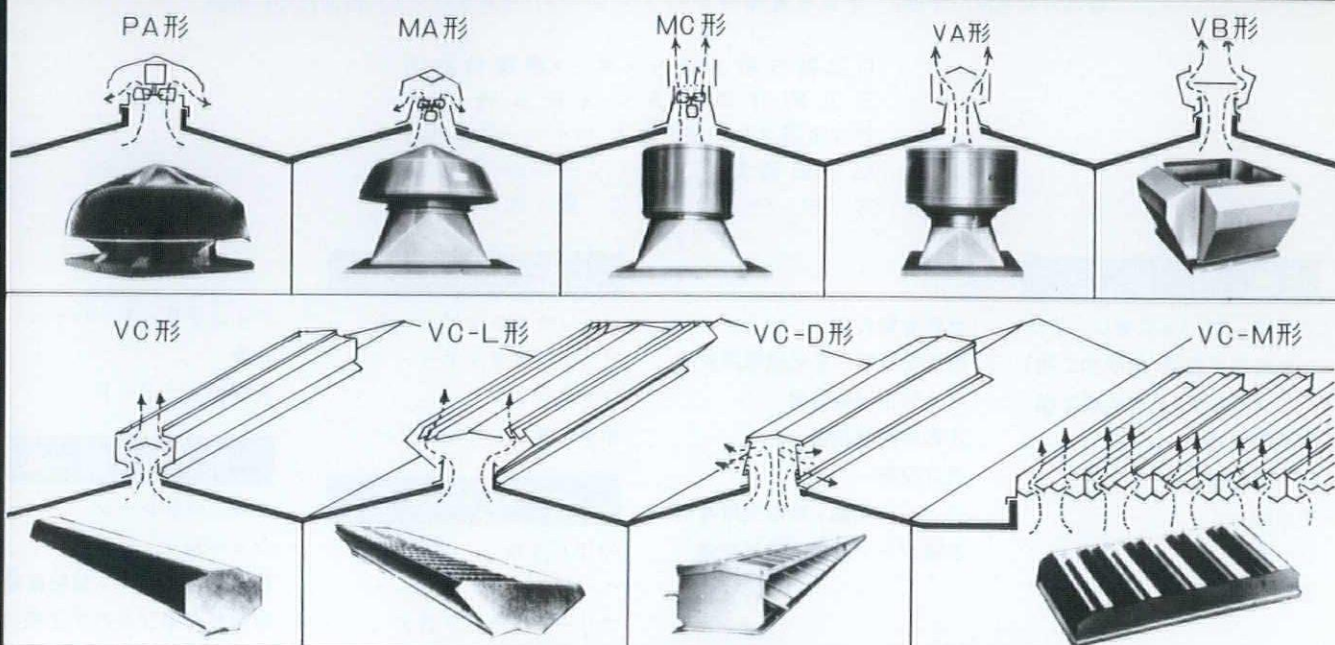
®
 考 誠意・熱意・創意で生きる
 株式会社 マンテン®

本 社 〒556 大阪市浪速区日本橋東 1-10-6 TEL (06) 644-2151
 東京支店 〒136 東京都江東区亀戸 2-3-17 TEL (03) 3683-6151
 札幌 TEL (011) 783-8661 横浜 TEL (045) 451-6245
 名古屋 TEL (052) 661-9511 高岡 TEL (0766) 24-5506
 福岡 TEL (092) 611-2180 台湾 TEL (001886) 2-719-9526

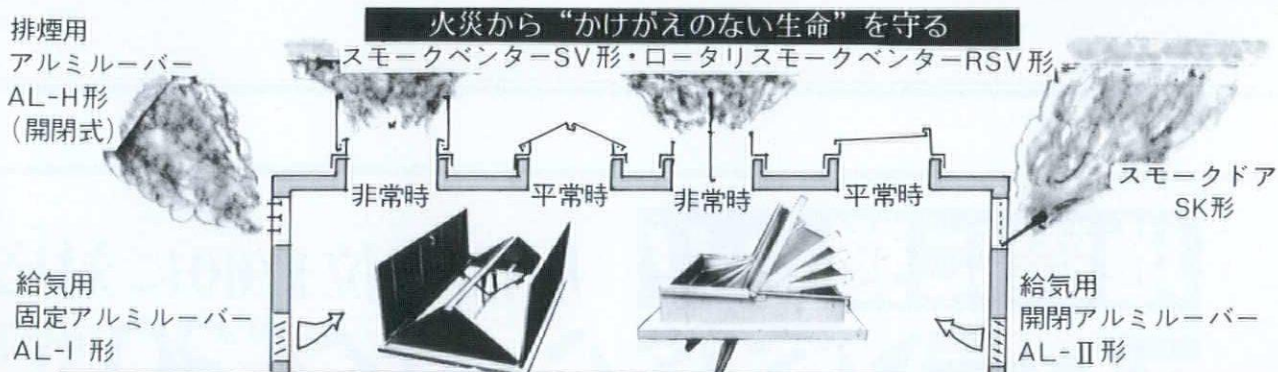
坂本商会は創業80年 換気・排煙・採光の専門メーカーです

“自然の風”を効率よく招く坂本式ルーフベンチレータ群

強制換気・自然換気装置

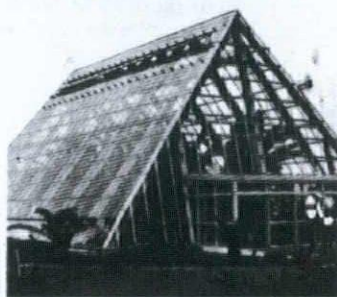
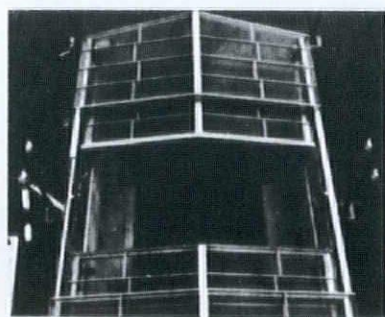


排煙・ルーバー装置



採光装置

“太陽の恩恵”を全身でウケとめる坂本式スカイライト



株式会社 坂 本 商 会

本 社 東京都中央区日本橋2-16-12(江戸ニビル) 〒103 電話 東京 (03)3271-5591(代)

松戸工場 千葉県松戸市松飛台420番地 〒270 電話 松戸 (0473)87-6595(代)

技術研究所 千葉県松戸市松飛台217番地 〒270 電話 松戸 (0473)87-3148

施工部 東京都墨田区東向島2丁目15番11号 〒131 電話 東京 (03)3619-2221(代)

広告目次

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命下さい(五十音順)

●共栄通信社

東京——東京都中央区銀座8-2-1

新田ビル (3572) 3381

FAX (3572) 3590

大阪——大阪市北区西天満3-6-8

笹屋ビル06 (362) 6515

FAX06 (365) 6052

●建報社

東京——東京都文京区湯島2-30-8

(3818) 1961

FAX03(3818)1968

大阪——大阪市中央区淡路町1-4-9

昭栄ビル06 (231) 4548

FAX06 (227) 0268

●新建社

東京都中央区八丁堀2-1-10

ハヤシビル (3552) 8247(代)

FAX (3552) 8249

●中外

大阪——大阪市北区浪花町14-25

日本生命天六ビル06 (379) 1791

東京——東京都千代田区神田須田町2-5-2

須田町佐志田ビル (3255) 8411

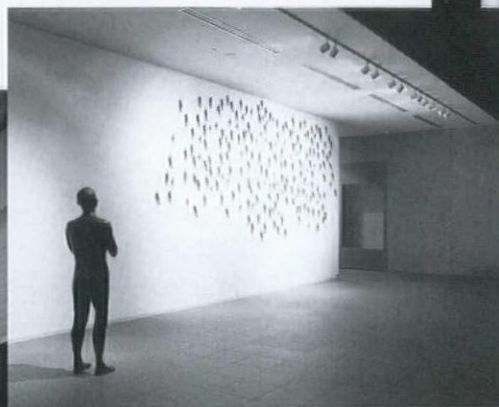
名古屋——名古屋市中区錦2-2-13

名古屋センタービル052 (221) 7641(代)

ア	(株)朝日工業社	A14
オ	(株)大林組	A3
カ	(株)関電工	表2
	鹿島	A4・A5
	軽井沢ホテル鹿島ノ森	A8
	(株)川合工業所	A11
	川本工業(株)	A12
ク	栗原工業(株)	A13
サ	三和シャッター工業(株)	85
	三機工業(株)	92
	三建設備工業(株)	A12
	(株)サトー工芸社	A20
	(株)坂本商会	A22
シ	新菱冷熱工業(株)	118
ス	(株)鈴木商会	A13
	鈴木電業(株)	A14
	住友電設(株)	A19
タ	大興物産(株)	A8
	ダイタン(株)	A11
ト	東陶機器(株)	A1
	(株)トーエネック	A15
	東光電気工事(株)	A16
	東洋熱工業(株)	107
ナ	中立電気(株)	A10
ニ	日新工業(株)	A9
	日章工業(株)	A21
ヒ	(株)日立製作所	108
	日立電線(株)	113
ホ	ホテルイースト21東京	A7
	豊正工業(株)	A15
マ	松下電器産業(株)	A2
	(株)マンテン	A21
ミ	三菱電機(株)	表4
	美和ロック(株)	88・89
ヤ	山田照明(株)	A24
	ヤマハ発動機(株)	123
	(株)ヤナセ	124
ロ	ロンシール工業(株)	表3

表情多彩

照明は空間づくりの重要なポイント。
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい……。山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。



山田照明株式会社

本社/ショールーム 〒101 東京都千代田区外神田 3-16-12 TEL03-3253-5161
仙台支社/ショールーム 〒980 仙台市青葉区二日町 11-11 (ANDOビル) TEL022-267-1630 横浜支社/ショールーム 〒220 横浜市西区南幸 2-20-1 TEL045-311-1731
大阪支社 〒542 東大阪市桃根 2-2-6 TEL06-745-6811 福岡支社 〒810 福岡市博多区店屋町 8-30 TEL092-282-7635 札幌営業所 〒003 札幌市白石区菊水七条 2-61 TEL011-811-2215
北関東営業所 〒370 高崎市緑町 3-14-8 TEL0273-63-1442 名古屋営業所 〒461 名古屋市中区泉 1-21-35-1102 TEL052-963-8411 静岡出張所 〒420 静岡市西草深 23-9-502 TEL054-247-0611
広島営業所 〒730 広島市中区十日市町 2-2-34 TEL082-293-6119 鹿児島営業所 〒890 鹿児島市上之園町 4-14 (第6相模ビル) TEL0992-58-0031 宇都宮出張所 〒382 宇都宮市海道町 818-2-1002 TEL0286-60-1381

雄勝町文化会館 (秋田)